

大阪市埋蔵文化財発掘調査報告

—1998年度—

加美遺跡・山之内遺跡・桑津遺跡・桃ヶ池遺跡

阿倍野筋遺跡・阿倍寺跡・難波大道跡・難波京朱雀大路跡

大坂城跡・大坂城下町跡・崇禪寺遺跡

2001.3

財団法人 大阪市文化財協会

大阪市埋蔵文化財発掘調査報告

—1998年度—

加美遺跡・山之内遺跡・桑津遺跡・桃ヶ池遺跡
阿倍野筋遺跡・阿倍寺跡・難波大道跡・難波京朱雀大路跡
大坂城跡・大坂城下町跡・崇禪寺遺跡

2001.3

財団法人 大阪市文化財協会



加美遺跡(KM98-8次)の方形周溝墓(北から)

大阪市埋蔵文化財発掘調査報告

－1998年度－

加美遺跡・山之内遺跡・桑津遺跡・桃ヶ池遺跡
阿倍野筋遺跡・阿倍寺跡・難波大道跡・難波京朱雀大路跡
大坂城跡・大坂城下町跡・崇禪寺遺跡

2001.3

財団法人 大阪市文化財協会

序 文

ここに『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告－1998年度－』を上梓する。1996年度から始まつたこのシリーズは、各年度のおもに民間の開発に伴う調査成果をすみやかに公表するもので、本書が第3冊目となる。

大阪市内には、我々の祖先の足跡がいたるところに残されている。本書には、さまざまな遺跡の発掘調査の成果が記されているが、どの遺跡もそれぞれが個性的であり、大阪の多様な歴史を如実に表していると思う。

現代に暮らす我々にとって、ともすれば過去の事象は忘れ去られがちであるが、めまぐるしく移り変わる現代に生きるからこそ、過去をふりかえる心のゆとりを持ち、新しい大阪の発展を考えたい。

最後に、発掘調査から本書の刊行にいたるまで、種々のご指導、ご協力を賜った皆さま方に、心より御礼を申し上げる次第である。

2001年3月

財団法人 大阪市文化財協会

理事長 脇 田 修

例　　言

- 一、本書は財団法人大阪市文化財協会が1998年度に実施した各遺跡の発掘調査のうち、大阪市教育委員会との委託契約によって実施した試掘立会調査の成果と、おもに民間事業者との委託契約によって実施した調査の成果をまとめた報告書である。後者については、各調査の契約期間終了時に既に個別の報告書として提出したものに、本書編集のための若干の変更を加えて再録したものである。
- 一、調査に係わる費用は、第Ⅰ章表1に記した各調査の事業者の負担による。
- 一、発掘調査は、財団法人大阪市文化財協会調査部長永島暉臣憲の指揮のもと、大庭重信・杉本厚典・清水和・小倉徹也・辻美紀・李陽浩・平田洋司・黒田慶一の各調査員が行った。また、試掘立会調査は、企画課連絡副主幹森毅と調査課主任趙哲済が行った。各調査の担当者・期間・面積などは第Ⅰ章表1にまとめている。
- 一、本書の編集は1999年度に、報告書作成室長代行田中清美の指揮のもと、同室調査員清水和明が行った。執筆は永島・調査課長京嶋覚の指導のもとに各調査の担当者が行い、編集のために清水が若干の変更を加えた。また、第Ⅰ章は第3節3)NS98-1次を森が、残りを清水が執筆した。巻末の英文目次・要旨の作成はRobert Condonが行い、調査課宮本康治がこれを助けた。
- 一、遺構写真的撮影は各調査の担当者が行い、遺物写真的撮影は徳永闇治氏に委託した。
- 一、発掘調査で得られた遺物、その他の資料はすべて当協会が保管している。
- 一、本報告書で引用した当協会略報(文献名の末尾に「略報」とあるもの)に依る遺構・遺物の記載は、将来に正式報告書が刊行された時点でその記述に従うものとする。
- 一、第Ⅸ章大坂城下町跡(OJ97-6次)の調査で出土した動物遺存体は、大阪市立自然史博物館の協力を得て、その分析結果を調査課調査員故久保和士が執筆した。記して深謝いたします。
- 一、発掘調査から本書の作成に係わる作業には補助員諸氏の協力を得た。深く感謝の意を表したい。

凡例

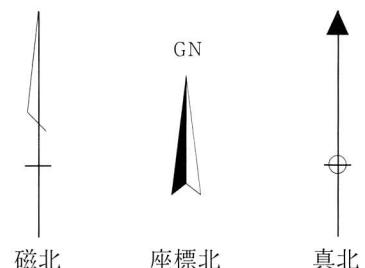
- 各調査次数中のローマ字は、その遺跡の略号を示す(例：「第Ⅱ章加美遺跡の調査 第1節KM98-8次調査」の「KM」は加美遺跡の略号)。遺構名には、方形周溝墓以外について、各種建物(SB)、柱穴・小穴(SP)、土壙(SK)、溝・堀(SD)、井戸(SE)、塀・柵(SA)、畦畔(SR)の略号を冠した。その他の遺構はSXとしたが、形状を示す名称で表した方が具体的で理解しやすいばあいは、その名称を使用した(例：畠状遺構など)。遺構番号は、遺構の種類を示す略号に続いて各調査次数ごとの通し番号を付し(例：SD01)、埋土と層序との関係が明らかなばあいは、検出層準の地層名に関する番号を付した(例：第5層相当の溝=SD501)。
- 遺物番号は、掲載した遺物のすべてに対して通し番号を付した。
- 本書で用いた方位には、磁北・座標北(国土平面直角座標第VI系)・真北の3種類がある。両者の区別は下記の指北記号によって示した。また、本書で用いた水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、図中では「TP±○m」としたが、水準測量が行えなかつたばあいにのみ、現在の地表面からの深さを表した「GL-○m」を用いた。
- 本書で用いた土器編年と器種名については、弥生土器は[佐原真1968]に、古墳～飛鳥時代の須恵器は[田辺昭三1966・1981]に、飛鳥・奈良時代の土器は[奈良国立文化財研究所1976・1978]に従い、煩雑を避けるため本文中では引用を割愛した。これら以外の文献に依拠したばあいはそのつど明記した。
- 本書の地層断面図・柱状図で用いた岩相の基本パターンは[趙哲済1995]のそれに準じて表現している。
- 註は各節末に、引用・参考文献と索引は巻末に掲載した。
- 本報告書で使用する中・近世の時期区分については、大坂城跡・大坂城下町跡の調査成果をもとに下記の区分を採用している。これは一般的な時代区分とは異なるが、記録に残る火災や築城に伴う大規模開発に対照しうる地層を鍵層にして出土遺物を検討した結果得られたものであり、遺跡を解釈する上で設定した時期区分である。

石山本願寺期 本願寺創建(明応5(1496)年)から焼亡(天正8(1580)年)まで

豊臣前期 大坂城三ノ丸築城開始(慶長3(1598)年)まで

豊臣後期 大坂夏の陣(慶長20(1615)年)まで

徳川期 大坂夏の陣以降



本文目次

序文

例言

凡例

第Ⅰ章 1998年度の調査と遺跡の概要

第1節	1998年度の調査	1
第2節	各遺跡の概要	3
1)	加美遺跡・山之内遺跡	3
2)	桑津遺跡・桃ヶ池遺跡・難波大道跡・難波京朱雀大路跡・阿倍野筋遺跡・阿倍寺跡	3
3)	大阪城跡・大坂城下町跡・崇禪寺遺跡	4
第3節	試掘立会調査の結果	6
1)	AS98-1次試掘立会調査	6
2)	ND98-6次試掘立会調査	6
3)	NS98-1次試掘立会調査	7

第Ⅱ章 加美遺跡の調査

第1節	KM98-8次調査	9
1)	調査の経緯と経過	9
2)	調査の結果	10
3)	まとめ	20

第Ⅲ章 山之内遺跡の調査

第1節	YM98-5次調査	27
1)	調査の経緯と経過	27
2)	調査の結果	27
3)	まとめ	30

第Ⅳ章 桑津遺跡の調査

第1節	KW98-3次調査	31
1)	調査の経緯と経過	31
2)	調査の結果	31
3)	まとめ	38

第Ⅴ章 桃ヶ池遺跡の調査

第1節	MG98-6次調査	39
1)	調査の経緯と経過	39
2)	調査の結果	39
3)	まとめ	42

第VI章 阿倍野筋遺跡の調査

第1節	AS98-7次調査	43
1)	調査の経緯と経過	43
2)	調査の結果	43
3)	まとめ	48

第VII章 阿倍寺跡の調査	
第1節 AB98-5・6次調査	51
1) 調査の経緯と経過	51
2) 調査の結果	51
3) まとめ	60
第VIII章 大坂城跡の調査	
第1節 OS98-3次調査	61
1) 調査の経緯と経過	61
2) 調査の結果	62
3) まとめ	66
第2節 OS98-55次調査	69
1) 調査の経緯と経過	69
2) 調査の結果	69
3) まとめ	72
第IX章 大坂城下町跡の調査	
第1節 OJ97-6次調査	75
1) 調査の経緯と経過	75
2) 調査の結果	76
3) まとめ	91
第2節 OJ98-2次調査	94
1) 調査の経緯と経過	94
2) 調査の結果	94
3) まとめ	95
第3節 OJ98-8次調査	96
1) 調査の経緯と経過	96
2) 調査の結果	96
3) まとめ	100
第X章 崇禪寺遺跡の調査	
第1節 SZ98-1次調査	103
1) 調査の経緯と経過	103
2) 調査の結果	103
3) まとめ	110
引用・参考文献	112
あとがき・索引	
英文目次・要旨	
報告書抄録	

図版目次

1 KM98-8次調査の遺構(一)
 上：方形周溝墓の調査風景
 中：1号方形周溝墓完掘状況
 下：2号方形周溝墓完掘状況

2 KM98-8次調査の遺構(二)
 上：3号方形周溝墓完掘状況
 中：SE601上層
 下：SE601完掘状況

3 KM98-8次調査の遺物(一)
 上：SE601出土土器(1)
 下：SE601出土土器(2)

4 KM98-8次調査の遺物(二)

5 YM98-5次調査の遺構
 上：第2層下面検出遺構
 中：SD103完掘状況
 下：調査終了状況

6 KW98-3次調査の遺構(一)
 上：調査区全景
 中：SD01
 下：SD03西壁断面

7 KW98-3次調査の遺構(二)
 上：SB01・02
 中：SP13
 下：SP36遺物出土状況

8 MG98-6次調査の遺構(一)
 上：調査地全景
 中：北壁地層断面およびSD301
 下：第5層上部上面検出状況

9 MG98-6次調査の遺構(二)
 上：SR501検出状況
 中：第5層下部上面検出状況
 下：SD501完掘状況

10 AS98-7次調査の遺構
 上：調査地東半完掘状況
 中：SB01完掘状況
 下：SB01柱穴完掘状況

11 AB98-6次調査の遺構(一)
 上：調査地全景
 中：1区SD01・02
 下：1区SD01・02

12 AB98-6次調査の遺構(二)
 上：1区SD01・02地層断面
 中：4区全景
 下：4・5区落込み1

13 AB98-6次調査の遺構(三)
 上：3・6区全景
 中：6区SK18地層断面
 下：6区SK06遺物出土状況

14 OS98-3次調査の遺構(一)

上：1区西壁断面
 中：1区完掘状況
 下：2区地山上面遺構完掘状況

15 OS98-3次調査の遺構(二)
 上：SK801断面
 中：SK801土器出土状況
 下：SE701断面

16 OS98-55次調査の遺構
 上：第3層下面、第4・5層上面遺構検出状況
 中：SK401土器出土状況
 下：SD301断面

17 OJ97-6次調査の遺構(一)
 上：ザトウクジラおよび貝出土相当層
 中：I期の遺構
 下：I期の遺構

18 OJ97-6次調査の遺構(二)
 上：SX102完掘状況
 中：竈4・5完掘状況
 下：SB01南北断面

19 OJ97-6次調査の遺構(三)
 上：SX01南北断面北部
 中：SX01南北断面南部
 下：SX01東西断面

20 OJ97-6次調査の遺構(四)
 上：SK02上面検出陶磁器
 中：V期遺構検出状況
 下：20区e-f断面

21 OJ98-2次調査の遺構
 上：第1層遺構完掘状況
 下：第2層遺構完掘状況

22 OJ98-8次調査の遺構(一)
 上：北東部SK337・338検出状況
 中：北東部SK337銅鏡出土状況
 下：南東部第3層内庄内式土器出土状況

23 OJ98-8次調査の遺構(二)
 上：南西部第3層内飛鳥時代の土器出土状況
 中：南西部古代の柱穴群
 下：南西部古代の柱穴SP301

24 OJ98-8次調査の遺構(三)
 上：古代の遺構全景
 中：南東部ゴミ穴SK119
 下：南東部江戸時代穴蔵2

25 SZ98-1次調査の遺構(一)
 上：調査地北東部地層断面
 中：第8層堆積状況
 下：第7層完掘状況

26 SZ98-1次調査の遺構(二)
 上：第5c-1層下面検出遺構SD601
 中：木樋掘削状況
 下：木樋連結状況

挿 図 目 次

図 1	大阪市内遺跡分布図	2
図 2	ND98-6次ほかの試掘立会調査地点と中位段丘構成層上面の地形図	6
図 3	難波大道跡の各地点地質柱状図	7
図 4	NS98-1次調査地位置図	7
図 5	KM98-8次調査地位置図	9
図 6	調査地周辺地形図	10
図 7	東壁・南壁地層断面模式図	11
図 8	第3層下面検出遺構平面図	12
図 9	第5層下面検出遺構平面図	13
図10	方形周溝墓平面図	14
図11	方形周溝墓断面図	15
図12	第6a層下面・6b層内検出遺構平面図	16
図13	SE601上層部土器出土状況実測図	17
図14	SE601実測図	18
図15	第6b層下面・6c層上面検出遺構平面図	19
図16	出土遺物(1)	21
図17	出土遺物(2)	22
図18	出土遺物(3)	23
図19	YM98-5次調査地位置図	27
図20	調査地西壁地層断面図	28
図21	第2層基底面検出遺構実測図	29
図22	第2層下面検出遺構平面図	29
図23	出土遺物	30
図24	KW98-3次調査地位置図	31
図25	調査地周辺地形図	31
図26	遺構平面図および調査区西壁地層断面図	32
図27	SB01・02実測図	33
図28	SP13瓦出土状況実測図	33
図29	SD01・03実測図	34
図30	出土遺物(1)	35
図31	出土遺物(2)	37
図32	MG98-6次調査地位置図	39
図33	地層断面模式図	40
図34	第5層上部上面検出遺構平面図	41
図35	第5層下部上面検出遺構平面図	41
図36	SP401~403実測図	42
図37	第3iii層下面検出遺構平面図	42
図38	AS98-7次調査地位置図	43
図39	地層断面模式図	44
図40	第1d層下面・2a層上面検出遺構平面図	45
図41	SB01実測図	45
図42	第1d層内・1c層下面検出遺構平面図	46
図43	各遺構実測図	47
図44	第1b層下面検出遺構平面図	48
図45	出土遺物	49
図46	阿倍野筋遺跡の庄内～布留式期の遺構群分布図	50
図47	AB98-6次調査地位置図	51
図48	調査地地質柱状図	52
図49	調査地遺構配置図	53
図50	1区遺構平面図	54
図51	SD01・02断面実測図	55
図52	4区西半・5区南半遺構平面図	55
図53	6区遺構平面図	56
図54	出土遺物(1)	57
図55	出土遺物(2)	58
図56	出土遺物(3)	59
図57	方形土壇・塔心礎位置と検出遺構	60
図58	OS98-3次調査地位置図	61
図59	調査区配置図	61
図60	北壁・1区西壁断面実測図	62
図61	古墳・飛鳥時代の遺構実測図	64
図62	各時期の検出遺構平面図	65
図63	出土遺物	67
図64	OS98-55次調査地位置図	69
図65	東壁地層断面図	70
図66	古代～中世遺構平面図	70
図67	SD301断面図	71
図68	近世遺構平面図	72
図69	出土遺物(1)	73
図70	出土遺物(2)	74
図71	OJ97-6次調査地位置図	75
図72	地区割りおよび地層断面位置図	76
図73	調査区の各地点地層断面模式図	77
図74	I期の遺構平面図	80
図75	I期の出土遺物	81
図76	II～IV期の遺構平面図	82
図77	III～V期の遺構平面図	83
図78	III期の出土遺物	85
図79	IV期の出土遺物	87
図80	III・IV期の出土遺物	88
図81	SX01出土木製品(1)	89
図82	SX01出土木製品(2)	90
図83	V期の遺構平面図	91
図84	V期の出土遺物	92
図85	船場の町割り推定図	93
図86	OJ98-2次調査地位置図	94

図87	東壁地層断面図	94	図96	出土遺物(2)	101
図88	遺構平面図	95	図97	第1層(一部は第2A層)上面検出遺構平面図	102
図89	釉裏紅実測図	95	図98	SZ98-1次調査地位置図	103
図90	OJ98-8次調査地位置図	96	図99	地層断面模式図	105
図91	地層断面図	97	図100	遺構平面図(1)	106
図92	SK337実測図	98	図101	遺構平面図(2)	107
図93	第2B層上面検出遺構平面図	98	図102	出土遺物(1)	108
図94	出土遺物(1)	99	図103	出土遺物(2)	109
図95	SE201実測図	100			

表 目 次

表1	本書所収の1998年度の調査一覧表	1	表4	MG98-6次調査地層序表	40
表2	各調査のおもな遺構・遺物の一覧表	5	表5	AS98-7次調査地遺物観察表	48
表3	KM98-8次調査地遺物観察表	24	表6	OJ97-6次調査地各地層断面模式図の説明	78

写 真 目 次

写真1	NS98-1次調査地井戸断面	8	写真3	SK101出土鏡のX線写真	95
写真2	SE601出土銅鏡	17			

第Ⅰ章 1998年度の調査と遺跡の概要

第1節 1998年度の調査

財団法人大阪市文化財協会が1998年度に実施した発掘調査は、受託件数で44件を数え、調査面積の合計は9,971m²である。

このうち、本書に収録した調査報告は、民間事業者を受託先とする発掘調査と、大阪市教育委員会から委託を受けた試掘立会の結果である。扱う遺跡数は11個所で、発掘調査は12件、試掘立会は4件である。各調査の調査個所・期間などは表1に、各遺跡の所在と報告した調査位置は図1に示した。各遺跡の地理的環境や歴史的変遷については、既刊の報告書のあるものについては、それを参照されたいが、その他の遺跡については次節で記述した。

表1 本書所収の1998年度の調査一覧表

	遺跡名	調査次数	調査の原因	調査の種類	調査個所	調査期間	面積(m ²)	調査担当者	本文頁
1	加美遺跡	KM98-8	株式会社きんでんによる建設工事	発掘調査	平野区加美東 6-33、45	1998年11月24日～ 1999年2月12日	241	大庭重信・ 杉本厚典	9頁
2	山之内遺跡	YM98-5	大阪市建設局による(仮称) 住吉スポーツセンター建設工事	発掘調査	東住吉区浅香1	1998年5月25日～ 7月8日	200	清水和	27頁
3	桑津遺跡	KW98-3	個人による建設工事	発掘調査	東住吉区桑津 5-21	1998年4月27日～ 5月14日	108	大庭重信	31頁
4	桃ヶ池遺跡	MG98-6	三井不動産株式会社による建設工事	発掘調査	阿倍野区桃ヶ池 1-4-4	1999年1月18日～ 2月3日	72	小倉徹也	39頁
5	阿倍野筋遺跡	AS98-7	白鳳産業株式会社による建設工事	発掘調査	阿倍野区阿倍野筋 4-20-25、31	1998年11月2日～ 11月26日	240	杉本厚典	43頁
6	阿倍寺跡	AB98-5 ・6	日新建物(株)による建設工事	試掘立会 発掘調査	阿倍野区松崎町 2-26-1	1999年1月25日～ 2月26日	160	大庭重信	51頁
7	大坂城跡	OS98-3	野村不動産(株)による建設工事	発掘調査	天王寺区清水谷 19-1・2	1998年4月17日～ 5月15日	159	辻美紀	61頁
8	大坂城跡	OS98-55	(株)ソフト99コーポレーションによる建設工事	発掘調査	中央区糸屋町1-1、 谷町2-11-2、12	1999年1月11日～ 2月18日	136	李陽浩	69頁
9	大坂城下町跡	OJ97-6	三共生興大阪本社ビル 新築工事	発掘調査	中央区備後町2-6	1997年9月16日～ 12月25日	800	清水和・ 平田洋司	75頁
10	大坂城下町跡	OJ98-2	(株)キシモトによる建設工事	発掘調査	中央区平野町1-11	1998年8月20日～ 9月3日	40	李陽浩	94頁
11	大坂城下町跡	OJ98-8	(仮称)安土町複合施設 建設工事	発掘調査	中央区安土町 3-10-1、2、3	1998年10月26日～ 11月26日	240	黒田慶一・ 清水和	96頁
12	崇禪寺遺跡	SZ98-1	淀川キリスト教病院 老人保健施設整備工事	発掘調査	東淀川区淡路 2-61-4	1998年4月6日～ 4月23日	71.2	杉本厚典	103頁
13	阿倍野筋遺跡	AS98-1	大阪市環境事業局による建設工事	試掘立会	阿倍野区阿倍野筋 4-24-23	1998年4月10日	※3	森 毅	6頁
14	難波大道跡	ND98-6	大阪市立自然史博物館による建設工事	試掘立会	東住吉区長居公園 1-23	1998年6月29日～	※5	趙哲済	6頁
15	難波京 朱雀大路跡	NS98-1	個人による共同住宅建設	試掘立会	天王寺区国分町 247-1、2	1998年4月2日～ 4月3日	26	森 毅	7頁

※は試掘トレチの数

各発掘調査の具体的な成果は次章以降に述べた。ただし、試掘立会の成果は本章の第3節でとりあげた。

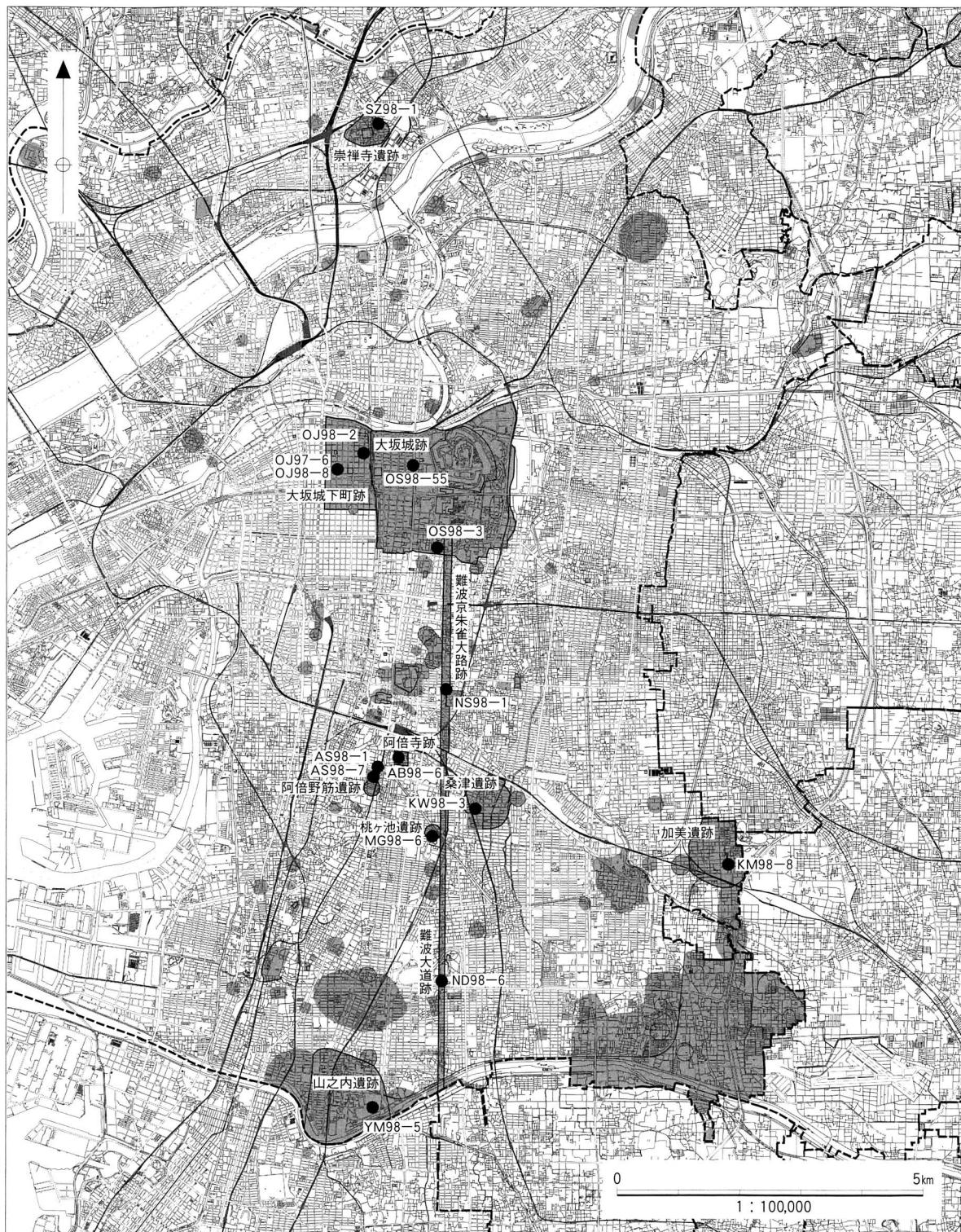


図1 大阪市内遺跡分布図

(本図は国土地理院1997『数値地図2500(空間データ基盤)』大阪-2~4をベースに、大阪市教育委員会1995『大阪市文化財地図』の遺跡範囲を転載したものを下図とし、本書掲載遺跡と調査地点を加えたものである。)

第2節 各遺跡の概要

1) 加美遺跡・山之内遺跡

加美遺跡は大阪市平野区北東部に所在する。東に隣接する久宝寺遺跡、南に接する亀井北遺跡などは加美遺跡と一連の遺跡群としてとらえられる性格のものである。加美遺跡では、これまでに行われた発掘調査によって、地表下2m付近で、弥生時代後期～奈良時代の居住域・墓域に係わる多種多様な遺構・遺物が検出されている[大阪市文化財協会1999b]。本書に掲載したKM98-8次調査地は、弥生時代後期～古墳時代初頭の方形周溝墓が分布する墓域中に位置している。

山之内遺跡は住吉区南部に位置し、上町台地の南部に立地する。西に接して遠里小野遺跡が展開する。本遺跡は、旧石器時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。特に、弥生時代の集落と墓域、古墳時代中期～奈良時代の集落に係わる遺構・遺物の発見が顕著である[大阪市文化財協会1998a・1999c]。本書に掲載したYM98-5次調査地は遺跡の東南部に当り、上町台地の脊梁部よりも東側の緩斜面上に立地する。周辺の調査では沖積層下部から低位段丘構成層上部層に係わる火山灰層と旧石器時代の石器遺物との関連が注目されている。

2) 桑津遺跡・桃ヶ池遺跡・難波大道跡・難波京朱雀大路跡・阿倍野筋遺跡・阿倍寺跡

桑津遺跡は東住吉区の北端付近に位置し、上町台地の東斜面にあって、上町台地から分岐する丘陵上に展開している後期旧石器時代以降の複合遺跡である。過去の調査結果から、この丘陵上には弥生時代中期と飛鳥・奈良時代を中心とする居住域が広がっていたことが判明している[大阪市文化財協会1998b]。本書に掲載したKW98-3次調査地は、この丘陵の頂部に当り遺跡内でも最も高い場所となっている。また、調査地の東側30mのKW93-26次調査地点では、桑津遺跡内では数少ない弥生時代後半の竪穴住居が見つかっている。

桃ヶ池遺跡は上町台地東斜面の中腹部に立地し、難波大道跡の西に接して存在する。遺跡の周辺には北東に桑津遺跡、南に山坂遺跡、南田辺遺跡、西に阿倍野筋遺跡がある。現在までの調査事例が少なく、遺跡の性格については未解明な点が多い。本書に掲載したMG98-6次調査地は桃ヶ池の北西部に位置する。桃ヶ池から北東に続く谷に位置する生野区勝山遺跡では、自然流路から縄文時代前期の土器が多く見つかっており、桃ヶ池遺跡においても縄文時代の遺構・遺物の発見が期待されている。

難波大道跡・難波京朱雀大路跡は難波宮から南に向かってその中軸線上に想定される古道で、推定京域内が朱雀大路跡、京域外で現大和川付近までが大道跡に指定されている。本書では朱雀大路跡で行われたNS98-1次、大道跡で行われたND98-6次の試掘立会調査の結果を記した。

阿倍野筋遺跡は阿倍野区に所在し、これまで6次の発掘調査が行われた。おもな遺構として、庄内式期古段階の3棟の竪穴住居(AS97-8次調査)、布留式期古段階の3棟の竪穴住居(AS89-1次調査)などが確認され[大阪市文化財協会1999a]、弥生時代末葉～古墳時代初頭の集落遺跡であることが判明している。また、曳網漁に用いられたと推定される大型の管状土錘も多量に出土し、集落の生

産活動の一側面が明らかとなった。本書に掲載したAS98-7次調査地はそれらに近接する位置に当たり、同様に古墳時代初頭の居住域が広がっていることが予想された。

阿倍寺跡は上町台地西斜面に立地し、阿倍野筋遺跡の北東約500mに位置する。文献や地籍図に阿倍寺に関する資料があり、また、遺跡内の松長大明神の付近には、現存しないが方形の土壇とその上の礎石、また土壇の南側に塔心礎石があったようである[明山大華1933]。周辺からは古代の瓦が採集されており、白鳳時代にさかのほる古代寺院として注目されてきた。本書に収録した調査は、阿倍寺に係わる初めての本格的な発掘調査である。本書に掲載したAB98-6次調査は、1998年12月～翌年2月に大阪市教育委員会および当協会によって3回の試掘調査が行われた結果、寺院に係わると考えられる遺構の存在が明らかになったために実施された。

3) 大坂城跡・大坂城下町跡・崇禪寺遺跡

大坂城跡は中央区に所在し、その範囲内には森の宮遺跡・難波宮跡が含まれている。調査された資料も旧石器時代～近代と幅広く、難波宮下層遺構や難波宮跡に関連する遺構群が調査されることも多い。豊臣氏によって中世末葉の石山本願寺跡地に築かれた大坂城は、大坂の陣を経て徳川氏が再建した。発掘調査では、この2時期にわたる大坂城の造成、建築に係わる遺構が見つかっている。1583年に築城が開始された豊臣氏大坂城は、天守閣(本丸)の周りを二の丸・惣構が取り囲む、約2km四方の巨大なものであり、1598(慶長3)年に、二の丸と惣構の間に三の丸を築いて完成された。本書に掲載したOS98-3次調査は惣構南部に、OS98-55次調査は、惣構西部の東よりに位置する。

大坂城下町跡は中央区に所在し、大坂城惣構の西に接する船場地域が指定されている。本書ではOJ97-6次・OJ98-2次・OJ98-8次調査の3件を掲載した。

崇禪寺遺跡は東淀川区淡路1・2丁目から東中島4・5・6丁目にかけての一帯に位置する弥生時代中期～近世の複合遺跡である。特に、上町台地の北端から北に向かって堆積した「長柄砂嘴・砂州」上に存在する弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺構が注目される。これらの遺構からは、漁撈具のほか、近隣地域に加え吉備・山陰・東海・北陸からの搬入土器が多数出土し、生業や他地域との交流に係わる情報が得られている[大阪府教育委員会1981・大阪市文化財協会1999d]。

表2 各調査のおもな遺構・遺物の一覧表

調査次数	弥生	古墳	飛鳥・奈良	平安	鎌倉・室町	安土・桃山	江戸	備考
1 KM98-8	井戸・溝・土壌 後期土器	方形周溝墓3 庄内・布留式土器・銅鏡				戸間	戸間	
2 YM98-5					溝 瓦器	鉢溝		
3 KW98-3	柱穴・溝・土壌 中期土器・磨製石庖丁・ その他石器遺物(古墳 時代溝から後期土器)	溝 土師器	掘立柱建物2 土師器・須恵器・瓦	掘立柱建物3・土壌 土師器・須恵器・ 黒色土器A類・陶器				
4 MG98-6					柱穴・溝・土壌・畦畔 土師器・須恵器・瓦器・瓦			
5 AS98-7		掘立柱建物1・小溝(前 期)・溝・土壌(後期) 古式土師器・須恵器			溝・小穴 瓦器		建物礎石・小穴・井戸 ・溝ほか 土師器・陶器・土人形	ほか古代以降 の掘立柱建物1
6 AB98-5 ・6			須恵器・軒丸瓦・ 軒平瓦	瓦	大溝・落込み 土師器・瓦質土器・備前 焼・輸入陶磁・瓦・石臼・ 鉄製品・橢形鉄滓・貝など			
7 OS98-3		柱穴・井戸・土壌・落込み 土師器・須恵器(古墳時代中期末～後期前) 土師器・須恵器(飛鳥時代)			掘立柱建物 瓦器・瓦質土器		土壌・島崩 陶磁器・瓦・土人形	
8 OS98-55		柵・柱穴・溝・土壌 陶質土器	土師器・須恵器・ 重圓文軒丸瓦		溝・土壌 須恵器・瓦器	陶器	柱穴・井戸・土壌 土師器・須恵器・ 陶磁器	
9 OJ97-6	土器(後世包含層から)	埴輪(平安包含層から)		柱穴・土壌 土師器・須恵器・ 黒色土器・銷壺	土壌 陶器・瓦	井戸・溝・土壌 陶磁器・輸入磁器	竈・博列建物・井戸・ 土壌・埴・石列 土師器・瓦質土器・陶 磁器・木簡・骨木製品	
10 OJ98-2						土壌 銅鏡	井戸・土壌 輸入磁器(釉裏紅)・ 瓦	
11 OJ98-8	土壌 古式土師器・飯蛸壺・ 銅鏡・土錐	掘立柱建物 製塙土器					井戸・柵列・土壌・ 穴藏 陶磁器・輸入磁器 铸造関係遺物	
12 SZ98-1	後期土器	古式土師器(中近世の遺 構・包含層から)			溝 瓦器・瓦質土器・白磁・瓦	鉢溝	本通・溝 土師器・陶磁器	
13 AS98-1		遺物包含層						
14 ND98-6								低位段丘構成 層下部～中位 段丘構成層を 確認
15 NS98-1					井戸 瓦質土器・軒瓦			

第3節 試掘立会調査の結果

1) AS98-1次試掘立会調査

4月10日に実施された阿倍野区の阿倍野筋遺跡の試掘立会調査である。本書で掲載したAS98-7次調査地点は、本試掘調査地点の南側500m付近に位置する。現在の地表面から約0.4~0.5m下位で近世以降の遺物包含層が堆積し、その下に古墳時代~中世の包含層が認められた。本試掘立会に先行して実施された大阪市教育委員会文化財保護課の試掘立会の結果とを併せて、発掘調査が実施されることとなった。調査は5月11日から約4ヶ月間にわたり、古墳時代前期の竪穴住居をはじめとする遺構や、漁撈具や製塩土器などの遺物が多数見つかった。その詳細な結果については、すでに報告書が刊行されている[大阪市文化財協会1999a]。

2) ND98-6次試掘立会調査

6月29日に実施された東住吉区の長居公園内の試掘立会調査である。試掘場は5箇所を設定し、その結果、現在の地表から約1.40m以内で、低位段丘構成層相当層(長原標準層序15層)を認めることができた(図2・3)。その下位には、中位段丘構成層相当層(同16~18層)が堆積し、吾彦火山灰層準(同16Bi層)も認めることができた。この火山灰層準は平野区長原遺跡や住吉区山之内遺跡などでも確認されている鍵層である。また、低位段丘と中位段丘の地層境界面に凹みが認められた。断面観察によるものであるが、偶蹄類や長鼻類などの大型動物の足跡化石と思われる。なお、難波大道跡に係わる資料は確認できなかった。さらに、本試掘立会を受けて、その後の建設工事の進行に伴い、3回の工事立会が追加実施されている。

(清水和明)

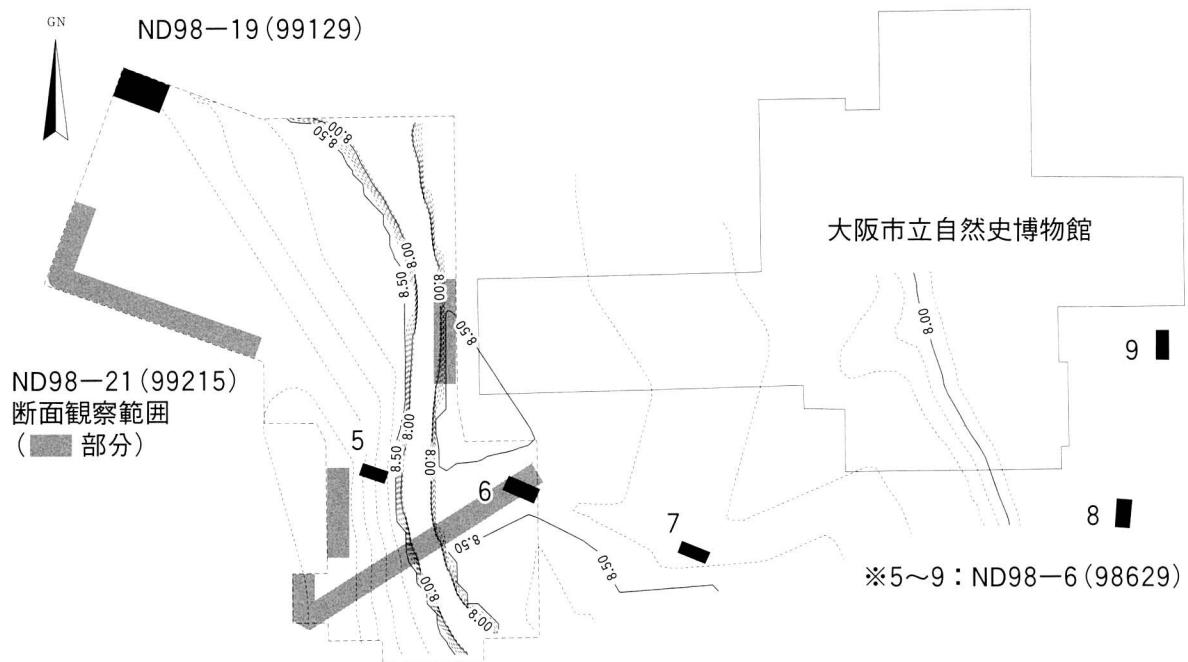


図2 ND98-6次ほかの試掘立会調査地点と中位段丘構成層上面の地形図

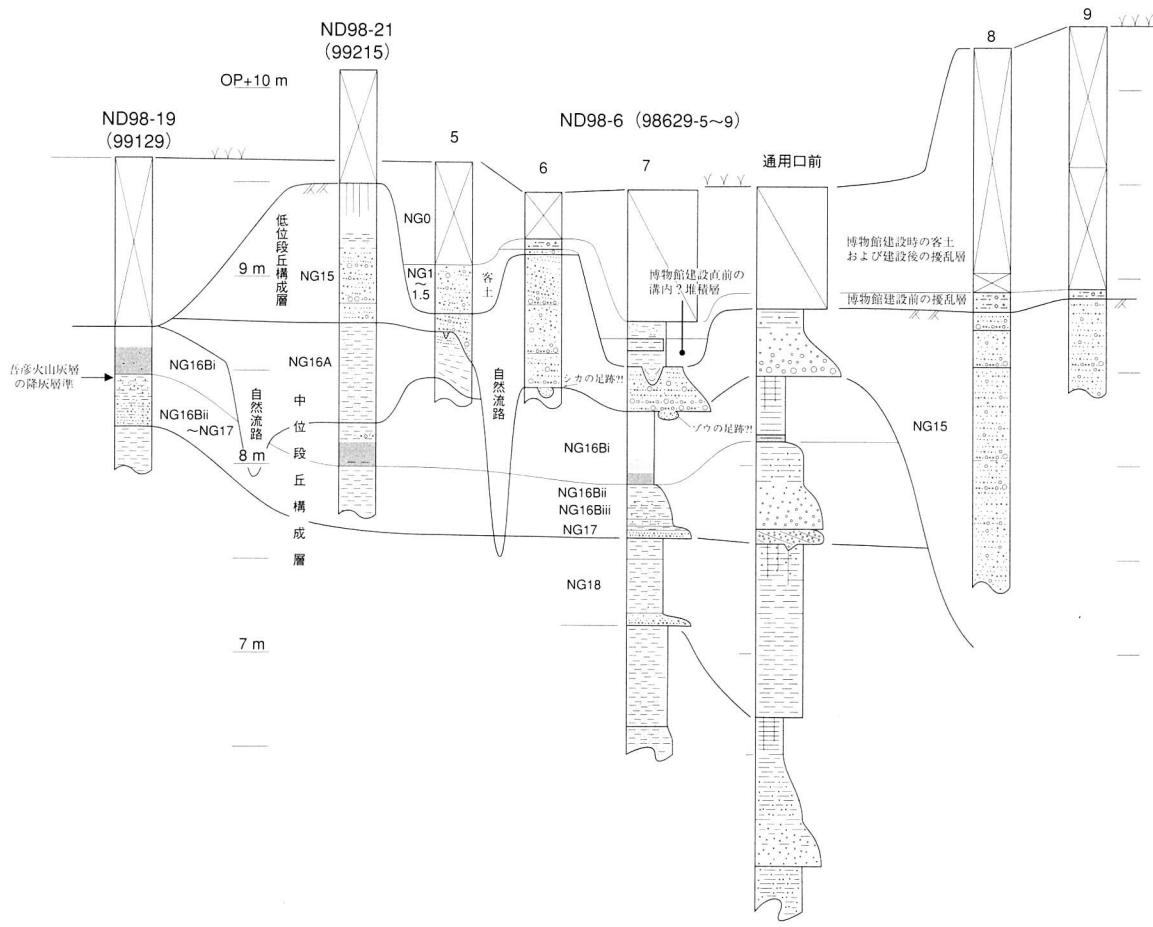


図3 難波大道跡の各地点地質柱状図

3) NS98-1次試掘立会調査

1997年12月4日にNS97-21次で試掘調査した結果、古代の柱穴ではないかと考えられる遺構が確認された。そのため、遺構の残存状況を調べるために、同月10日に空地となっていた敷地西部で再試掘を行った。

その結果、古代と考えられた遺構には15世紀代の瓦質土器羽釜が含まれていることと、さらに西側に17世紀後半の陶器を含む深さ1.4mの溝が確認された。いずれの遺構も地山上面で確認されることから、モデルハウスが撤去された1998年4月2日と3日の二日間で地山上面の遺構確認を行うこととなった。

確認されたほとんどの遺構は18世紀以降の近

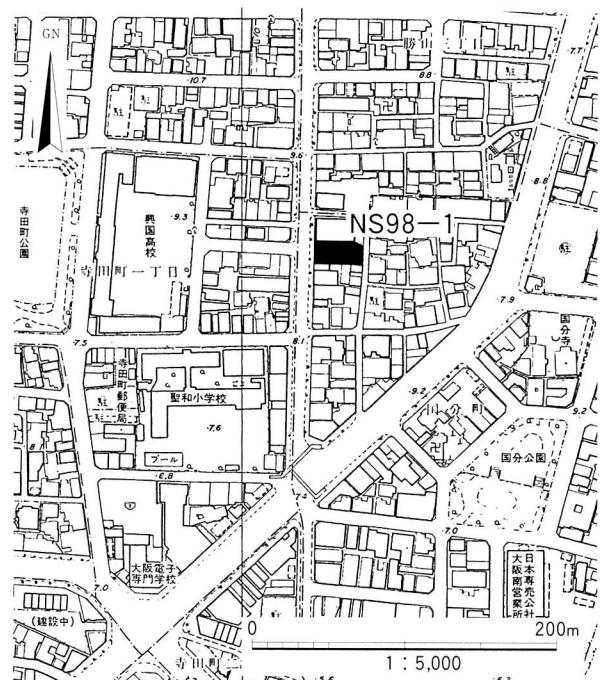


図4 NS98-1次調査地位置図



写真1 NS98-1次調査地井戸断面

世・近代のものであったが、初回の試掘調査で確認された遺構が15世紀代の素掘りの井戸であることが判明した(写真1)。井戸の直径は0.80~0.86mで、深さは約2mである。上部は一気に埋戻され、下部はレンズ状の堆積が認められた。埋土からは摂津国分寺と同範の瓦が出土しており、いずれも火を受けていた。瓦以外に瓦質土器羽釜や備前焼が出土しており、埋没時期は15世紀後半と考えられる。この地域では中世の遺構から国分寺の瓦が出土することがよくある。 (森)

第Ⅱ章 加美遺跡の調査

第1節 KM98-8次調査

1) 調査の経緯と経過

今回の調査地はKM84-1次調査地の北西隣、KM97-1次調査地の南隣、加美東小学校調査地およびKM85-6次調査地の東約150mの位置に当る(図5・6)。

本調査に先立って10月6日に実施された試掘調査では、敷地内の東西に合計2個所のトレンチを設定し、東側のトレンチにおいて現地表下2mで、弥生時代後期の土器片を含む包含層が確認された。周辺の調査結果も考慮すると、本調査地においても、弥生時代後期の集落、庄内式期から布留式期の方形周溝墓群の存在が予想された。

これを承けて11月24日から本調査を行うこととなり、方形周溝墓群の広がりが想定される敷地内の東側に調査区を設定し、近世の作土層までを重機で除去した後、人力による掘削を開始した。近世、奈良時代の遺構を調査した後、12月上旬には方形周溝墓の溝の輪郭を検出し、溝の内部を分層しながら掘下げた。その結果、調査区の東、北西、南西で合計3基の方形周溝墓を検出した。



図5 KM98-8次調査地位位置図

1:KM98-8(今回の調査地)、2:KM95-14、3:KM87-2、4:KM97-1、5:KM85-6、6:加美東小学校調査、7:KM84-1、8:KM83-2、9:KM81-1、10:KM83-7、11:KM84-14・KM85-3・KM85-7



図6 調査地周辺地形図

12月下旬に方形周溝墓の墳丘が調査区内では完全におさまらず、主体部の存在も確認できないことが判明したため、株式会社きんでんと大阪市教育委員会との間で協議がもたれ、方形周溝墓の規模、主体部の有無を明らかにする目的で調査地南西部を拡張することになった。拡張作業は重機により1月10・11日に行い、墳丘より上の地層を除去後、直ちに方形周溝墓の溝および主体部の検出作業に入った。20日以降は墳丘の下層の遺構の調査を行い、井戸・溝・土壌などを完掘した。発掘調査は2月10日、埋戻しを行いながら部分的に重機で断割り調査を行い、2月12日に埋戻しを含めて、すべての現場作業を終了した。

調査に用いた方位は国土平面直角座標第VI系であり、標高はTP値である。

なお本文中に用いる土器の編年は、弥生時代後期については寺沢薰・森井貞雄両氏の見解[寺沢薰・森井貞雄1989]に、庄内式期については米田敏幸氏の見解[米田敏幸1991]に従った。

2) 調査の結果

i) 層序(図7)

第1層はオリーブ黒色含シルト細粒砂である。作土層であり、調査地東部の本層下面で南北方向にのびる木樋を検出した。

第2層は灰オリーブ色細粒砂混りシルトである。近代の遺物が含まれていた。作土層であり、この層の下面で畝間溝を数多く検出した。

第3層はオリーブ灰色粗粒砂混りシルト質粘土である。この地層の中に含まれていたもっとも新しい遺物は口縁端反りの特徴をもった無貫入の白磁皿で、15~16世紀のものである。

第4層はオリーブ灰色粘土で、調査地の南部に分布していた。この層からは1(図16)に示したような奈良時代の須恵器壺Lの底部が出土した。また、調査地の北西部では、TP+5.50~5.54mに粗粒砂~細礫が分布しており、厚い個所で4cmの堆積が認められた。南に広がる粘土層と直接的な重なりはなかったが、粘土層の方が検出レベルが低く、かつ第3層には粗粒砂から細礫が多く含まれていたことを考慮すると、粘土層の上に粗粒砂層が堆積していた可能性が高い。

第5層は方形周溝墓の溝内堆積層と墳丘の機能時堆積層である。溝内堆積層の上層は偽礫を多く含

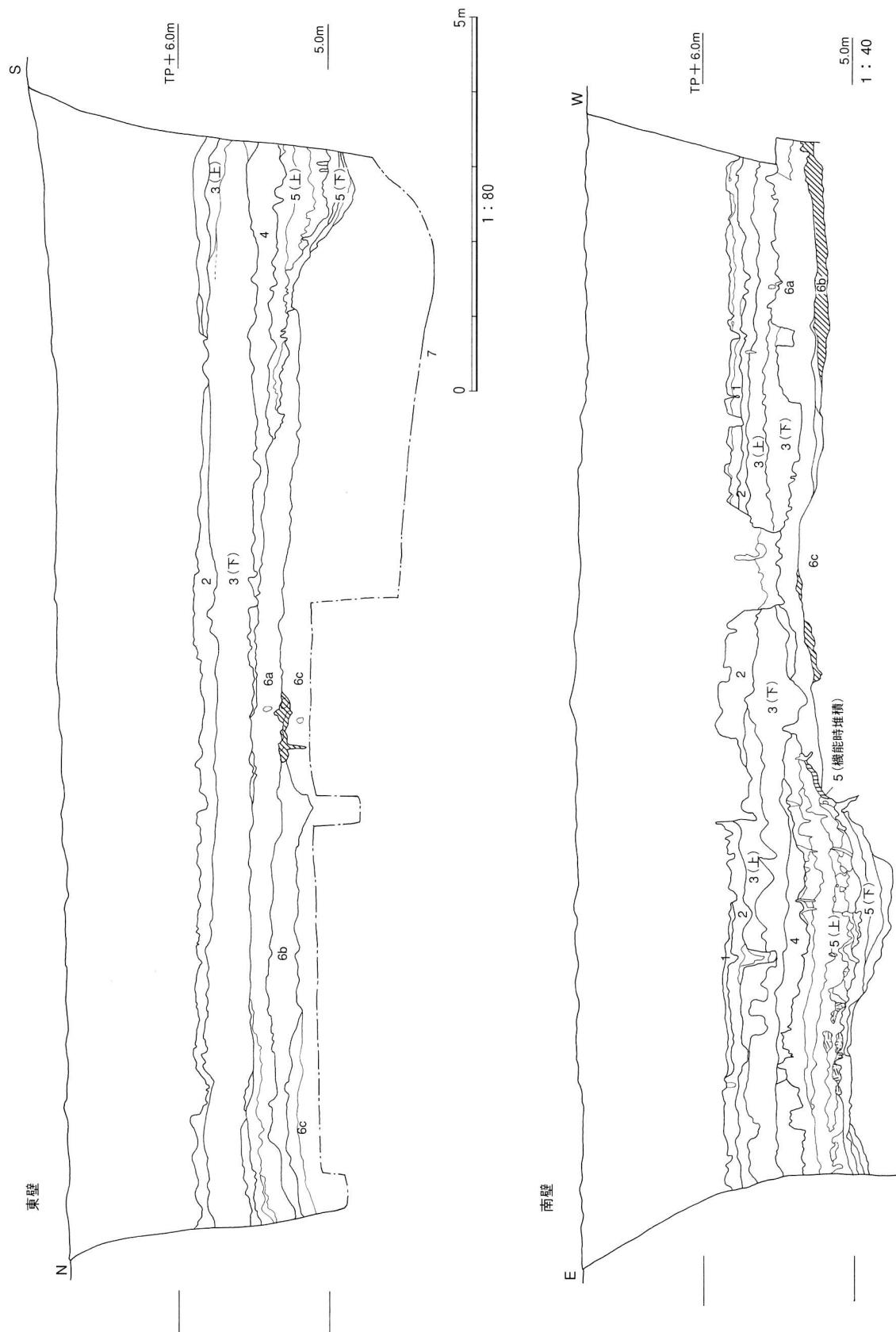


図7 東壁・南壁地層断面模式図

む褐色砂質シルトであり、下層はオリーブ黒色粘土～シルト、灰オリーブ色粘土などの互層である。機能時堆積層はオリーブ黒色細粒砂混りシルト層であった。この地層は庄内式V期から布留式古段階の時期に相当する。

第6層は墳丘構築時の盛土である6a層と、弥生時代後期の6b・6c層に分かれる。第6a層は方形周溝墓ごとに層相を異にする。

1号方形周溝墓の第6a層は褐色粗～細粒砂混りシルトである。本層に含まれる粗粒砂は調査地中央部に多く、下層のSP604の埋土となった粗粒砂と同一の起源であろう。

2号方形周溝墓の第6a層は褐色のシルト質粘土層である。また第6b層が厚く堆積していた調査地南西部では、灰色のシルト層に直径1cm前後の黒色の粘土混りシルトの偽礫が多く含まれていた。また調査地南西部の本層下面では、面的に炭化物の薄層が認められた。炭化物は植物茎のはっきりと分かるものが多く、ほぼ原位置をとどめると考えられ、水の営力で再堆積した植物ラミナとは異なるものと判断した。盛土を行う前に植物を刈り取り、整地した痕跡と考えることも可能であろう。

3号方形周溝墓の第6a層は、粗粒砂を少量含む灰オリーブ色細粒砂層である。



図8 第3層下面検出遺構平面図

第6b層は調査地南西部と北西部に分布する黒色粘土混りシルトである。

第6c層は灰オリーブ色シルトと細粒砂が交互に堆積する水成層である。この層は調査地全体に広がっており、上部は薄く暗色化していた。弥生時代後期の遺構が営まれたベースである。

第7層は調査地北西隅、調査地南東隅の探掘りトレンチ、およびSE601の断割り調査で確認した、TP+4.0m付近に堆積する細礫から小礫の層である。この地層の上面は比較的固くしまっていた。SE601の断割り時に、この細礫層の上面から弥生時代後期の広口壺17(図16)が出土した。

ii) 遺構と遺物

第1層下面では調査地東側で南北に延びる木樋を検出した。

第2・3層下面では調査地全体

で南北に延びる畝間を確認した(図8)。これらから中世後期以降、本調査地が耕作地であったことがわかる。第4層下面には顕著な遺構はなく、木根の痕跡を2個所で認めただけであった。

a. 第5層下面検出遺構(図9~11、図版1・2)

1号方形周溝墓は調査地北西部に位置している。検出面での墳丘の規模は東西7.3m以上、南北5.4

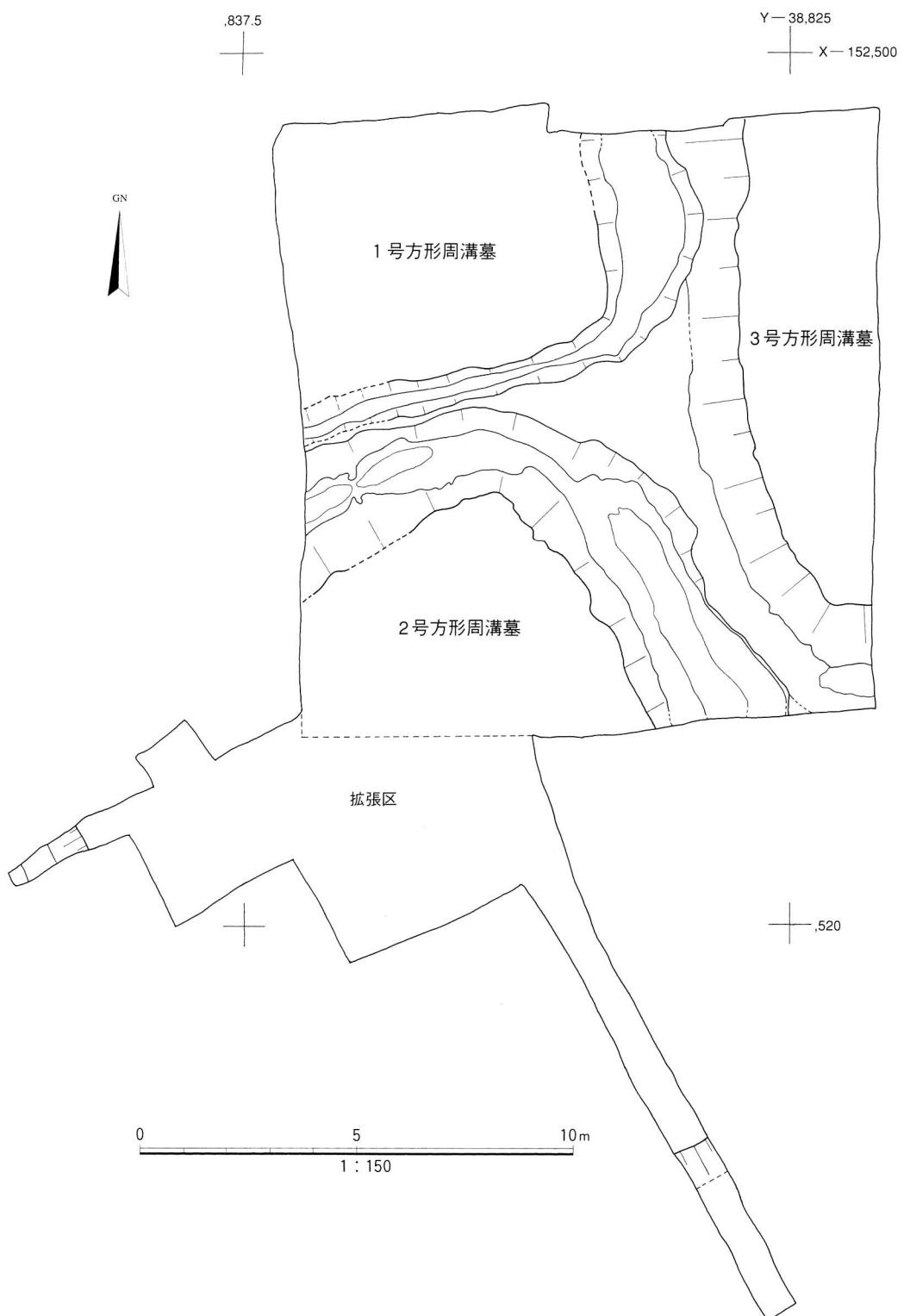


図9 第5層下面検出遺構平面図

m以上であった。東溝は上部の幅2.40m、下部の幅1.58m、深さ0.40mであった。南溝は東側よりも狭く、上部の幅0.69m、下部の幅0.28m、深さは0.52mであった。溝の堆積は上下2層に分かれる。上層は1~6cmの大きさの偽礫を含む粗粒砂混り細粒砂であった。偽礫はにぶい黄橙色の粗粒砂混り細粒砂~シルトで構成されており、墳丘の盛土と共通する。また溝の上層より出土した土器は磨滅した破片であり、弥生時代後期のものに限定される。したがって、墳丘を削平し、当時、完全に埋りきつていなかった溝に排土を投棄したと考えられる。溝の下層は細粒砂の上に、黒褐色粘土が2~5cm堆積し、墳丘側からシルトおよび細粒砂が流れ込んだ後、シルト質粘土で埋っていた。下層の最上部を構成する炭化物のラミナが、上層の偽礫の荷重で変形を受けている状況が観察された。南溝内の堆積も東溝と同じであった。1号方形周溝墓の東溝は3号方形周溝墓の墳丘を部分的に掘込んで設けられ

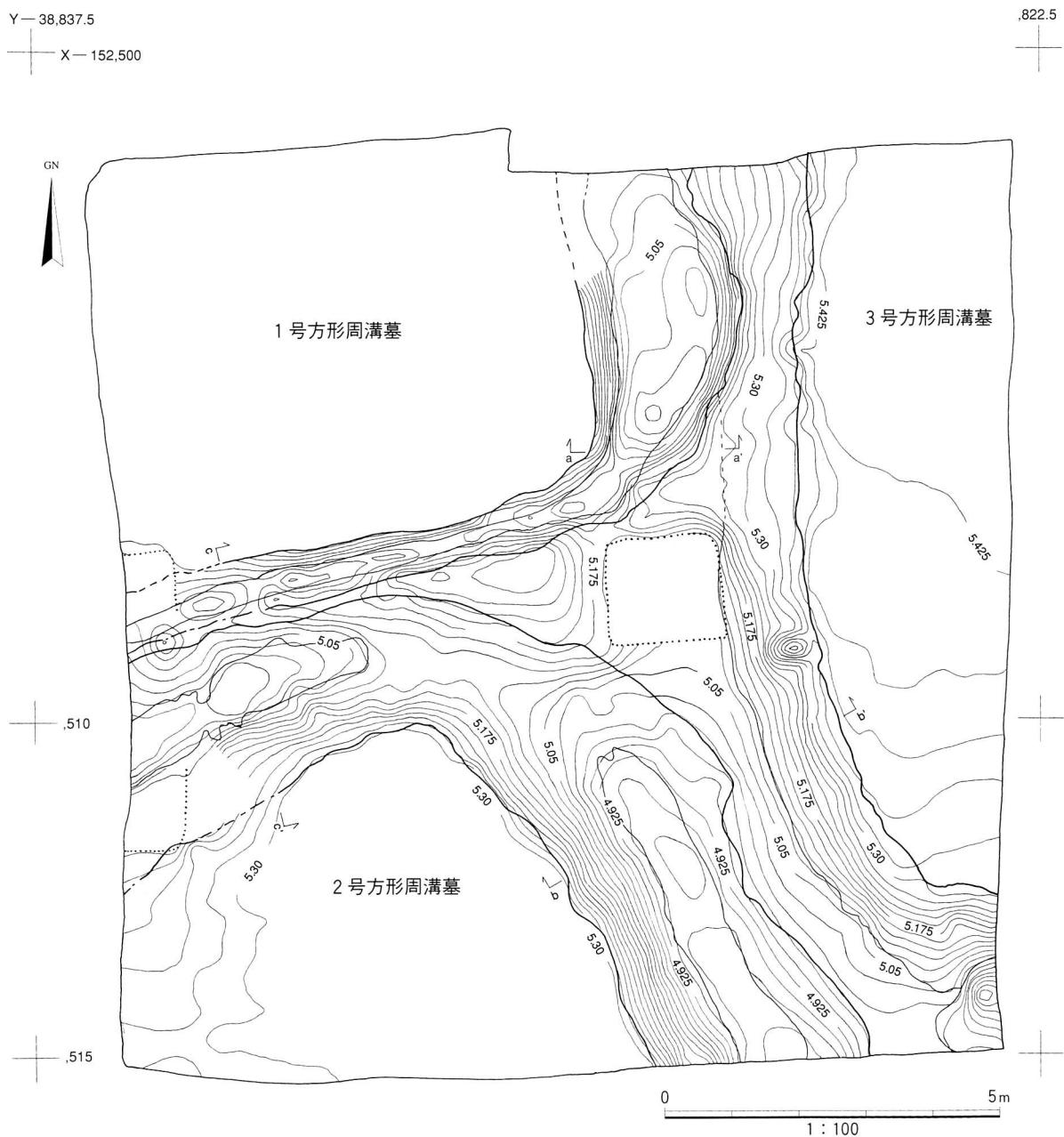


図10 方形周溝墓平面図

ていた。1号方形周溝墓の南溝と2号方形周溝墓の北溝には直接的な切合は認められなかったが、2号方形周溝墓の北溝上層は、1号方形周溝墓の南溝上層を覆っていた。

遺物は布留式甕の底部が2点、生駒西麓産庄内式甕の細片が出土した。布留式甕8(図16)の底部内面にはユビオサエの痕跡が明瞭である。

2号方形周溝墓は調査地南西部に位置する。主体部は検出できなかった。検出面での墳丘の規模は東西12.8m、南北15.4mであった。2号方形周溝墓の東溝は上部の幅2.84m、下部の幅1.68m、深さ0.65mであった。溝は墳丘の北東コーナーでは浅く、そこから離れるにつれて深くなっている。溝のもっとも深い場所は検出面から溝底まで0.8mあった。北溝は上部の幅2.20~2.40m、下部の幅0.86~1.60m、深さ約0.6mであり、墳丘北東部のコーナーから離れるにつれて深くなっていた。

東溝の堆積は上下2層に大別される。上層の堆積物は1~6cmの大きさの偽礫を含む粗粒砂混り細粒砂であった。偽礫は灰黄色の細粒砂からシルトで構成され、墳丘の盛土と共に通していた。また上層より出土した土器は磨滅の著しい破片で、時期の判別可能な個体は弥生時代後期のものに限定される。したがって、当時、完全に埋りきっていなかった溝に、墳丘を削平した排土を投棄したと考えられる。

溝の下層は、下部が腐食した植物茎を多く含むオリーブ黒色粘土層で、2~5cm埋った後、墳丘側からシルトおよび細粒砂が流れ込み、その上に炭化した植物の細片を多く含むオリーブ黒色シルト質粘土が堆積していた。溝下層のラミナが上層の偽礫の荷重によって変形した状況が観察された。北溝内の堆積も東溝の状況と同じであった。

2号方形周溝墓の東溝は3号方形周溝墓の西溝を一段掘下げて設けられており、3号方形周溝墓の後に2号方形周溝墓が構築されたことが分かる。しかし、溝の埋土の堆積は同時と判断された。

1号方形周溝墓の南溝と2号方形周溝墓の北溝には直接的な切合は認められないが、2号方形周溝墓の北溝の上層は1号方形周溝墓の南溝の上層直上に堆積しており、幅が広くて深い2号方形周溝墓の溝の方が、1号方形周溝墓の南溝が埋没後も窪地として残存していたようである。

遺物は壺の垂下口縁部・甕・小型丸底壺・高杯が墳丘斜面や溝底から出土した(図16-2~7)。

3号方形周溝墓は調査地東半部に位置する。検出面での墳丘の規模は東西3.2m以上、南北11.3m

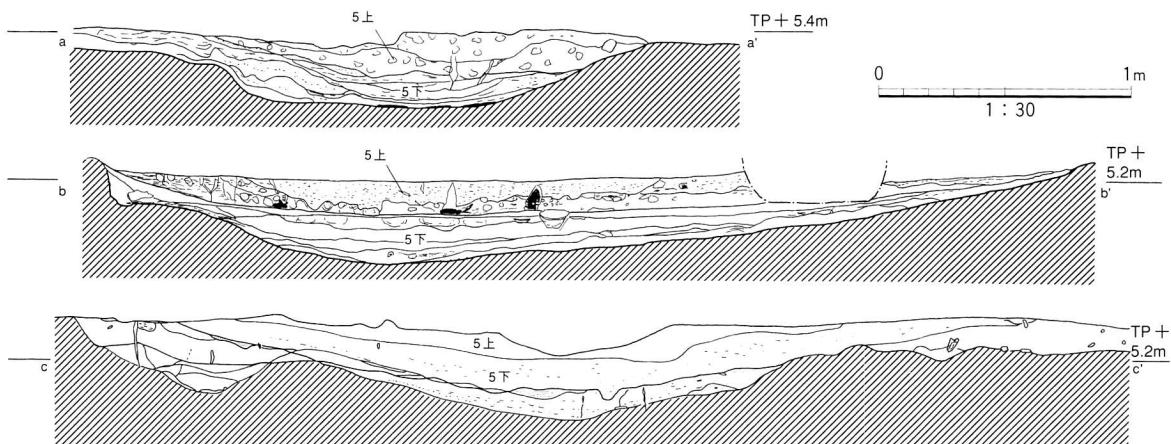


図11 方形周溝墓断面図

以上であった。主体部は調査地の外にあると考えられる。3号方形周溝墓の西溝は、2号方形周溝墓の東溝と共有されていたと考えられる。3号方形周溝墓が構築された当初の西溝の規模は不明である。南溝は上部の幅3.5m以上、下部の幅1.5m、検出面からの深さは0.48mであった。

南溝の堆積は上下2層に分かれ、2号方形周溝墓東溝の堆積状況と同じであった。ただし上層に含まれていた偽礫は灰黄色の細粒砂およびシルトで構成されており、3号方形周溝墓の墳丘の盛土と類似していた。また3号方形周溝墓の南溝最上部には4層の粘土が約20cm堆積し、奈良時代の壺L1(図16)が含まれていた。3号方形周溝墓に伴う確実な遺物はなかったが、盛土の中から弥生時代後期の鉢底部11(図16)が出土した。

b. 第6a層下面・6b層内検出遺構(図12、図版2～4)

SE601(図13・14)は第6b層を掘削中に検出した井戸である。井戸の上部は直径3.0m、深さ0.73m

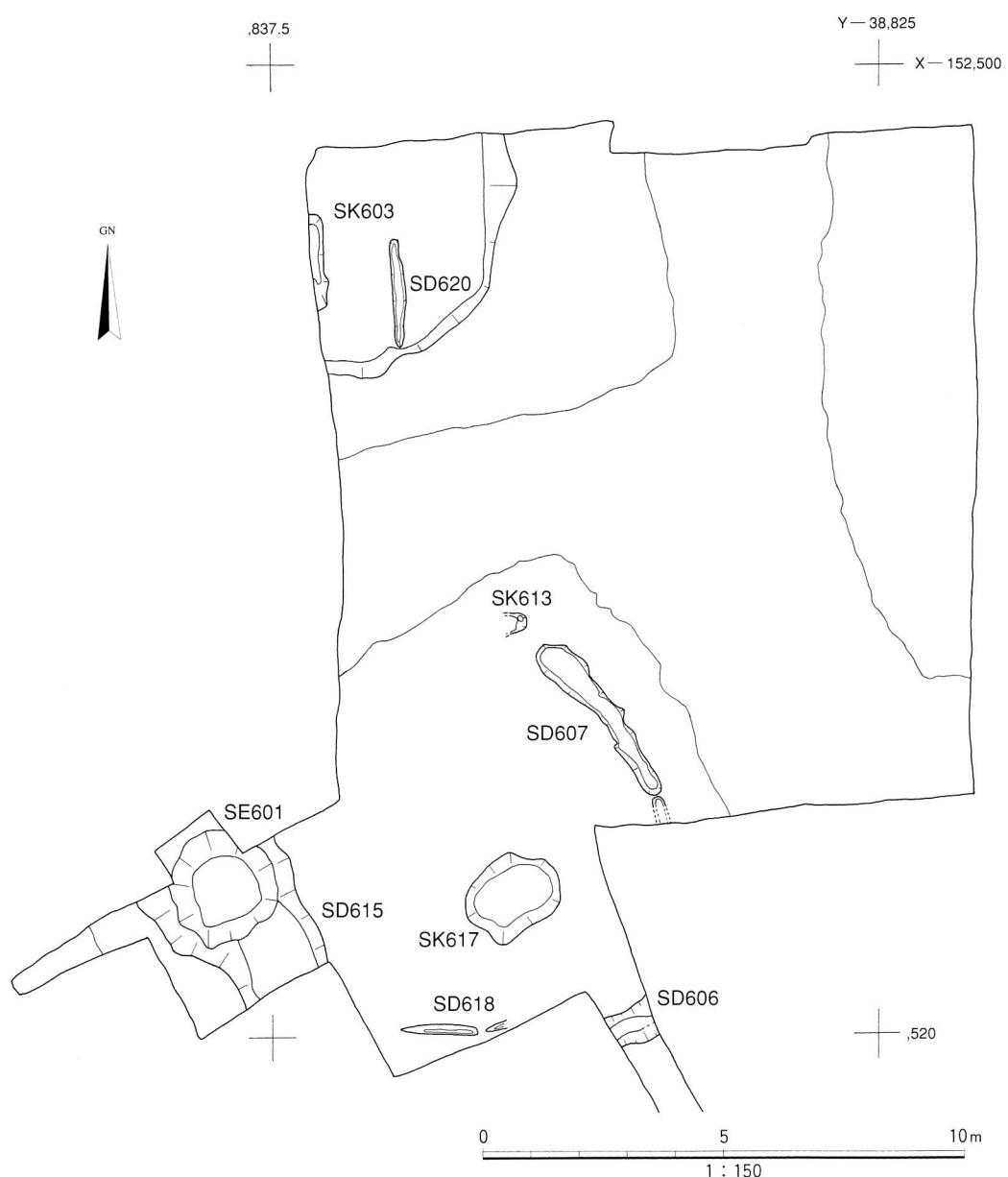


図12 第6a層下面・6b層内検出遺構平面図

で擂鉢状に凹み、大きく二段に落込んでいた。下部は直径2.14～2.30m、深さ1.10mで、筒状にTP+4.2mのレベルまで掘下げられていた。検出面から井戸底面まで1.83mあった。素掘りで側壁に井戸側などの施設は見られず、井戸下部の南東側は底面から0.8mの高さまでが抉れていた。

井戸の上部には炭・灰・焼土の塊を多く含むシルト層と、第6c層が再堆積したシルト質細粒砂層が交互に堆積していた。埋土中からは銅鏃1点、砥石1点、軽石2点、および400点余りの土器片が出土した。土器は弥生時代後期の河内VI-2様式新段階の資料で、庄内式甕は含まれていなかつた(図17・18)。銅鏃51は全長3.4cmで、刃部の幅は1.0cm、厚さは0.3cm、茎の直径は0.4cm、重量は2.99gである(写真2)。

井戸の下部にはシルト混り細粒砂と細粒砂が交互に堆積していた。埋土内から少量の土器が出土したほか、抉れた部分では3本の木材が出土し、うち1本は端部に加工痕が認められた。井戸の深部の断割り調査時にTP+4.0mの極粗粒砂層から激しい湧水が観察された。井戸底はこの極粗粒砂層より約20cm上になる。

井戸の上層で見つかった多くの土器・金属器18～56(図17・18)はほぼ完全に取上げたにもかかわらず、完形に復元されるものは少なかった。一般に井戸の廃絶時の祭祀では完形の土器を投棄する事例が多いことを考慮すると、祭祀よりも井戸廃絶後に生活用具を廃棄していた可能性が高い。二次的な被熱痕をとどめる土器にミニチュアの高杯、加飾直口壺など、通常、火にかけて用いることのない器形が存在する点に祭祀の可能性を説く余地も残されるが、土器は破片になってから二次的に熱を受けて変色したものが多いため、使用のために火にかけられたとはいがたい。むしろ割れた土器のかけらがその他のものと一緒に燃やされ、すでに半分



51

写真2 SE601出土銅鏃

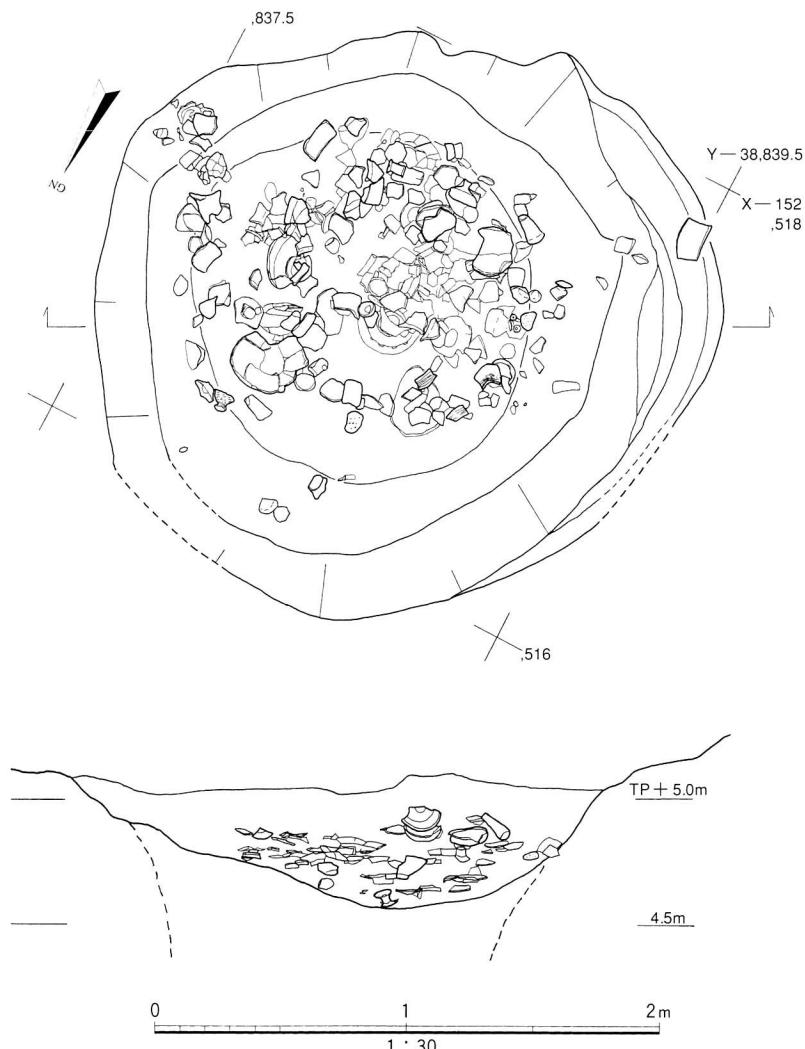


図13 SE601上層部土器出土状況実測図

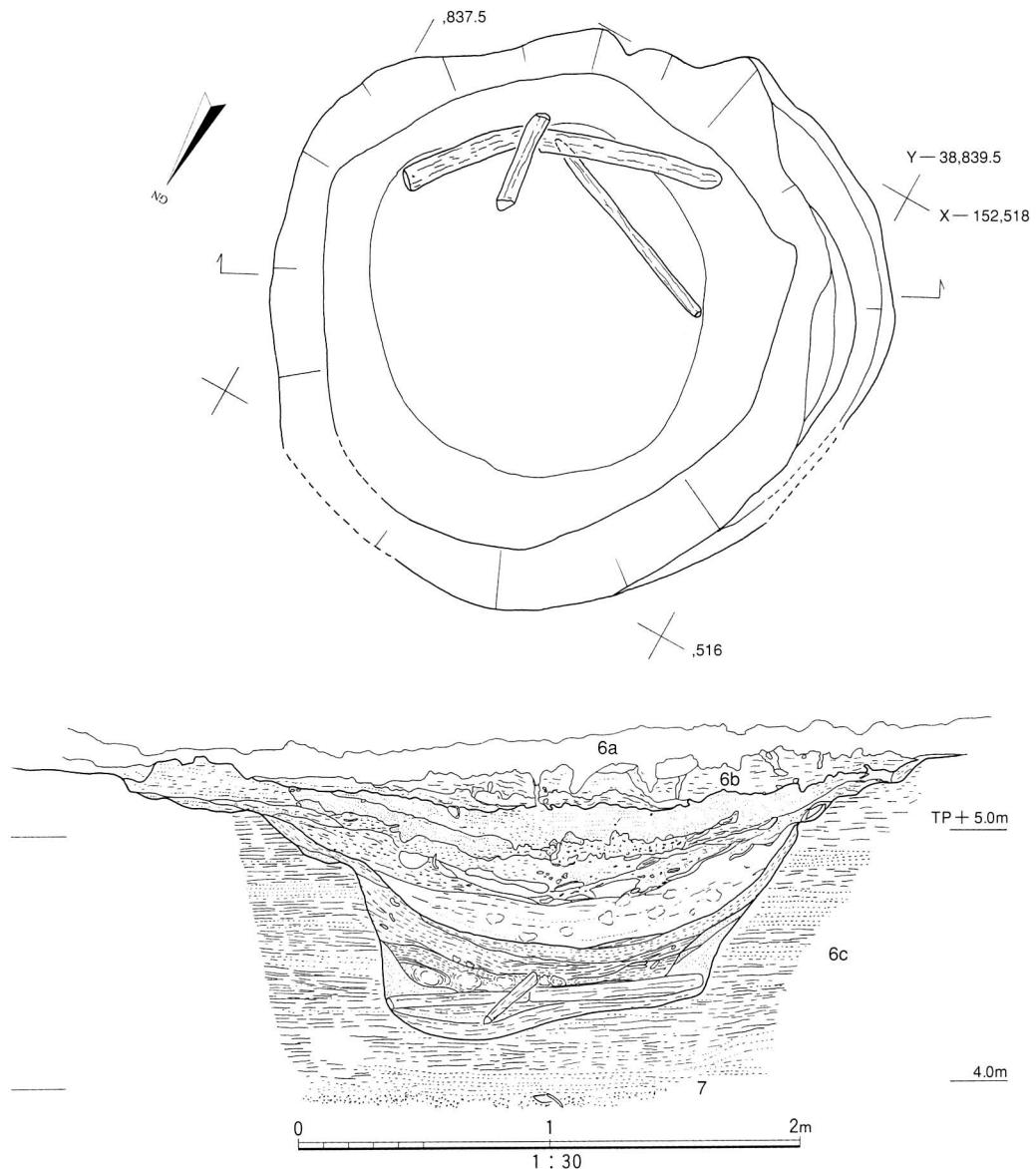


図14 SE601実測図

埋っていた井戸の上の窪地に捨てられたと考えられる。

SK603は調査地北西部において1号方形周溝墓の盛土を除去後に検出した。南北約2.0mの土壙である。土壙の西半は調査地の外にあり、全体の形状は不明である。断面は「コ」字形で、埋土はシルト混り細粒砂である。位置からみて1号方形周溝墓の主体部としての可能性を想定したが、断面および平面において棺の痕跡は認められなかった。

SK617は第6b層の除去中に検出した長軸2.20m、短軸1.56m、深さ0.35mの落込みである。埋土は暗茶褐色のシルト質粘土で、第6c層の灰黄色シルトよりなる3~5cmの偽礫が認められた。弥生時代後期の土器片が数点出土した。木根あるいは倒木の痕跡と考えられる。

SD606は幅0.70m、深さ0.11mの溝である。埋土は暗褐色シルト質粘土であり、埋土中には広口壺の口縁部、鉢12(図16)など、弥生時代後期の河内VI-2様式の土器片が含まれていた。

SD607は南東から北西に延びる溝で、深さは0.05~0.14mと浅く、幅は0.4~0.5mで、溝の断面は

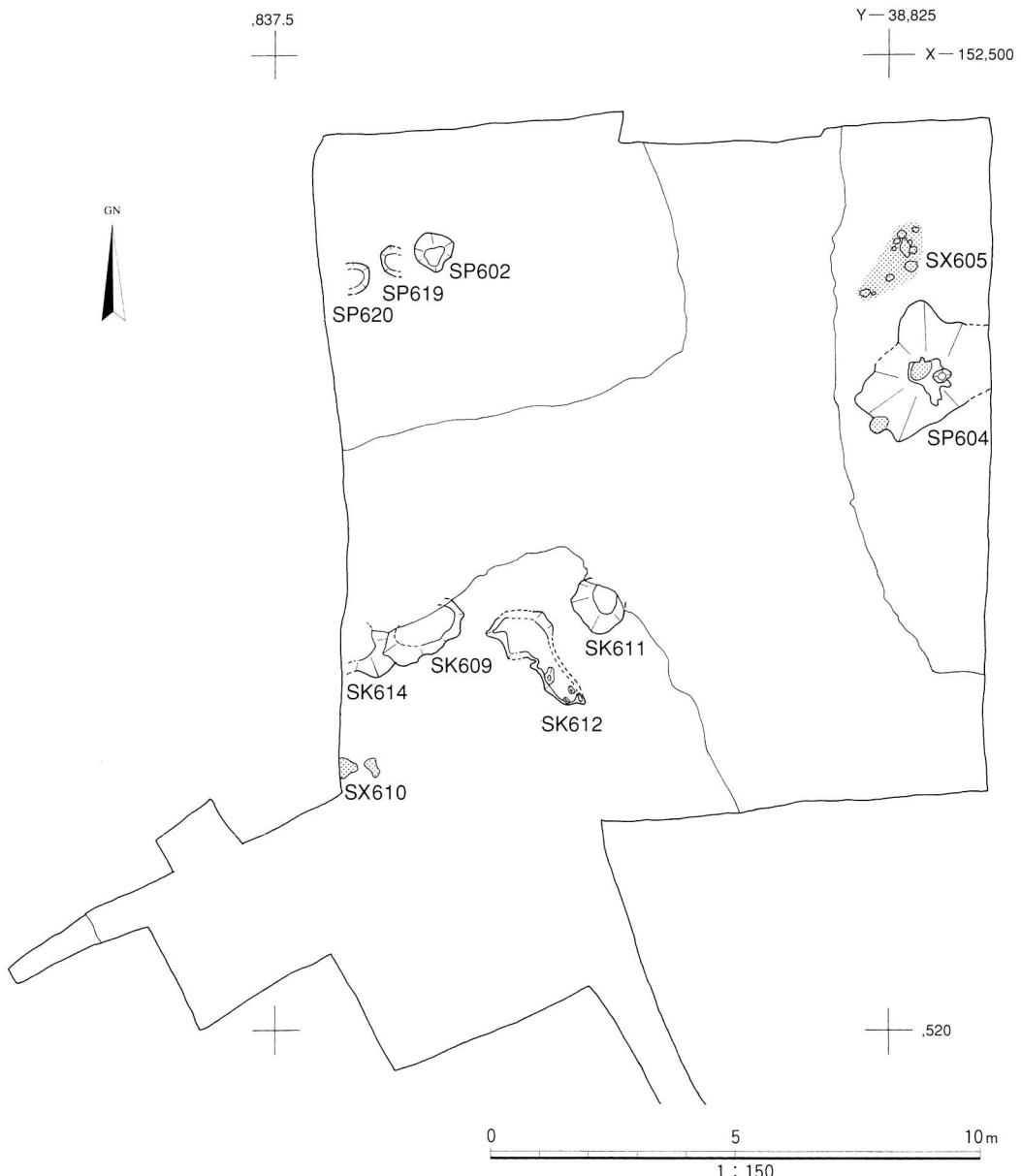


図15 第6b層下面・6c層上面検出遺構平面図

「U」字形から台形であった。溝の埋土は淡茶褐色のシルト～細粒砂で、弥生時代後期の土器片が多数出土した。埋土より出土した土器の中にはSP604出土の高杯15(図16)と接合する杯部の破片があった。この溝の北端部はSK612を切っていた。

SD615はSE601の南側に位置する幅2.0m、深さ0.08mの溝である。検出時での観察では、SD615の埋土に含まれる偽礫がSE601最上層の埋土中に混っており、遺構の埋戻しはSD615の方が新しいと考えられたが、完掘すると、溝底の中央部が井戸側に向うにつれてやや舌状に張り出して井戸の上端に接しており、SE601とSD615とは一連の遺構であった可能性が高い。

SD618は幅0.1～0.2m、深さ0.02～0.08mの断面「U」字形の溝である。少量の弥生時代後期の土器片が出土した。

c. 第6b層下面・6c層上面検出遺構(図15)

SP602は不定形の穴である。埋土は暗褐色のシルト質細粒砂で、その中に少量の土器の細片が混っていた。底面には凹凸が多く見られ、木根の痕跡である可能性が高い。

SP604は直径0.65m、深さ0.4mの小穴である。埋土上部には粗粒砂が堆積し、高杯、甕などの土器片が多く含まれていた。小穴の中には粗粒砂～細礫によって埋っており、直径約2cmの偽礫や磨滅の著しい土器の細片が含まれていた。この粗粒砂は第6層に含まれておらず、他の場所か調査地の深部より人為的にもたらされた可能性がある。上部の粗粒砂中より出土した高杯脚部の破片はSD607から出土した高杯15の杯部片と接合した。

SP620はSP619の西0.3mに位置し、直径0.58mの小穴になると考えられる。遺構の西側はSK603によって壊されていた。この遺構に伴う遺物はなかった。

SK609は東西1.86m、南北0.84m以上の土壙である。深さは0.2mで、埋土は第6c層と同じ淡茶褐色細粒砂混りシルトであった。埋土中には多くの土器片が含まれていた。

SK611は第6c層上面で検出した南北1.12m、東西0.84m、深さ0.11mの土壙である。土壙の東側は2号方形周溝墓の西溝によって削られていた。埋土は第6c層の灰黃褐色シルト質細粒砂であり、少量の土器片が含まれていた。

SK612は長軸2.3m、短軸1.1m、深さ0.16mの南北に長い土壙である。SD607とSK613によって切られていた。埋土は暗灰黃色細粒砂混りシルトで、弥生時代後期VI様式の土器片が数点含まれていた。

SP619はSP602の西0.4mに位置する。SD620によって東側が壊されていたが、直径0.6mの小穴と考えられる。この遺構に伴う遺物はなかった。

SX605はSP604の北2mに位置する土器集中部で、東西0.6m、南北0.9mの範囲に広がっていた。この土器集中部より甕16、甕底部10(図16)などが出土した。

SX610はSX605と同様の土器集中部である。東西2.5m、南北0.8mの範囲に土器片が散っていた。

3)まとめ

本調査の成果は以下の通りである。

- a. 調査地全体でTP+4.0mを前後する高さに粗粒砂～細礫で構成される水成堆積層が認められた。この地層はKM97-1次調査でも検出された旧平野川の自然堤防の続きと考えられる。
- b. 弥生時代後期VI様式には井戸・溝・土壙・土器集積といった当時の人々の生活に係わる遺構が数多く認められ、居住域であったと考えられる。
- c. 庄内式期後半から布留式期古段階にかけては墓域であり、3基の方形周溝墓が築かれていた。
- d. 方形周溝墓は水成堆積によって下半分が埋った後、古墳時代中期から奈良時代までの間に墳丘の一部が削平されていた。
- e. 中近世には調査地全域は耕地となっていた。

弥生時代中期から古墳時代前期にかけての加美遺跡は、弥生時代中期の墳丘墓が弥生時代後期の洪水層で埋没した後に弥生時代後期後半の居住域が形成され、居住域の廃絶後、しばらくしてから方形周溝墓群が築かれることが知られている。本調査地においても、墓域の形成が居住域の機能を停止す



図16 出土遺物(1)

る直接的な契機となっていたとはいえない。というのも、本調査地の弥生時代後期後半の遺構の中でもっとも新しい遺構は第6b層中検出のSE601であるが、この井戸が完全に埋没したのは弥生時代後期VI-2様式新段階で、この井戸の上に築造された2号方形周溝墓の時期は庄内式V期の段階にあたるためである。SE601の廃絶から2号方形周溝墓の築造までに、庄内式I~IV期といった時間的な間隙を指摘できる。

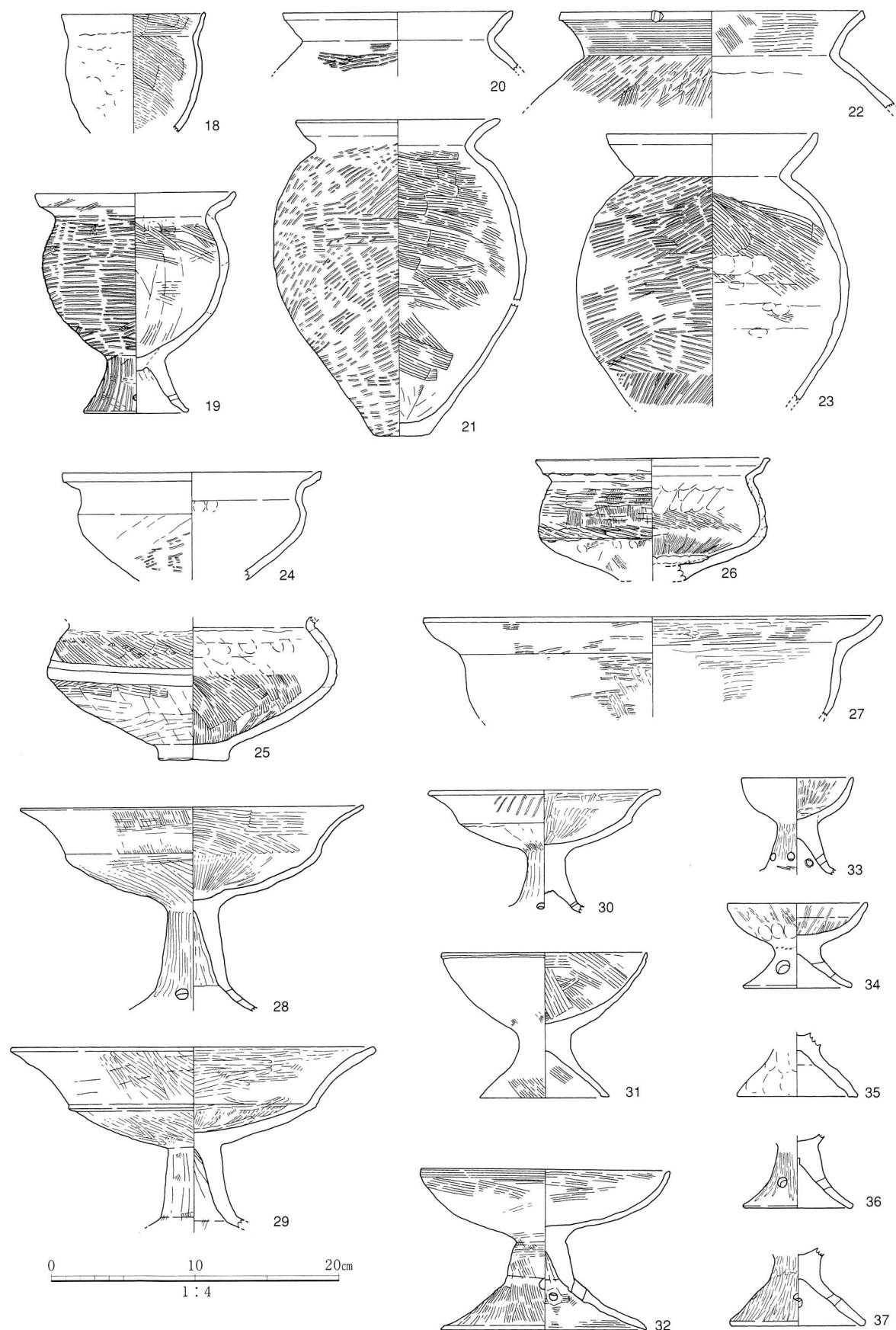


図17 出土遺物(2)

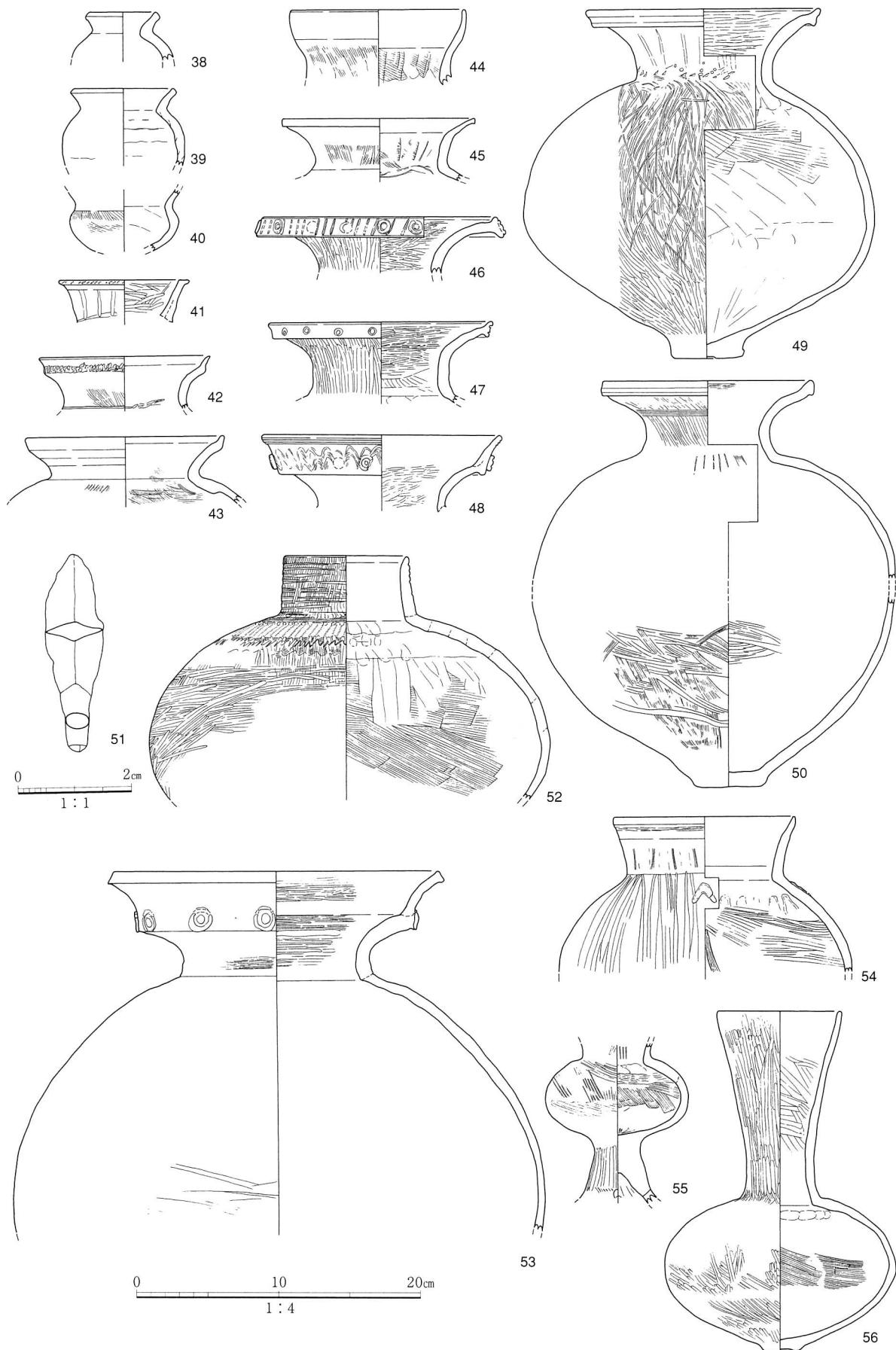


図18 出土遺物(3)

表3 KM98-8次調査地遺物観察表

番号	区分	器種	土器出土位置	色調	混和砂粒の種類	調整	備考
1	須恵器	壺L底部	4層内	灰白色	長石	高台取付けヨコナデ明瞭	
2	吉式土師器	高杯脚部	2号方形周溝幕北溝最下層	橙色	長石	内面シボリのちナデ	
3	吉式土師器	小型丸底壺	2号方形周溝幕東斜面	灰白色	長石・石英・チャート・シャモット・雲母	外面ナデのち底部付近ケズリ	
4	吉式土師器	小型丸底壺	2号方形周溝幕東溝最下層	灰褐色	長石	外面ヨコミガキ、煤付着著しい	
5	吉式土師器	加飾壺口縁部	2号方形周溝幕東斜面	にぶい黄色	長石・石英・チャート	口縁部描波状文のち浮文貼付竹管のスタンプ、外反部に沈線	
6	吉式土師器	壺	2号方形周溝幕東斜面	にぶい黄色	長石・石英・角閃石	外面タタキのちハケ、内面ケズリ	
7	吉式土師器	壺	2号方形周溝幕東溝最下層	灰黄色	長石・石英・雲母	内底面指頭圧痕のちケズリ	
8	吉式土師器	壺底部	1号方形周溝幕南溝最下層	黄褐色	長石・角閃石・チャート・石英・雲母	外面ハケ、内面底部指頭圧痕のちケズリ	
9	弥生土器	二重口縁壺	2号方形周溝幕盛土(6a層内)	にぶい褐色	長石・石英・雲母	口縁外面2個1対竹管文、外反部刻み目	
10	弥生土器	壺底部	SX605	にぶい黄橙色	長石・石英・堆積岩	外面ハケのちタタキ、ナデ、内面ハケ	
11	弥生土器	鉢底部	1号方形周溝幕盛土(6a層内)	にぶい黄橙色	長石	底部摘み出し	
12	弥生土器	鉢底部	SD606	浅黄色	長石・雲母	外面タタキのちハケのち縁辺摘み出し	
13	弥生土器	広口壺口縁部	6c層上面	にぶい黄橙色	長石・石英	外面ハケ、内面ナデのちヨコミガキ	
14	弥生土器	広口壺口縁部	SK617	にぶい黄橙色	長石・石英・シャモット・植物茎	外面タテミガキ、口縁端部浮文竹管	
15	弥生土器	高杯	SD607、SP604上層粗粒砂内	にぶい黄橙色	長石・石英・堆積岩	内外ともナデ、透孔4?	
16	弥生土器	壺	SX605	灰黄褐色	長石・雲母	外面タタキ、内面ナデ	
17	弥生土器	広口壺	7層	灰黄色	長石・石英・チャート・シャモット	頭部内外ともヨコミガキ、肩部記号文	
18	弥生土器	小型壺	SE601上部	にぶい褐色	雲母・長石・石英	外面オサエ、内面ハケ	
19	弥生土器	小型台付壺	SE601上部	にぶい黄褐色	長石・雲母	外面タタキ、内面ハケ、脚部外外面タテハケ、円盤充填、脚部透孔1	
20	弥生土器	中型壺口縁部	SE601上部	浅黄色	長石・チャート・石英・雲母	外面タタキ	
21	弥生土器	中型壺	SE601上部	灰白色	長石・雲母・石英	外面タタキ、内面ハケ	
22	弥生土器	大型壺口縁部	SE601上部	橙色	長石	外面タタキ、内面ナデ、口縁端部刺突あり	
23	弥生土器	中型壺	SE601上部	にぶい黄橙色	長石・石英・雲母・チャート	外面タタキ、内面下半ハケのちナデ、上半ハケ	
24	弥生土器	鉢	SE601上部	にぶい黄褐色	長石・石英	外面タタキのちナデ、内面ナデ	破碎後二次被熱
25	弥生土器	鉢	SE601上部	にぶい黄橙色	長石・堆積岩・石英	肩部に刺突点、胸部最大位突帯状隆起	近江系
26	弥生土器	鉢	SE601上部	橙色	長石・雲母・チャート・堆積岩・石英	外面タタキ、内面ハケ	近江系、破碎後二次被熱
27	弥生土器	大型鉢	SE601上部	にぶい黄橙色	長石・雲母・チャート	外面胴部タテミガキ、内面胴部ヨコミガキ	
28	弥生土器	高杯	SE601上部	にぶい黄橙色	長石・雲母・石英	杯内面ミガキ、外面ヨコナデ	
29	弥生土器	高杯	SE601上部	灰黄色	石英・長石・チャート	杯部外面ヨコナデのち斜めの浅いミガキ	
30	弥生土器	小型高杯	SE601上部	にぶい黄褐色	長石・石英・チャート	外面暗文、透孔3	
31	弥生土器	楕円高杯	SE601上部	にぶい黄橙色	長石・チャート	外面ナデ、内面ハケ、口縁端部直下突帯	
32	弥生土器	楕円高杯	SE601上部	にぶい黄色	長石・雲母	内外ともハケのちナデ、透孔4	
33	弥生土器	楕円高杯	SE601上部	灰褐色	石英・長石・雲母	杯内面放射状ミガキ、脚外面ミガキ、透孔7	ミニチュア
34	弥生土器	楕円高杯	SE601上部	にぶい黄褐色	雲母・長石・石英	内面暗文様のミガキ、透孔3	ミニチュア
35	弥生土器	高杯脚台部	SE601上部	浅黄橙色	長石・石英	内外ともオサエのちナデ	ミニチュア
36	弥生土器	高杯脚台部	SE601上部	灰黄色	長石・雲母	外面ミガキ、透孔3・脚内頂部軸芯あり	ミニチュア
37	弥生土器	高杯脚台部	SE601上部	にぶい黄橙色	長石・石英・雲母	外面ミガキ、透孔4	ミニチュア
38	弥生土器	壺	SE601上部	にぶい黄橙色	長石・石英・軽鉢	内外ともナデ	ミニチュア
39	弥生土器	壺	SE601上部	灰灰色	長石・石英	内外ともナデ	ミニチュア、破碎後二次被熱
40	弥生土器	壺	SE601上部	灰黄色	長石・雲母・堆積岩	外面ハケ、内面ナデ	ミニチュア
41	弥生土器	広口壺口縁部	SE601上部	灰白色	長石・石英	口縁端部刻み目、頭部暗化したタテミガキ、内面ヨコミガキ	ミニチュア
42	弥生土器	広口壺口縁部	SE601上部	灰黄色	長石	口縁外反部刻み目	
43	弥生土器	広口壺口縁部	SE601上部	にぶい黄橙色	長石・雲母	頭から口縁ヨコナデ	
44	弥生土器	壺口縁部	SE601上部	浅黄色	長石	内外面ハケ、口縁ヨコナデ	
45	弥生土器	広口壺口縁部	SE601上部	浅黄色	長石・石英・雲母・チャート	外面タテミガキ、内面ヨコハケ	破碎後二次被熱?
46	弥生土器	広口壺口縁部	SE601上部	にぶい黄橙色	長石・石英・雲母	頭部外面タテミガキ、内面ヨコミガキ、口縁端部刻み目、浮文貼付竹管	
47	弥生土器	広口壺口縁部	SE601上部	にぶい黄橙色	チャート・雲母	口縁端部竹管文、頭部外面タテミガキ、内面ヨコミガキ	
48	弥生土器	二重口縁壺口縁部	SE601上部	にぶい黄橙色	石英・長石・雲母	口縁外面波状文のち浮文貼付竹管	
49	弥生土器	広口壺	SE601上部	灰白色	長石・チャート・石英・雲母・植物茎	外面ミガキ、頭つけ根に刺突	
50	弥生土器	広口壺	SE601上部	にぶい黄橙色	長石	外面ミガキ、肩部記号文	
51	青銅器	銅鑼	SE601上部				
52	弥生土器	直口壺	SE601上部	灰黄褐色	チャート・長石・雲母	肩部櫛描文、頭部凹線文	破碎後二次被熱
53	弥生土器	大型二重口縁壺	SE601上部	灰黄色	長石	外面ミガキ、内面ナデのち口縁ミガキ、浮文貼付竹管	
54	弥生土器	短頸壺	SE601上部	にぶい黄橙色	長石	外面ナデのちミガキ、肩部浮文	
55	弥生土器	台付細頸壺	SE601上部	灰白色	長石・石英・チャート	外面ミガキ、内面ハケ、透孔4	
56	弥生土器	細頸壺	SE601上部	灰白色	長石・チャート	外面ミガキ内面ハケ・ナデ	

方形周溝墓群は3号方形周溝墓、2号方形周溝墓、1号方形周溝墓の順に設けられていた。方形周溝墓が機能していた時期に堆積した地層の厚さは3号方形周溝墓が最大で7cm、2号方形周溝墓が最大で5cm、1号方形周溝墓が4cmであり、築造が古いものほどやや厚い傾向が認められた。本調査地においては南東から北西の順序で造墓されており、最初に築かれた3号方形周溝墓の西溝を介して、ほぼ同時期に3基が存続していたことが知られる。本調査地を含め約1.1haの広さに約50基の方形周溝墓・前方後方形周溝墓が確認されているが、溝を共有したり幅を規制し合いながら一つのユニットを形成し、それらが複合・重複しつつ、しだいに墓域が拡大していったものと思われる。

今回の調査で、方形周溝墓に供獻されたことが確実な土器は少なかった。1号方形周溝墓では南側の溝底より布留式甕の底部が2点、生駒西麓産庄内式甕の口縁部の細片が約1点出土しただけである。2号方形周溝墓では図示した7点がすべてであった。祭祀の場と考えられる墳頂部が削平され、出土遺物も限られているため、墳墓祭祀の実態を明らかにすることは困難であるが、甕と小型丸底壺が互いに近接した位置で、一対ずつセットになって出土している点が注目される。すなわち、庄内式甕6(図16)と底部を削る小型丸底壺3が墳丘斜面から、布留式傾向甕7とヨコミガキを施した小型丸底壺4が溝の最下部からそれぞれ出土した。これらの土器はいずれも庄内式V期に属すが、前者は庄内式系統、後者は布留式系統であり、同じ時期に属しながらも両者はそれぞれ系譜を異にするものである。土器の系統差による使い分けの可能性を示唆しており興味深い。

方形周溝墓の溝の埋没は緩慢に進行したと考えられる。溝最下層に腐食した植物茎が形をとどめた状態で多く含まれていたが、これは溝底に植物が繁茂していたことを示す。また、墳丘斜面から溝内にかけて認められた直径1cm以下の細かな偽礫から、干割れと水浸かりを繰返すことによって、墳丘斜面に小規模な浸食が起こっていたことが分かる。溝は水成堆積により半分までが埋没した後、墳丘を削平した土で埋戻されていた。

墳丘を削平して溝を埋め、平坦な土地を造成している状況は、古墳時代中期から奈良時代にかけて、本調査地周辺で土地利用のあり方が変化したことを暗示する。居住域と墓域の関係を略述すると、弥生時代後期の居住域は、本調査地を含め南東から北西へ延びていた自然堤防上に営まれ、次の時期に方形周溝墓群が形成される範囲にほぼ一致すると考えられる。またKM84-1次調査地・KM85-6次調査地・加美東小学校調査地で庄内式期、KM84-1次調査地で布留式期古段階、KM97-1次調査地で布留式期中段階の居住域がそれぞれ確認されている(註1)。このように弥生時代後期に居住域であった範囲が、庄内式期から布留式期段階にかけて墓域となり、この墓域をとりまいて同時期の居住域が分布していたと想定される。

古墳時代中・後期において本調査地周辺における居住域は不明で、遺構としては溝が多い。本調査地の約200m南のKM83-7次調査地において、南北方向に主軸をもつ幅約2mの溝が確認されている。このように自然堤防を南北に縦断するような溝の出現は、古墳時代中期以降、本調査地周辺での土地利用のあり方が変化したことを示唆するのかもしれない。墓域および居住域の廃絶が何によるものであったかは今後の調査を行う上での課題の一つであろう。

(杉本)

註)

(1) 加美東小学校校舎部分の調査は1977年に難波宮址顕彰会によって行われ、庄内～布留式期にかけての竪穴住居5棟、井戸、土壙、小溝群が確認された。この調査地に近接するKM85-6次調査地においても、居住域が広がっており、庄内式期の竪穴住居1棟、掘立柱建物の柱列と考えられる3個の小穴、井戸1基が認められた[大阪市文化財協会1985]。

KM84-1次調査では弥生時代中期後半の墳丘墓、弥生時代後期の竪穴住居と井戸、庄内式期から古墳時代前期にかけての方形周溝墓・前方後方形周溝墓、掘立柱建物、竪穴住居、古墳時代前期の大溝などが確認された[田中清美1986]。

KM87-2次調査地では弥生時代後期後半の土器を多く含む溝1条、庄内式V期の井戸1基、同時期の土器を多く含む溝1条が確認された[伊藤純1990]。

KM97-1次調査では弥生時代後期後～末葉の遺構として畠状遺構、溝、土壙などが確認され、庄内式期新段階の方形周溝墓2基、木棺とその周溝と考えられる溝、土壙が、布留式期になって、中段階以前の掘立柱建物2棟、杭列、溝、土壙、土器・炭の集中部が確認された[大阪市文化財協会1999b]。

第Ⅲ章 山之内遺跡の調査

第1節 YM98-5次調査

1) 調査の経緯と経過

調査地は遺跡東部に当り、市営地下鉄旧操車場跡地における4箇所目の調査である(図19)。大阪市教育委員会の試掘調査の結果、調査区は建設予定敷地(約9,000m²)の南西隅に設定された。調査は近～現代の作土層や整地層を重機で掘削し、それ以下を人力で掘下げた。中世以降の耕作などによって東半部の地層の残存状況は悪く、最終調査面となった低位段丘構成層上部層に対しては、堆積状況の良好な約40m²を同層下部まで掘下げ、地層や遺構、遺物の確認を行った。

調査に使用した方位は国土平面直角座標第VI系で、水準はTP値である。

2) 調査の結果

i) 層序(図20)

沖積層や低位段丘構成層の堆積状況は当該地周辺の調査成果とほぼ対応する。低位段丘構成層最上部の高さは約TP+9.3mである。調査地西壁における層序を以下に記す。

第0層：5～10cm大の礫を含む暗オリーブ灰色極粗粒砂で、層厚は220cmである。市営地下鉄旧操車場施設に伴う整地層である。

第1層：5mm大の礫を含む暗緑灰色極細粒砂質細粒砂で、層厚は12cmである。市営地下鉄旧操車場施設以前の近代～現代の作土層である。

第2層：5mm大の礫を含むオリーブ黒色極細粒砂質細粒砂で、層厚は20cmである。弥生時代～近世の遺物を含む近世の作土層である。

第3層：オリーブ黒色シルト質細粒砂～粘土で、層厚は10～15cmである。横大路火山灰を含む土壤化した地層(黒ボク層)で、土師器の細片が出土した。時期を判別できる資料が少なく、出土した土師器の細片は上層からの混入と考えられるが、本層の形成時期が古墳時代まで下る可能性も否定でき

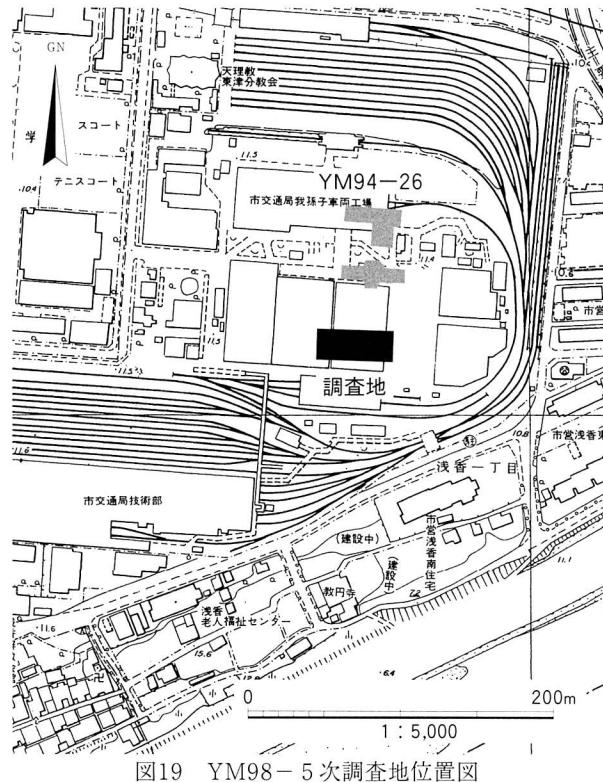


図19 YM98-5次調査位置図

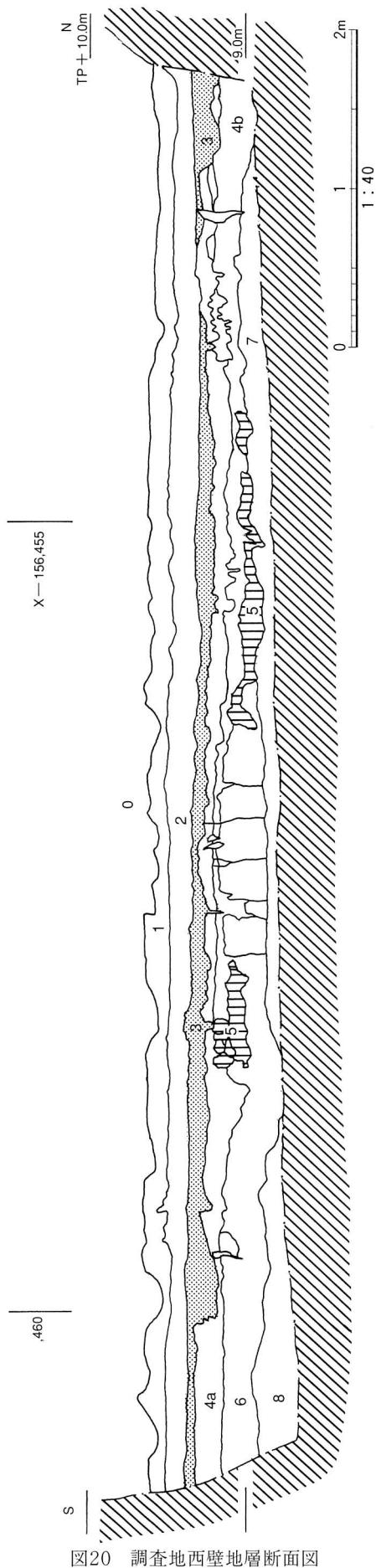


図20 調査地西壁地層断面図

ない。周辺の調査では縄文～弥生時代の土器が出土していることなどから、沖積層上部Ⅱ～中部に相当する長原遺跡標準層序第8～12／13層に対比されている。沖積層下部層の長原遺跡標準層序第13A層については不分明である。YM94-26次調査地の第4層に相当する[大阪市文化財協会1998a]。

第4層：灰色～灰オリーブ色シルト質粘土で火山ガラスを多く含む地層である。低位段丘構成層最上部層に相当し、長原遺跡標準層序第13B層に対比される。下記の2層に分別されるが、火山灰分析による再検討が必要である。第4層以下の地層については、遺構や遺物の確認はできなかった。YM94-26次調査地の第6層相当層準である。

第4a層は灰色シルト質粘土で、層厚は10～23cmである。ピンク色を呈した平安神宮火山灰を含む地層である。上面からの乾痕が多く、第3層の浸透を受けて擾乱されている。

第4b層は灰オリーブ色シルト質粘土で、層厚は10～20cmである。平安神宮火山灰を含み、第4a層に比べて火山ガラスの凝集密度が高い。

第5層：オリーブ灰～灰色シルトである。シルトが凝固して偽礫化している。層厚は10cmで長原遺跡標準層序第13C層に対比される。

第6層：5mm大の礫を含む灰色シルト質粘土で層厚は25cmである。長原遺跡標準層序第14層に対比される。

第7層：オリーブ黄色粘土で、層厚は20cm以上である。長原遺跡標準層序第15層最上部に対比される。

第8層：5～20mm大の緑色礫層で、層厚は30cm以上である。

ii) 遺構と遺物

a. 第2層基底面検出遺構(図21、図版5)

井戸・溝・窪みが確認された。おもな遺構と遺物は以下のとおりである。

SD103は幅2.34m、深さ0.98m、方位N50°Wで、調査区東端部から北西方向へ延びている。埋土は大略3層に分層できる。下部層は機能時の崩壊土で、中・下部層によって短期間に埋ったものと考えられる。埋土に滯水や流水の痕跡がなく、排水や灌漑など以外の機能が考えられよう。溝の断面形は底部に幅0.25mの平坦面を残し、45°の傾斜角をもって「V」

字状になっている。溝の傾斜面には掘削時の工具痕跡があった。土師器・瓦器・瓦が出土している。図23-59は残存部の厚さが3.3cmで、凹面に布目痕跡、凸面に縄タタキメの残る奈良時代の平瓦である。出土した瓦器片から13世紀頃の遺構と考えられる。

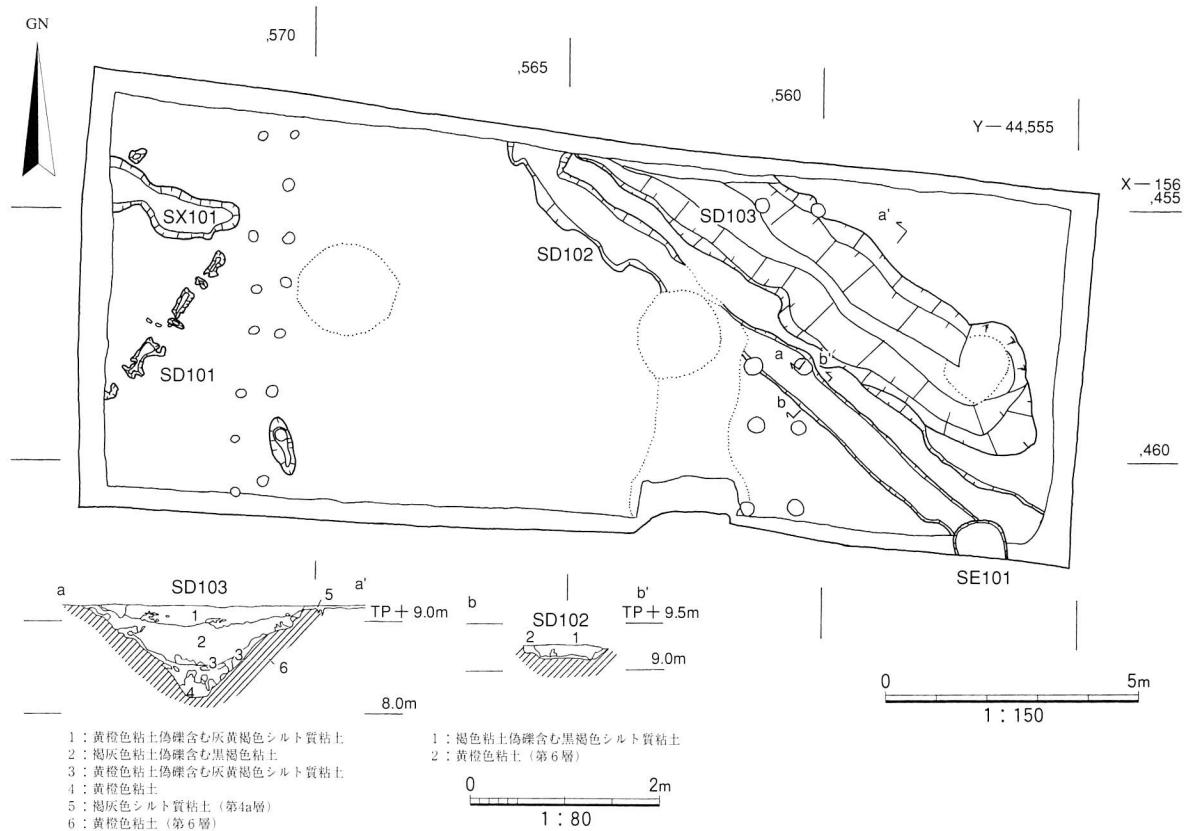


図21 第2層基底面検出遺構実測図

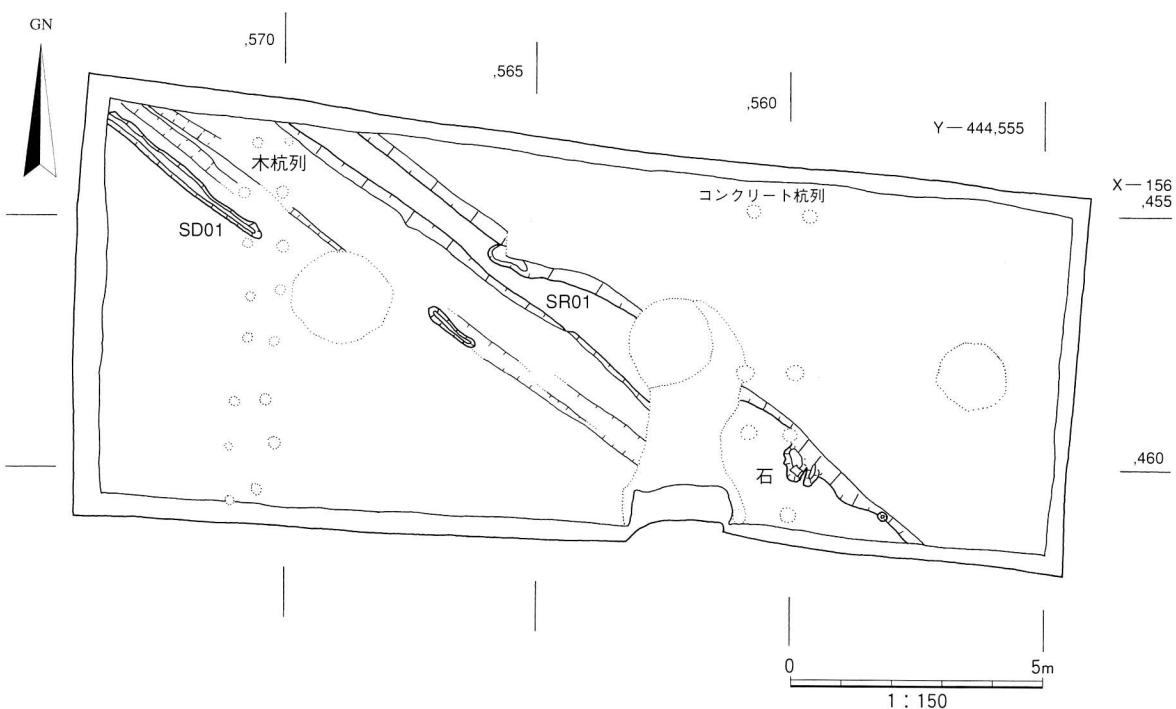


図22 第2層下面検出遺構平面図

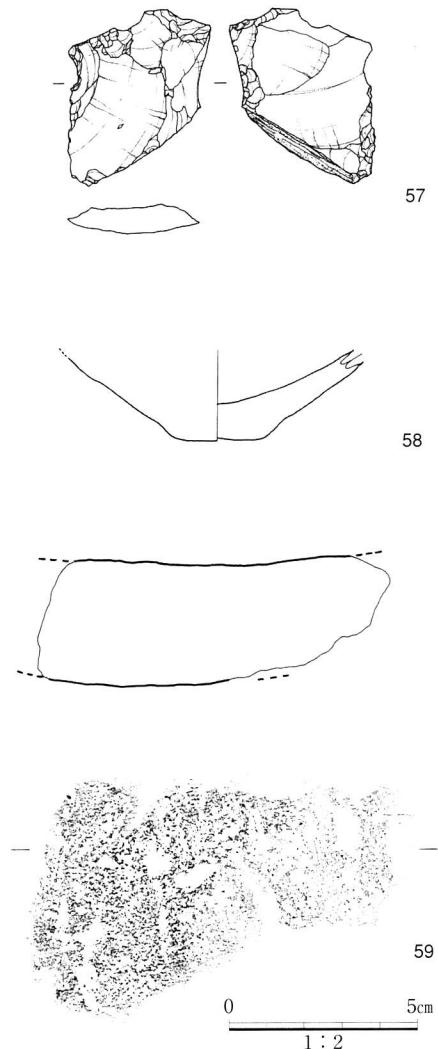


図23 出土遺物
SD103(59)、第2層(57・58)

分的に施されており、石器製作途上の未製品である。風化や加工の状況から弥生時代に属するものと考えられる。58は畿内第V様式の甕底部である。表面が磨滅しており調整は不明である。その他、土師器・須恵器・瓦器の細片や輪羽口の破片が出土している。

3)まとめ

周辺調査地と同様に、本調査地においても、広域火山灰層が低位段丘構成層～沖積層下部に擾乱されながらも残存していることが確認できた。今後火山灰層を鍵層にして調査を行う上で貴重な情報である。また、弥生時代後期～江戸時代の遺物、中世～近世の遺構と遺物を確認した。遺物量はコンテナ2箱分である。当該地は10世紀前半に成立した『和名抄』にみられる「住吉郡大羅郷」に比定されており、古代以降「依羅氏」などの豪族や、河内鉄物師集団の存在が注目される地域である。今回の調査で新たに発見された中世の溝はその構築状況から、耕作のための灌漑設備としての機能より、未確認の居館の堀や土地区画に係わる溝と考えられ、文献史料との検証もふまえた調査の蓄積が待たれる。

(清水和)

第IV章 桑津遺跡の調査

第1節 KW98-3次調査

1) 調査の経緯と経過

平成10年2月26日および3月9日に試掘調査を行った結果、弥生時代の土壙や溝、奈良時代の柱穴など数多くの遺構が検出された。そのため工事に先立ち調査を行うこととなり、4月27日より開始した。現代および近世の地層を重機により除去したのち、わずかに残っていた包含層を人力により掘削し、地山上面で遺構の検出を行った。また、5月14日には調査区の北側および西側の2箇所を拡張し、調査区内で確認された奈良時代の建物の規模の確認、および試掘時に存在を確認していた弥生時代の大溝の調査を行った。同日に埋戻しを行い、調査を終了した。

調査に使用した方位は国土平面直角座標第VI系に、標高はTP値に基づく。

2) 調査の結果

i) 層序(図26)

現代客土層以下地山層までが4層に大別でき、第0～3層とする。

第0層：現代客土で、層厚は10～30cmである。

第1層：粗粒砂を含む灰オリーブ色細粒砂の作土層である。部分的に下位層を起源とする偽礫を含む。調査区北半に分布しており、層厚は最大で25cmである。下面で鋤による耕作痕が認められた。時期は近世以降と考えられる。

第2層：褐灰色シルト質細粒砂で、弥生時代中期～平安時代の土器を含む暗色帶である。層厚は最大で10cmあるが、ほとんどの箇所では削平により残存していない。第2層の最上部はもっともよく残っているところで、TP+7.16mである。

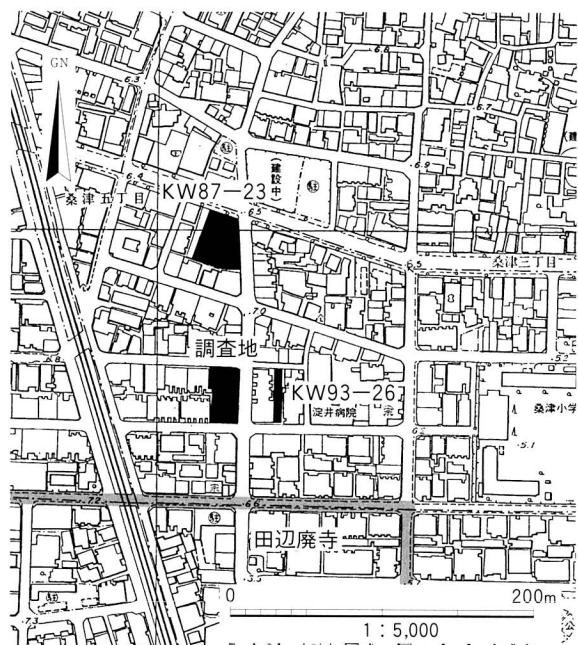


図24 KW98-3次調査地位置図

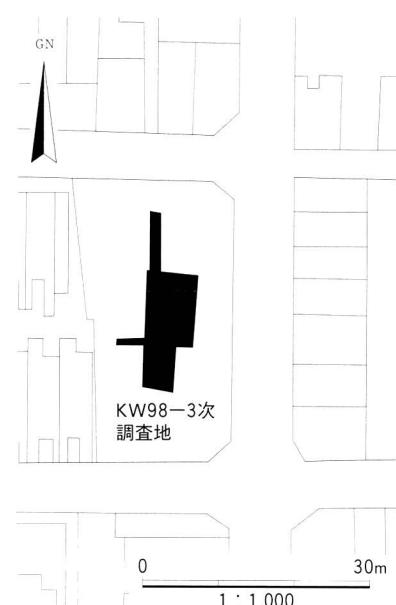


図25 調査地周辺地形図

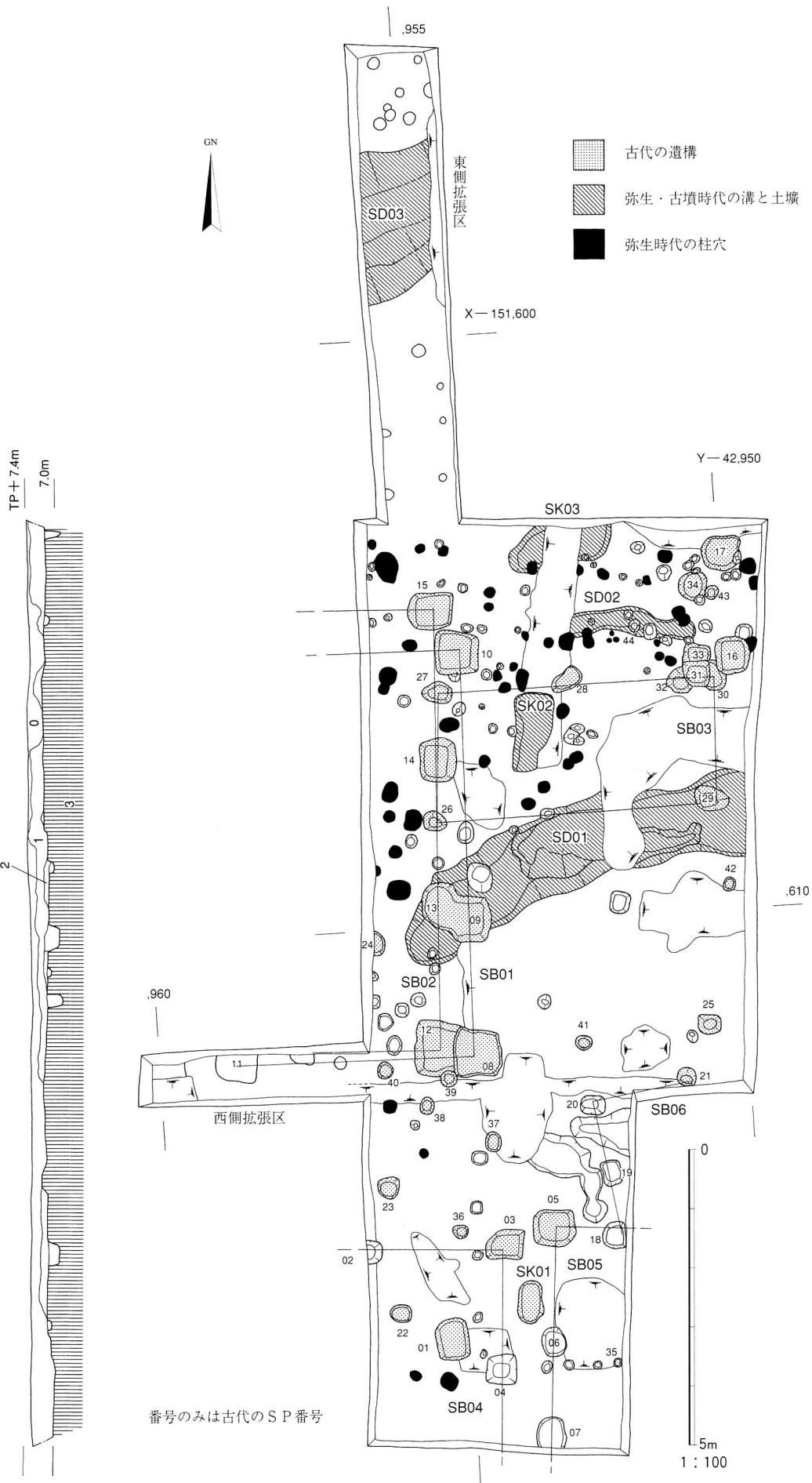


図26 遺構平面図および調査区西壁地層断面図

第3層：橙色細粒砂質粘土で、地山である。

ii) 遺構と遺物(図26~31、図版6・7)

調査区の中央東部分は現代の削平によって遺構がほとんど残存していなかったが、その他の個所では地山上面で多数の柱穴および土壙・溝を検出した。遺構の埋土に含まれる遺物は、弥生時代中期の土器と奈良・平安時代の土師器・須恵器が大半を占める。図26では奈良・平安時代の土器が出土した遺構と、弥生時代の遺物のみが出土した遺構とを区別して示している。

なお、北側および西側拡張区の遺構は、SD03を除いて検出面での輪郭を確認したにとどまる。

a. 奈良・平安時代

この時期のものと考えられる柱穴は、調査区内全域に分布しており、合計44個確認した(図26)。これらは規模や形状により3つに大別される。

SP01~17は一辺0.6m前後と大型の隅丸方形の柱穴で、深さは検出面から0.3~0.5mある。SP18~34は直径0.4m前後と中型の円形もしくは隅丸方形の柱穴で、深さは検出面から0.2~0.4mある。

SP35~44は直径0.2m前後と小型の円形の柱穴で、深さは検出面から0.2m前後ある。

これらのうち、柱筋が確認できる掘立柱建物はSB01~06の6棟である(図26)。建物の主軸は、北西-南東方向にやや振れるSB06以外は正方位である。

SB01およびSB02は調査区の北西部で検出した(図27、図版7)。大型の隅丸方形の柱穴をもち、南北3間、東西1間以上で、南北の柱間は2.4mである。同一場

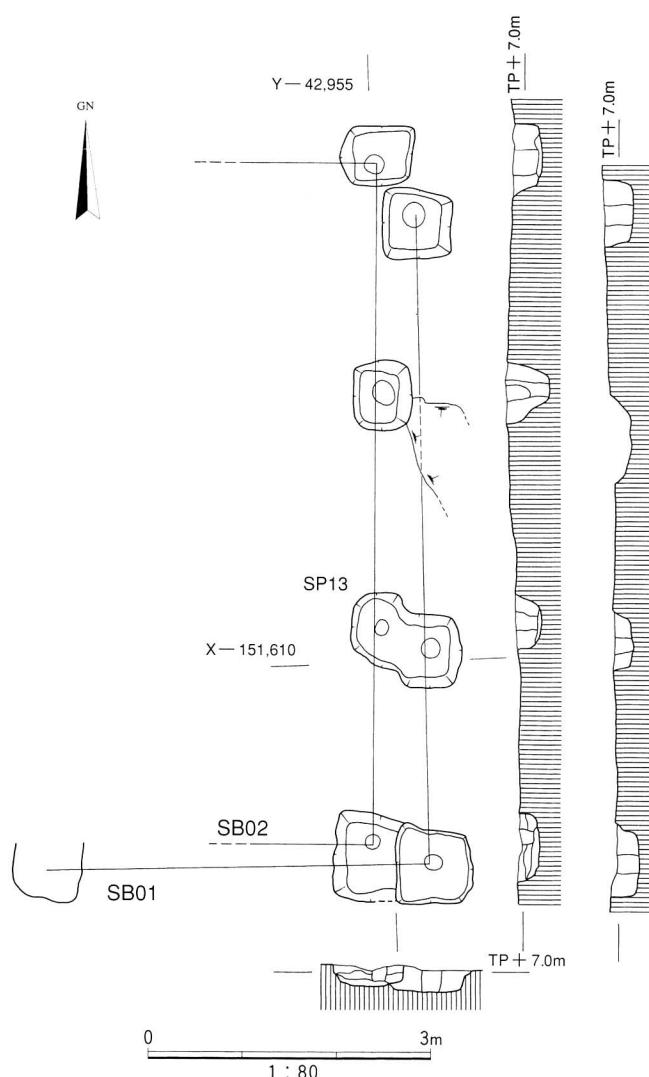


図27 SB01・02実測図

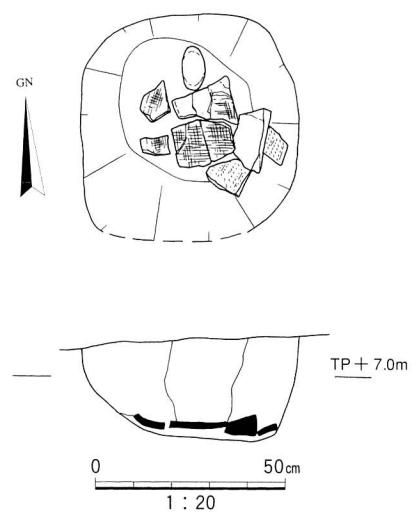


図28 SP13瓦出土状況実測図

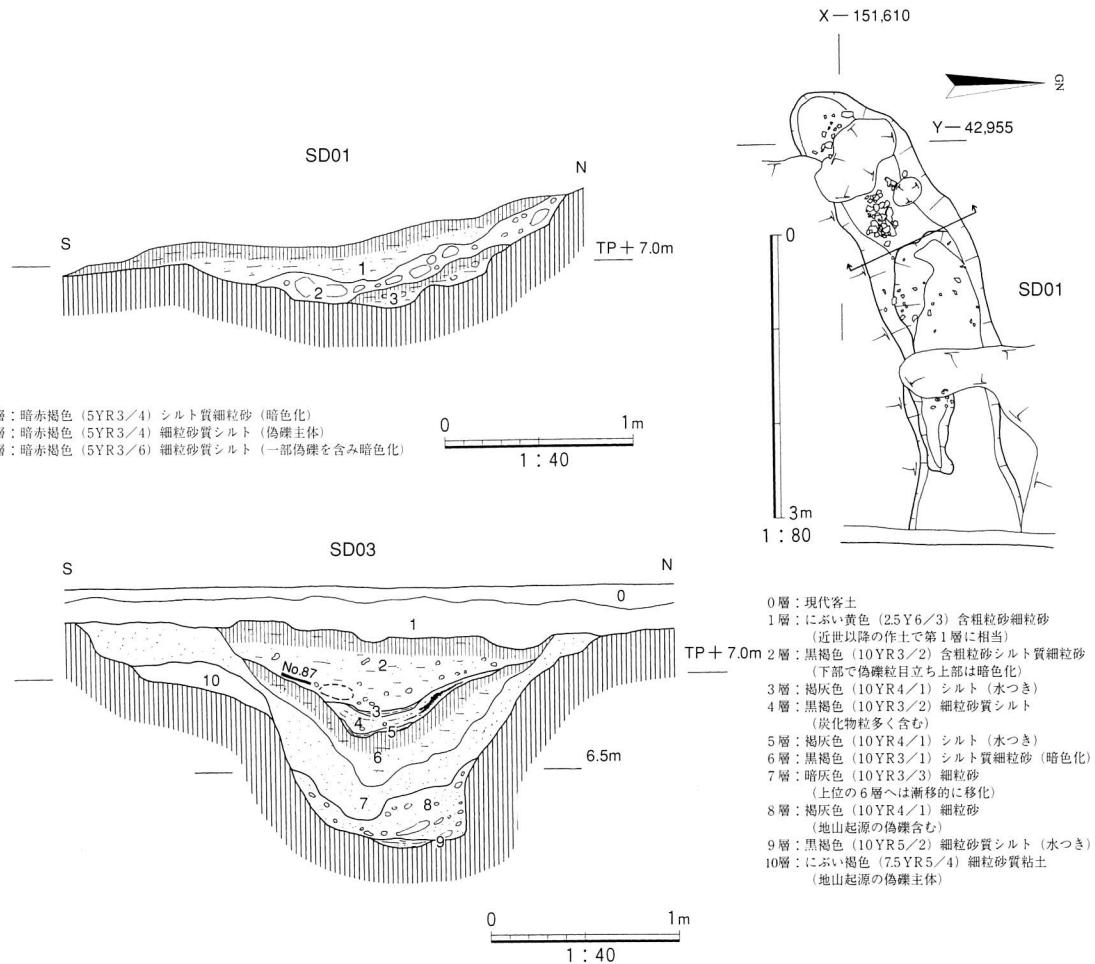


図29 SD01・03実測図

所で建て直されたものと考えられ、SP12がSP08を切っていることから、SB01が古くSB02が新しい。SB02のすべての柱痕跡内には炭や焼土が詰まっており、建物が火を受けたことがわかる。またSP13では、掘形の底に柱を支えるための平瓦や砥石・河原石を敷いていた(図28、図版7)。

SP13から出土した平瓦68~70は、ともに凹面に布目を残し、68・69は凸面に縄タタキメが、70は格子タタキメが認められる。調査地南側に推定されている田辺廃寺に係わる瓦であろう。ほかにもSP13内から土師器皿64が出土している。

SB03は中型の柱穴をもつ掘立柱建物で、調査区北半で検出した。南北1間、東西2間で、柱間は南北・東西とも2.2mある。SP28からは土師器碗62が出土した。

SB04~06は調査区南半で検出した掘立柱建物で、いずれも建物の一角を確認したにとどまる。出土遺物は、SB06の柱穴であるSP21から黒色土器A類碗65が出土したほか、SB04の柱穴であるSP03内から平安時代の土師器碗の細片が出土している。また、SP16とSP17・SP33とSP34はそれぞれ同一の建物に伴う柱穴と考えられ、SP17からは奈良時代の土師器碗の細片が、SP33およびSP34からは黒色土器A類碗の細片が出土している。なお、SP36では柱を抜き取ったあとに完形の土師器碗60を埋納しており(図版7)、SP25からは須恵器杯66、緑釉陶器碗67が出土した。

出土遺物からみた建物の時期はSB01・02が奈良時代、SB03・04・06が平安時代前半である。

ほかに、調査区南半でSK01を検出した。検出面での平面形は南北0.8m、東西0.4mの楕円形で、深さは0.4mある。炭粒を多く含む土で埋戻されており、土師器碗61・63や粘土塊が出土した。

b. 古墳時代

SD03は調査区北側の拡張区で検出した東西方向の溝である(図26)。幅2.5m、深さ1.2mで、断面形態が逆台形の大溝である。

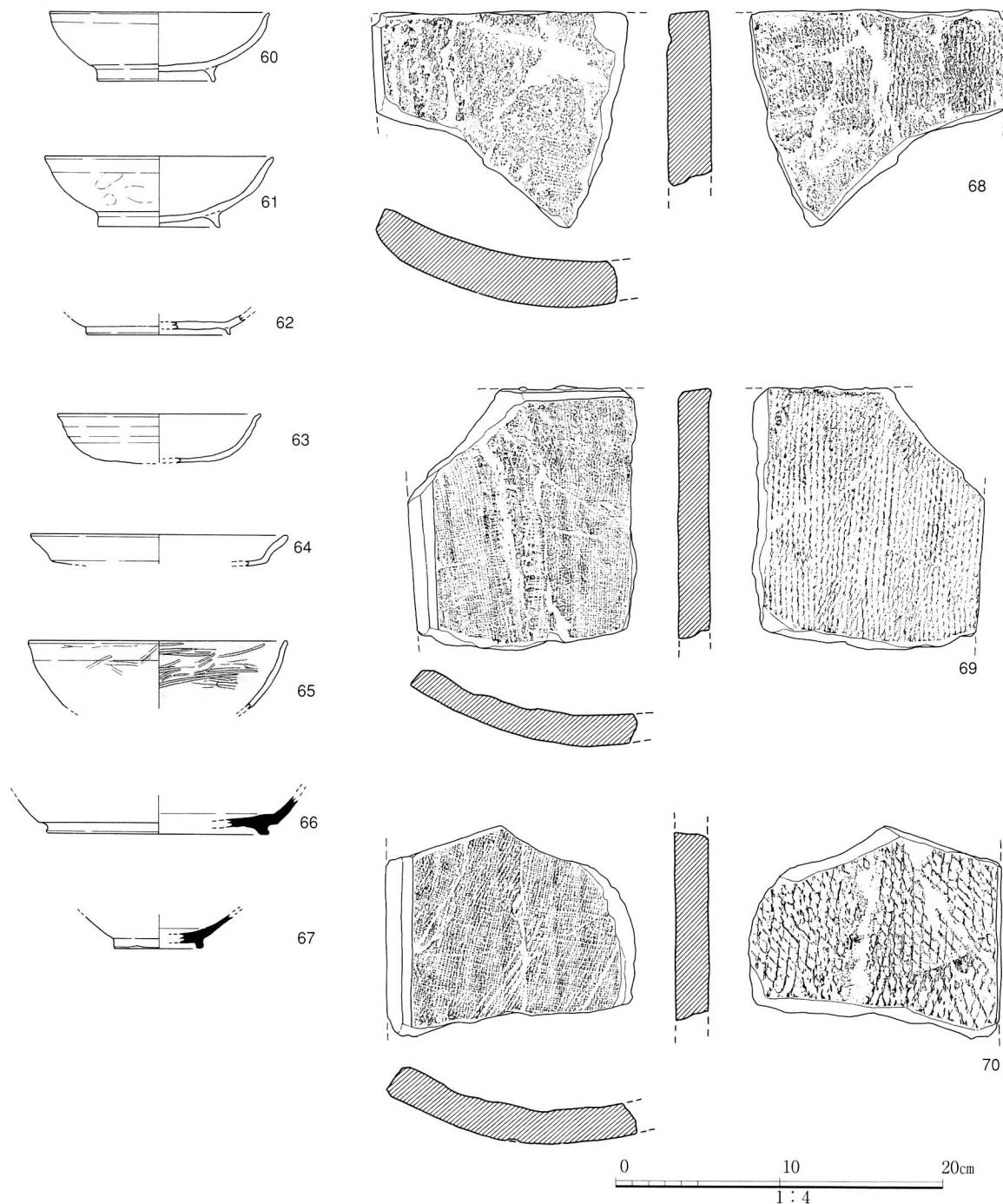


図30 出土遺物(1)

SK01(61・63)、SP13(64・68~70)、SP21(65)、SP25(66・67)、SP28(62)、SP36(60)

埋土は8層に細分できる(図29、図版6)。第2・6層は暗色化した黒褐色土で、溝が徐々に埋まつていったことを示している。第2層と第6層の間には、水つきのシルト層である第3・5層が介在する。溝の底付近には地山起源の偽礫を多く含む第8層がみられるが、その下には水つきのシルト層である第9層がわずかに残っている。このことから、第8層は溝を掘直した際に再堆積した可能性がある。遺物は80～88が出土した。このうち80が第6層、87が第3層から出土し、それ以外は正確な出土層位が不明である。特に84～86・88は調査終了後の重機掘削中にトレンチ外から出土した。80は弥生時代後期の広口壺、81～83は弥生時代後期の甕底部で、81・82は底部内面にクモの巣状にハケメを残す。84～86は土師器高杯、87・88は土師器甕で、ともに船橋O-IないしO-IIに併行する。

溝が最終的に埋った時期は、87が第3層から出土していることから古墳時代中期と考えられる。しかし、出土した遺物のなかには弥生時代後期の土器も少なからずみられ、溝の掘直しが想定されることからも、この溝は弥生時代から存在していた可能性がある。

c. 弥生時代

柱穴 弥生時代の土器が出土する柱穴が、調査区北半を中心に多数存在する(図26)。周辺の遺物が出土しなかった柱穴についても、埋土の特徴からこの時代のものである可能性が高い。直径は0.1～0.2m、深さは検出面から0.2m前後のものが中心である。調査区内では、建造物の配置を復元することができなかった。また、柱穴内の土器は畿内第Ⅲ様式のものを主体とし、凹線文を伴う畿内第Ⅳ様式の土器は少ない。

土壙 調査区北半でSK02・03を検出したが、ともに攪乱による削平のため浅い窪みとして残っていたにすぎない。SK02は南北1.5m、東西0.6mの長方形プランで、埋土中から弥生土器78・79が出土した。

78・79は胴部の屈曲が緩やかな直口の鉢である。器面が荒れているために外面の文様の有無は不明である。ともに畿内第Ⅲ様式の特徴をもつ。

溝 SD01～03を検出した。SD01は調査区中央で検出した東西方向の溝(図29、図版6)で、西端は浅くなり収束している。幅2.0m、深さが検出面から0.6mで、南肩はなだらかであるが、北肩は急な傾斜である。最下層に若干暗色化する第3層が薄く堆積したのち、主として北側からの崩落土(第2層)で溝が半分ほど埋る。そのあとは徐々に埋まっていき、第1層は暗色化している。第1層中からは弥生土器71～77がまとまって出土した。

71～74は広口壺、75は壺頸部、76は高杯、77は大型の甕である。口縁部もしくは頸部に幅広の凹線文を巡らしたり、口縁端部を上下に拡張させるもので占められており、これらは畿内第Ⅳ様式に属するものである。

SD02は調査区北側で検出した東西方向の溝である。幅0.3m、深さは検出面から0.07mで、長さは2.1m以上ある。埋土から畿内第Ⅲ様式の土器片のほか、サヌカイト製の石錐が1点出土した。

その他の遺物 弥生時代中期の土器以外の遺物として、遺構内や包含層中からサヌカイト製の剥片が多数、結晶片岩製の磨製石庖丁の破片が3点出土した。

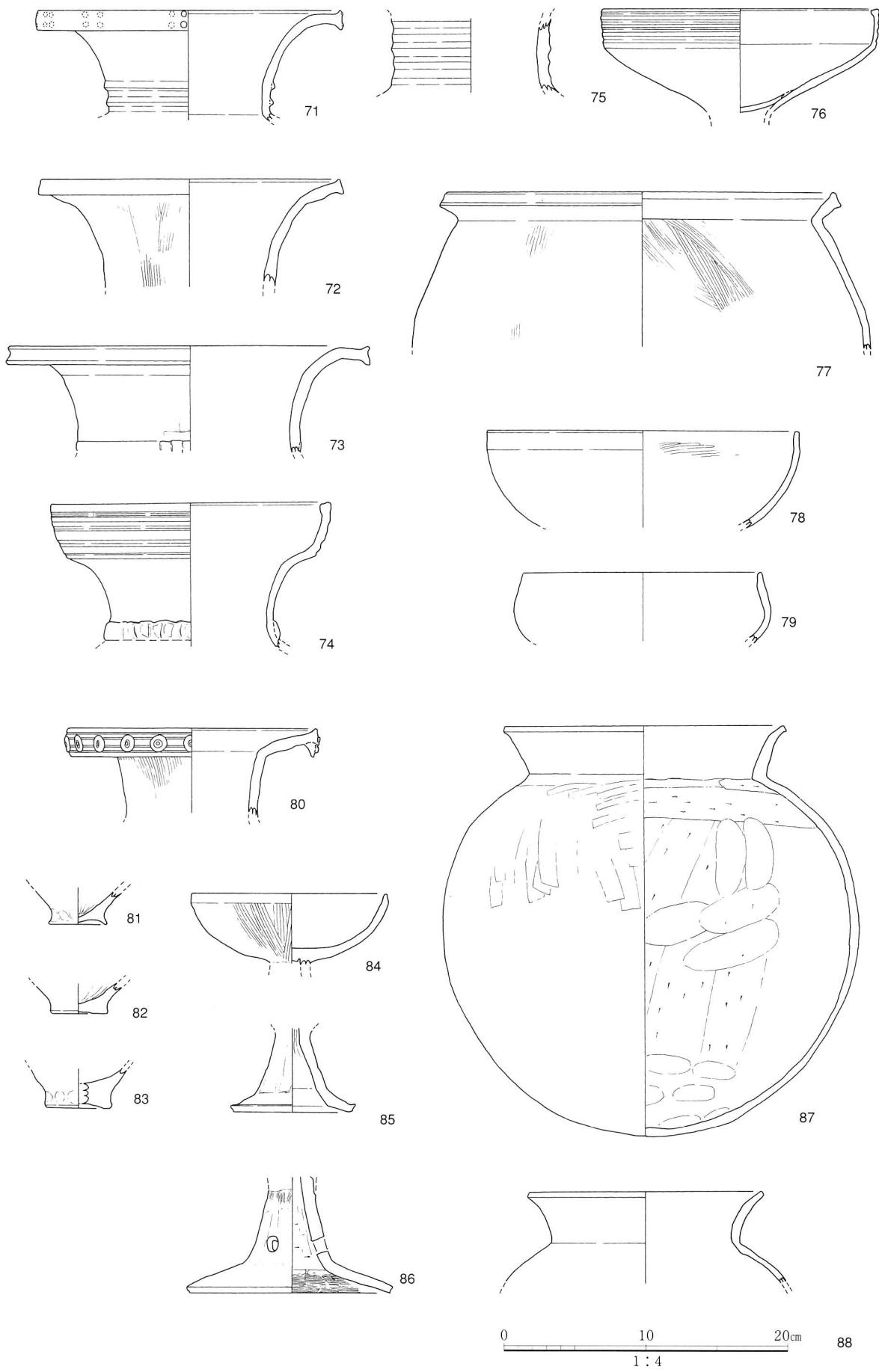


図31 出土遺物(2)

SD01(71~77)、SD03(80~88)、SK02(78・79)

3)まとめ

今回の調査で確認された遺構・遺物の中心は、奈良～平安時代前半と弥生時代中期にある。ともに居住域としての様相を強く示しており、周辺で行われてきた調査の結果と矛盾しない。なかでも、奈良時代の掘立柱建物のSP03の底に敷かれていた平瓦は、調査地の南側に推定されている白鳳寺院の田辺廃寺に係わるものとして注目されよう。

今回得られた新しい知見として、古墳時代中期に最終的に埋る東西方向の大溝SD03の存在を挙げることができる。時期や規模からみて、調査地北側100mのKW87-23地点で確認された南北方向の大溝と類似している[大阪市文化財協会1998b]。また、埋土内からは弥生時代後期の土器が少なからず出土しており、この時期の遺構・遺物の検出例が少ない桑津遺跡では特異な存在である。(大庭)

第V章 桃ヶ池遺跡の調査

第1節 MG98-6次調査

1) 調査の経緯と経過

1998年12月8日および17日に試掘調査(MG98-4・5次)を行った結果、中世ごろと考えられる遺物包含層と遺構が確認されたため、建設工事に先立って調査を行うことになった。調査区は建物が予定されている敷地内の南東区画に設定し、調査を開始した。調査は現代の盛土層から近・現代の作土層までを重機により除去し、以下を人力によって掘下げた。翌年2月3日に発掘調査を終え、2月5日にすべての作業を終了した。

なお、調査に用いた方位は磁北、標高はTP値である。

2) 調査の結果

i) 層序

部分的な坪掘りを含め、現地表下約3.5mまでの地層を観察した(表4、図33)。

厚さ30~80cmの現代盛土の下位に、作土層である第1層(現代)と第2a・2b層(近代以降)がある。

第3層はSD301内の堆積物である第3i~iii層とその上位の作土層と考えられる第3'層からなり、調査区の東部にのみ分布する。出土遺物は少ないが、周辺の調査結果と上下の地層状況から、室町時代~近世ごろの層準であろう。第3i層下部からは池や沼などの停滞水域の植生を示すヒメビシの果実が産出している。

第4層は調査区の中央から西部に分布し、3層準に細分される作土層である。12世紀末葉~13世紀に属する瓦器のほか、少量の土師器・須恵器と奈良時代ごろと思われる瓦が出土している。

第5層は上位層と同様の分布を示す暗色帶である。上位層と同時期に属する瓦器や土師器・須恵器・瓦が少量出土している。下部に横大路火山灰層起源の褐色火山ガラスが認められ、遺物や上下の地層



図32 MG98-6次調査地位置図

の特徴などから、縄文時代から中世にかけて長く地表面であったと考えられる。また、本層は下位層上面に沿って東側に緩く傾斜し、SD301の掘削以前から東側が低くなっていたことがうかがえる。

第6'層および第6層は段丘構成層準である。第6'層は調査区の東部に分布し、生物擾乱や乾痕などによる環境変化の影響を受けた擾乱帶である。上位層とは不整合で接しており、地層の特徴と周辺の

表 4 MG98-6 次調查地層序表

凡例 暗色带 作土层 水成层 ← 上面检出遗构 ↓ 下面检出遗构

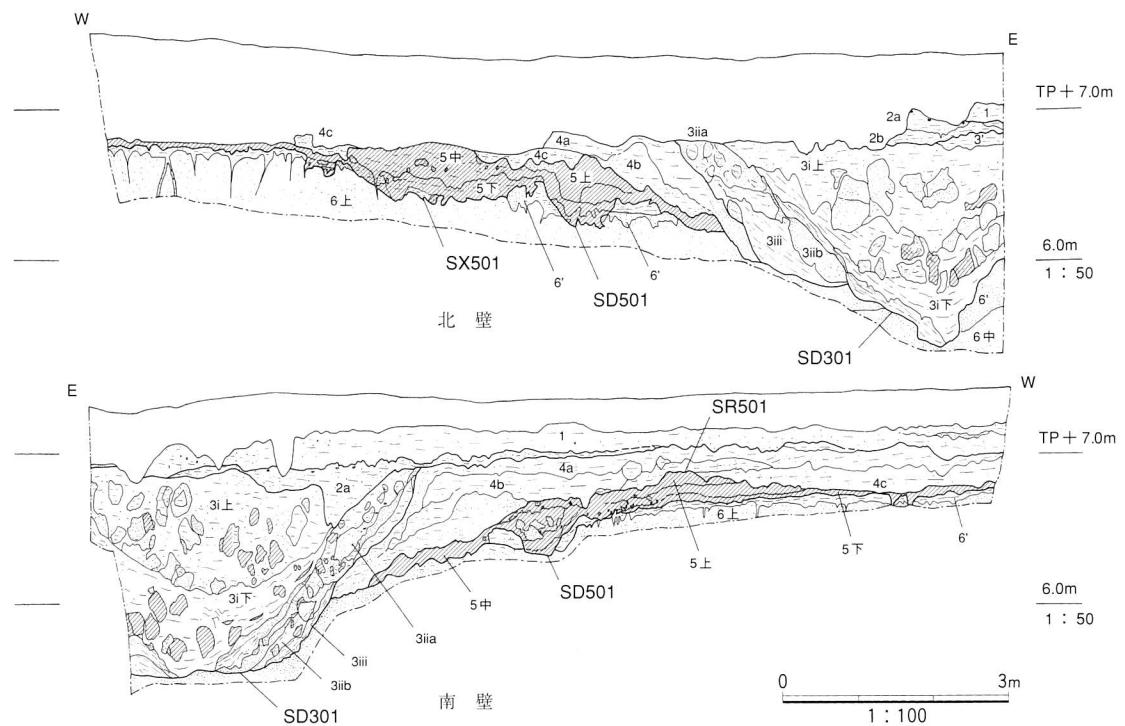


図33 地層断面模式図

地質状況から低位段丘構成層準と思われる。第6層は調査区全域に分布し、3層準に細分される。上部は第6'層と同様の擾乱帶である。中～下部は淘汰のよい細粒砂からなる水成層である。上位層とは不整合で接しており、地層の特徴や層相と周辺の地質状況から中位段丘構成層と考えられる。

ii) 遺構と遺物

a. 第5層下部上面検出遺構(図35、図版9)

調査区中央部においてSD501とSK501、北壁断面においてSX501を確認した。

SD501は幅0.65～0.95m、深さ0.1～0.2mである。下底部に地山の偽礫の混る加工時形成層と、その上位に暗色化したシルト層の機能時堆積層が認められた。地山の偽礫の混る中部層によって覆われている。遺物は出土しなかった。SK501は長径約0.5m、短径約0.25m、深さ0.27mの不定形な土壙である。SX501は幅約1.5m、深さ約0.2mであるが、北壁断面で観察されたため平面形は不詳である。溝の可能性もあるが、水の流れの痕跡がなく、南側に連続しないことから土壙とした。

b. 第5層上部上面検出遺構(図34、図版8)

調査区の中央部で南東～北西方向の畦畔を検出した。SR501は幅0.8～1.2m、高さ0.1m前後である。周囲には足跡は認められなかった。

c. 第4c層上面検出遺構(図36)

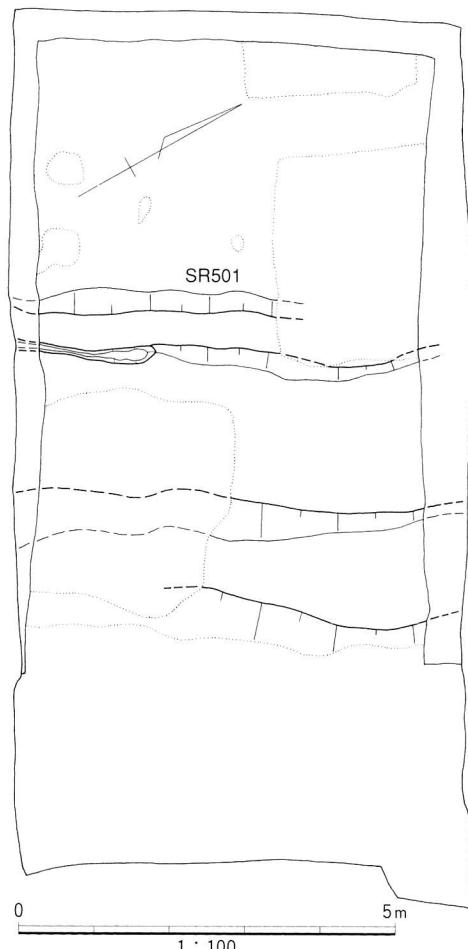


図34 第5層上部上面検出遺構平面図

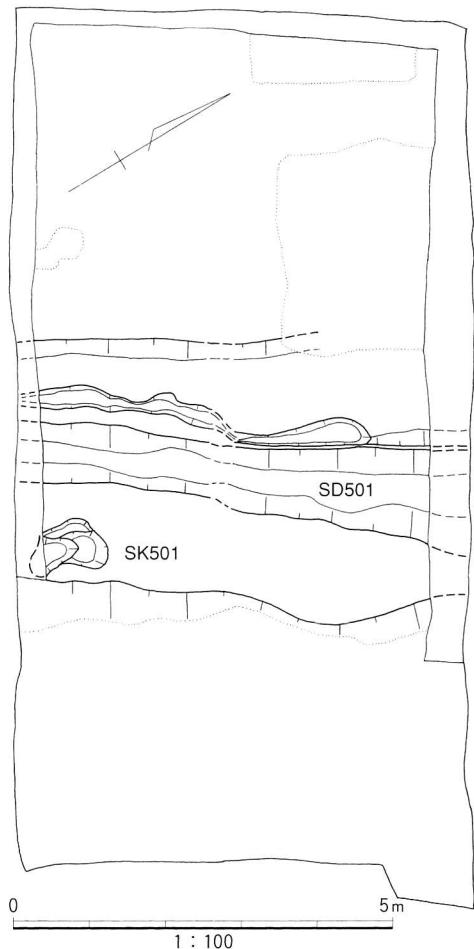


図35 第5層下部上面検出遺構平面図

調査区西部においてSP401～403を検出した。いずれも直径0.1m前後のほぼ円形の柱痕跡を残していたが、これらに組み合う柱穴は周囲には認められなかった。

d. 第3iii層下面検出遺構(図37、図版8)

調査区の東壁にかかるSD301があり、深さは約1.3mである。幅は約5.0～5.5m程度と推測され、南端ではさらに1.0m前後広くなる。溝内堆積物は西肩部から下底部にかけて分布する第3iia・b層および第3iii層と、埋土である第3i層からなる。前者は西肩から流し込むように最大厚0.4mで客土され、幅2.3～2.5mの帶状に分布していたことから、溝の西肩に護岸工事が施されていたと考えられる。第3i層は上下に細分される。下部は細粒砂をレンズ状に挟み、ラミナのめだつシルト～粘土を主体とする。下底部は水の流れの余りない堆積相である。また、下部上半には約0.3～0.45mの亜円～隅丸方形の偽礫が客土されていた。偽礫には横大路火山灰層の褐色火山ガラスを含む暗色化した古土壤と平安神宮火山灰層とが上下関係を残しているものもあり、付近に縄文時代の地層が残されていると考えられる。上部はシルト質細粒砂の偽礫が不規則に大量に客土されており、溝の埋立てが目的で客土されたものであろう。ごく少量の土師器・須恵器・瓦のほか、寛永通宝が出土した。

3)まとめ

飛鳥時代以前の遺物はなく、奈良時代と思われる遺物も僅少であったが、縄文時代の古土壤が偽礫として見つかった。桃ヶ池が上町台地の形成に係わる構造的な谷の中であり、その谷の延長上に縄文時代の遺物が出土した生野区勝山遺跡があることから、調査地の近辺に縄文時代の遺跡が存在する可能性がある。平安～鎌倉時代では耕作に伴う遺構があり、調査地の周囲が生産域であったと考えられる。近世以降も継続的に耕作されていたものと思われる。(小倉)

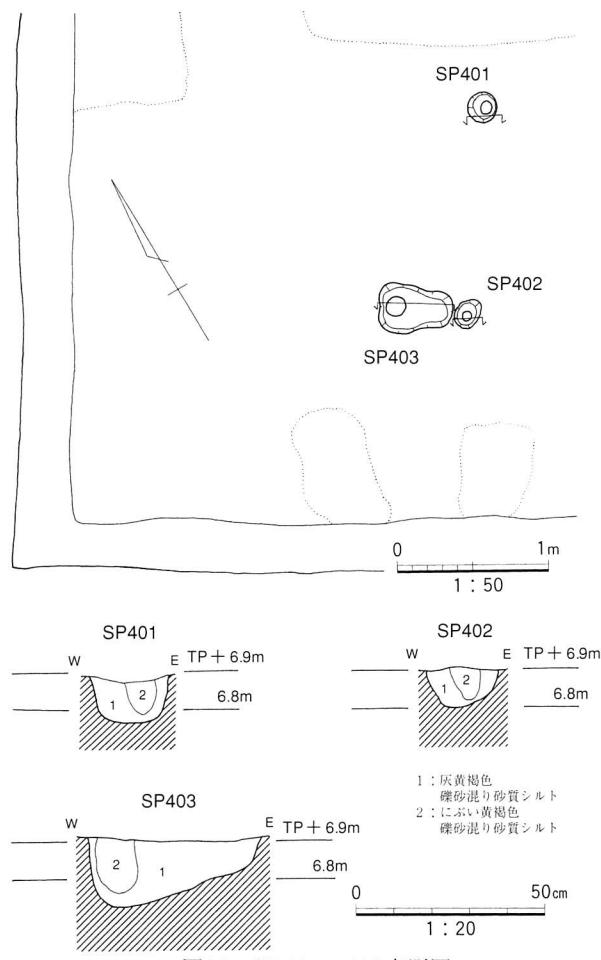


図36 SP401～403実測図

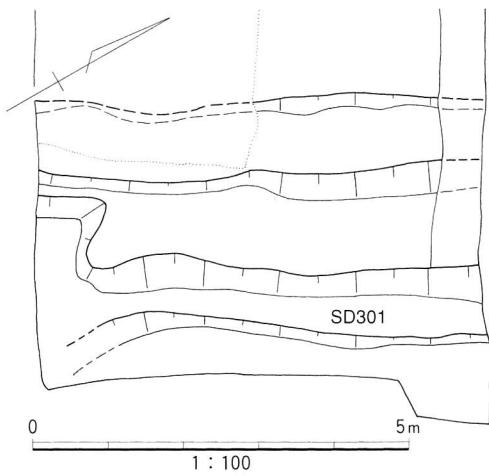


図37 第3iii層下面検出遺構平面図

第VI章 阿倍野筋遺跡の調査

第1節 AS98-7次調査

1) 調査の経緯と経過

11月2日に機械掘削を開始し、11月4日に近世の地層までを除去した後、人力で掘削を開始した。11月5～10日に中世および古墳時代後期の調査を行い、11月10日から庄内式期の調査を開始し、11月25日に調査地の北西と南東部にトレーナチを設け、TP+15mまでの地層を観察した。翌26日全調査を終了した。なお、調査に用いた方位は国土平面直角座標第VI系で、標高はTP値である。

2) 調査の結果

i) 層序(図39)

第1a層は明黄褐色の小礫を多く含む細粒砂層である。本層には炭、焼土からなる層厚約3cmの薄層が含まれていた。

第1b層はにぶい黄褐色細粒砂層で、層厚は9～10cmである。攪乱の著しい調査地中部を除き、調査地全体に広がっていた。近世陶磁器を多く出土した(図45～94の信楽焼水差ほか)。

第1c層は粗粒砂から細礫を多く含むにぶい黄橙色シルト層で、層厚は6～10cmであった。調査地の東部では残りがよく、瓦器の細片が出土した。

第1d層は黄橙色細粒砂混りシルト層で、調査地東部では層厚が10～12cmであるが、西部ではほとんど残っていなかった。須恵器細片が出土したが、瓦器は含まれていない。

第2a層は黄橙色シルト混り粘土層である。地山直上の暗色帶で、調査地全体に広がっていた。

第2b層は明褐色粘土の地山層である。水成堆積層で、下部は粒径が大きく、上部に向かってシルト混り粘土、シルトへと遷移していた。

第2c層は細礫から1～2cmの円～亜円礫が混る黄橙色粗粒砂層の水成堆積層であった。

ii) 遺構と遺物

a. 第1d層下面・第2a層上面検出遺構(図40・41、図版10)

SB01は総柱掘立柱建物である(図41)。建物の方位はN21°Wである。桁行4間以上、梁行2間で、柱間寸法は桁行1.8m、梁行2.8mである。

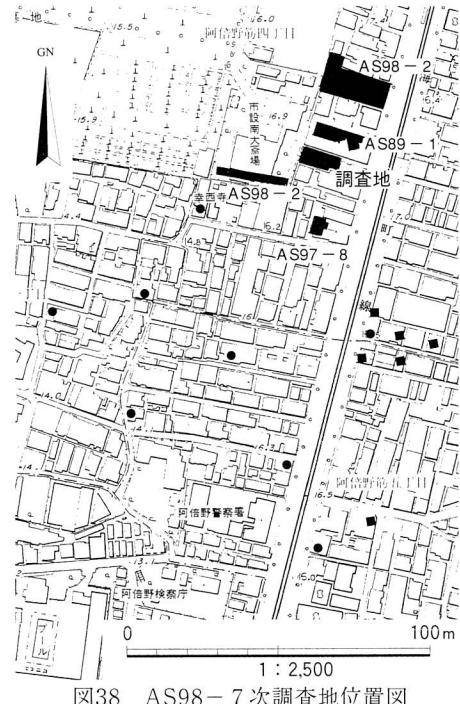


図38 AS98-7次調査地位置図

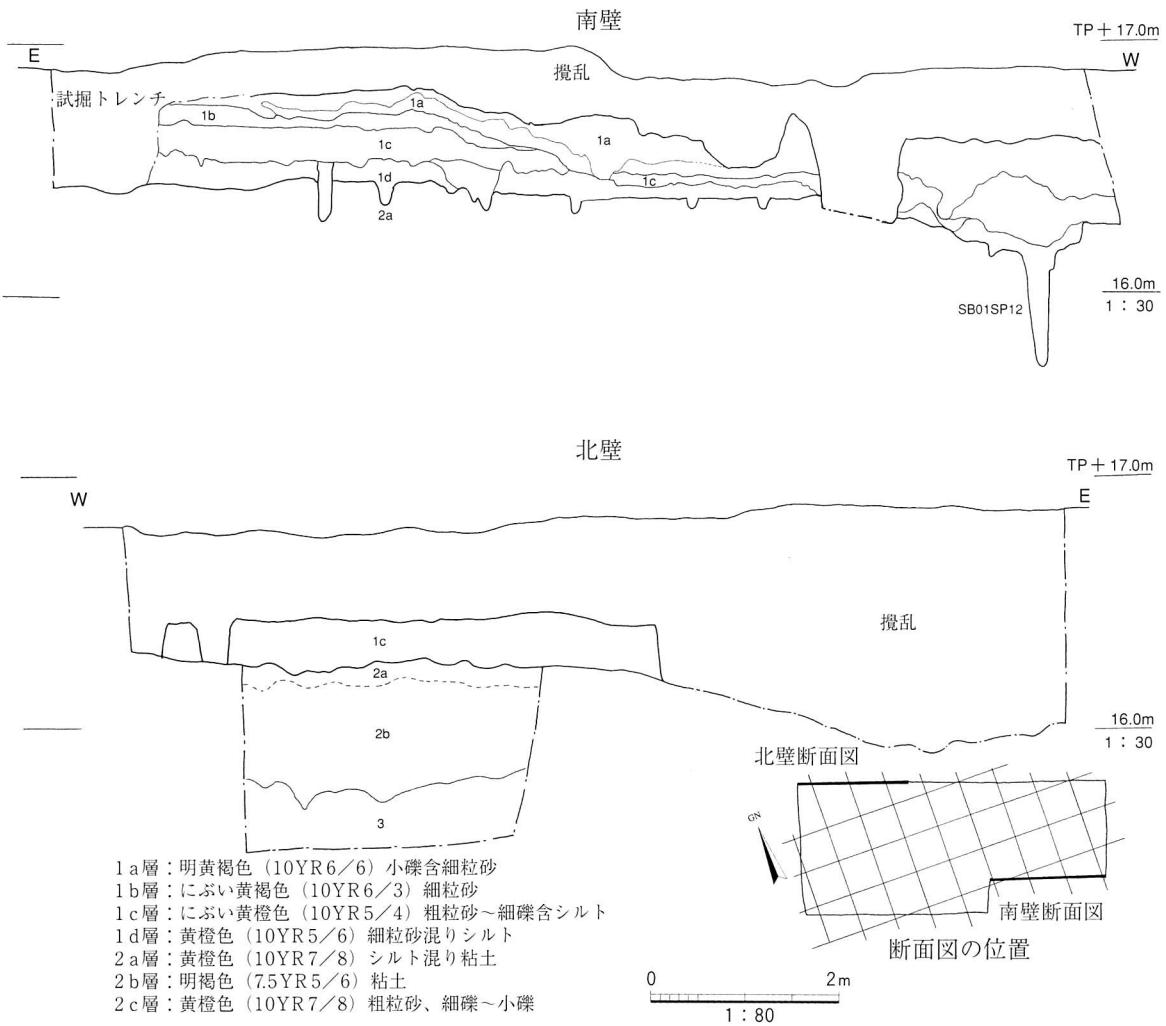


図39 地層断面模式図

柱穴は側柱と床柱で大きく異なっていた。側柱は隅丸長方形の柱穴で、長さ0.6m、幅0.4m、深さ0.6mであった。柱痕跡から直径約0.26mの丸柱であったことがわかる。埋土は比較的固くしまっており、地山の黄褐色粘土と黒色シルト質粘土が交互に埋められていた。また、柱の抜取り穴が認められたものがあり、黒色シルト質粘土の中に黄褐色粘土の偽礫がまばらに含まれ、最上層は暗茶褐色シルト質粘土で埋っていた。床柱は直径約0.26mで、深さは0.2mと側柱に比べて浅く、埋土は基本的に1層であり、黒色シルト質粘土であった。また、建物の北側で、棟のとおりの延長線上2.6mの位置に、長軸0.73m、短軸0.29mの細長いSP04がある。上部は削平され、検出面からの深さは0.14mであった。埋土は他と同様に暗茶褐色粘土であった。独立棟持柱と考えるには規模が小さいが、建物の主軸上にあることから、SB01に関連するものと考えられる。

遺物(図45)は庄内式甕101・102、鉢104、広口壺103、甕底部106が柱の抜取り穴の埋土中から出土した。102は生駒西麓産の胎土である。103はSP02・11から破片が出土し、接合しないが、色調などから同一個体の可能性が高い。これらの遺物の時期は庄内式Ⅰ～Ⅲ期と考えられる(註1)。

SP38は東側が搅乱で破壊されていたが、東西0.65m以上、南北0.48mの小穴と考えられる。深さは0.3mで、埋土は淡茶褐色シルト混り細粒砂からなり、SB01の柱穴のように地山の偽礫は含まれて

いない。生駒西麓産の胎土の山陰系二重口縁壺の口縁部片が出土した。庄内式後半期と考えられる。SP39は長軸1.2m、短軸0.7mの土壙で、埋土は暗茶褐色シルト質粘土である。出土遺物はない。そのほかに、調査地の東側で幅0.1m、深さ約0.08mの小溝群がある。溝には直角に曲るものもある。

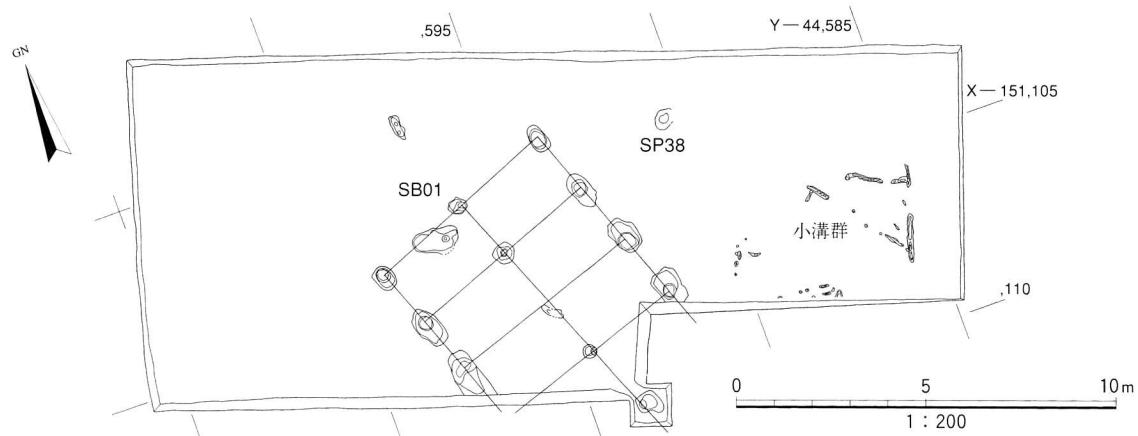


図40 第1d層下面・2a層上面検出遺構平面図

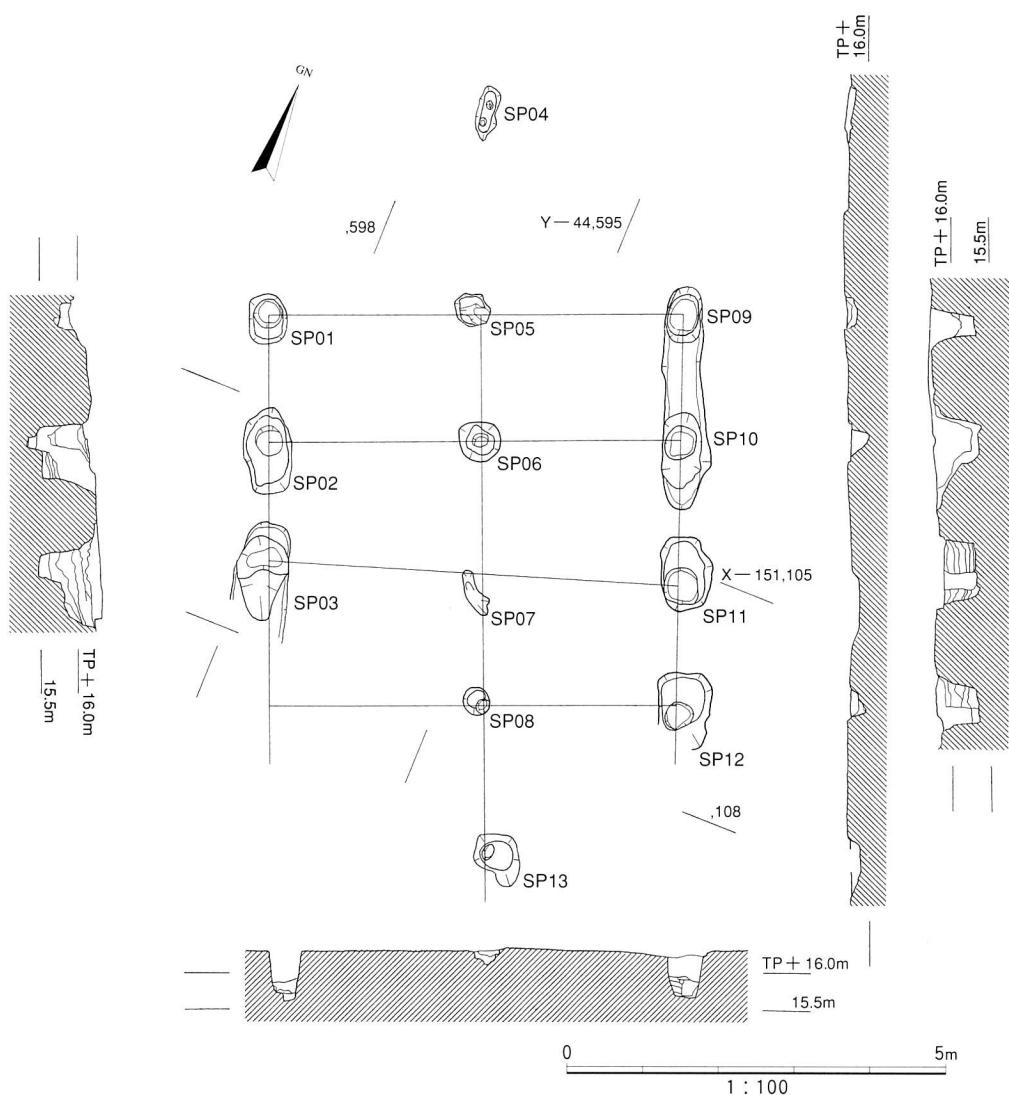


図41 SB01実測図

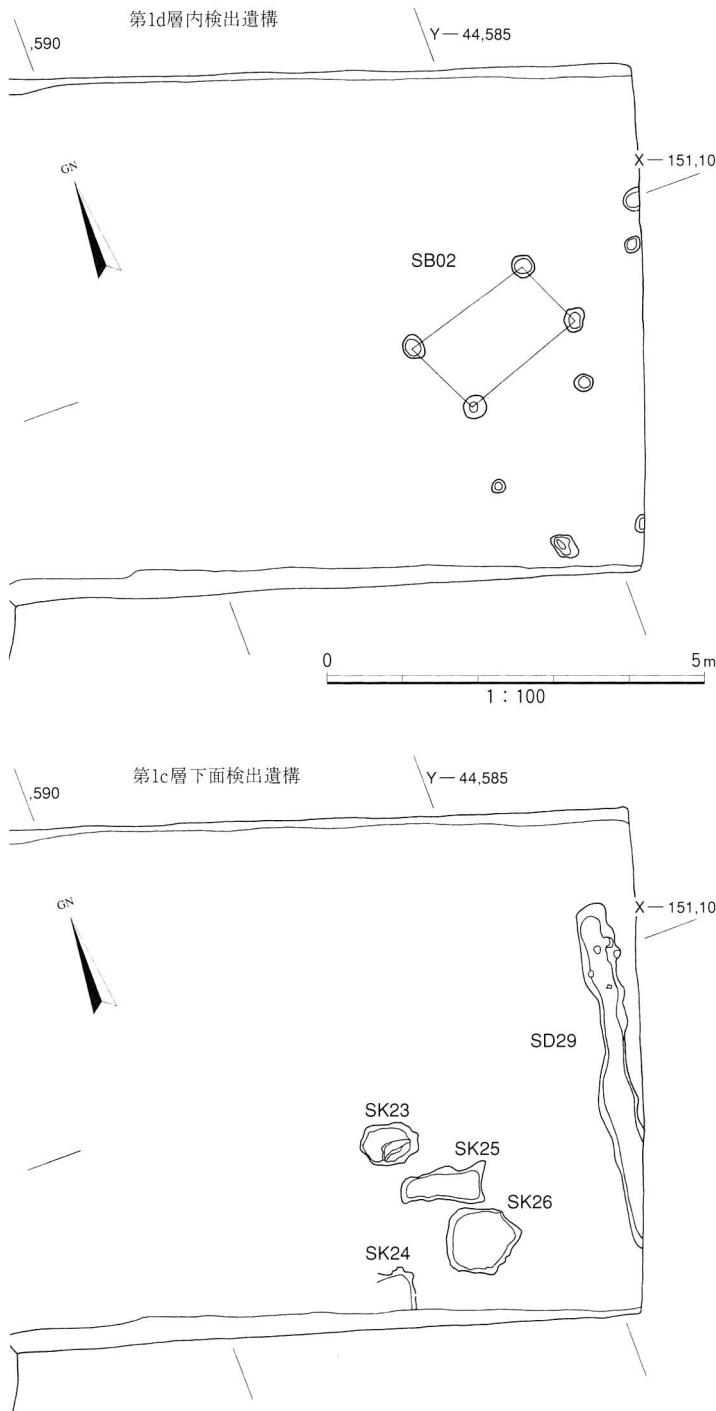


図42 第1d層内・1c層下面検出遺構平面図

北0.31～0.42m、深さ0.15mの土壙である。平面形は隅丸長方形である。断面形は舟底状で、埋土の最上部で炭の薄層が観察された。

SK26は東西1.04m、南北0.96m、深さ0.13mの土壙で、南西部を近代の遺構に削られていた。壁は西側を中心に帶状に焼けていた。埋土には炭、焼土が含まれていた。

SD29は幅0.3～0.5m、深さ0.15mの南北方向の溝である。断面形は台形である。埋土は淡茶褐色シルト質細粒砂で、基底付近から須恵器杯や甕の破片が出土した(図45-97・98)。杯はTK217型式

る。堅穴住居の周壁溝の可能性も考えられたが、対応する柱穴・炉跡などはない。この小溝群の一帯で、第2a層を掘削中に、管状土錐(図45-99)が出土した。直径2.3cm、長さ4.0cm以上である。

b. 第1d層内検出遺構(図42・43)

SB02は東西1間、南北1間の掘立柱建物と考えた4個の柱穴で、柱間寸法は東西1.75m、南北1.1mになる。掘形は直径0.3～0.35m、深さ0.12～0.36mで、埋土はオリーブ褐色細粒砂混りシルトである。柱穴の基底はTP +18.2mでほぼそろっている。建物の南北軸の方位はN33°Wである。

c. 第1c層下面検出遺構(図42・43)

SK23は調査区の東部中央にあり、東西0.63m、南北0.45～0.53m、深さは0.19mであった。土壙の上端付近が東西軸上の一個所ずつで焼けており、屋外炉の可能性がある。須恵器甕の細片が出土した。

SK24は東西0.4m以上、南北0.5m以上の土壙である。検出面からの深さは0.13～0.18mで、上部がSD22に切られる。南部の断面形は「W」字状で、基底付近に少量の炭が堆積していた。出土遺物はない。

SK25は東西0.96～1.05m、南

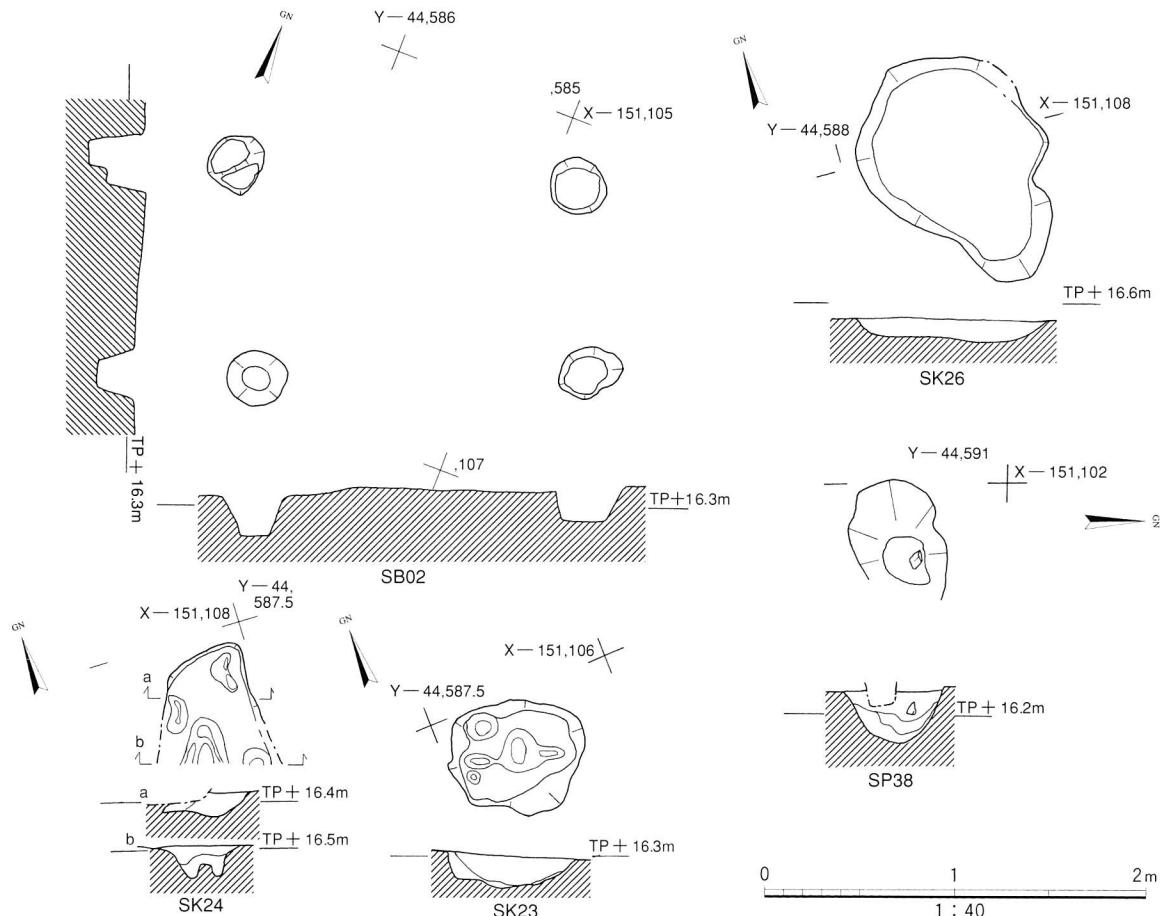


図43 各遺構実測図

に属すると考えられる。

d. 第1b層下面検出遺構(図44)

第1b層下面では溝と小穴多数を検出した。

SD22は東西方向の溝である。幅約0.3m、深さ約0.15mであり、断面形は浅い舟形であった。埋土は暗褐色粗粒砂混り細粒砂であった。細片であるが、13～14世紀頃の和泉型の瓦器碗と思われる破片が数点出土した。

SP31は円形で、幅0.26～0.28m、深さ約0.3m、また、SP35は隅丸方形で、東西0.3m、南北0.41m、深さは約0.25mであった。これらは柱穴の可能性が高い。

このほかの小穴は規模も小さく浅いため、建物の柱穴と判断できるものはなかった。

e. 第1a層下面検出遺構

第1a層下面では近世～近現代の溝・井戸・瓦溜まり・漆喰溜まり・小穴・建物の礎石などがある。

図45-89・91・92・94・96はこれらに伴う遺物である。96は調査地北西隅の井戸から出土した土人形で、髪は黒色、ふんどしは赤色、腹掛は青色に着色され、童子の姿をしていることから金太郎をかたどったものと考えられる。

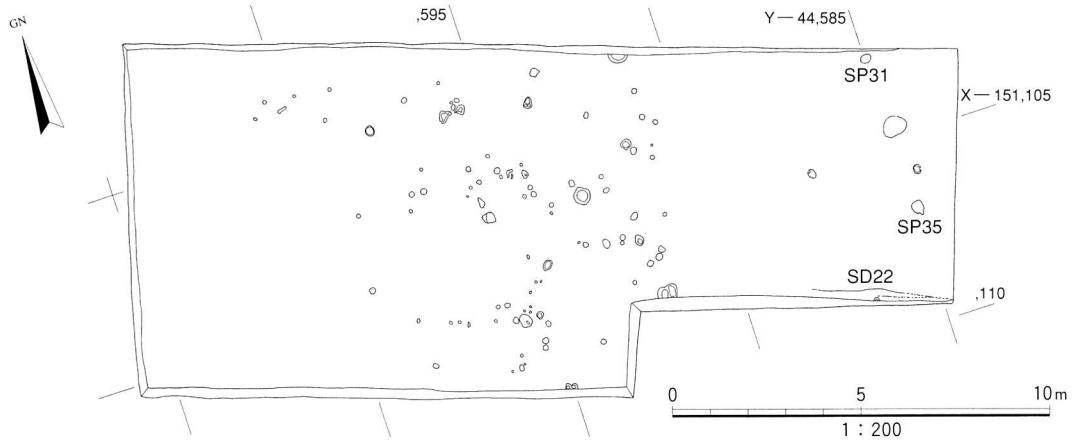


図44 第1b層下面検出遺構平面図

3)まとめ

今回の調査の成果は以下のとおりである。

- a. 調査区中央部で庄内式期前半の大型建物SB01を検出した。調査区東部は古墳時代後期の遺構によって残りが悪かったが、比較的時期が近いと考えられる小穴群・小溝群を確認した。
- b. 古墳時代後期(6世紀後半)と考えられる遺構として溝1条、土壙4基を確認した。土壙には壁が焼けたものがあり、屋外炉の可能性がある。SD29の方位はN10°Eで南北に直線的に延びている。その北側60~70mの延長上には、N9°Eの方位でTK10型式の須恵器が出土したSD305(AS98-2次)があり、両者は一連の遺構であろう。そこで、SD29は集落内を区画する溝の可能性が考えられる。
- c. 中世の遺構には瓦器が出土したSD22があり、現在の阿倍野筋と直交している。

阿倍野筋遺跡ではこれまでに7棟の堅穴住居、7棟の掘立柱建物が確認され、その集落構造については寺井誠が総括している[大阪市文化財協会1999a・寺井誠1999]。今回の調査によって、新たに掘立柱建物2棟が加わった。これらの遺構群は庄内式期から布留式期古段階にかけて設けられており、この時期に阿倍野筋遺跡の居住域が拡大したといえる。庄内式期前半の遺構群が本調査地およびその南に広がっているのに対して、庄内式期後半から布留式期古段階にかけての遺構群は、本調査地より北に展開する傾向を示す(図46)。

表5 AS98-7次調査地遺物観察表

番号	区分	器種	検出面	遺構	色調	胎土の特徴	備考
89	土器	小皿	1a層下面	SD12	浅黄褐色	シャモット・チャート	灯明皿、口縁端部に煤付着
90	陶器	楕円縁部	1b層下面	SE28	灰褐色	雲母	
91	磁器	碗底部	1a層下面	SD11	灰白~明緑灰色	長石	くらわんか茶碗
92	陶器	茶碗底部	1a層下面	SD12	施釉部灰黄色	雲母・チャート・シャモット	蛇ノ目釉剥ぎ、盤付無釉
93	陶器	皿底部	1b層下面	SE28	淡黄色	チャート・シャモット	盤付無釉
94	陶器	水差	1a層下面	SX01	にぶい黄褐色	雲母・チャート・シャモット	
95	土製品	土人形	1a層内		橙色	長石・シャモット	裏面に剥離痕
96	土製品	土人形	1a層下面	SE28	にぶい黄褐色	雲母	髪は黒、ふんどしは赤などの着色、金太郎か?
97	須恵器	甕体部	1c層下面	SD29	灰色	長石・雲母	やや軟質
98	須恵器	杯身	1c層下面	SD29	灰色	長石	TK217型式
99	土製品	管状土錘	2a層内		にぶい黄褐色	長石・石英・シャモット	長4.3cm、直徑2.6cm、管径11.2cm
100	古式土師器	二重口縁甕 か鉢?	1d下/2a上	SP38	にぶい黄褐色	角閃石・長石	生駒西麓産
101	古式土師器	庄内式甕?	1d下/2a上	SB01(SP01)	にぶい黄褐色	角閃石・長石	生駒西麓産、外面タタキ不明、タテハケ、内面ケズリ
102	古式土師器	庄内式甕?	1d下/2a上	SB01(SP13)	にぶい黄褐色	角閃石・長石	生駒西麓産庄内甕
103	弥生土器	広口短頭壺	1d下/2a上	SB01(SP02-11)	明褐色~灰褐色	長石・石英	
104	弥生土器	鉢	1d下/2a上	SB01(SP09)	橙色	長石・石英・雲母・チャート	底部ユビオサエ、内面ハケのちナデ
105	弥生土器	甕底部	2a層内		黄褐色	長石・石英・雲母・角閃石	生駒西麓産?
106	弥生土器	甕底部	1d下/2a上	SB01(SP13)	橙~灰褐色	長石	底部外面赤く変色

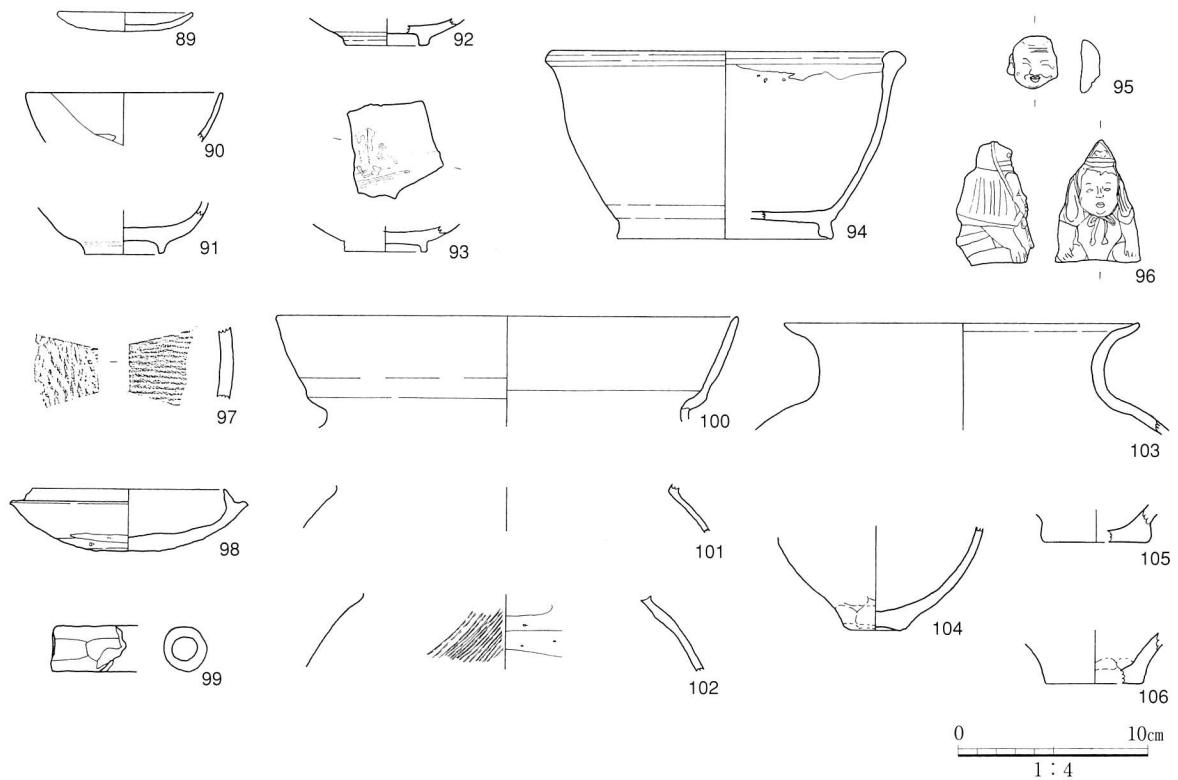


図45 出土遺物

遺構群の方位や、各遺構の配置にも時期による特徴がうかがえる。すなわち、庄内式期前半の建物では方位がN30°Wであるのに対し、庄内式期後半から布留式期古段階にかけてでは、N20°Wになっている。古墳時代後期の遺構は溝のみであるが、調査地が異なっていてもN9~10°Eの方位に延びている。このように集落全体にわたって、各時期ごとの遺構方位に規則性が存在していたと考えられる。さらに、本調査地の大型総柱建物SB01は、南側30mに位置する大型竪穴住居SB501(AS97~8次)の主軸を北に延長した位置に西側柱列を配するなど、主要な建物配置に一定の規格性が見受けられ、いくつかの建物が建ち並ぶことで複合施設を形成していた可能性も考えられる。

調査地東側で検出された掘立柱建物・区画溝および屋外炉と考えられる遺構の存在は、本調査地が古墳時代前期から古墳時代後期にかけても居住域として利用されていたことを示している。AS98~2次調査では、TK10型式の須恵器杯蓋や土師器甕が出土した溝や落込みが検出されており、阿倍野筋遺跡が弥生時代末葉~古墳時代前期以降、長期間にわたって集落として機能していたことは確実である。今後、古墳時代を通して集落の変遷や生活の様相の変化を解明することが期待される。(杉本)

註)

(1)庄内式期の土器の編年は米田敏幸氏の考えに従っている[米田敏幸1991]。

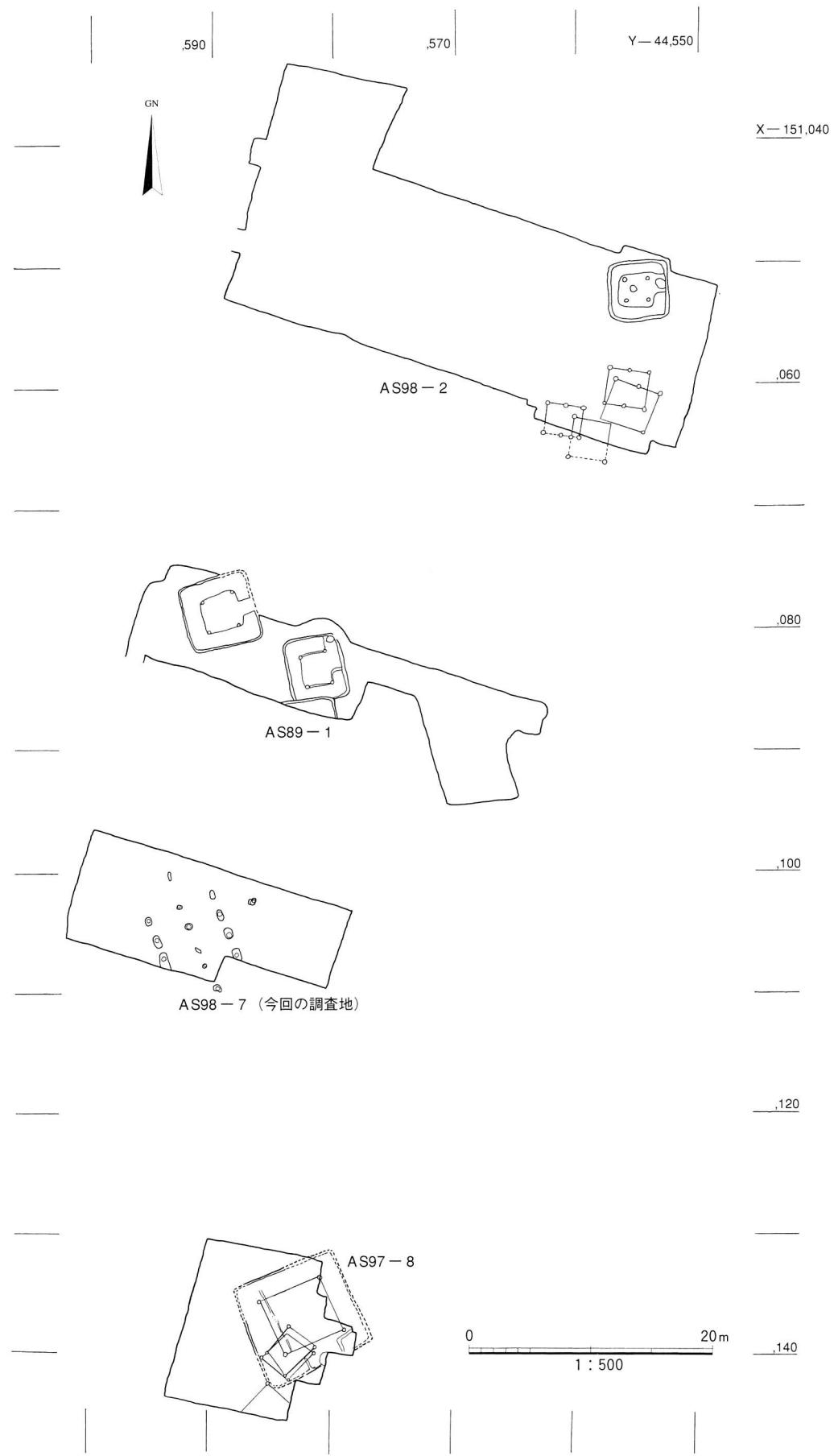


図46 阿倍野筋遺跡の庄内～布留式期の遺構群分布図

第VII章 阿倍寺跡の調査

第1節 AB98-5・6次調査

1) 調査の経緯と経過

阿倍寺跡は、周辺に残る小字名や、かつて存在した方形土壇や礎石、周辺から採集された古代の瓦などから、白鳳時代にさかのほる古代寺院として注目されてきた[藤沢一夫1941]。しかし、これまで正式な発掘調査が行われておらず、実態が不明であった。

今回の調査が阿倍寺跡における初めての発掘調査である。1998年12月22日に試掘調査を行い(AB98-4次)、次いで大阪市教育委員会によって試掘調査が行われた。その結果、中世の遺構が確認され、1999年1月25日～2月3日に、三たび試掘調査を実施し(AB98-5次)、第1～5区の調査区を設定した(図49)。結果、寺域の区画溝と考えられる中世の大溝を確認し、また古代のものを含む瓦が大量に出土した。このため、敷地以南に寺院が存在していた可能性が高くなり、調査を行うこととなった(AB98-6次)。敷地内の南西に第6区を設定し、2月10日から重機掘削を開始し、26日にすべての調査作業を終了した。ここではAB98-5・6次の成果を合わせて記述する。

なお、調査で用いた方位は国土平面直角座標第VI系、標高はTP値である。

2) 調査の結果

i) 層序

現代の客土層以下、地山層上部までを第0～6層に区分した(図48)。

第0層：現代の客土層である。

第1層：4・5区の低い部分を埋める客土層で、層厚30～80cmである。第二次大戦直後の地形測量図から判断すると、この範囲は第1層による客土がなされておらず[林野全孝1949]、それ以後の

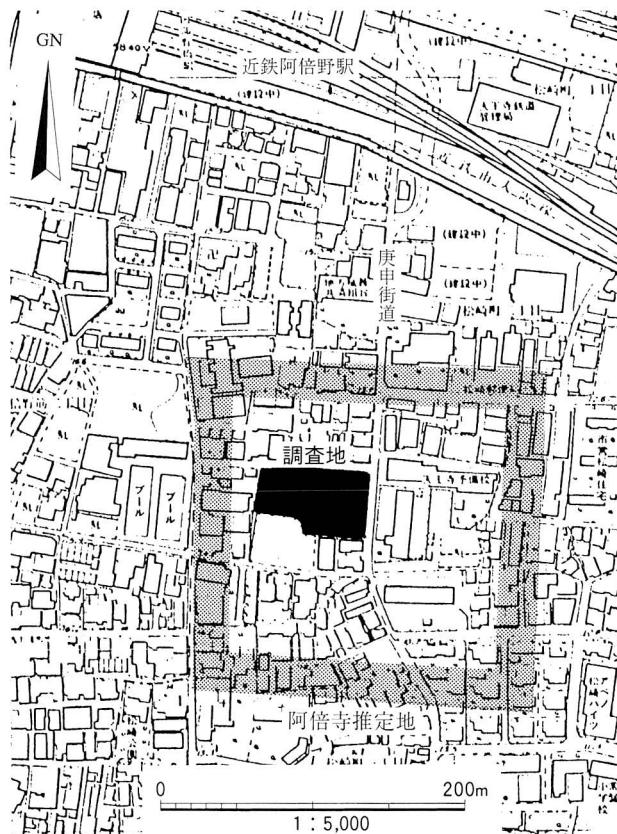


図47 AB98-6次調査地位置図

整地に伴うものと判断される。

第2層：6区中央に分布する黄褐色シルト質粗粒砂の作土層である。層厚は最大で15cmあり、下面で南北方向の耕作溝を検出した。遺物は出土せず、時期は不明である。

第3層：5区南半の落込み1北半を埋める客土層で、層厚は最大で40cmある。層相は第2層と類似するが、遺物はなく、時期は不明である。

第4層：1区に分布する地山層で、黄褐色礫混り粘土である。中位段丘構成層最上部の地山風化帯と考えられる。層厚は最大で25cmある。

第5層：下部は黄橙色礫～極粗粒砂で、上部は細粒化し、淡黄色粗粒砂の段丘構成層である。敷地内西側の2・5・6区では上部の極粗粒砂が優勢で、東側の1区では下部の礫～極粗粒砂が優勢となる。層厚は最大で60cmある。

第6層：上位の第5層とは不整合をなす段丘構成層で、上部は灰白色粗粒砂で6区に厚く分布し、下部は黄褐色礫である。下位には粗粒砂と礫が互層をなす個所がある。

ii) 遺構

a. 1区(図49～51・54・55、図版11・12)

地表下約0.3mにある地山層の上面で、SD01～05を検出した。

SD01は調査区を東西に縦断する大溝である。検出面での幅は2.2m、深さは0.7mで、断面形は逆台形もしくは「U」字形である。1区東端で南側に直角に折れ曲る。2区で西側への続きを、4区東端で南側への続きを確認し、東西66m以上、南北34m以上の「L」字に曲る大溝と判明した。1区西半で溝

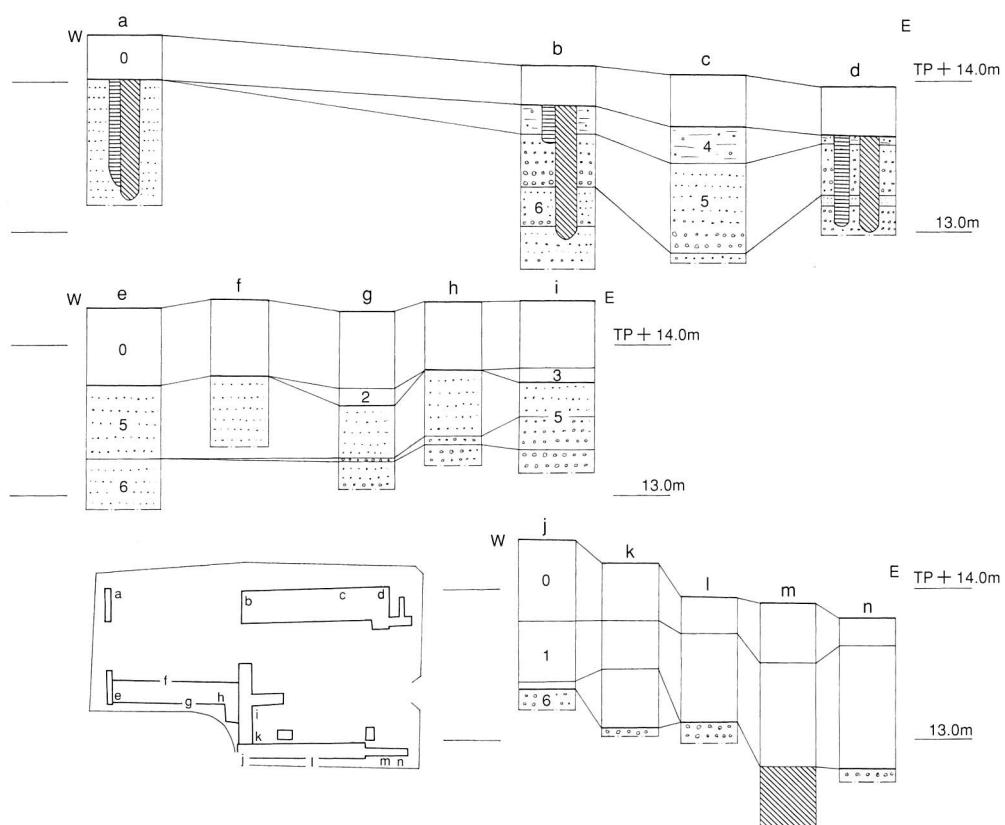


図48 調査地地質柱状図

底を幅約1.0m、高さ約0.3mのブリッジ状に掘り残した部分が2個所ある。西から東へ水を排水する際に汚泥を沈殿させる機能が考えられる。溝の基底には水つきのシルト質粘土が薄く堆積していた。偽礫層がほとんどないことから、溝ざらえを頻繁に行う管理の行き届いた溝であったと考えられる。その上には0.2mほどの土砂が堆積し、上部がわずかに暗色化しているため、一定期間放置されていたようである(図51)。その後、厚さ約0.5mほどの土砂で溝が埋められている。この埋戻し土から多量の瓦・土器が出土した。表面が磨滅した瓦が多く、溝を埋める際に周辺からかき集めて投棄されたものと思われる。遺物には土師器羽釜107、甕120・122、備前焼擂鉢127・130、須恵器火舎131、龍泉窯系青磁碗134・135、水柱143、皿144などがある。107・120・122・130は16世紀前半、127は15世紀前半の特徴をもつ。131は8世紀頃のものである。134・135は胎土が粗く焼きも良くないが、143・144は精良な胎土で、144は外面に蓮弁文を施す。この他にも楕形のもの1点を含む鉄滓3点が出土した。出土遺物から、SD01の埋没時期は16世紀前半と考えられる。

SD02はSD01とほぼ重なる位置にある東西方向の溝で、SD01に切られ、方位も若干北東に振っている。1区および2区の状況から、SD01と同様の区画溝であったと考えられる。1区の東側では幅1.7m、深さ0.5mで、断面形は「V」字に近い逆台形である。溝底は1区中央付近で段差があり、西側が高くなっている。この部分は、SD01の底にあるブリッジの東側部分とほぼ同じ位置にあり、SD01はSD02を踏襲したものと考えられる。埋土の観察から、下半は薄い水つき堆積と土砂の崩落、上半は暗色化と土砂の崩落を繰り返しながら、徐々に埋没していったことがわかる(図51)。

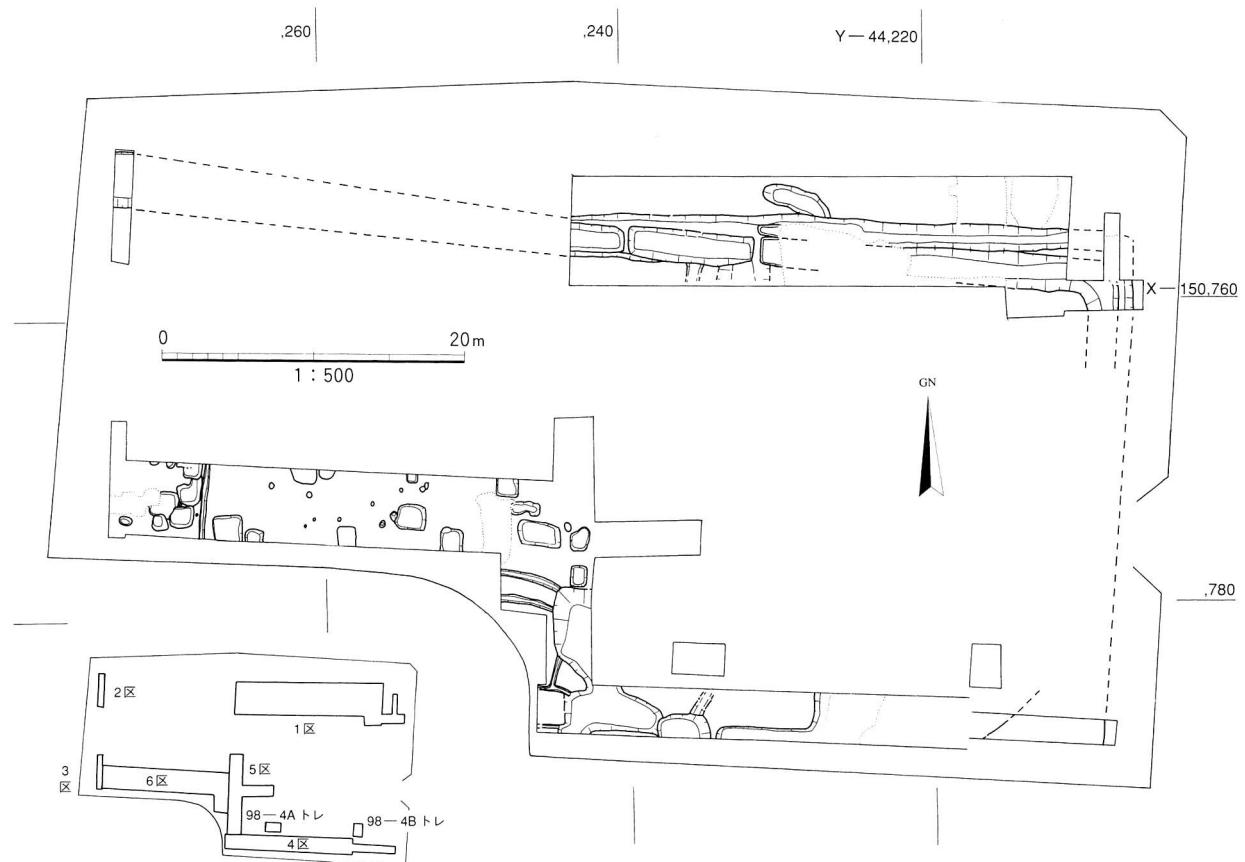


図49 調査地遺構配置図

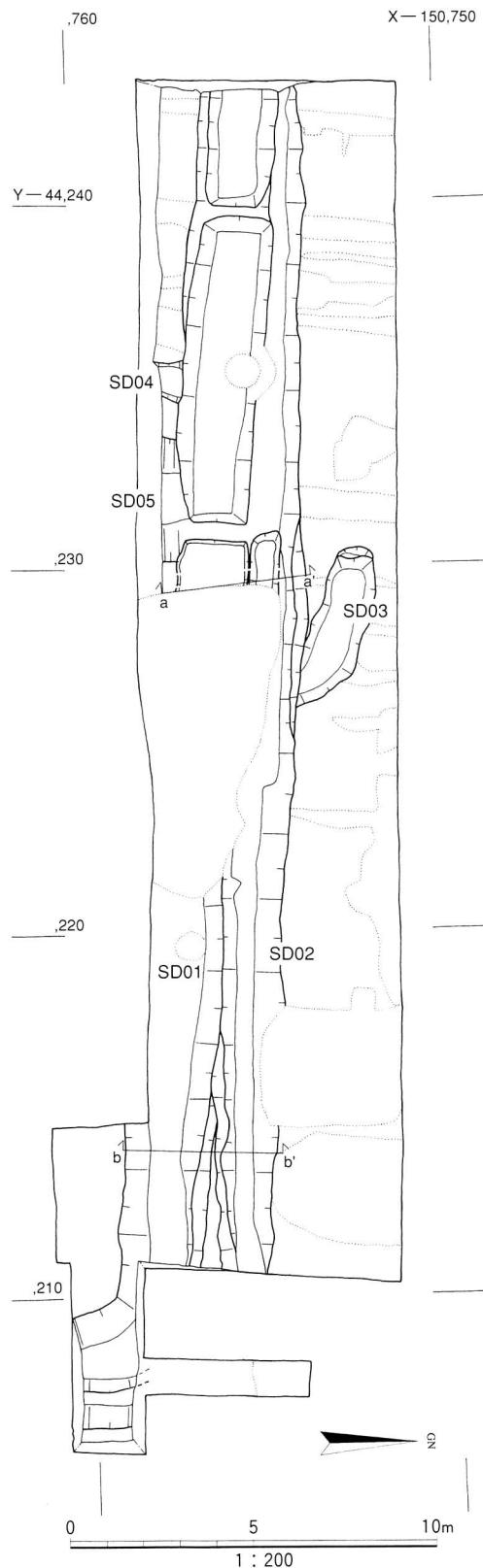


図50 1区遺構平面図

出土遺物はSD01ほど多くない。瓦器小皿115、東播系須恵器鉢123・124、甕125などがあり、14世紀前半代のものである。SD02の開削時期はそれ以前にさかのぼることになる。また、鉄製刀子1点が出土した。

SD03はSD01・02の北側にある幅1.4mの溝で、深さは0.3mである。底に水つきのシルト質粘土層が薄く堆積し、その上位は埋戻し土である。シルト質粘土層上面で貝殻がまとまって投棄された状態で出土し、また理戻し土から土師器・瓦器・備前焼、瓦、椀形の鉄滓1点が出土した。埋没時期は16世紀前半と考えられ、埋り方の共通性から、SD03はSD01に連結していたようである。

ほかにも、SD01の南側で、これに直交してとりつくSD04・05を検出した。

b. 4区・5区南半(図48・52・54・55、図版12)

4区の地山面は他の調査区よりも低い。地山面は5区南半から急に下がり、4区に北隣するAB98-4次試掘トレーナA・Bでは地山面が地表下約0.4mであるから、4区とほぼ重なる位置に東西方向の落ちがあったことが予想される。地山上面の検出遺構は、4区東側のSD01の南北方向の続きと、4区西側から5区南側にかけて位置する落込み1～3およびSD06～11である。

落込み1はいびつな形をしているが、南辺が東西方向に、西辺が南北方向に直線的である。この東側に落込み2・3が存在する。落込み3はほぼ正方位に合う逆「L」字状である。落込み2は落込み1に切られ、ともに検出面からの深さが0.3mで、埋土の水つきのシルト質粘土層と埋戻し土から、瓦を中心に多量の遺物が出土した。瓦は磨滅の進んでいない大きな破片が多く、付近に瓦葺き建物の存在が予想される。遺物には、落込み1で土師器羽釜111～113、土師器小皿118、瓦質土器甕121、落込み2で瓦質土器火入119、備前焼擂鉢128、龍泉窯系青磁132・133・136、落込み3で土師器小皿117、瓦質土器

羽釜114、龍泉窯系青磁139、白磁あるいは青白磁碗140、白磁皿145が出土した。140は内面に割花文を施し、底部に朱書きで「大」の文字を入れる。これらの時期は15～16世紀前半で、遺構の埋没は16世紀前半と考えられる。他にも落込み2で石臼129、落込み1で椀形のもの3点を含む鉄滓5点、

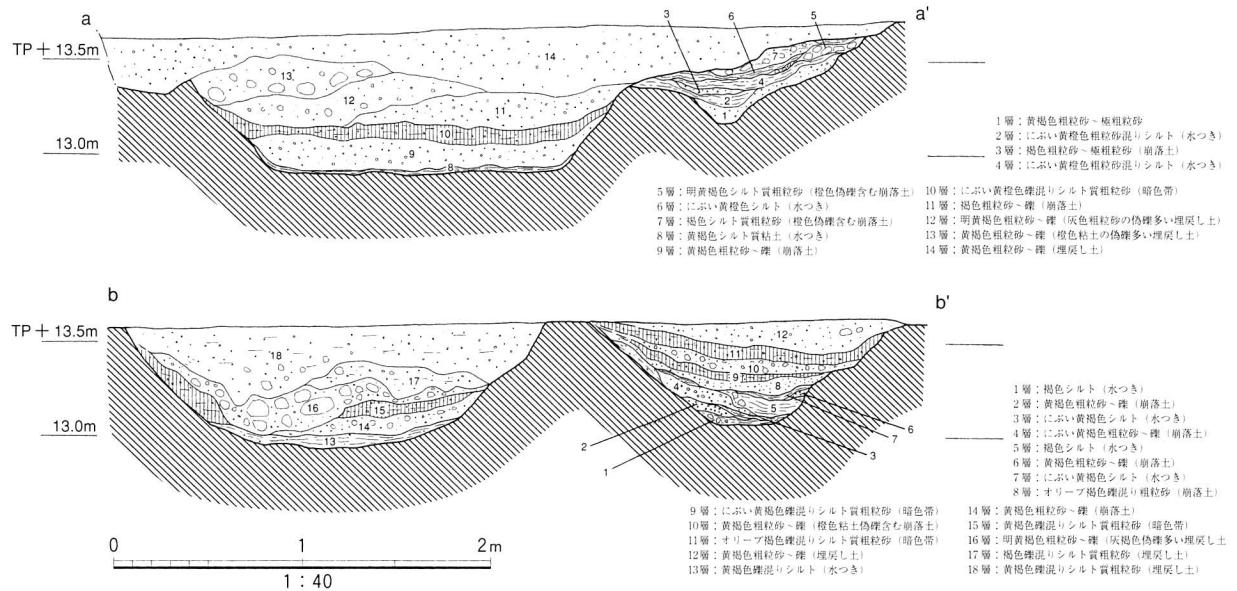


図51 SD01・02断面実測図

落込み2で楕形の鉄滓3点、4区西半の遺構精査時に鉄滓1点、龍泉窯系青磁137、白磁皿146・147が出土した。もっとも大きい鉄滓の重量は229gある。

落込み1の西側にはSD07～11がとりつく。SD07～09は幅0.3m、SD10・11は幅0.5mである。これらは西側から落込み1に水を流す排水溝であろう。落込み2につくSD06も同様の機能であろう。

c. 6区(図53～55、図版13)

地表下約0.5mにある地山層上面で、SK01～25、

SP01～11、SD12を検出した。

土壌は25基で、平面形が方形のもの18基、円形のもの7基がある。方形土壌は一辺0.7～2.7mで、1.5m前後のものが多く多い。円形土壌は直径0.3～0.7mとやや小さい。深さは検出面から0.1～0.8mである。

4区西端でSK18～25が密集する以外は、調査区の南・北辺に沿って東西に等間隔で並ぶ傾向がある。

複数の土壌では滞水の痕跡が見られたが、多くは掘ったあとすぐに埋戻されていた。埋戻し土は橙色粘土を主体とする。これは地山の第4層を起源とすると思われるが、6区には存在せず、遺構検出面で確認した地山は第5層上部の黄白色粗粒砂であった。土壌を掘った土で埋戻したとすれば、本来存在した第4層が後世に削平されていることが予想される。また、掘抜いた粗粒砂が埋土にほとんど認められず、土壌は地山の粗粒砂を採取する土取り穴と考えられる。

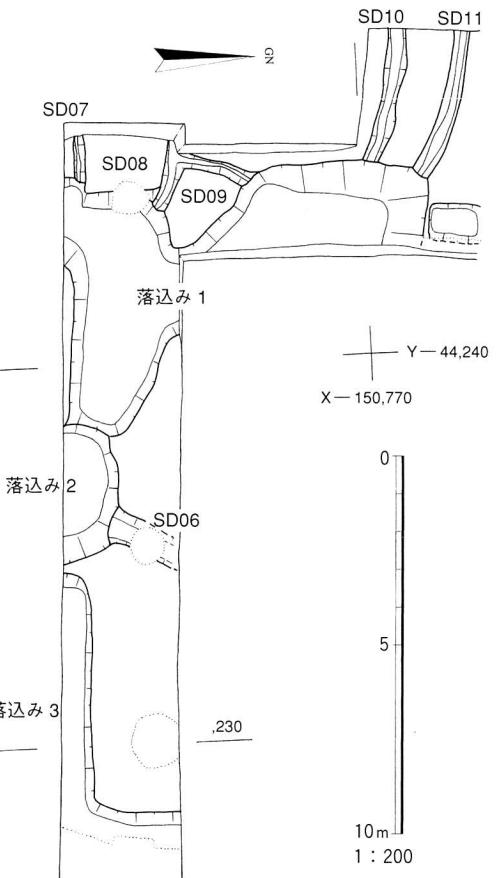


図52 4区西半・5区南半遺構平面図

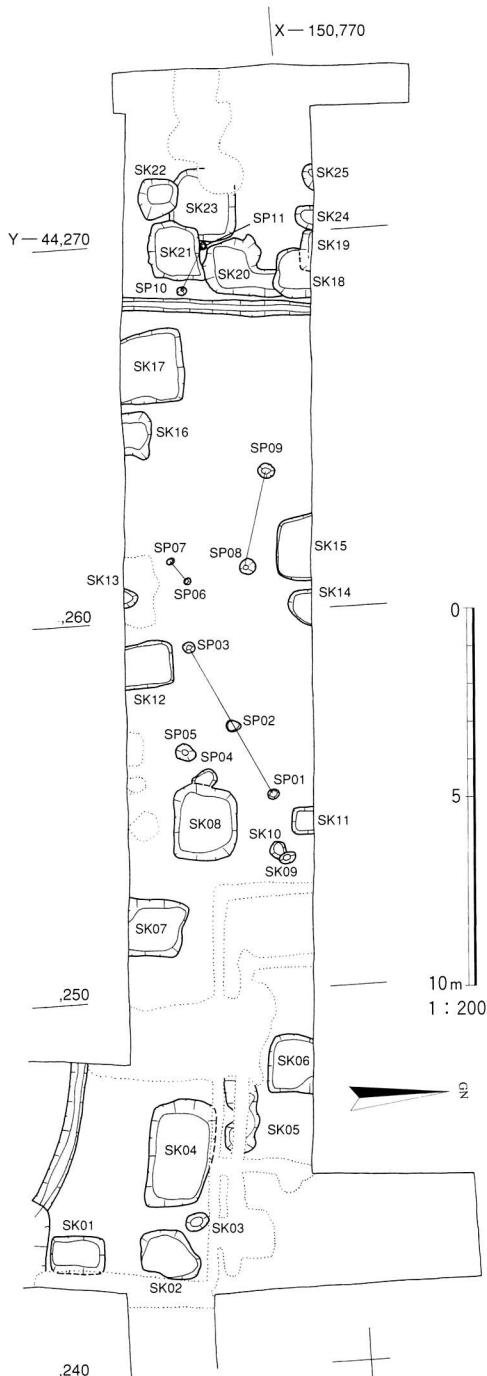


図53 6区遺構平面図

土壌を埋める直前に瓦や土器類、寺院建築物の基礎と思われる花崗岩の破片を投棄したものが数基見られた。遺物にはSK07から土師器羽釜108・110、龍泉窯系青磁碗141、SK16から龍泉窯系青磁碗142、SK18から備前焼擂鉢126、SK22から土師質土器羽釜109がある。108・109・126は16世紀中葉で、土壌の時期を示す。また、SK04・06・07・17の底付近からスサの入った粗粒砂質の壁土がまとまって出土した。

柱穴は6区中央でSP01～09を、西端でSP10・11を検出した。直径0.2～0.4mと小さく、組み合うものはあるが建物を復元するにはいたっていない。中世のものと思われるが、時期は確定できない。

iii) 遺物

a. 瓦(図56)

軒丸瓦は1区SD01から150・151・158～160、SD02から153・157、SD03から148が、4区落込み1から149・154・155・161・162・165、落込み3から164が、6区SK06から156、SK22から163が出土した。

148～150は重圏縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦で、外縁にはほぼ等間隔の圏線が3重に巡る。148は間弁が中房から外区まで長く延び、外区との連結部分で盛り上がる点が特徴的で、扁平な中房に1+8の平らな蓮子を配する。瓦当と丸瓦との接合粘土は少ない。149・150は同型式で、蓮弁は立体的に弁端が突出し、間弁の形態は148と共通する。148と比べ瓦当は厚い。152は素文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦で、陰刻により蓮弁を表現し、断面は盛り上がっている。151も同型式であろう。151は中房に三重に蓮子を巡らす。153は素文縁单弁八葉蓮華文軒丸瓦

で、弁の簡略化が著しい。外区内縁の幅は短く、この部分に珠文があったかは磨滅して判然としない。154・155は蓮華文軒丸瓦の中房部分である。扁平な中房に1+8の蓮子を配する。156は複弁八葉蓮華文軒丸瓦で、中房は大きく蓮弁は短い。157・158は素文縁で外区に珠文を配する。159～161は複弁の短い蓮華文の軒丸瓦で、径が小さい。162～165は巴文の軒丸瓦で、162は巴頭部が尖り尾部が長く、163は巴頭部が丸みを帯び尾部が短い。

軒平瓦は1区SD01から168・169・172・174・176、1区第0層から166・167が、4区落込み1から170・171・173・175、落込み2から177・178が出土した。

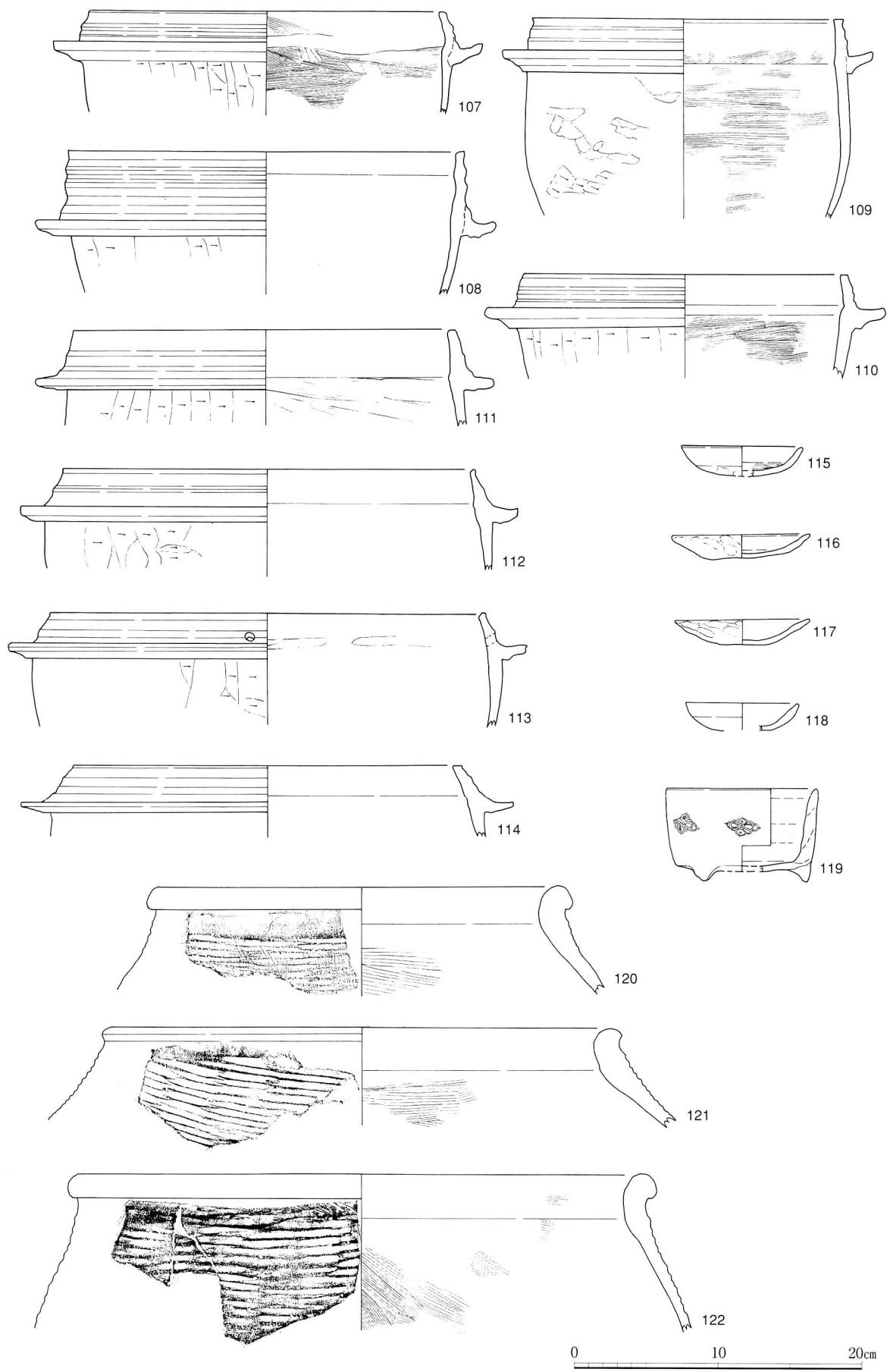


図54 出土遺物(1)

SD01(107・120・122)、SD02(115)、落込み1(111~113・118・121)、落込み2(119)、落込み3(114・117)、SK07(108・110)、SK22(109)

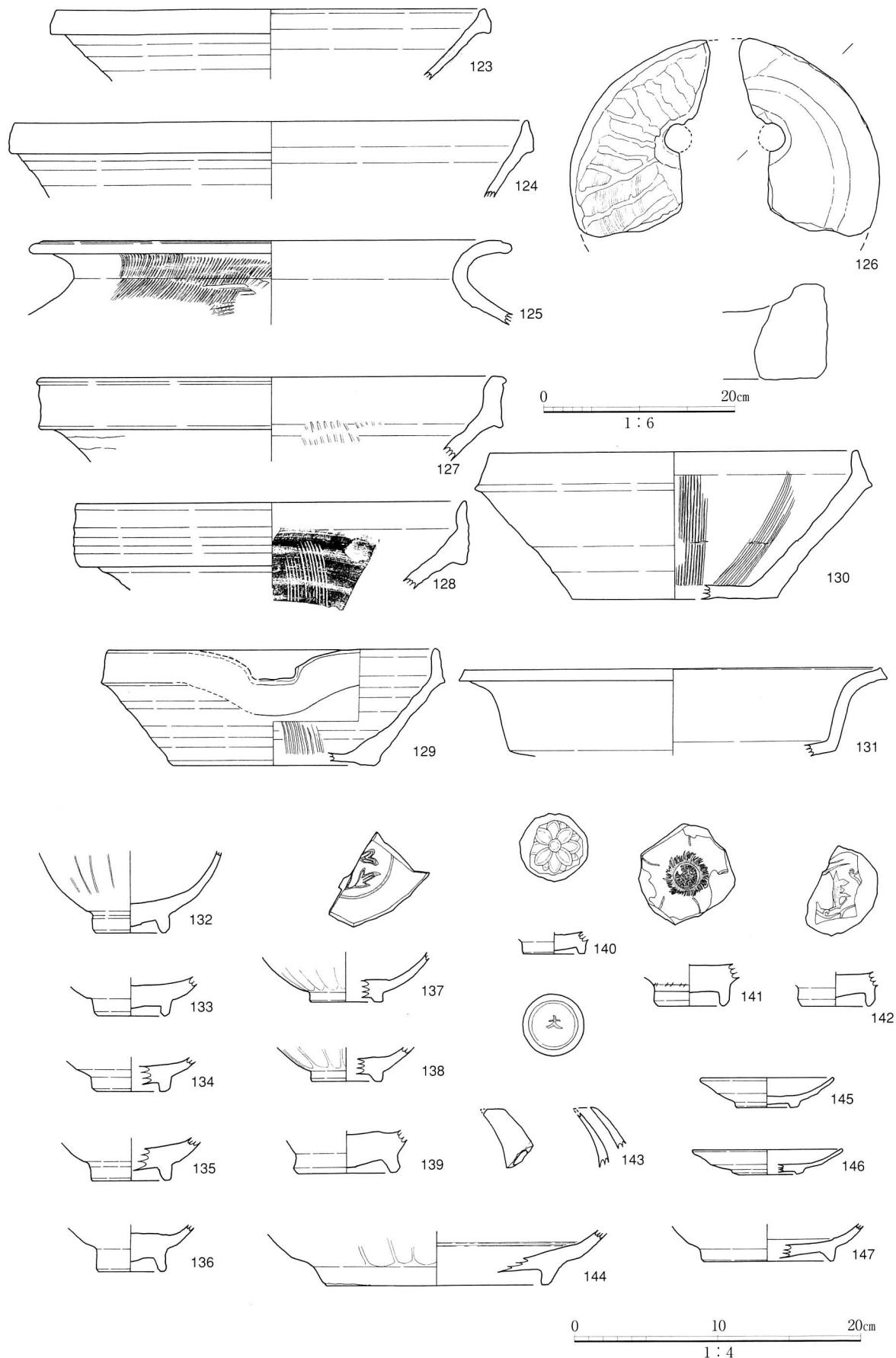


図55 出土遺物(2)

SD01(127・130・131・134・135・143・144)、SD02(123～125)、落込み2(128・129・132・133・136)、落込み3(139・140・145)、SK07(141)、SK16(142)、SK18(126)、4区西半遺構精査中(137・146・147)



図56 出土遺物(3)

SD01(150・151・158~160・168・169・172・174・176)、SD02(153・157)、SD03(148)、落込み1(149・154・155・161・162・165・170・171・173・175)、落込み2(177・178)、落込み3(164)、SK06(156)、SK22(163)、1区第0層(166・167)、4区攪乱(179)

166～173は重圈文軒平瓦である。168～172は圈線の間隔が狭く、彫りが深いのに対し、166・167・173は圈線の間隔がやや幅広である。166～169は直線顎で、170～173は破片のため不明である。174は流水文軒平瓦、177は花菱文軒平瓦、175・178は均整唐草文軒平瓦である。

179は鬼瓦で、4区西半の現代の攪乱から出土した。

瓦の時期は148～153・166～173が奈良時代、156～161・177が平安時代後半、162～165・174～176・178が鎌倉・室町時代のものである。阿倍寺創建時の軒丸瓦は148～152と考えられ、時期は7世紀後～末葉にさかのぼる可能性がある。これに重圈文軒平瓦が伴うと思われるが、破片資料のため不明点が多い。

b. 動物遺体

SD03の貝層を水洗選別すると、貝類3種と種不明の魚類の骨片、炭化種実などが採集された。貝類にはハマグリ11個体とシオフキ12個体がある。ともに内湾の砂泥底に生息する種類で、中世の水産物利用を知る貴重な資料となる。他はヒメコハクガイという陸産微小巻貝で、平地の灌木の根本や落葉下などに生息する。貝層の堆積環境がわかる資料である。種実にはイネ(炭化米)などがある。

3)まとめ

本調査では古代の阿倍寺に係わる遺構はなかったが、寺の変遷を知る上で得られた。

a. 古代～中世の瓦が出土したことから、阿倍寺の存続期間を確認できた。特に、創建時と考えられる重圈縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦148～150は文様が特徴的で、阿倍寺の創建年代や創建に係わる集団を考える上で重要である。また、これ以後の瓦が四天王寺と類似点が多い点も注目される。

b. 4区西半で多量に出土した各時期の瓦の多くがあまり磨滅しておらず、付近に瓦葺き建物があつた可能性が高くなった。4区南側の敷地外に存在した、礎石があったとされる方形土壇が候補地となる(図57)。落込み1～3や4区とほぼ重なる東西の落ちも、この土壇に係わるもの可能性がある。つまり、この場所が中世に大きな造作を受けており、土壇自体も中世に改変を受けた結果のものであるかもしれない。

c. 寺域の北東側を区画するSD01・02を検出し、14～16世紀前半に阿倍寺が城塞的景観をなしていたことが判明した。特に、16世紀前半を中心とした土器が各調査区でもっとも多く、この時期が大きな画期となる。輸入陶磁器が一定量出土し、鉄滓から鍛冶生産が推定されることなども、阿倍寺が四天王寺と同様、地域の拠点となっていたことをうかがわせる。また、大溝が埋戻された以後に瓦は出土しておらず、寺の廃絶期を考える上で参考となる。

(大庭)

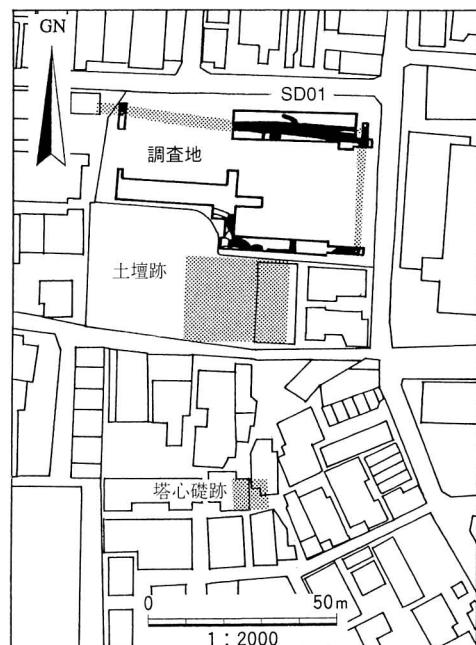


図57 方形土壇・塔心礎跡位置と検出遺構

[林野全孝1949]を参考にした。

第VIII章 大坂城跡の調査

第1節 OS98-3次調査

1) 調査の経緯と経過

調査地は豊臣氏大坂城の物構南部に位置し、江戸時代後期の絵地図には大坂城代家臣屋敷がこの周辺に所在したことが示されている。また、前期難波宮「朱雀門」跡から南方約400mに当り、古代の都城を考える上でも重要な位置を占める。これまでに周辺で行われた調査(図58)では、前期難波宮およびそれ以前の時期を含む6～7世紀代の建物が数多く報告されている。特に、OS91-3次調査では掘立柱建物が12棟検出され、建物の向きが7世紀前半と中頃で変化することが判明した[大阪市文化財協会1991]。また、OS92-7次調査では、周囲を溝で区画し、礎板を伴った7世紀前半の掘立柱建物が見つかり、有力者の居館がこの地域に存在したと推定されている[大阪市文化財協会1992]。

今回当地において住宅の建設工事が行われることになり、それに先立ち平成10年3月5日に試掘調査が実施された。その際、古代の遺物包含層ならびに遺構が確認され、本調査の実施にいたった。当

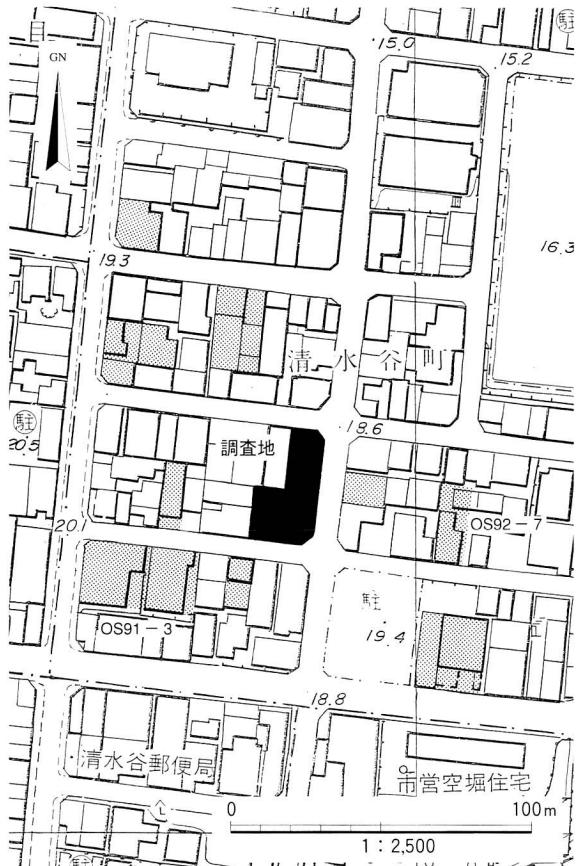


図58 OS98-3次調査地位置図



図59 調査区配置図

初、調査区は東西2箇所に設定したが、遺構の広がりや地山面の傾斜を把握するため、関係者の理解を得て、後日、二つの調査区をつなぐ形で拡張区を設定した(図59)。掘削はまず近世作土までを機械で行い、それ以下は人力に依った。検出した遺構や遺物は隨時図面・写真などで記録をしつつ調査をすすめ、5月15日に一連の作業を終了した。

なお、調査に用いた方位は国土平面直角座標第VI系に、高さはTP値に基づく。

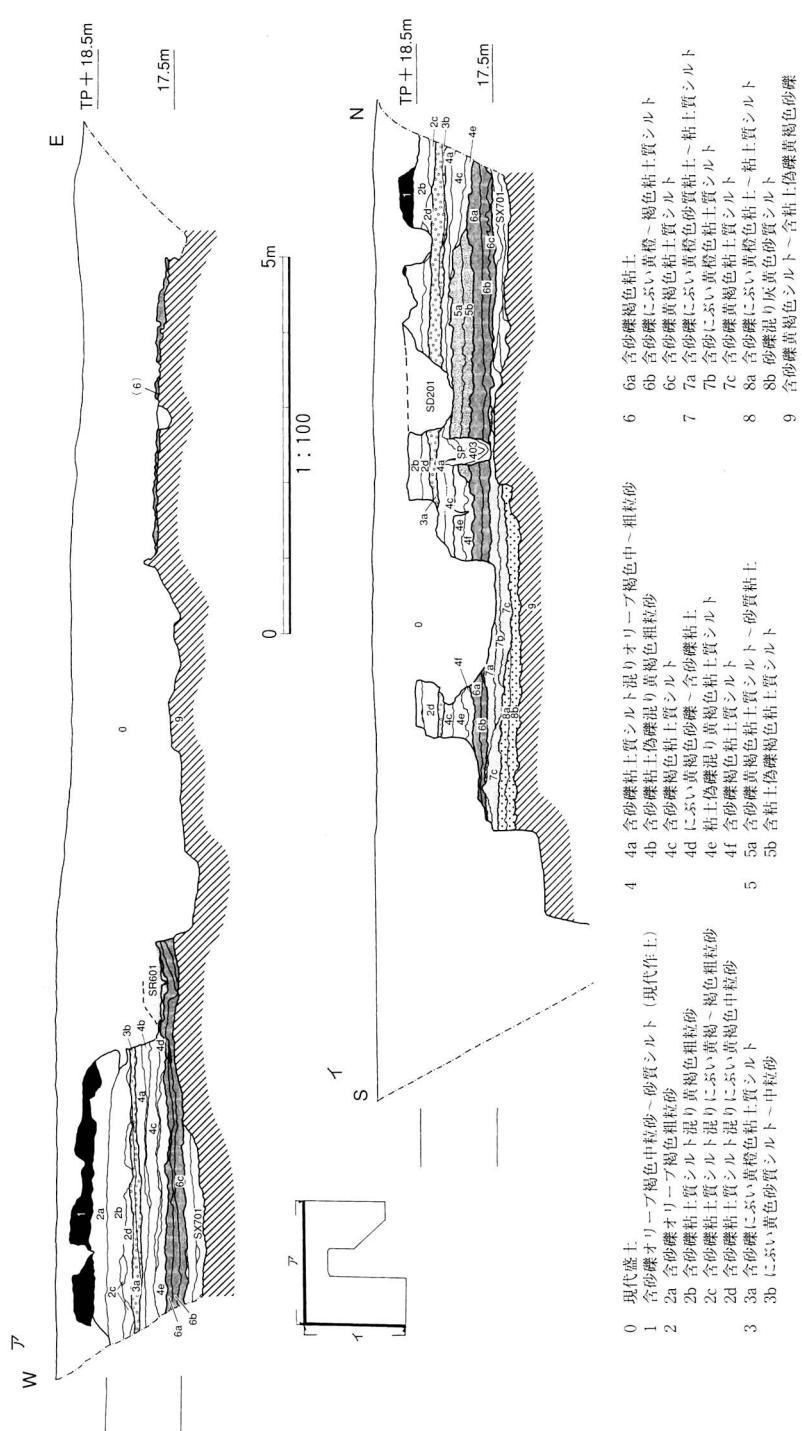


図60 北壁・1区西壁断面実測図

2) 調査の結果

i) 層序(図60、図版14)

調査区のうち、おもに1区の基層序は以下のとおりである。

第0層：現代の盛土層である。

2区と拡張区では、ほぼ地山上面まで達する。

第1層：現代の作土層である。オリーブ褐色含砂礫中粒砂～砂質シルトからなり、層厚は20～25cmである。

第2層：黄褐色～褐色の粗粒砂からなる約30cmの江戸時代の作土層で、4層(第2a～2d層)に細分される。第2c層を埋土とする島畠と思われる遺構を断面で確認した。

第3層：豊臣期から江戸時代前期にかけての盛土層で、層厚は5～10cmである。にぶい黄褐色粘土質シルト(第3a層)とにぶい黄色砂質シルト～中粒砂(第3b層)の2層で構成され、いずれも炭化物を多く含む。遺物は瓦が多く、ほかに瀬戸美濃系陶磁器などが見られた。

第4層：中世の作土層で褐色の含砂礫粘土質シルト(第4a・4c・4e・4f層)と黄褐色を呈する砂礫～粗粒砂(第4b・4d層)の互層から

なる。全層厚は15~40cmである。遺構としては、第4a層下面で掘立柱建物に伴う柱穴を数基検出した。遺物は、瓦器や瓦質土器がある。本層は14世紀以降のものと思われる。

第5層：黄褐色含砂礫粘土質シルト～砂質粘土(第5a層)と粘土偽礫を多く含む褐色粘土質シルト(第5b層)で構成される層で、1区西壁で確認した。しまりがよく、粘土偽礫が顕著に認められることから、畦畔の盛土の可能性が高い。

第6~8層は古代の遺物包含層である。

第6層：褐色の含砂礫粘土(第6a層)と黄褐色の粘土質シルト(第6b層)からなる作土層である。下位ほど砂礫の含有量が多くなり、粘性も弱くなる。層相は第4層と類似するが、含まれる土師器や須恵器が7世紀前半かそれ以前に位置づけられるものに限られることから古代の地層と判断した。

第7層：1区の南部、地山が1段下がる部分に存在する。含まれる砂礫の量や粘性から3層(第7a~7c層)に細分できるが、大差はない。本層の上面でSE701を、層中でSP701を検出した。含まれる土器の年代は第6層とかわらない。

第8層：第7層の下で確認された地層で、2層に分けることができる。上層は砂礫を多く含有するにぶい黄橙色粘土で、SK801を上面で検出した。土師器や須恵器を多く含み、それらから5世紀末葉~6世紀初頭の年代が与えられる。一方、灰黄色砂礫混り砂質シルトで構成される下層には遺物は一切含まれない。

第9層：黄褐色含砂礫粘土質シルト～黄褐色含粘土偽礫砂礫からなる地山層で、上町台地を構成する洪積層に相当する。

ii) 遺構と遺物

平面的に遺構検出を行ったのは第3層以下である。遺構としては、近世の溝、中世の掘立柱建物、古代~中世の畦畔を含めた田畠の痕跡、古代の柱穴・土壙・水溜め遺構などがある。

a. 古代の遺構(図61・62、図版14・15)

第7・8層の掘削、ならびに地山層(第9層)上面の精査を進める過程で井戸や土壙・柱穴を検出した(図61)。

SK801はSP701から西側に約2.5m離れた位置で検出された土壙である。当初、SP701に伴う柱穴と考えたが、掘込み面が第8層上面で一段階古いこと、断面で柱痕跡あるいは柱の抜取り穴を確認できなかったため土壙と判断した。規模は直径が約1.5m、残存する深さが約0.65mである。

1区北半には北西側へ向う落込みSX801があり、その埋土(第8層)上面および上層からは古墳時代中期末葉の土器が集中して出土したが、飛鳥時代の土器を下限とする。SX801は土壙の肩の可能性が考えられるが、調査区外に広がっており遺構の性格を把握することはできなかった。

また2区では、柱穴の底と思われる窪みを数基地山の上面で確認したが、建物を復元するにはいたらなかった。

SE701は1区の中央やや北よりの部分で検出された。上部は直径が約1.5mの円形、下部は1辺が約0.6mの方形の平面形を呈する。残存する深さは約0.7mである。掘形に沿って水つきの粘土が堆積することから、井戸もしくは水溜め遺構と判断した。埋土は地山の偽礫で、一時に埋戻されている。

第6層が落込んだ部分から土師器や須恵器の破片が見つかったが、埋土そのものからは1点も出土しなかった。SE701の北西には、深さが0.2m弱の不定形の窪みSX701が存在した。埋土は水成の粘土であり、南西隅からSE701側に下がっていく溝状の窪みがみられたため一連の遺構である可能性が考えられる。

SP701は残存する深さが約0.4m、南北が約1.3m、東西が約0.6mの不整形のプランをもつ柱穴である。調査区内ではこれに組み合う柱穴は確認できなかった。

第4層の掘削後、1区北東隅において帶状に盛土の高まりが検出された。高まりから1段下がった部分では、植物の根の痕や踏込みが見られたため、この高まりは畦畔(SR601)であると判断した。また調査区の西壁断面を観察したところ、同様の盛土の高まりが確認されたことから、トレンチの西壁に沿って畦畔が存在したと思われる。しかし、側溝としてすでに掘削しており、平面では確認することができなかった(図62右上)。

畦畔に伴う、あるいはその下にある作土層(第6層)を掘削すると、調査地の西側へ向う落込みが見

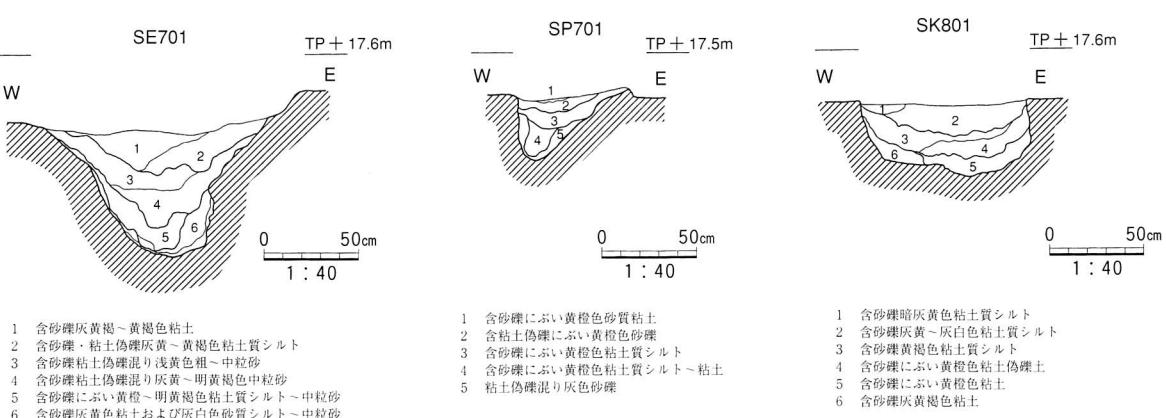
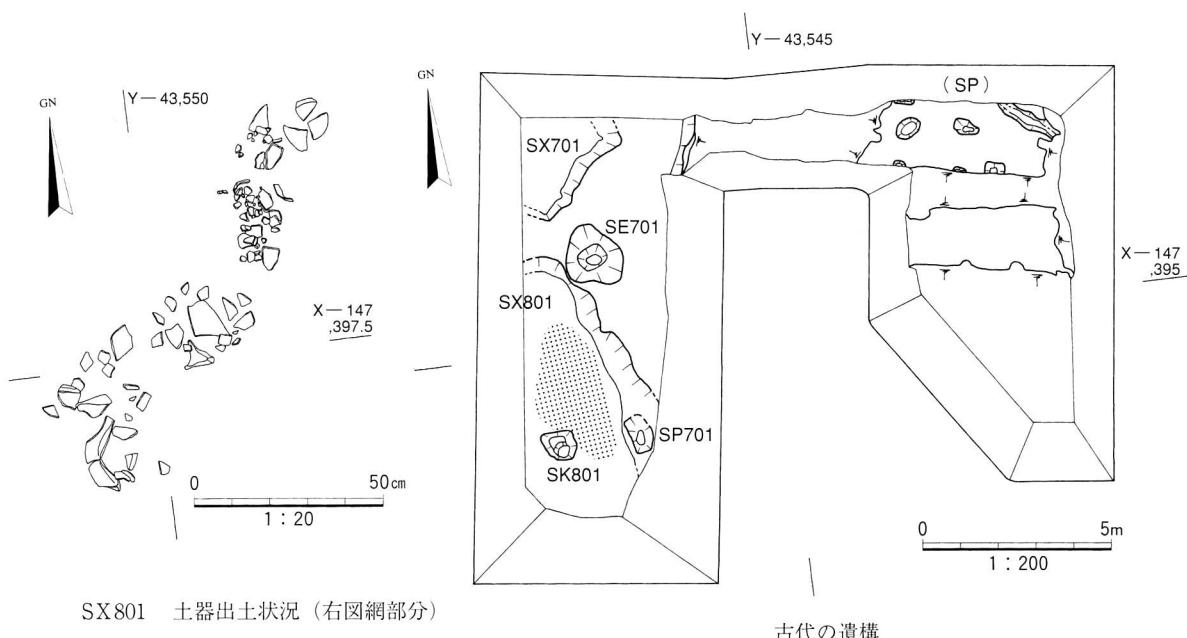


図61 古墳・飛鳥時代の遺構実測図

つかった。当初は遺構の肩の可能性を考えたが、後に地山の高さを調べたところ西側へ下がっていくことがわかり、自然の地形が反映されたものと判断した(図62左上)。

次に、遺物について記述する。今回の調査では、コンテナバットで10箱分の遺物が出土した。中には近世の瓦や陶磁器も含まれるが、大半は古墳～飛鳥時代に属する土師器と須恵器で、そのうち須恵器は古墳時代中期末葉(図63-180～192)のものと飛鳥時代前半のもの(198～203)に大きく2分することができる。

180～182は杯蓋で、口径が11.8～14.4cm、器高が4.5～5.2cmである。天井部は稜のすぐ上までヘラケズリが施されており、口縁端部は内側に面をもつ。180の天井部には「×」状のヘラ記号が見られる。184～186・188・189は杯身である。口径は10.5～12.1cm、器高は4.5～5.2cmである。立上がりの部分は薄手で内傾する角度が急なものと、厚手であまり内傾しないものがある。杯部下半に施されるヘラケズリの方向は、189を除

き時計回りである。184の内面には当て具痕が残っており、188の底部外面には「*」状のヘラ記号が刻まれている。183は短頸壺の蓋と思われる。口径は11.4cmである。天井部はついでにヘラケズリが施されており、口縁端部の内側はわずかに稜をなす。190・191はいずれも高杯の杯部である。190は有蓋高杯で、口径は9.6cmである。外面下半はカキメ調整が施されている。191は無蓋高杯で中位に稜をもち、それより下はカキメ調整が行われている。口径は12.5cmである。両者とも底面には脚部のスカシ孔を開ける際に生じたヘラのあたりが残っており、いずれも3方向のスカシ孔であったことが

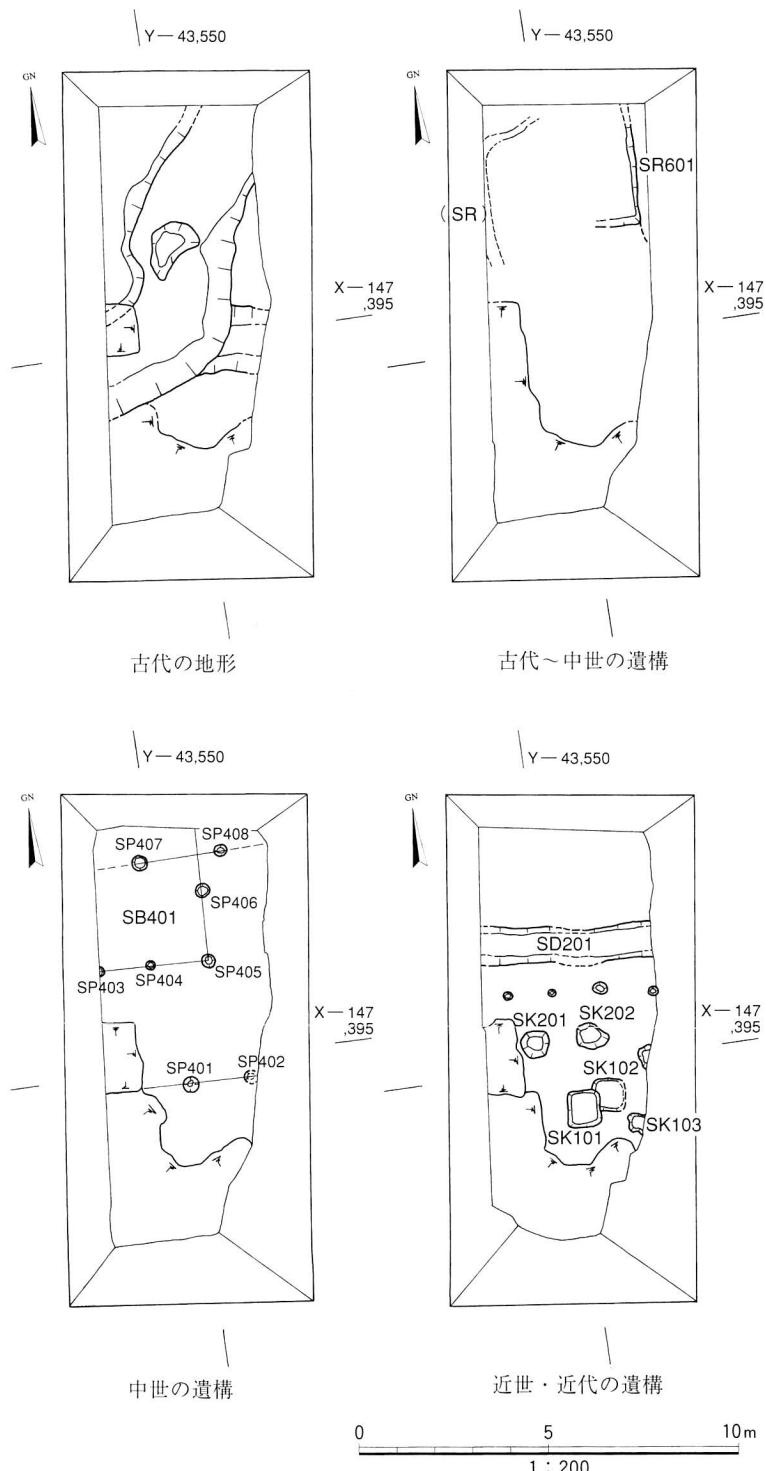


図62 各時期の検出遺構平面図

わかる。187・192は壺である。187は口径が11.7cm、器高が16.5cmに復元できた。体部下半にはタタキと当て具の痕があり、頸部には波状文が施されている。192は口径が16.3cmの広口壺の口頸部である。口縁端部は外側に面をなし、頸部にはカキメが巡らされている。

以上の須恵器はTK47型式～MT15型式に相当すると考えられる。それ以外の198～203はTK209型式～TK217型式の特徴を有する。198は高杯の脚部で底径が7.2cm、高さが6.5cmである。裾部がわずかに外反する。199は短頸壺である。口縁端部は外側に面をもち、体部の中ほどには沈線が1本巡らされている。200は甕の口縁部で、口縁端部が外側に丸く肥厚する。201～203は杯である。いずれも立上がりは短く、内側につまみあげられたような形状を呈する。

須恵器とともに土師器の破片が多数出土したが、器面の残りが悪く小片が多い。193は小型甕である。外面はハケ、内面はナデで調整を施している。194は甕の口縁部で、口径は20.6cmである。おそらく同一個体と思われる甕の体部片があり、体部外面は粗いハケで調整され、底部は外面全体が煤で覆われている。195は羽釜で口縁部が短く外反する。胎土は生駒西麓のものとは異なる。196は甕の口頸部である。口縁部は急角度で外反し、端部は外側に面をもつ。調整は口縁部内面にはヨコハケ、体部外面にはタテハケが用いられている。197は移動式竈の破片で、鎧状の庇を有する。土師器の年代については、出土した層や検出状況から196は7世紀前半、残りは須恵器180・192などとともにSX801から出土した(図61左上)ことから6世紀前半の年代が与えられる。

b. 中世の遺構(図62左下)

第4a層の下面では、平面形が円形の柱穴を8個検出した。SP404のように残存する深さが0.1m弱のものもあるが、残りは径・深さとともに0.3m前後である。それぞれの柱穴は1.6～1.7mの間隔で、東西あるいは南北に並ぶようすが認められた。その結果、少なくとも建物を1棟(SB401)確認することができたが、調査区外に延びるため規模は不明である。

c. 近世・近代の遺構(図62右下)

1区中央から南部にかけて複数の土壙を検出した。土壙は埋土が黒褐色粗粒砂のもの(SK101～103)と黄灰色粗粒砂のもの(SK201・202)に二分される。前者の埋土には焼土や金属が溶解したものが多く含まれる。調査区の北西隅で第二次世界大戦時の焼夷弾が見つかったことから、焼土などはこれに起因すると思われ、土壙の年代は20世紀前半に位置づけられる。一方、後者には少量であるが瓦や陶磁器が含まれることから、18世紀中頃のものと考えられる。

SD201は1区の中央やや東寄りの部分で検出された東西方向の溝で、幅が1.0～1.1m、残存する深さが0.6mある。第2層の上面から掘込まれており、底の高さは西から東へ下がっていく。埋土はにぶい黄褐色～灰黄褐色の粗粒砂で、大きく2層に分かれる。下面には踏込みの痕が認められる。遺物には肥前陶器皿・京焼碗・瀬戸美濃系餌耳壺・馬の土人形があり、18世紀中頃の年代が与えられる。

3)まとめ

今回の調査の成果としては次のことが挙げられる。まず、古墳時代中期末葉の土器がSX801からまとった形で検出されたことである。これらは比較的破片が大きく磨滅をあまり受けていないことか

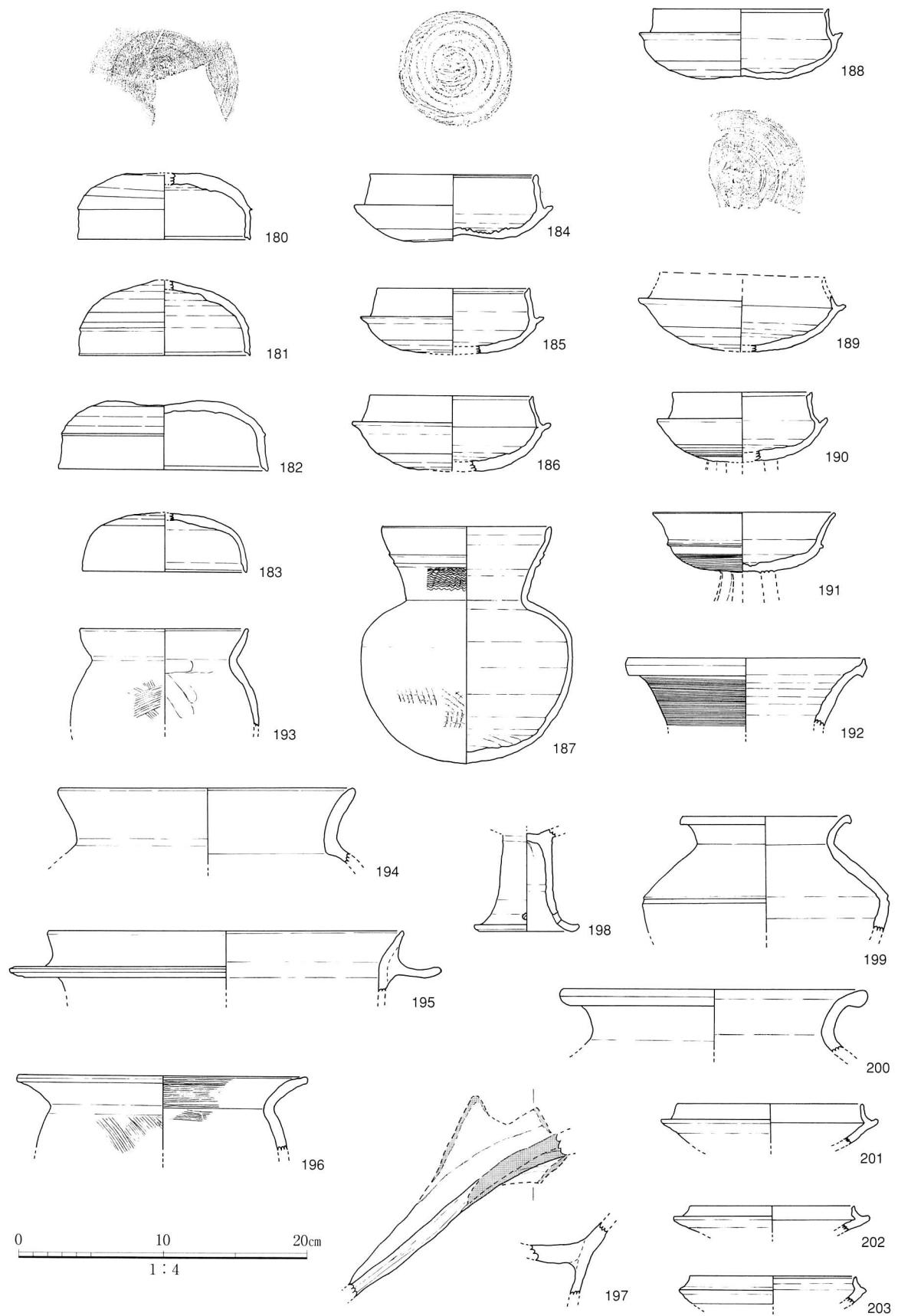


図63 出土遺物

SX801(180・181・183~192・199~201・203)、第7層(182・193・194・196)、第6層(195・197・198・202)

ら、窪みにまとめて廃棄されたか、あるいは周辺から転落したものと思われる。今回の調査地から南東へ約150m離れた地点で行われたOS95-56次調査で6世紀にさかのぼる建物の存在が報告されており、この周辺に古墳時代の遺構が広がっていた可能性は高い。

第二に、当地域における古代の土地利用を総体的に考える手掛かりが得られたことである。本調査では周辺の既調査で検出されたような明確な建物跡は見つからなかったが、谷状の地形を利用した水利施設の存在が考えられた。また、7世紀中頃以降は中世にいたるまで耕作地として使用され、遺物の量も激減することがわかった。

第三に、中世～近世の遺構が検出されたことである。これまでの調査でも点的に中近世の遺構が見つかっているが、今回は遺物包含層が良好な状態で残っていたことから、継続的に遺構の変化を追うことができた。古代以来耕作に利用されてきた当地に、中世のある段階で建物が築かれる。建物は14世紀以降に築かれたと考えられるが、遺物量が少ないため限定はできない。近世の初めには瓦葺きの建物が存在したことが盛土層(第3層)に数多く含まれる瓦片から推測され、惣構に関連する遺構が存在した可能性が考えられる。しかし、それ以降18世紀中頃までは島畠などが作られ、再び耕作に利用されていたようである。

今回の調査では古墳時代から近世にわたる各時期の成果を挙げることができた。しかし、各時代における調査地周辺の環境を包括的に復元するにはいたっておらず、周辺域の遺構との結びつきを含めて検討しなければならない問題は多い。今後の調査成果が期待される。 (辻)

第2節 OS98-55次調査

1) 調査の経緯と経過

調査地は南北に延びる上町台地の西側、現在の谷町筋に面した場所にある(図64)。当地は豊臣氏大坂城の惣構内に当り、奈良時代においては難波宮域の北西隅付近と推定されている地域である。調査地に接して北側にはOS91-32次調査地があり、東隣の谷町筋にはOS97-1次調査地がある。それらの調査地では奈良時代から豊臣期、徳川期にかけての遺構・遺物が見つかっている。本調査地では工事に先立って二度の試掘調査(OS98-31・49)を行った。その結果、GL-2.2m以下で古代の遺物を多く含む包含層が発見されたため、全面的に調査を行うことになった。

試掘調査の所見により現地表面から約2m下までは重機により地層を除去し、以下は人力による掘削を行った。1月11日に調査区を設定して調査を開始したが、地山上で検出した8世紀末葉頃の東西溝、および7世紀中～後葉の柱列の延長部分を確認するために、さらに拡張区を3個所設定して調査を続けた。2月18日にはすべての調査を完了した。

なお調査で用いた方位は国土平面直角座標第VI系に、水準はTP値に基づく。

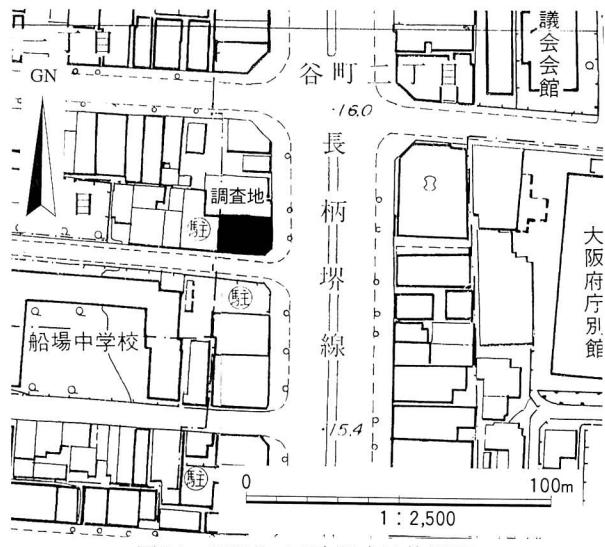


図64 OS98-55次調査地位置図

2) 調査の結果

i) 層序(図65)

第1層：機械掘削の際の攪乱土を一括して第1層とする。

第2層：調査地の東部・西部で様相が若干変化するが、基本的には中世の盛土層である。第2a層は暗灰黄色細粒砂～極細粒砂を主体とした薄い層で、奈良時代末葉から平安時代にかけての遺物を含む。須恵器壺や土師器皿などが出土している(図69-211・212・222)。調査地中央部から東部にかけて部分的に存在する。第2b層は炭を含む灰黄褐色中粒砂～細粒砂の薄い層で、第2a層と同じく奈良時代末葉から平安時代にかけての遺物を含む。調査地中央部から西部にかけて部分的に存在する。

第3層：炭を含む黄灰色細粒砂混りシルトを主体とする層で、調査地全体にかけて広く分布するが、西北部にはほとんどない。層厚はおよそ20cmである。7世紀中～8世紀末葉頃の遺物を含む。層中からは土師器皿・甕・鉢、須恵器杯身・高杯・壺や土錐、製塩土器などが出土している(図69-207・209・210・219～221・223・227・230・233・234)。本層下面からはSD301やSK301・302が検出された。

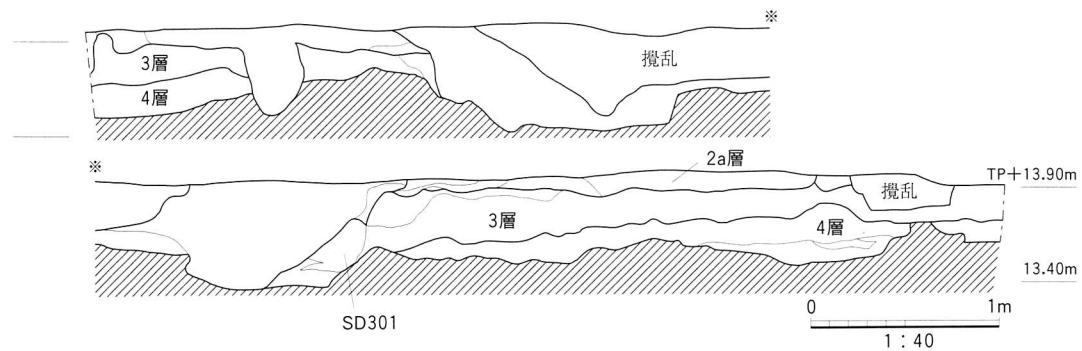


図65 東壁地層断面図

第4層：炭と地山の偽礫を含む灰～暗灰黄色細粒砂混りシルト層で、おもに調査地南東部に分布する。本層は土師器甕や須恵器杯身・甕・高杯など、7世紀中～末葉頃の遺物のみが出土する層である(図69・70-206・214-217・224・228・237・238)。上面からはSA301と柱穴が検出された。

第5層：黄褐色細粒砂混りシルト層で、地山である。上面で柱穴と土壙が検出された。

ii) 遺構と遺物

a. 飛鳥時代の遺構と遺物(図66・69、図版16)

SP401～404 柱穴は4個あり、調査地南西部の狭い範囲に位置している。掘形の大きさは最大のもので約0.9m×0.7m、深さ約0.45mである。柱痕跡は判然とはしないが、直径約0.15mである。直線状に並んでいるものの建物として組めるものではなく、その用途・機能については不明である。

SP404の掘形からは、須恵器平瓶が底部を上に向けた状態で出土した(図69-229)。

SK401・402 浅い土壙で、調査地南東部に存在している。すべてトレンチの壁にかかっており、

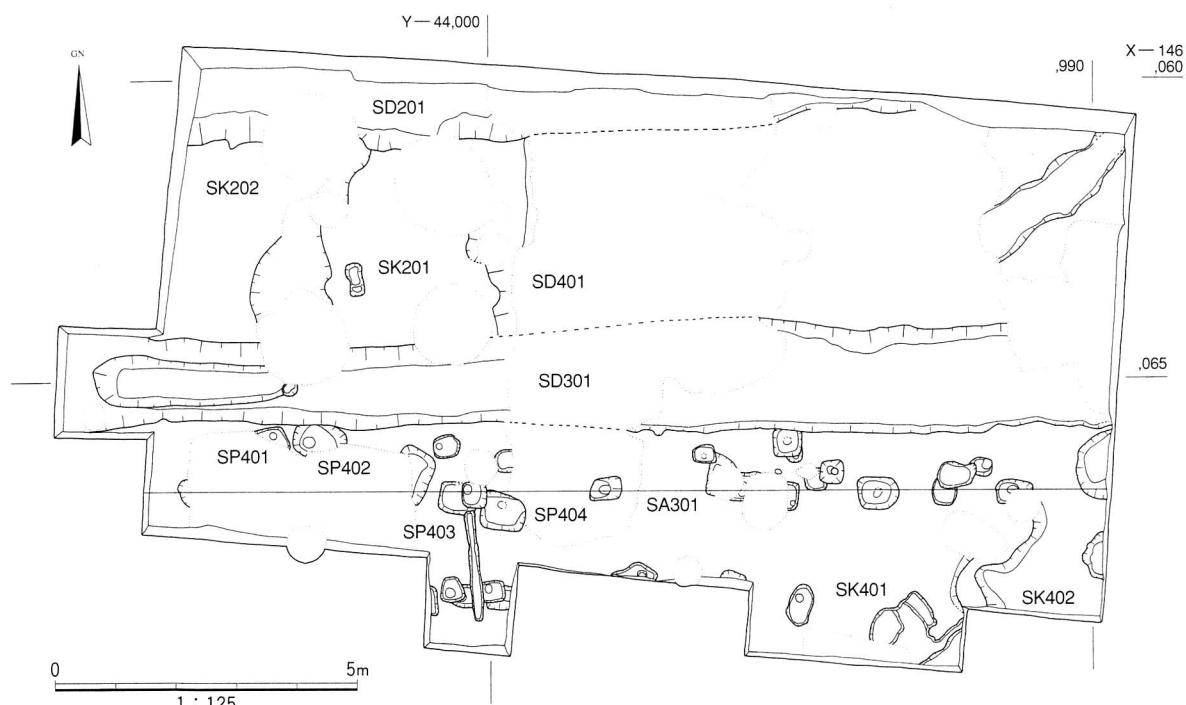


図66 古代～中世遺構平面図

全体の形は不明である。SK401の埋土からは、土師器甕236が横向きに出土したほか、高杯205も出土した。また、SK402からも土師器壺204が出土した。

SD401 調査地中央付近から北に向けて低くなる溝である。東肩部分が後世の遺構に切られており、全体の形は不明である。

b. 奈良時代の遺構と遺物(図66・67・69、図版16)

SA301 調査区を横断する東西柵で、東で南に $0^{\circ}50'$ ほど振る。同じような規模の柱穴6個から構成されており、調査区外に延びる可能性が高い。柱間は2.1m、掘形の大きさは平均約0.6m×0.4m、深さが約0.45mで、柱痕跡は直径約0.15mである。

SD301 調査区を横断する東西溝で、SA301とその方向を等しくする。幅約1.3m、検出した部分の長さは約17mである。第3層によって埋められており、埋土からは土師器皿208・鍋225、および須恵器の破片が出土した。東西の調査区断面からすれば、調査区外に延びる可能性が高い。溝中央付近から東端にかけての部分がもっとも深く、その深さは約0.16mである。溝中央付近から西端部分にかけては、特に肩の部分が後世の削平を受けて浅くなっている。溝底部の高さは全体的にほとんど変わらないが、溝両端の断面からするとわずかに東に向かって落ちている。

以上のほかにも、切合いをもつ柱穴がいくつか検出された。しかし、建物として復元することができるものではなく、その性格は不明である。

c. 中世の遺構と遺物(図66・69、図版16)

SD201 調査地北辺にある東西溝で、もっとも深いところでは約0.8mである。肩の方向からすると調査地東端で北に振るものと思われる。底は凹凸が著しく、肩付近は急激に落んでいる。北壁断面における埋土の堆積状況を見ると、緩やかに西に向けて落ちているといえる。この遺構からは、重圈文軒丸瓦の瓦当部分、陶質土器の破片、円面鏡の破片、須恵器皿・蓋、瓦器椀などが出土した(図69・70-218・226・231・232・235・240・241)。

SK201・202 第3層下面で検出された土壌で、SK201の埋土からは水晶の小片が出土した。

d. 近世の遺構と遺物(図68・70、図版16)

近世の遺構は、第2a・b層上面で検出された。

豊臣期の遺構としてはSK101~105とSP101がある。SK101はトレチ南壁にかかっているために全体像が不明であるが、埋土からは瀬戸美濃焼の端反りの皿243が出土した。SP101は小穴の東西に

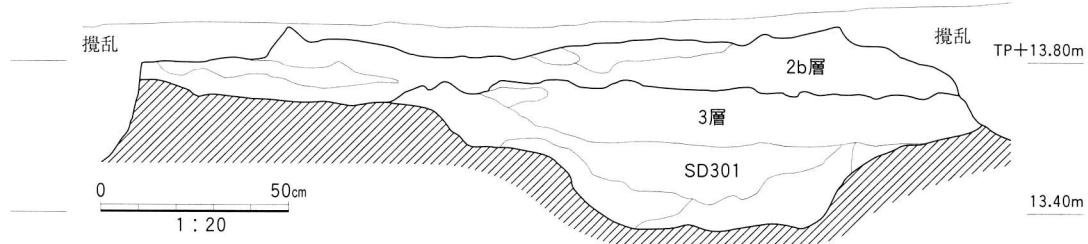


図67 SD301断面図

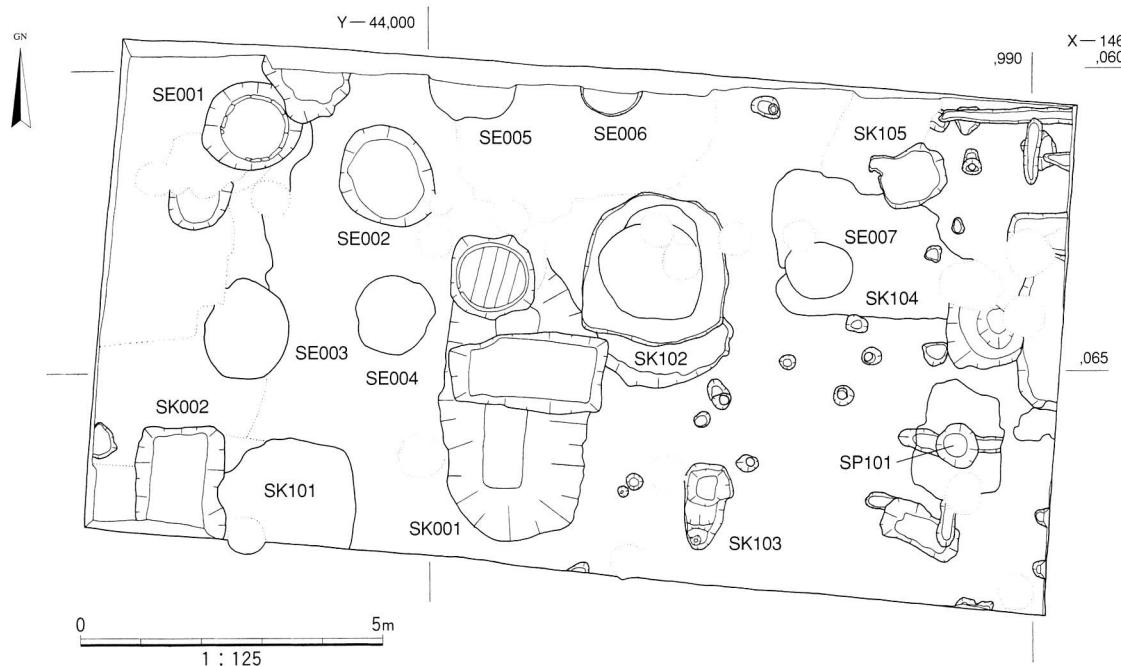


図68 近世遺構平面図

溝を掘り、その端部に石を据えている。性格は不明である。

江戸時代初期の遺構にはSE001・002がある。SE001は井戸瓦によって組まれており、埋土からは伊万里焼皿244が出土した。江戸時代中期以降の遺構は井戸・土壙・柱穴があり、調査区全体に分布している。SE003～007は、出土遺物から18世紀以降のものと思われるが、それぞれの前後関係は不明である。SK001・002は調査地西部にある土壙で、SK001からは土師器皿・甕、須恵器杯蓋(図69・70-213・239・242)や、陶磁器片が出土している。SK002は焼土を含む瓦溜りである。

3)まとめ

今回の調査結果をまとめると以下のようになる。

1. 7世紀中～末葉頃の遺構はそれほど多くなく、調査地東南部に土壙が、西南部に柱穴が、各々かたまって存在していた。土壙から出土した土器からは、生活の痕跡をうかがうことができる。一方、並んだ柱穴は建物として復元するのは困難であり、その用途・機能については不明である。

2. 8世紀末葉頃の遺構としては東西方向の柵とその柵に伴う溝が検出された。層序からすれば柵の方がより古いものといえるが、同時期に存在していた可能性も考え得る。柵の方位は、座標の東で南に0°50'ほど振る。この方位は後期難波宮の中軸線とほぼ90°をなし、この柵が「難波京」の条坊割りに関係している可能性を示唆する。本調査地は、澤村仁氏による想定「難波京」からすれば宮域西部の条坊内に当る[大阪市文化財協会1984]。この条坊は前期難波宮のものであるが、後期も引き続き踏襲されたと考えるなら、この柵はその坊内を区画するようなものであった可能性が考えられる。柵に伴う溝も同じ方位をとることから、同様にこの地域を区画するものと考えられよう。

3. 中世の遺構は少なく、おもに調査地西部に存在している。SD201からは重圈文軒丸瓦が出土しており、8世紀中葉頃の遺構との関係が注目される。また、少ないながらも中世の地層および遺構が

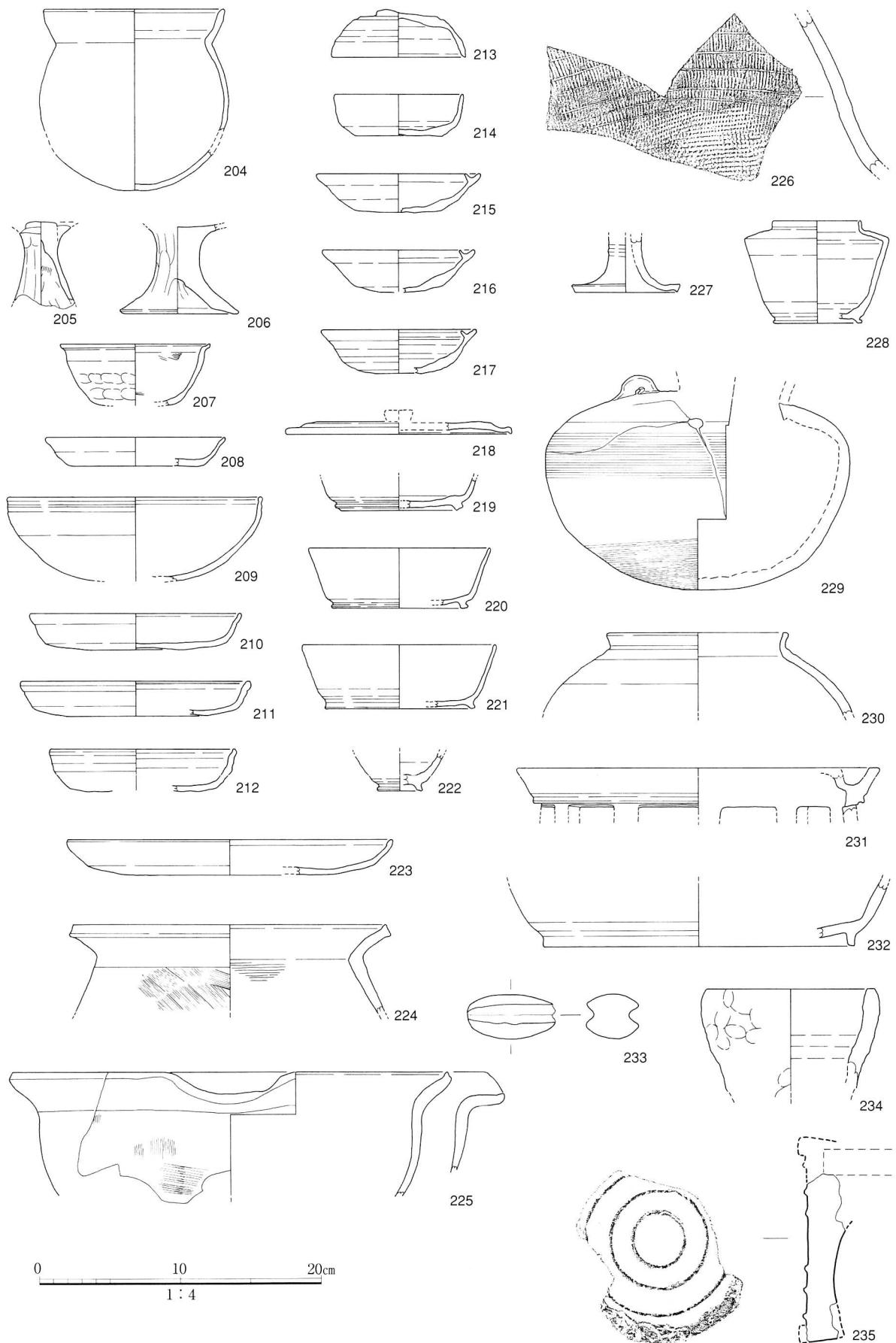


図69 出土遺物(1)

SP404(229)、SK401(205)、SK402(204)、SD301(208・225)、SD201(218・226・231・232・235)、SK001(213)、第4層(206・214~217・224・228)、第3層(207・209・210・219~221・223・227・230・233・234)、第2層(211・212・222)

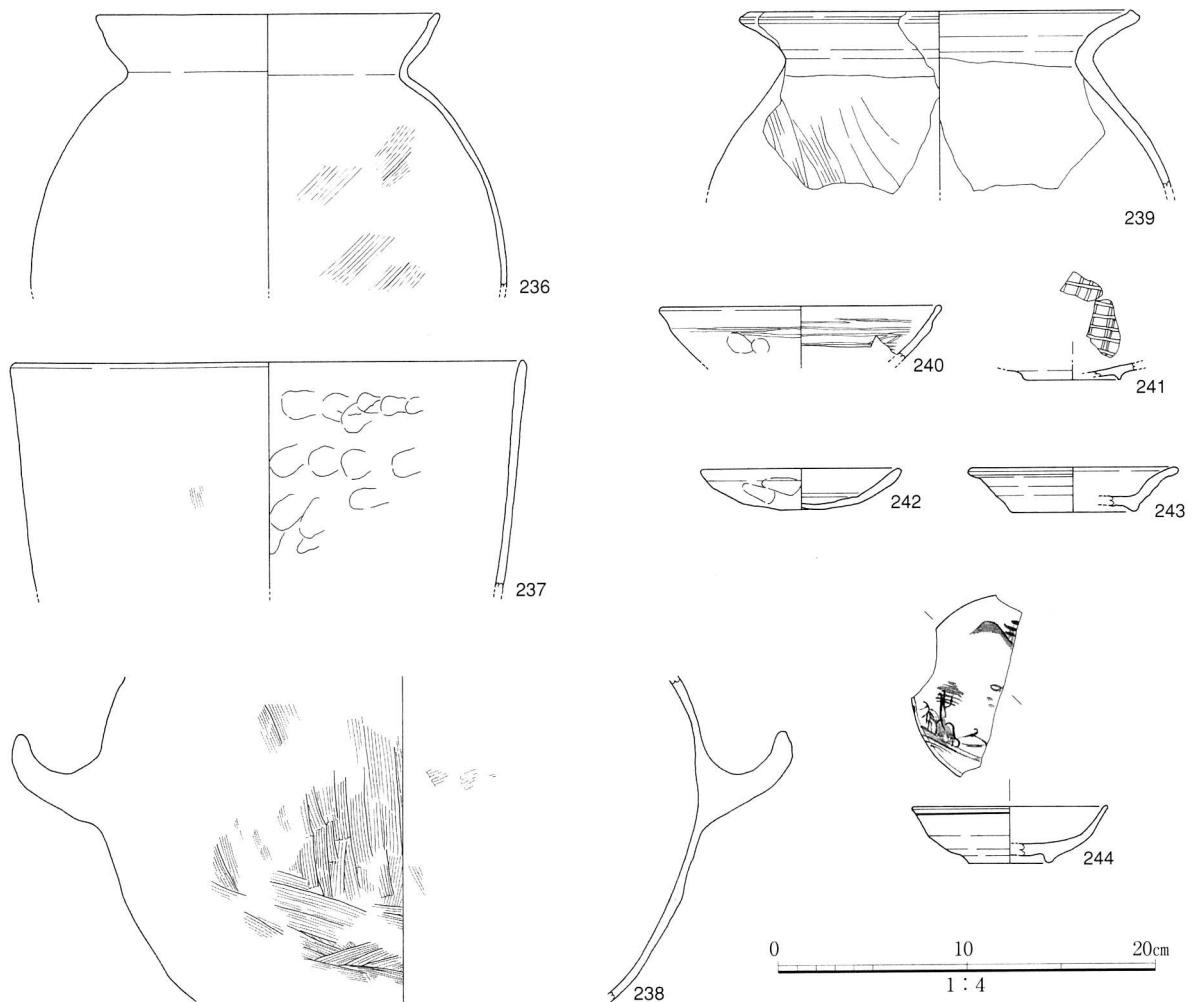


図70 出土遺物(2)

SK401(236)、SD201(240・241)、SK101(243)、SE001(244)、SK001(239・242)、第4層(237・238)

確認されたことは、上町台地西側の中世における土地利用の実態を考えるうえで重要であるといえる。

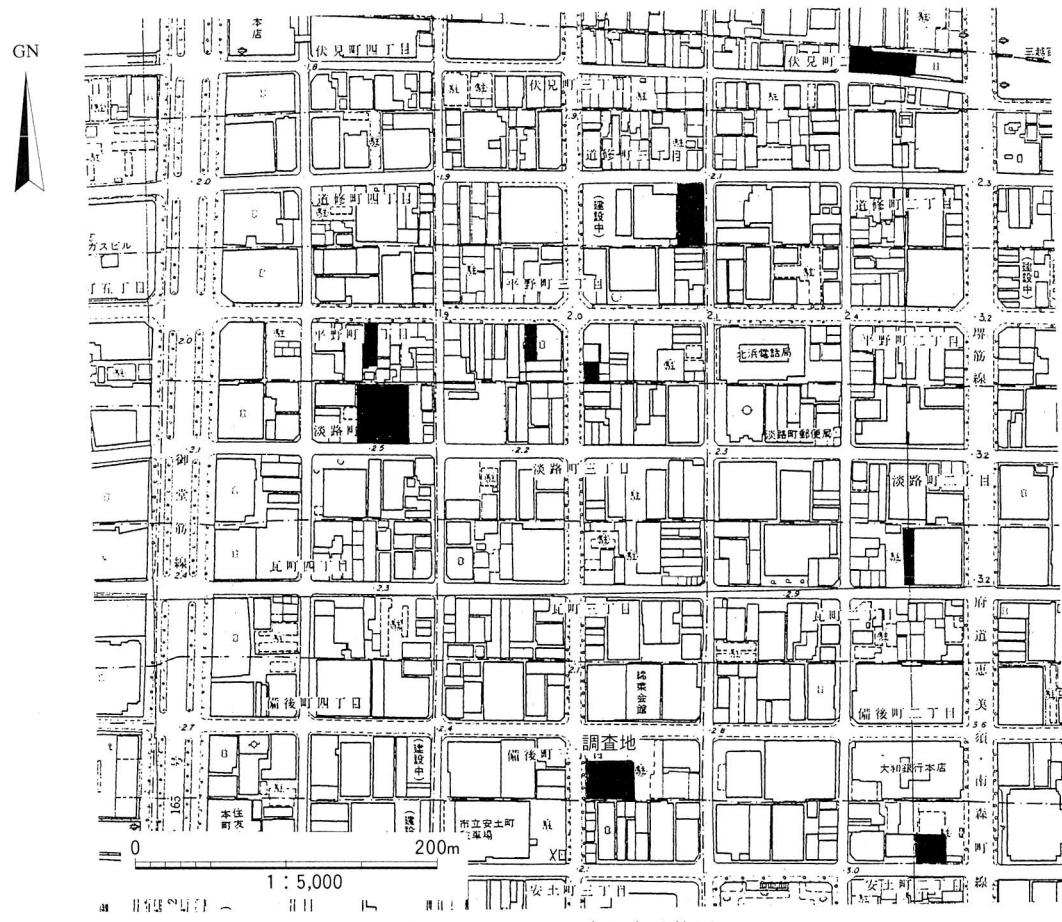
4. 近世の遺構は調査区全域で見い出される。井戸・土壙は調査区全体に分布しているが、それに対して柱穴は東半部に集中している。これらの遺構には大きな時期差があると考えられるので一概にはいえないが、調査区の中央を境として、東側に建物が建ち、西側には井戸などが位置する空地(庭)があった可能性が考えられる。 (李)

第IX章 大坂城下町跡の調査

第1節 OJ97－6次調査

1) 調査の経緯と経過

当該地では、試掘調査の結果、近世以降の「船場」の形成や、それ以前の遺跡の形成に係わる資料が存在することが確認され、建設予定地(約3,800m²)のうち地中障害の少ない約800m²を調査対象とした。調査に先立って現代盛土や地下埋設物の除去のため、地表下約1.5mまで重機で掘削した。その際、17世紀後半以降に敷設されたと考えられる東西および南北方向に延びる石組みの背割下水も除去されたが、事業者の配慮により残されていた一部の下水の位置が記録されていた。その記録をもとに江戸時代の下水と町割りについて復元を試みた(図85)。既存建物の基礎による江戸時代前半期以前の遺構の破壊は予想外に激しく、調査地全域を同一層上で検出することは困難であった。なお、調査に際しては、すでに施工されていた地中杭とそれを支える水平の梁で仕切られた範囲で地区割りを行った。



た(図72)。また、調査地外で併行していた工事現場で地表下約10mの海成層から大形鯨類の骨や貝層が発見された(図版17)。そこで、11月10日に事業者ならびに大阪市立自然史博物館の協力を得てデータの収集を行った(別記)。

文中で使用した遺構番号は以下のとおりとした。300番台(I期:古代)・200番台(II期:中世)・100番台(III期:豊臣氏大坂城期~徳川氏大坂城期初期)・01~99番台(IV・V期:徳川氏大坂城期)。近世陶磁器については[大橋康二1989]、古代~中世の土器については[古代の土器研究会編1992~1994]の編年観によった。

2) 調査の結果

i) 層序(図72・73、表6、図版20)

調査地は、徳川氏大坂城期に備後町通りに面して4軒以上の屋敷地が存在していたと考えられる(図85)。上位層を攪乱などで失われたり、遺構が重複したために、屋敷地間における整地の状況が不明であった。そこで地層の対応関係について各地点の地層断面図を記録するとともに、遺構の切合い関係や出土した陶磁器の年代観から同時代に相応する地層を統一した名称で示した。各地点の地層の堆積状況についても統一名称を用い、遺構の埋土は英小文字で個別に示している。III~V期については重複した遺構が多く地層による判別が困難であったので、時期設定に際しては大橋康二氏の編年[大橋1989]によった。

調査地は現地表から平均して約2.5mで海成堆積層(難波砂堆)に達する(TP±0.0m)。層序は以下の

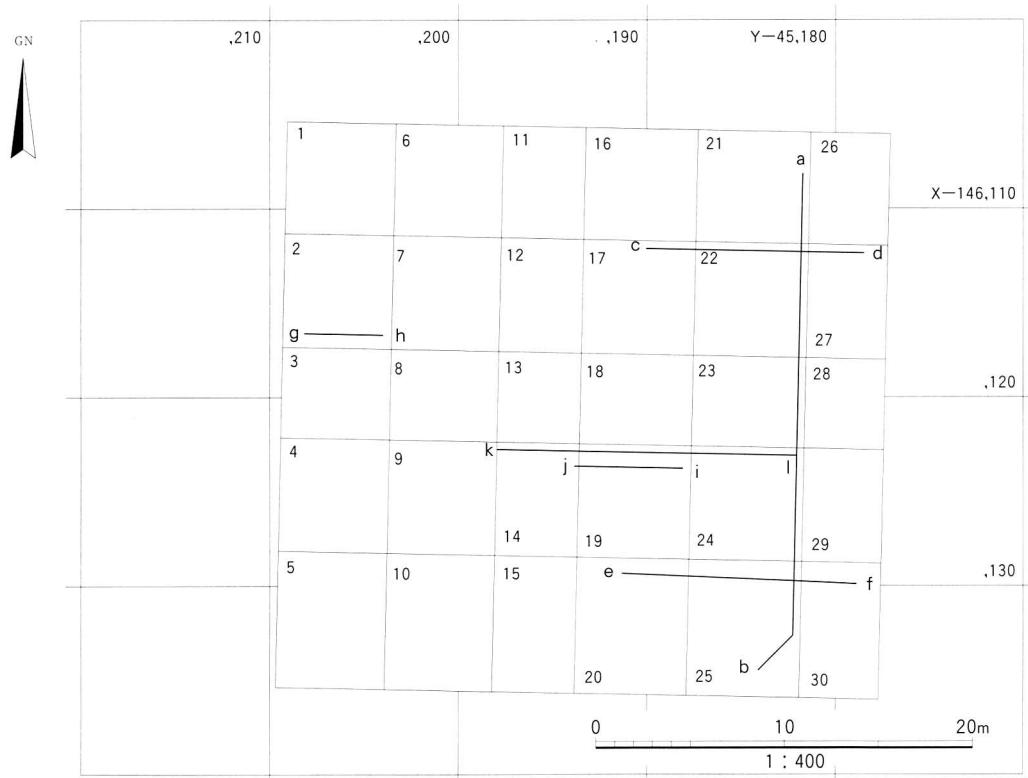


図72 地区割りおよび地層断面位置図

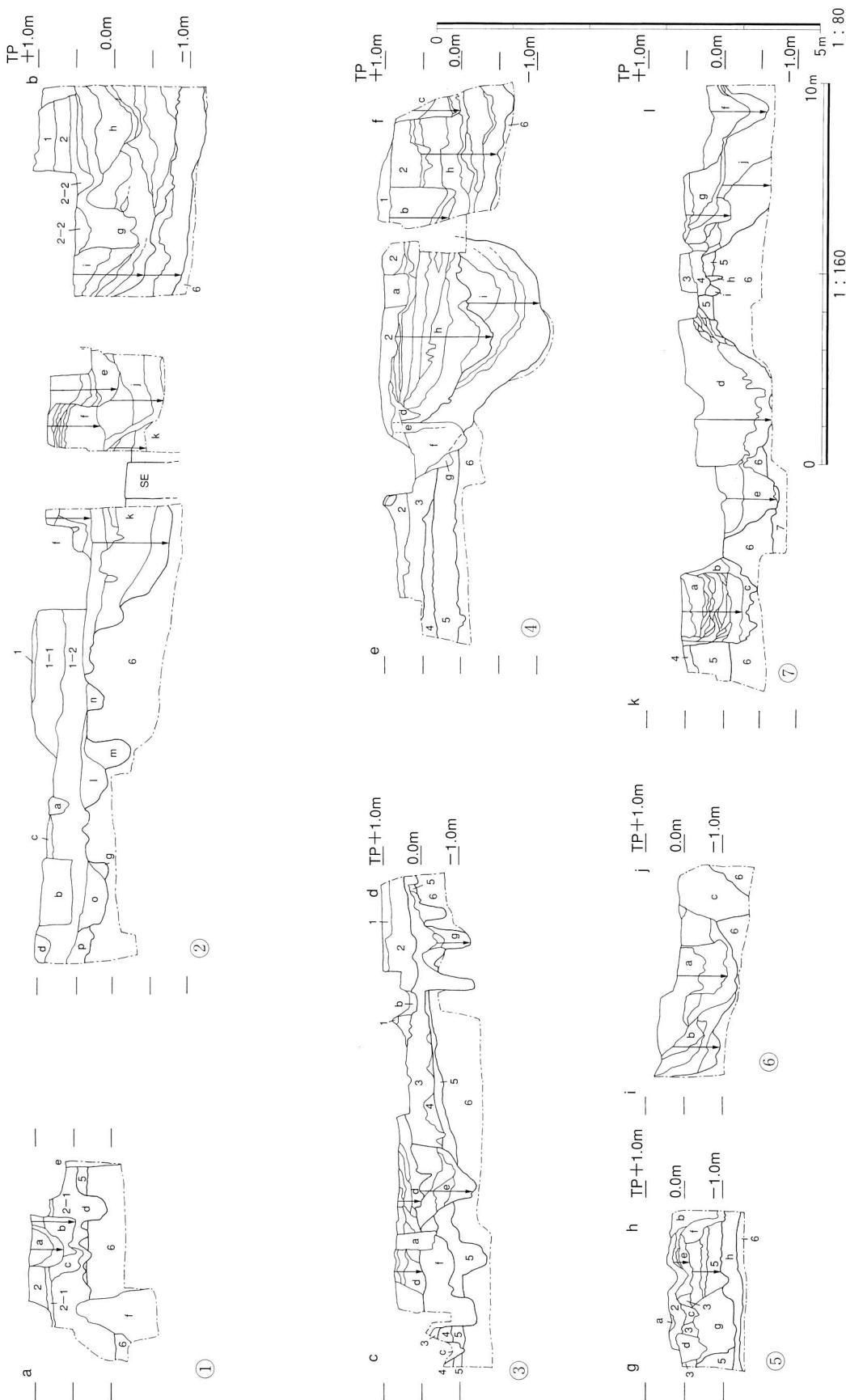


図73 調査区の各地点地層断面模式図

とおりである。

第0層：調査開始以前に掘削された近世～現代の整地層である（図示省略）。

第1層：灰黄褐色シルト質中粒砂を主体とする地層で、層厚は約20cmである。分布範囲は調査地東半部に限られており、上部と下面で遺構を検出した。18世紀中頃の整地層である。

第2層：黒褐色シルト質中粒砂を主体とする地層で、層厚は約20cmである。分布範囲は1・21・25区周辺で、上面検出遺構から出土する肥前磁器の年代観から18世紀中頃までに形成された整地層と考えられる。

第3層：暗褐色シルト質中粒砂を主体とする地層で、層厚は約20cmである。分布範囲は20・21区周辺で、出土した瀬戸美濃焼陶器や肥前陶磁器から、豊臣期～徳川氏大坂城期に形成された複数の整地層と考えられる。大坂の陣の焼土層は確認できなかった。この地層は、1598年の船場開発に伴う

表6 OJ97-6次調査地各地層断面模式図の説明

番号	記号	層相	番号	記号	層相
①	a	オリーブ色粘土偽礫多く含む暗オリーブ色中粒砂～炭化物、 黄色中粒砂偽礫多く含む明黄褐色シルト質中粒砂	④	1	浅黄橙色細粒砂質極細粒砂
2		炭化物、黄色中粒砂偽礫多く含むシルト質中粒砂	a		炭、焼土含む暗オリーブ褐色シルト質中粒砂
2-1		炭化物含む暗オリーブ色シルト質中粒砂	b		褐色中粒砂質細粒砂～オリーブ褐色シルト質細粒砂
b		黄色中粒砂偽礫多く含む暗オリーブ色粗粒砂	c		暗褐色中粒砂質細粒砂～黒色シルト
c		褐色シルト質中粒砂偽礫含む黄褐色中粒砂	2		黄色粘土偽礫多く含む暗褐色粗粒砂
d		炭化物、礫を含むにぶい黄褐色～褐色細粒砂	d		炭化物含むシルト質細粒砂～粗粒砂
e		暗褐色～暗灰黄色粗粒砂	e		黒褐色シルト質細粒砂
f		黄褐色～オリーブ褐色粗粒砂	f		炭化物含むシルト質中粒砂
5		にぶい黄褐色～褐色細粒砂	3		小礫、黄色シルト偽礫多く含むオリーブ黄色粗粒砂
6		にぶい黄色細粒砂	g		黄褐色粗粒砂～暗オリーブ褐色シルト
②	1	にぶい黄橙色シルト質細粒砂	h		暗褐色中粒砂質細粒砂～褐色細粒砂質細粒砂
1-1		褐色極細粒砂質細粒砂	i		シルト質中粒砂偽礫含む暗オリーブ色中粒砂～粗粒砂および、 オリーブ褐色シルト～粘土
1-2		にぶい黄橙色細粒砂質極細粒砂	3		炭化物、黄色シルト偽礫含む暗褐色シルト質中粒砂
2		褐色～黒褐色シルト質中粒砂	4		黄色シルト偽礫含む褐色中粒砂
2-2		褐色～黒褐色炭化物含むシルト質中粒砂	5		褐色中粒砂
a		5mm大の礫含む褐色細粒砂	6		黄褐色細粒砂
b		にぶい黄褐色5～10mm大の礫を含む細粒砂	⑤		
c		灰黄褐色シルト含む極細粒砂質細粒砂	a		灰黄褐色シルト質細粒砂
d		5mm大の礫含むシルト質細粒砂	b		暗褐色～暗オリーブ色シルト質細粒砂
e		5～10mm大の礫を含む中粒砂質細粒砂～暗褐色シルト	2		暗褐色シルト質細粒砂
f		黄褐色細粒砂質中粒砂～浅黄色細粒砂質極細粒砂	c		にぶい黄褐色～暗褐色シルト質細粒砂
g		灰黄色粗粒砂～中粒砂質シルト	d		灰黄褐色シルト質細粒砂
h		黑色中粒砂質シルト	e		5mm大の礫含むにぶい黄褐色シルト質細粒砂
i		黒褐色中粒砂質シルト	3		にぶい黄褐色～暗褐色シルト質細粒砂
j		炭多く含む暗灰黄色細粒砂質極細粒砂	f		5mm大の礫含むオリーブ褐色～暗褐色シルト質細粒砂
k		にぶい黄色極細粒砂～オリーブ褐色極細粒砂	g		5～10mm大の礫含むオリーブ褐色～暗褐色シルト質細粒砂
l		暗灰黄色細粒砂質中粒砂～明黄褐色粘土偽礫含む中粒砂質細粒砂	5		暗褐色細粒砂層を挟む5～10mm大の礫含む褐色～暗褐色シルト質細粒砂
m		にぶい黄褐色細粒砂質極細粒砂	h		暗褐色極細粒砂質細粒砂
n		にぶい黄褐色中粒砂質細粒砂	6		褐色極細粒砂
o		にぶい黄褐色中粒砂質細粒砂	⑥		
p		にぶい黄褐色～オリーブ褐色中粒砂質細粒砂	a		オリーブ褐色中粒砂～黒褐色シルト質中粒砂
q		にぶい黄褐色中粒砂質細粒砂	b		暗褐色中粒砂～にぶい黄褐色中粒砂～粗粒砂
r		にぶい黄褐色～明黄褐色中粒砂質粗粒砂	c		にぶい黄褐色中粒砂～粗粒砂
6		にぶい黄褐色極細粒砂	d		黄褐色中粒砂～粗粒砂
③	1	灰黄褐色シルト質中粒砂	⑦		
a		炭化物、粘土偽礫多く含む灰オリーブ色中粒砂	a		灰オリーブ色シルト質粘土～暗灰黄色シルトの互層
b		炭化物、焼土偽礫含む暗灰黄色シルト質粗粒砂	b		黄褐色極細粒砂質細粒砂
c		にぶい黄色シルト偽礫多く含む黄褐色中粒砂	c		灰黄褐色～にぶい黄橙色細粒砂質中粒砂
2		炭化物、黄色シルト偽礫含む暗灰黄色シルト質中粒砂	d		5mm大の礫含む炭化物含む灰黄褐色～にぶい黄褐色シルト質細粒砂
d		にぶい黄色粗粒砂～炭化物多く含む暗灰黄色シルト質中粒砂	e		にぶい黄褐色～にぶい黄橙色細粒砂質中粒砂～極粗粒砂
e		礫を含む灰オリーブ色粗粒砂～炭化物、粘土を含むオリーブ褐色中粒砂	f		暗灰黄色シルト質細粒砂～褐色細粒砂
f		炭化物多く含む黄褐色中粒砂	g		黒褐色シルト（炭層）～黄褐色シルト質細粒砂
4		褐色粗粒砂	3		2～3mm大の礫含む暗褐色～オリーブ褐色極細粒砂
g		炭化物多く含むオリーブ褐色シルト質中粒砂	4		3mm大の礫含む暗灰褐色～オリーブ褐色極細粒砂
h		にぶい黄色中粒砂～灰褐色シルト偽礫含む黄褐色中粒砂	5		にぶい黄褐色極細粒砂質細粒砂
5		灰黄褐色細粒砂	h		灰黄褐色極細粒砂
6		にぶい黄色細粒砂	i		暗灰黄色シルト質細粒砂
7		にぶい黄色細粒砂	j		5～10mm大の礫含む黄褐色極細粒砂～5～10mm大の礫を含む細粒砂

整地層が基盤となっている。

第4層：褐色中～粗粒砂を主体とする地層で、層厚は20～30cmである。分布範囲は14・20区周辺で、本層下面の遺構から古代の土師器・須恵器と瓦器の細片が出土している。

第5層：にぶい黄褐色～褐色細粒砂を主体とした地層で、層厚は20～30cmである。弥生時代後期の土器や古墳時代の埴輪、古代の土師器・須恵器が出土している。上面で土壙を、下面で土壙と柱穴を検出した。

第6層：にぶい黄色細～極細粒砂を主体とする海成層である。

第7層：灰白色中～極細粒砂の海成層である。

海成層：建設工事現場の地表下約10mの海成層から多くの貝化石が見つかった。この海成層は、繩文海進最高潮期(約5,000年前)に形成された地層である(註1)。

各層序と対応する時期区分については、出土遺物に基づいて以下のように判別した。

第1層：V期(1750年代頃)

第2層：IV期(1650～1750年代)

第3層：III期(1600年代以降)

第4層：II期(中世)

第5層：I期(弥生時代～古代)

ii) 遺構と遺物

a. I期(弥生時代～古代)の遺構と遺物(図74・75、図版17)

遺構(図74・図版17) 第5層が残存していた範囲で、第5層下面遺構として土壙や柱穴・小型の穴を検出した。21～30区では徳川氏大坂城期以降の開発によって第5層が削平されており、遺構は確認できなかった。おもな遺構は以下のとおりである。

SK301は形状不明の土壙で長軸6.0m以上、短軸3.0m以上、深さ0.3mである。埋土は黒色シルト質細粒砂で、8世紀末葉～9世紀前半の土師器杯249・皿253、須恵器壺蓋256・杯B蓋257と、9世紀代の黒色土器A類底部264や、製塩土器などが出土している。

SP301は直径1.2m、深さ0.45mの柱穴で、柱痕跡の直径は0.1mである。埋土は褐灰色細粒砂で、掘形から土師器や須恵器の細片が出土した。

SP302は直径0.9m、深さ0.5mの柱穴で、柱痕跡の直径は0.12mである。埋土は黒色細粒砂で、須恵器や瓦の細片が出土した。

SP303は直径1.0m、深さ0.3mの柱穴で、柱痕跡の直径は0.1mである。埋土は黒色細粒砂で、掘形から土師器・須恵器・弥生土器の細片が出土した。

これらの柱穴は柱間約2.2mで約N70°Eの方向に連続し、掘形の形態に共通性があること、同程度の柱間をもつこと、柱痕跡底部の高さが近似することなどから、同一の建物や柵の可能性がある。

遺物(図75) 第5層を主体に試掘壙や近世の遺構から弥生～平安時代の遺物が出土した。245はSE102出土の畿内第V様式の弥生土器壺底部で、外面にタタキメがみられる。246は第5層出土の畿内第V様式の弥生土器広口壺口縁部で、頸部はハケメ調整されたのちナデが施され、内面はヘラミガ

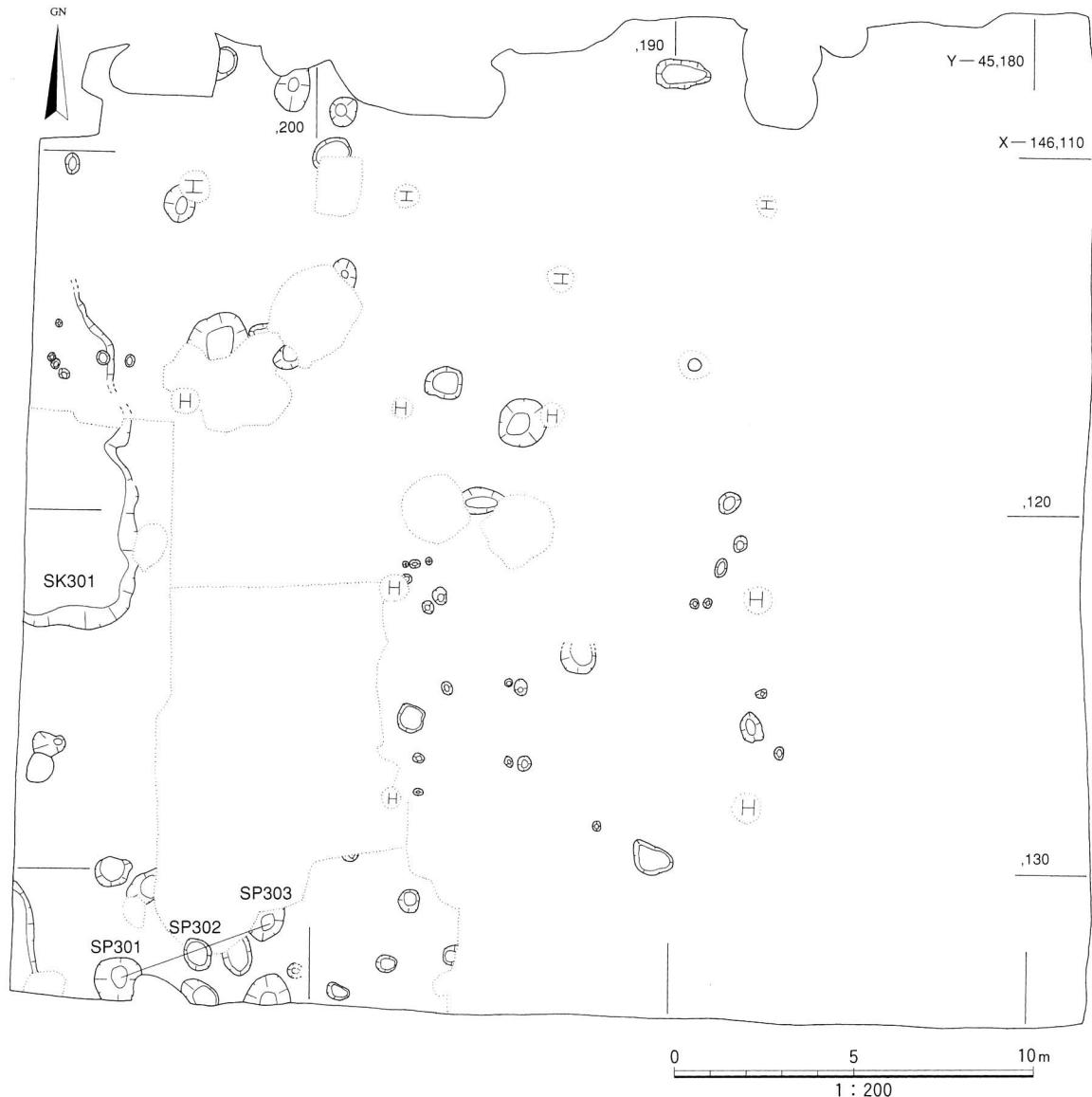


図74 I期の遺構平面図

キで調整されている。247は第5層出土、248は第4層出土の畿内第V様式の弥生土器高杯脚部で、247にはスカシ孔が5個所、248には2個所以上穿たれており、外面はヘラミガキ調整が施されている。250・251・252・254は平安京I期の土師器で、250は第5層出土の杯、251はSK101、252はSX102、254は第5層出土の皿である。255・258～263は平安京I期の須恵器で、255・258は第5層出土の杯B蓋、259は第5層出土の椀、260は第5層出土の壺、261はSK203出土、262はSX104出土の杯A、263は第5層出土の杯Bである。265・266は第5層出土の黒色土器A類である。267はSK113、268～270は第5層、271は遺構外出土の緑釉陶器皿で、267・268は削り出した平底高台に特徴があり、京都近郊で生産された9世紀前半頃の資料である。272は第5層出土の手づくね成形された製塩土器で、内外面ともユビナデの痕跡がある。273は第5層出土の須恵器の飯蛸壺で、輪積み成形の後、把手部分はヘラケズリされている。これらの他に、第5層から6世紀代の円筒埴輪片が出土している。

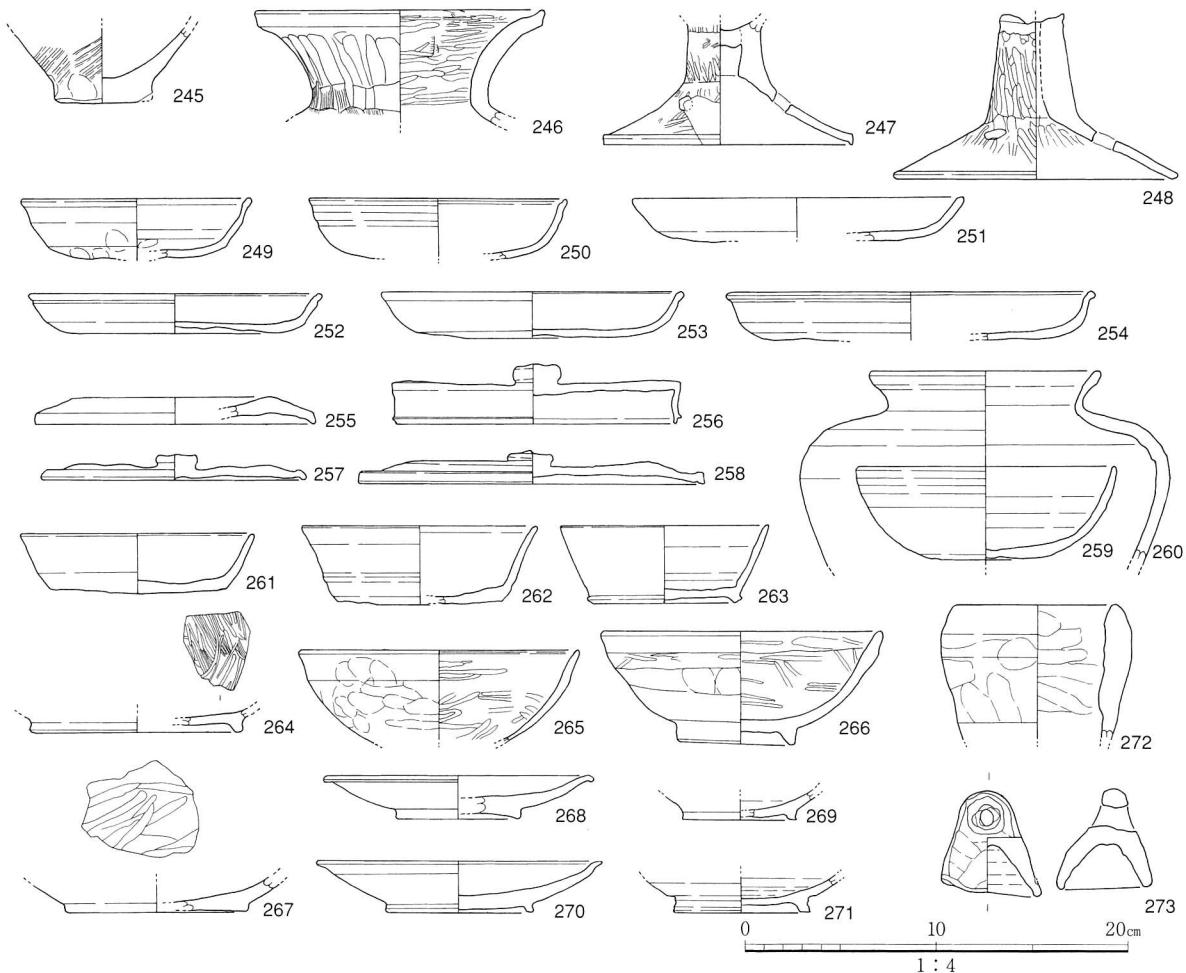


図75 I期の出土遺物

SK301(249・253・256・257・264)、第5層(246・247・250・254・255・258~260・263・265・266・268~270・272・273)、遊離(245・248・251・252・261・262・267・271)

b. II期(中世)の遺構と遺物(図76)

第4層下面で土壙や小型の穴を検出した。時期は特定できないが、瓦器片の出土から13世紀以降に形成された遺構と考えられる。

SK201・202は長円形の土壙で、それぞれ長径1.0m以上・短径1.0m・深さ0.64m、長径1.5m・短径0.8m・深さ0.15mである。埋土は灰褐色細粒砂で、産地不明陶器・土師皿などの細片や、瓦質土器脚部・弥生土器などの細片が出土している。

SK203は長円形の土壙で、長径0.7m、短径0.6m、深さ0.43mである。埋土は灰オリーブ色シルト質細粒砂である。

SK204・205は円形の土壙で、それぞれ直径0.6m・深さ0.1m、直径約0.6m・深さ0.13mである。埋土は灰褐色細粒砂で、瓦の細片が出土している。

SK206は形状不明の土壙で、深さ0.19mである。埋土は灰褐色細粒砂である。

c. III期(豊臣氏大坂城期～徳川氏大坂城期初期)の遺構と遺物(図76～78、図版18)

遺構(図76・77) 4層上部検出遺構ならびに、出土した遺物から時期を判別した遺構である。出

土遺物は瀬戸美濃焼天目碗や志野・黄瀬戸が出土している。全体的に唐津焼碗が多く、唐津焼砂目溝縁皿の出土が目立っている。豊臣氏大坂城期の遺構については、前期と後期を判別する大坂の陣の焼土層や、各時期の出土遺物を明確に確認できなかった。SD101～104は互いに約6mの間隔をもって南北に敷設されており、南北に長い当時の町割りがこれらの溝を境に形成されていたと考えられる。

SK101は長円形の土壙で、長径1.9m、短径1.0m、深さ0.3mである。埋土はオリーブ灰色細粒砂で、瀬戸美濃焼が出土している。

SK102は形状不明の遺構で、深さは0.6mである。埋土は炭化物を含む黄灰色シルト質細粒砂で、伊万里焼碗、唐津焼碗280～282、砂目皿・胎土目皿287、瀬戸美濃焼天目碗289・皿290、中国青花片、備前焼、丹波焼が出土している。295は焼塩壺で、輪積み成形のあと内外面をナデと工具で仕上げている。これら土器類の他には、豊臣氏大坂城期に使用された桐文軒丸瓦などが出土している。

SK103は形状不明の遺構で、南北2.5m以上、東西2.8m以上、深さは0.95mである。埋土はオリーブ

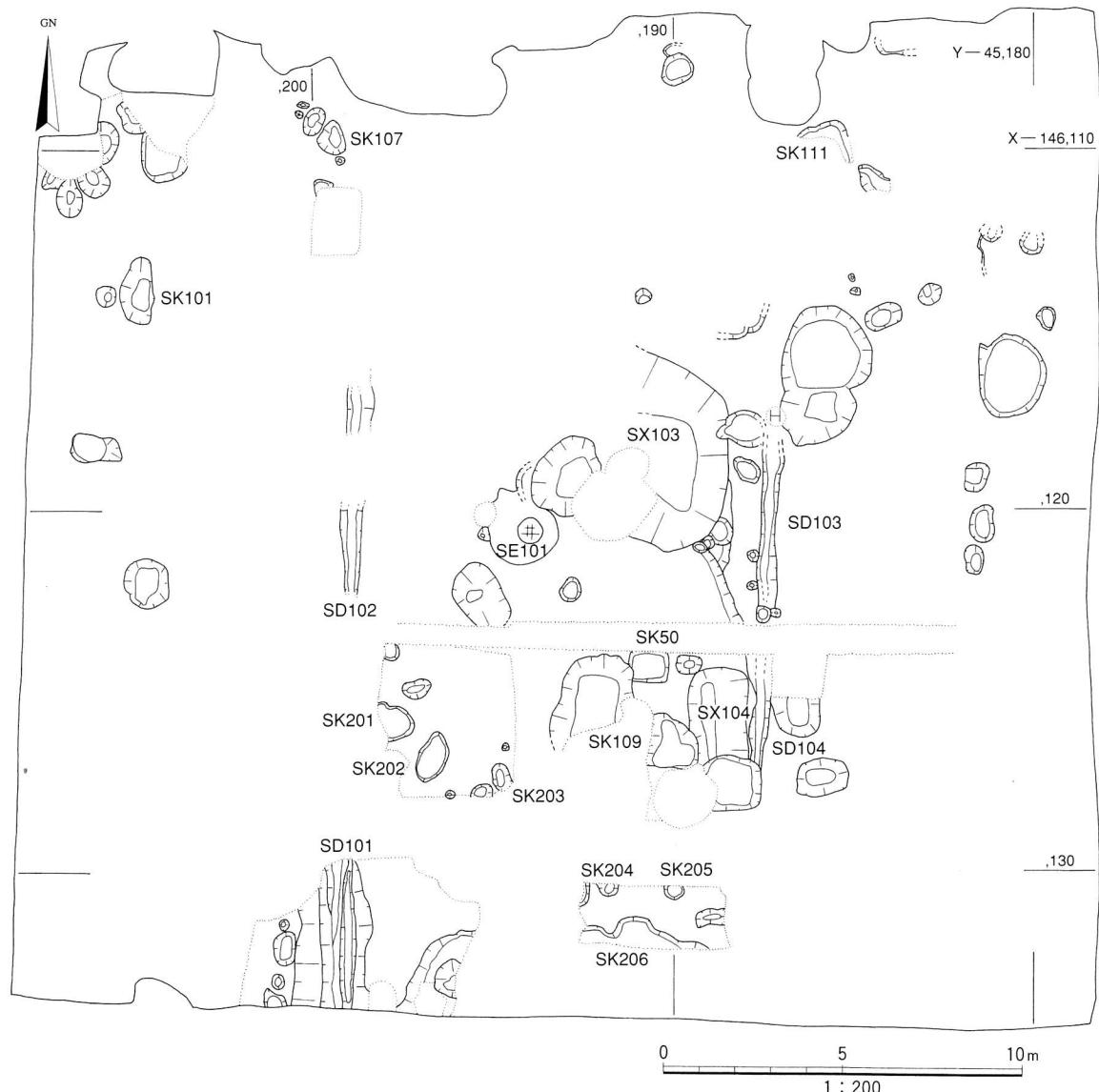


図76 II～IV期の遺構平面図

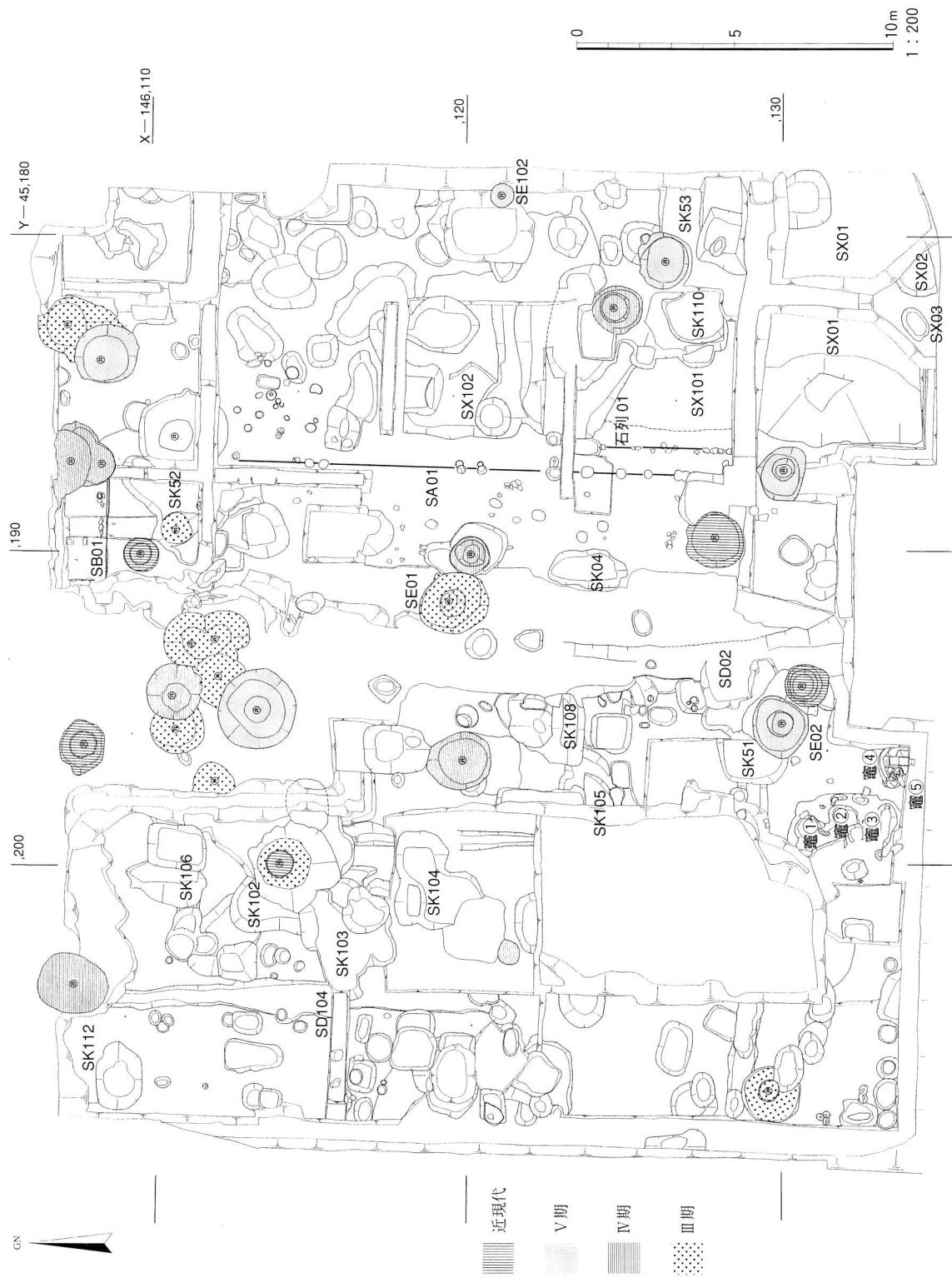


図77 III～V期の遺構平面図

ブ褐色シルト質細粒砂で、唐津焼碗285・砂目皿288、中国青花碗・皿、備前焼、丹波焼、ベトナム製長胴壺口縁部、土師器皿292、焼塙壺293・296・297などが出土した。

SD101は南北方向に延びる溝で、堆積状況から上層と下層の2時期に分けられる。下層の溝は幅1.5m以上、深さ0.95mである。埋土は暗灰褐色中粒砂で、水成堆積の痕跡が認められないことから一時期に埋められた溝である。上層の溝は幅2.0m、深さ0.75mで、下層の溝が埋った後に東へ約0.4mの位置へ移設されている。埋土は暗灰黄色シルト質中粒砂～粘土で、伊万里焼・唐津焼・瀬戸美濃焼天目碗などが出土している。

SD102は南北方向に延びる溝で、上部は削平されている。幅0.6m、深さ0.1mで、埋土は暗褐色中粒砂である。SD101下層溝と連続した遺構と考えられる。

SD103・104は南北方向に延びる溝で、それぞれ幅が0.6～1.2m、深さ0.2～0.3m、幅0.5m、深さ0.1mである。埋土は褐色シルト質細粒砂で、伊万里焼、唐津焼などが出土地している。

SX101は南北4.0m以上、東西3.0m以上、深さは1.2mの土壙である。埋土はオリーブ褐色シルト質中～粗粒砂で、黄瀬戸向付275、瀬戸美濃焼天目碗276・277、唐津焼碗278・279の他に、伊万里焼・唐津焼・備前焼・丹波焼・土師質土器類などが出土している。

SX102(図版18)は南北16m以上、東西14m以上、深さ0.9mの土壙である。埋土は黒色シルト(炭層)を主体としたにぶい黄褐～黄褐色細粒砂で、伊万里焼、唐津焼碗283・284・皿286、備前焼、丹波焼、瀬戸美濃焼、中国青花片、土師器皿291、焼塙壺294などが出土している。

SX103は南北5.0m以上、東西2.5m以上、深さ1.28mの土壙である。埋土は浅黄色シルト、黒色シルト質細粒砂で、伊万里焼・唐津焼・中国青花・備前焼・丹波焼などが出土地している。

SE101は直径2.1mの円形の井戸で、木製の井戸側内から丹波焼擂鉢339、土師器片、瓦類が出土している。

遺物(図78) 274はSD101出土の唐津焼水指で、肩部の張出しから胴部下半にかけての曲線が特徴的である。口縁部は鈸線状で、口縁部から体部には褐色の釉薬が施され、退色によって渋味のある色調を呈している。底部には右回転糸切り痕が残されている。275はSX101出土の黄瀬戸向付で、口縁部と内底面には刻文と草花文の印花が施されている。碁笥底を呈した高台には、輪トチン痕とヘラ記号が残されている。黄色の釉の発色がよい優品である。298はSK105出土の志野織部丸皿である。口縁部内面に圓線と薦文、内底面に草花文が描かれ、目跡が3個所残されている。299はSK106出土の唐津焼鉄絵向付で、見込みと体部外面に十字文が描かれている。300はSK107出土の鉄絵志野深皿で、見込みには菊花状にソギが施され、体部外面にもソギによる装飾が施されている。302・303はSK108出土の唐津焼皿で、見込みには4個所に砂目痕が残されている。304はSK109出土の唐津焼皿である。301はSK110出土の伊万里焼碗で、見込みに草花文、体部外面に梵字文が描かれている。305はSK111出土の伊万里焼碗で、体部外面に山水文が描かれている。306はSK111出土の伊万里焼胴丸形白磁小壺で、口縁部内面には施釉がないことから蓋物であったと考えられる。307はSK112出土の信楽焼壺で、胎土には石英粒を多く含んでいる。体部外面には線刻が施されている。

d. IV期(徳川氏大坂城期)の遺構と遺物(図76・77・79～82、図版18・19)

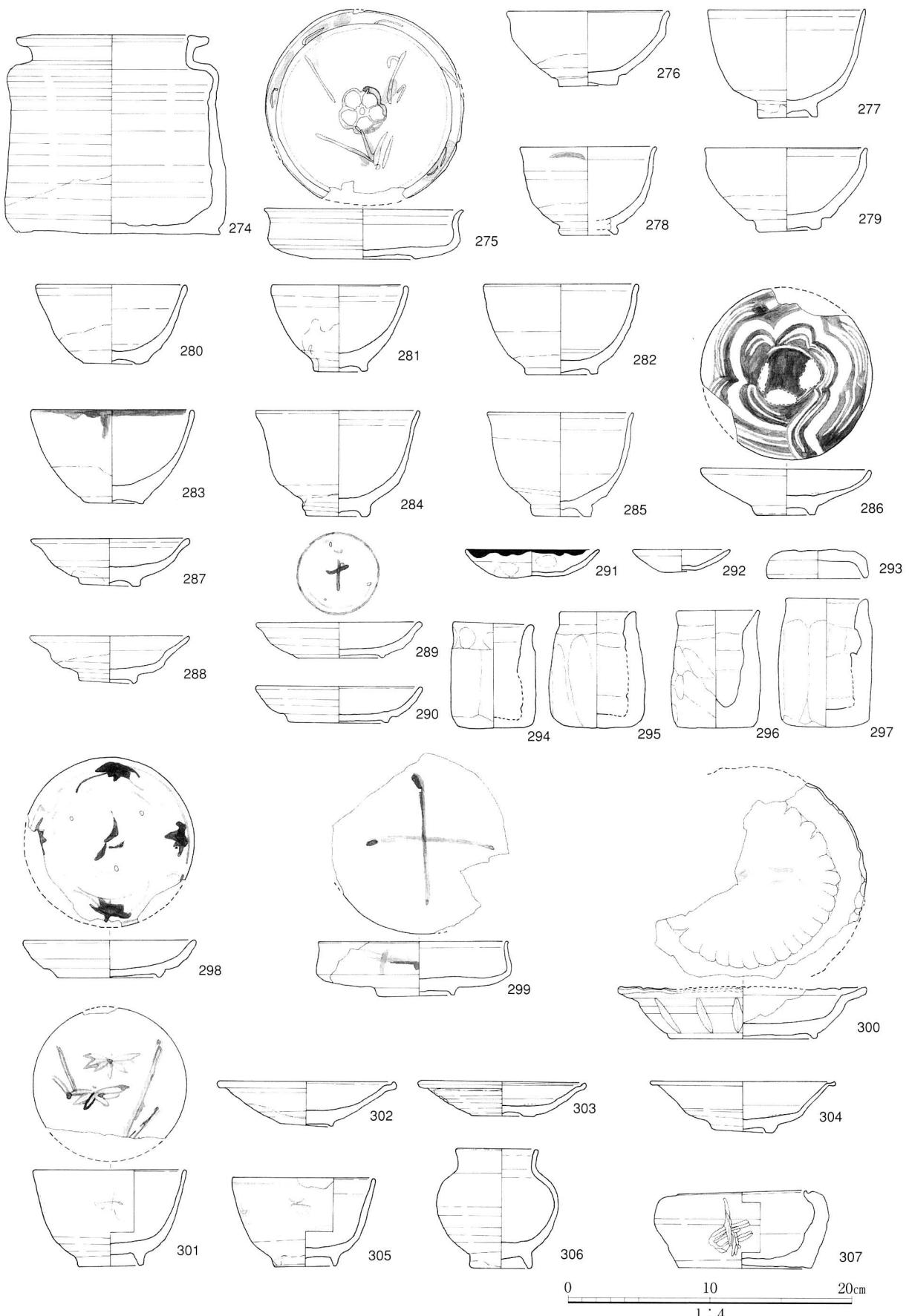


図78 Ⅲ期の出土遺物

SD101(274)、SK102(280~282・287・289・290・295)、SK103(285・288・292・293・296・297)、SK105(298)、SK106(299)、SK107(300)、SK108(302・303)、SK109(304)、SK110(301)、SK111(305・306)、SK112(307)、SX101(275~279)、SX102(283・284・286・291・294)

竈1～5(図版18)は上層と下層の2期に分けられる。上部構造は不明であるが、確認された長円形の平面形状は共通している。平均的な大きさは長軸1.8m、短軸0.8m、深さ6.25mである。燃焼室の大きさは1.0m×0.3mの長方形で、側壁は粗粒砂混りの粘土で構築されている。竈口の両側と燃焼室の奥壁には石が置かれ、床には一辺の長さが30cmの瓦が2～3枚敷かれていた。下層の竈4・5は竈口が南に開口し、並列している。上層の竈1～3は竈口が西に開口し、扇状に並んでいる。埋土は焼土や炭を主体とする赤褐色シルト質細粒砂で、伊万里焼などが出土している。

SB01(図版18)は埠列建物で、全体の形体は不明であるが、南北1.2m以上×東西3.2m以上の方形の建物の南西隅であったことがうかがえる。床面には厚さ0.23mのにぶい黄褐色シルト質粘土が敷かれ、南壁に沿って0.2m大の円礫が並んでいた。埠は床面を切る幅0.35m、深さ0.23mの溝状の掘込み内に一列に並べられていた。

SX01(図79～82、図版19)は南北13m以上、東西18m以上の土壙である。埋土は炭化物を多く含む褐灰色細粒砂である。遺構の埋った時期は伊万里焼・唐津焼の年代観から17世紀後半頃と考えられる。308～311は唐津焼碗で、308には高台内に「十」字が墨書されている。唐津焼向付315・皿316～319・瀬戸美濃焼天目碗312が出土している。313は黄瀬戸向付底部で、内面には草花文の印花が施されている。314は瀬戸美濃焼ソギ皿である。320は伊万里焼染付寿文猪口で体部外面には放射状にシノギが施されている。321は伊万里焼白磁肩衝形小壺である。土師質土器類では、焼塩壺322・323、皿330などが出土している。335は土師質土器の火入れで、内外面ともユビナデで仕上げられており、三足の支えが付いている。346・347は土師質土器鉢で、底部を型づくり成形した後に、体部外面をていねいなナデで仕上げている。346の内面には1.5～2.2cm幅のハケメの痕跡が残されている。丸底で、口縁部にかけての立ち上がりは緩やかである。346は内面に付着物のない状態で出土した。上面観は橢円形で、長軸37cm、短軸34cm、器高13cm、重さ4kgである。この鉢は多量に出土しており、用途が不明ながら当該地の生業を検討していく上で重要である。木製品では、赤漆で「平」の文字が記された黒漆椀蓋ないしは身348・349、体部外面に黒漆で繊細な草文が描かれた赤漆椀350、体部外面に黒漆で丸に囲碁盤が描かれた赤漆椀351、体部外面に黒漆で分銅形の家紋ないしは文様を描いた赤漆椀352・353、復元径約38cmの盆367などが出土している。また、最大径が1cm未満で、長さが20cm前後の箸373～377と、最大径が1cm以上で、長さが28cm以上の箸378～382といった2種類の大形の箸が出土している。これらの他に、板材を加工した製品として、箇の機能が考えられる加工具358～361、穿孔のある木札355・356、解読不明ながら表裏に墨書された木簡357が出土している。これは、表面の一部に「門」と記された墨跡がかろうじて判読できる資料である。刀関係の資料では、鞘362・363、柄364・365、鐔354などがある。363には「1月20日」と墨書された半身があり、原形に復元できる。これらを組み合わせて復元すると、刃わたり24cm前後の小刀を収めた、45cm前後の脇差であったと考えられる。その他、長さ29cm、厚さ0.9cm、最小単位の目盛り幅が1.2cmで、一単位が約2.5cmのさし366、長さ18cm前後の丸下駄368・369と長さ20cm前後の角下駄370・372および、丸下駄371などが出土している。これらの他に牛や馬の骨を使用した骨製品や、加工痕のある牛や馬の骨がまとまって出土している。

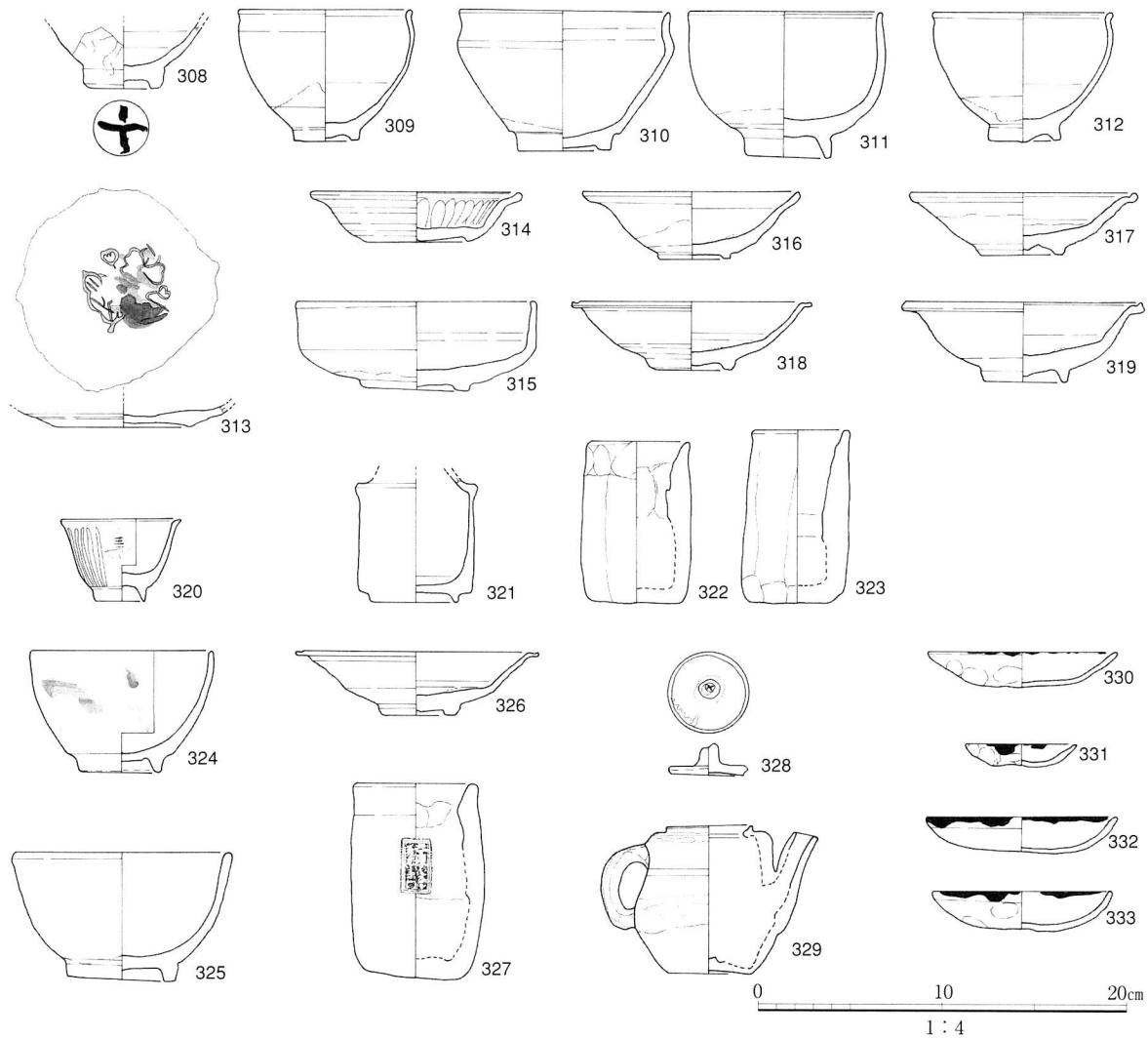


図79 IV期の出土遺物

SX01(308~323・330)、SK50(324~326)、SK51(327~329・331~333)

また、SX02は形状不明の土壙で、深さは0.3mである。埋土は炭化物を含む暗褐色シルト質中粒砂で、伊万里焼が出土している。340・341は灰落として、復元径は29.2cm、厚さは3cmである。裏面から表面にかけて直径0.9~1.0cmの孔が1.5~2.0cm間隔で穿たれている。裏面には被熱した痕跡が残されている。多量に出土した土師質土器鉢と対応できるだけの出土量はないものの、供伴して出土した土師質土器鉢の内面に残された帶状の痕跡と、灰落しの復元径が一致することから、土師質土器鉢とこの灰落しは組み合わせて使用されたと考えられる。344・345は土師質土器鉢で、底部を型づくり成形した後に、体部外面をていねいなナデで仕上げている。丸底で、底部から体部への立上がりはやや屈曲し、口縁部にかけては直線的である。内面には炭化物が口縁部付近まで付着している。

SX03は長円形の土壙で、長径1.3m、短径0.9m、深さ0.15mである。埋土は炭化物を含む暗褐色シルト質中粒砂で、伊万里焼などが出土している。

SK50は長辺1.8m、短辺0.9m以上、深さ0.32mの方形の土壙である。伊万里焼雲文散らし碗324、唐津焼銅緑釉碗325・砂目皿326、土師質土器十能338などが出土している。

SK51は直径2.0m、深さ0.5mの円形の土壙である。唐津焼262・263、丹波焼、軟質施釉陶器など

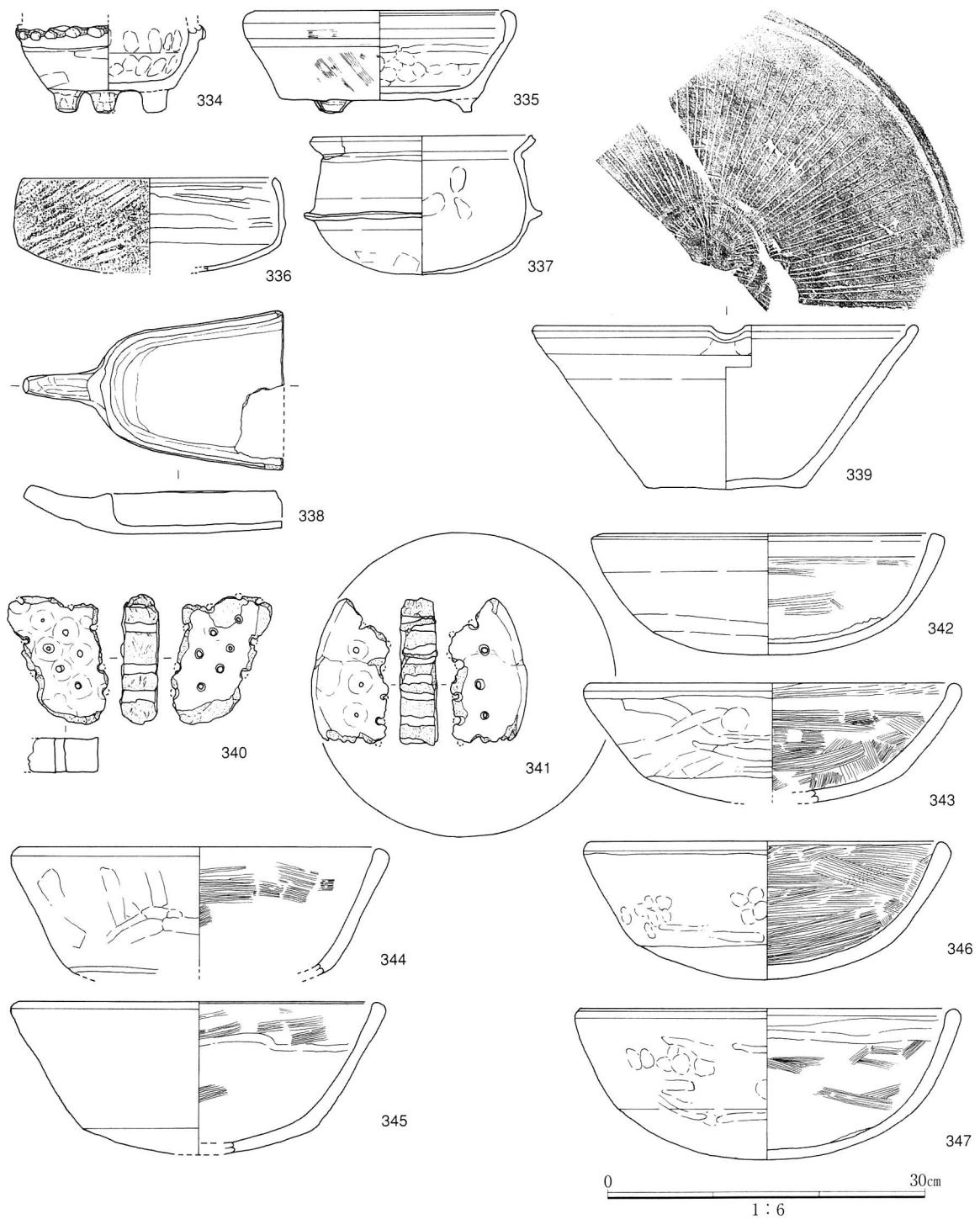


図80 III・IV期の出土遺物

SE101(339)、SK50(338)、SK52(334・336)、SX01(335・346・347)、SX02(340・341・344・345)

が出土している。328は産地不明の陶器で、表面に褐色の施釉をした蓋である。摘み部の上面には「×」文が線刻されている。329は産地不明焼締陶器で、把手付きの油壺である。327は焼塩壺で、輪積み成形のあと外面をナデで仕上げている。体部の刻印は「天下一堺ミなと藤左衛門」である。331～333は土師器皿である。

SK52は深さは0.6mの形状不明の土壙である。埋土は炭化物を多く含む黄褐色中粒砂で、伊万里焼

が出土している。334は瓦質土器の火入れで、体部外面には粘土紐貼付けによって装飾が施され、内面にはユビオサエの痕跡が残されている。三足がついている。336は炮烙で、体部外面には平行タタキ痕が残されている。

SK53は方形の土壙で、長辺1.6m以上、短辺1.6m以上、深さ0.35mである、埋土は炭化物や貝を

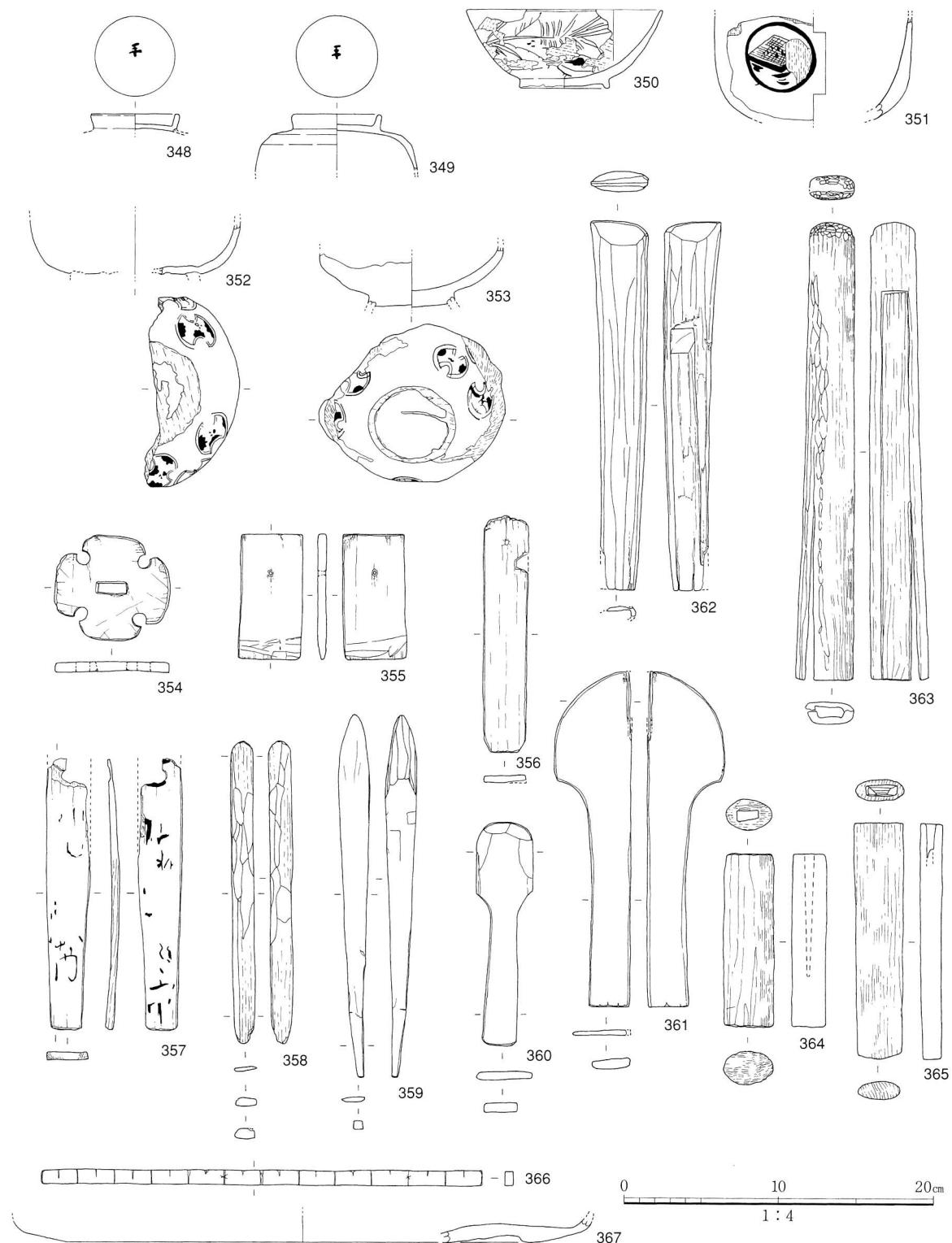


図81 SX01出土木製品(1)

多く含む暗黒褐色細粒砂質中粒砂で、伊万里焼、家紋を表した平文鳥衾が出土している。

SA01は堀の基礎と思われる柱穴列で、直径0.3~0.4m、深さ0.5~0.6mの柱穴が南北方向に延びている。

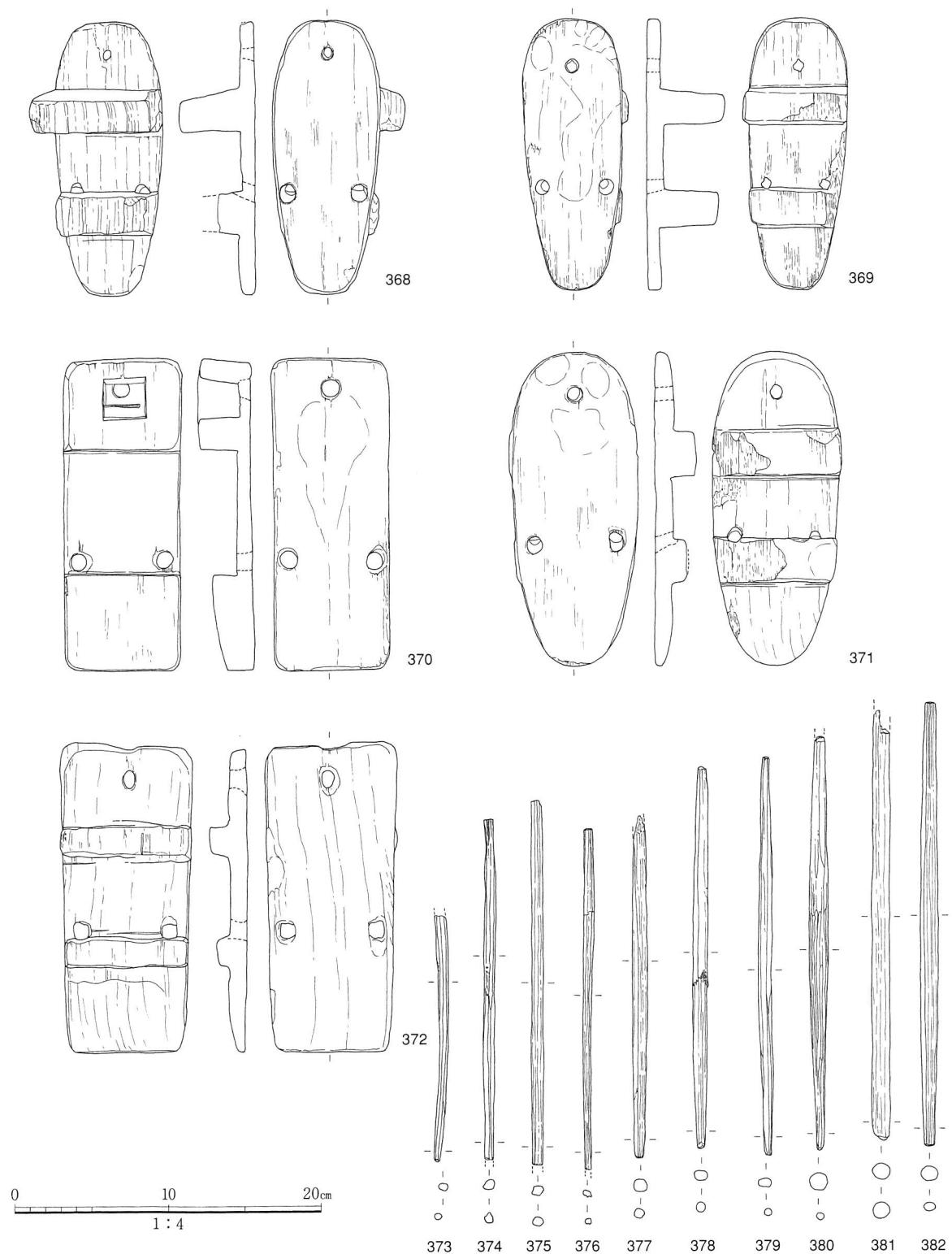


図82 SX01出土木製品(2)

石列01は0.2m大の石がSA01に平行して一列に並んでいることから、塀に接して石列を基礎にした建物が建てられていた可能性がある。

e. V期(徳川氏大坂城期)の遺構と遺物(図83・84、図版20)

SK01は方形の土壙で、長辺1.0m、短辺0.9m、深さ0.45mである。埋土は炭化物を含む黒褐色細粒砂質中粒砂で、伊万里焼などが出土している。396は焼塩壺で、体部外面に「泉州麻生」の刻印がある。

SK02は方形の土壙で、長辺4.8m、短辺3.5m、深さ0.25mである。埋土はにぶい黄橙色細粒砂を含む黒色シルト質細粒砂で、伊万里焼などが出土している。伊万里焼染付碗384、波佐見焼染付碗385、唐津焼銅緑釉碗386・碗387・388は一括廃棄された肥前陶磁器の一部で、内面に幅3cmの刷毛を用いて暗褐色の塗料を使用した痕跡が残っていることから、これらの碗を使って塗り作業を行ったことがうかがえる。393は伊万里焼蛇ノ目釉剥ぎ皿で、399・400は土師器皿である。

SK03は形状不明の土壙で、深さは0.57mである。392は伊万里焼蛇ノ目釉剥ぎ皿である。

SK04は長円形の土壙で、長径2.4m、短径1.13m、深さ0.55mである。389は口縁部が端反りになつており、口縁部内面には四方櫛文と内底面には二重圈線内に梅花文が描かれている。高台内に「大明成化年製」銘がある。398は土師器皿で、内外面ともていねいなナデで仕上げられている。

SD01は南北方向に延びる溝で、幅0.5m、深さ0.2mである。埋土は灰白色細粒砂である。

SD02は南北方向に延びる溝で、幅2.96m、深さ0.59mである。埋土はオリーブ褐色細粒砂である。17世紀後半以降に敷設された東西方向の背割下水と接続する下水の底部が残ったものである。

SE01は直径1.96m、深さ0.49mの井戸である。383は伊万里焼染付草花文小碗で、口縁部内面の釉は掻き取られている。391は伊万里焼蛇ノ目釉剥ぎ皿、394は唐津焼水差蓋、397は土師器皿である。

SE02は直径2.2m、深さ1.9mの井戸である。390は伊万里焼染付草花文蓋物碗で、8客揃いで出土している。蓋と身には口縁部外面に四方櫛文と、高台内に二重角福銘が描かれている。395は産地不明の焼締陶器水差蓋である。

3)まとめ

今回の調査において、弥生時代後期～江戸時代の遺構や遺物を検出した。遺物量はコンテナ374箱分である。おもな調査成果は以下のとおりである。まず、弥生時代後期の土器や古墳時代の埴輪が出

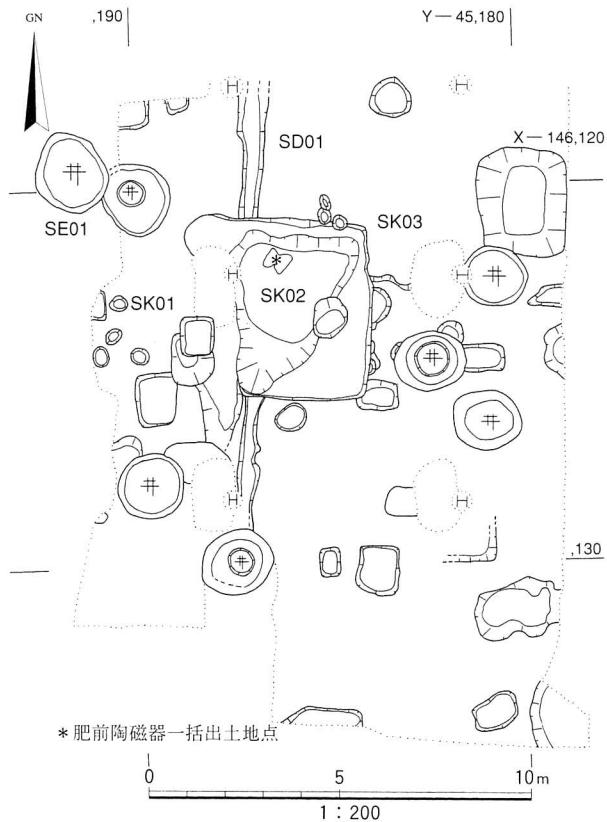


図83 V期の遺構平面図

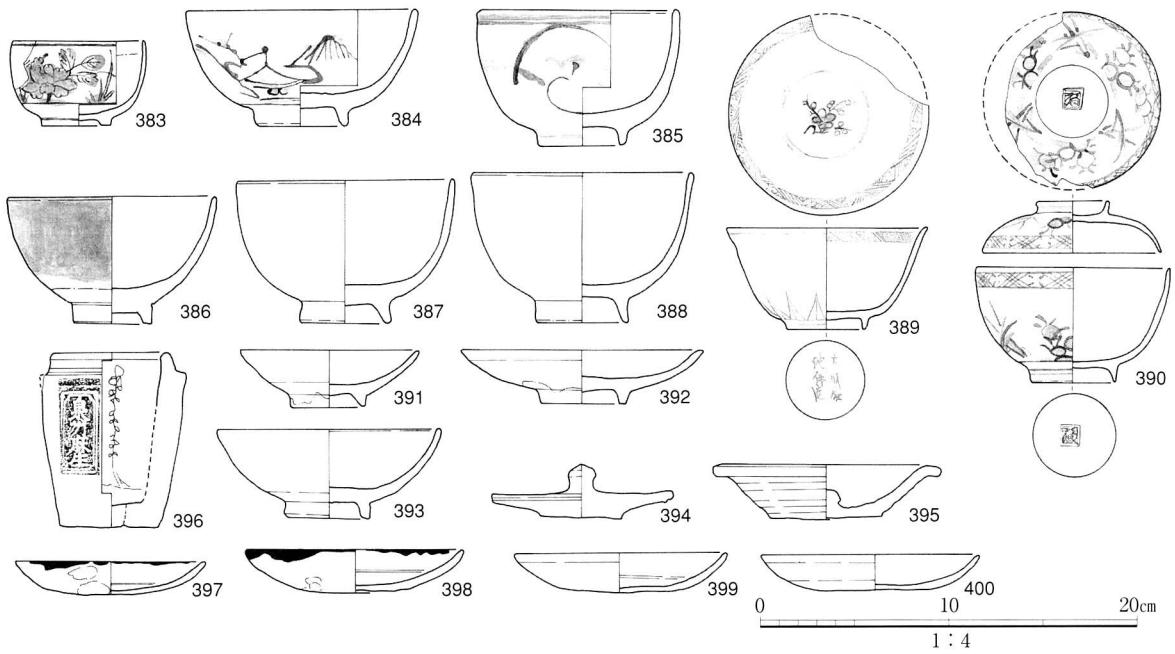


図84 V期の出土遺物

SK01(396)、SK02(384~388・393・399・400)、SK03(392)、SK04(389・398)、SE01(383・391・394・397)、SE02(390・395)

土したことから、近隣に集落や古墳があったことがうかがえるとともに、難波砂堆上の遺跡の形成時期を考える上で貴重な資料となったことがあげられる。さらに、奈良時代末葉～平安時代の土壙や柱穴、9世紀前半代の土師器・須恵器・綠釉陶器がまとまって出土したことから、当時の「難波」と「平安京」の関連性を示唆する資料が得られた。一方、中世の遺構の多くは豊臣氏大坂城期の物構工事(1594年)と船場の開発によって改変されたと考えられる。その後の船場の発展によって町場は拡大したと考えられる。今回検出した遺構と遺物のほとんどが徳川氏大坂城期に属することから、当時の町場の形成がもっとも活発であったことがうかがわれる。ここで、備後町について文献上知られる江戸時代の沿革を以下にまとめておく。1)正保2(1645)年刊行の「毛吹草」によると摺り碁石などの産業が記載されている。2)元禄13(1700)年記載の水帳によると、備後町5丁目に当り大坂三郷北組に属していた。3)延享版(1744年頃)「難波丸綱目」に関東筋問屋・江戸積醤油問屋・伊勢御師宿・医師・鼈甲細工各1が記載されている。これらの他に、延宝7(1679)年の「難波鶴」と元禄5(1692)年の「万買物調方記」に基づいた産業地図[脇田修1994]によると、調査地西側の梅檀木橋筋と、備後町通りから安土町通りにかけて厨子・戸棚屋・湯風呂細工といった家具・建具に係わる指物師の存在や、安土町の鹿革加工に係わる白革師の存在が指摘されている。また白木小三郎氏の見解[白木小三郎1994]によると、当時の船場の町割りは東西、南北各々約40間四方の地割を基準とし、東西方向を4間半の通りが、南北方向を3間半の筋が通っていた。町割りの南北の境は石組の背割下水で仕切られ、北側は備後町通りに面した備後町で、南側は安土町通りに面した安土町である。以上のような江戸時代の町割りに関する資料に加えて、今回の調査で明らかになった南北方向の溝や、背割下水の石組溝、石組の一部から、屋敷境の推定を試みた(図85)。

発掘調査から上記の史料を補強できる遺物はなかったものの、コンテナ5箱分の加工された獸骨、

コンテナ50箱分に及ぶ内面に炭化物が付着した土師質土器の鉢や、内面に付着物のある肥前陶磁器一括資料などから、文献上知りえなかった船場における産業の実態を解明する手がかりが得られたことは今後の調査における留意点の一つになった。

(清水和・平田)

註)

(1) 海成層出土の動物遺体種については以下のように同定された。貝類では、左右両殻が揃ったものや、水管を上に向けた状態のものが多いことから、現地性の化石が多く含まれると思われる。同定の結果、腹足綱9種、二枚貝綱7種を現段階で確認している。腹足綱にはイボキサゴ・オオヘビガイ・カイコガイダマシ・シワホラダマシ・ツメタガイ・ナガニシ・バイ・ヒメムシロガイ・ホソヤツメタガイ、二枚貝綱にはエゾマテガイ・オオノガイ・カガミガイ・サルボウ・バカガイ・フジナミガイ・マテガイがある。これらのうちバカガイとマテガイが多産する印象が強い。これらの種構成や量の印象からみて、本地点の古環境は水深10m以下の砂質の海底であったと推測される(湾中央部生息種)。貝類以外には、棘皮綱のハスノハカシパン、哺乳綱のクジラ類の椎骨が見つかった。クジラ類の椎骨は大型で、ヒゲクジラ亜目に属すると思われる。

(久保)

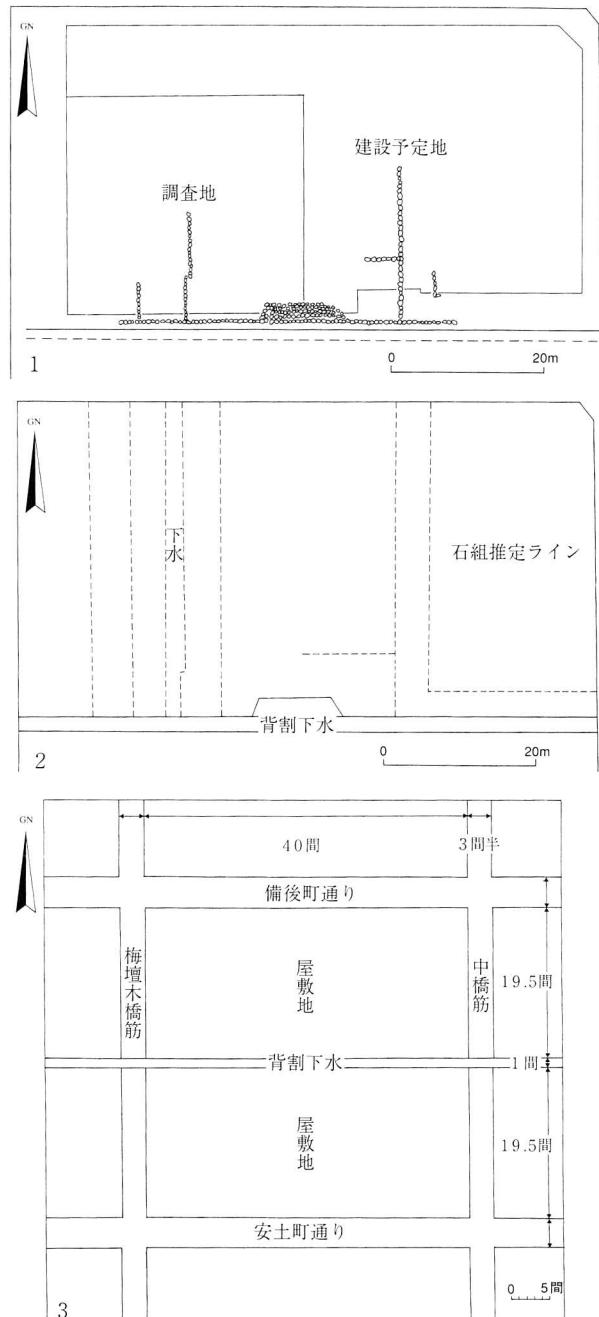


図85 船場の町割り推定図

1：石組み溝残存範囲 2：屋敷割り 3：町割り

第2節 OJ98-2次調査

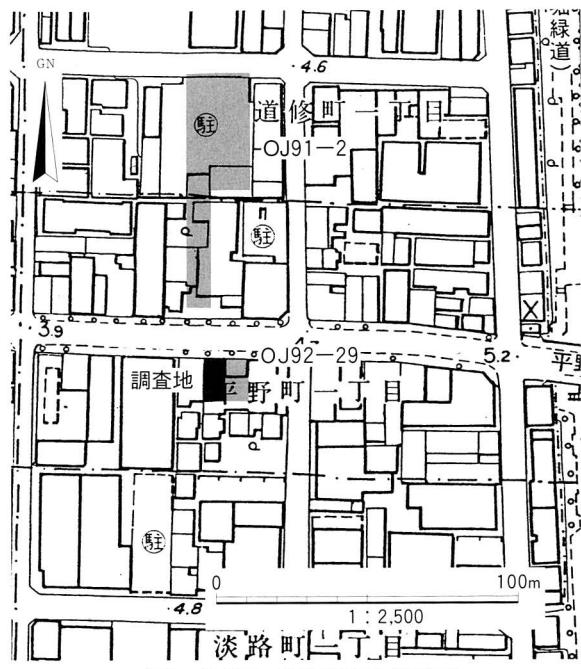


図86 OJ98-2次調査位置図

1) 調査の経緯と経過

調査地は大坂の城下町である船場の北部に位置し、付近の調査では豊臣～徳川期の遺構・遺物が多く発見されている。調査は試掘の所見により現地表面から約2m下までを機械で掘削し、以下は人力による掘削を行った。

2) 調査の結果

i) 層序(図87)

第1層より上は機械掘削の際の攪乱土である。

第1層：暗褐～黄褐色シルト混り粗粒砂～細粒砂を主体とした整地層で、偽礫と炭を含む。徳川前期頃の地層である。

第2層：2層に大別される。第2a層は黄褐色小礫を含むシルト混り粗粒砂が主体の薄い整地層で、調査区中央部および北部に分布する。第2b層は黄褐色～にぶい黄褐色の粗粒砂～中粒砂が主体の整地層で、北部が比較的高く、南部にかけて緩やかに低くなる。また北部では第3層を切込む土壌状となっている。豊臣後期頃の地層である。

第3層：暗褐色の細粒砂が主体の盛土層である。豊臣後期以前の地層と思われる。

ii) 遺構と遺物

遺構(図版21) 豊臣後期(図88-2)には土壌と思われる遺構があるが、ほとんどが後世の遺構に壊されている。SK101は直径約1.5m、深さ約0.7mの廃棄土壌で、最下層から銅鏡401(写真3)が出土した。徳川前期(図88-3)には井戸・土壌がある。SE001～003は出土遺物から17世紀後半～18世紀前半のものと思われるが、前後関係は不明である。なお、SK001は瓦溜りである。

遺物 401は直径5.3cm、縁厚0.4cmで、鏡面には木質が付着し、木箱に納められていたものである。鏡背紋様は二重圈線より内に菊花紋を配し、下方に「天下一」印刻銘を置く。通常、鏡を箱に入れる際

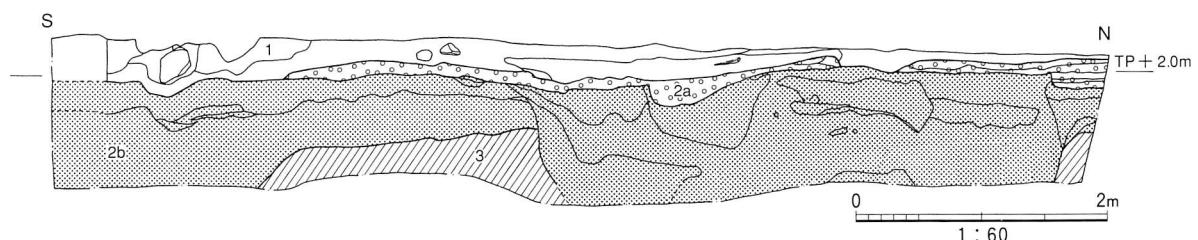
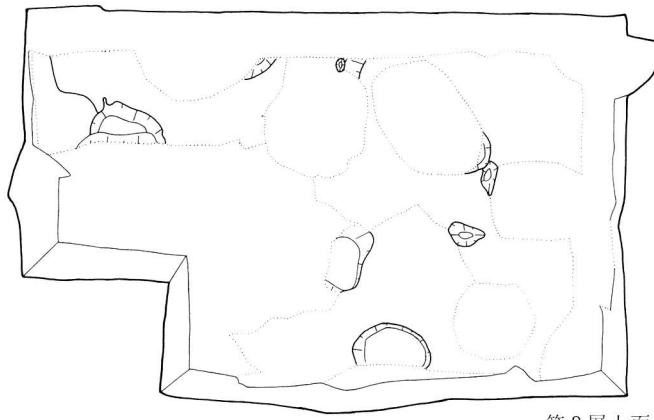
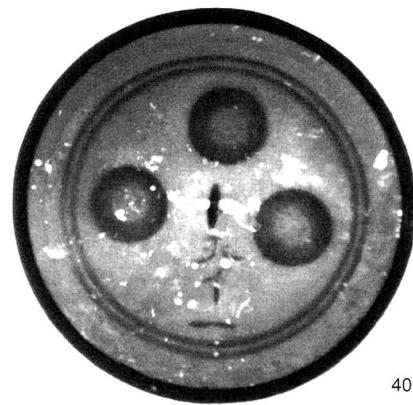


図87 東壁地層断面図

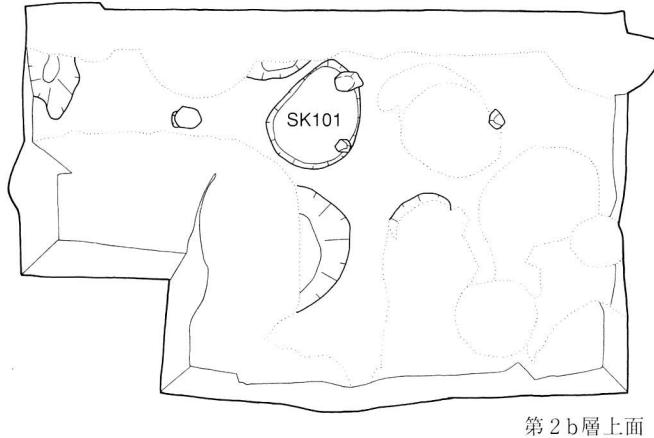


第3層上面



401

写真3 SK101出土鏡のX線写真



第2b層上面

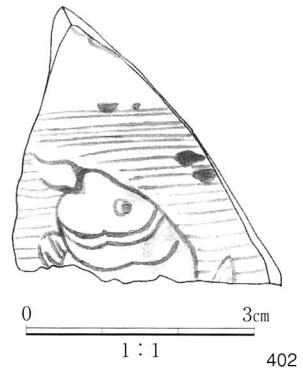


図89 釉裏紅実測図

に布などで包むが、布痕が無いため、直接箱に入れられた可能性も考えられる。また、第1層上面からは清朝磁器の釉裏紅の破片402が出土した。これはOJ92-18次調査で出土したものと酷似しており、17世紀後半～18世紀前半のものと考えられる。

3)まとめ

今回の調査では、豊臣後期～徳川前期

の遺構が見つかった。建物などは無く、また、井戸などの遺構はおもに調査区の南部の道から離れたところにある。このことから屋敷地内のこの部分は、建物間の空閑地であった可能性が高く、少なくとも18世紀前半まではその状態が続いていたようである。出土遺物では、まず釉裏紅の破片が付近の調査地との関係や輸入陶磁器の利用状況を知る上で重要である。またSK101出土の鏡は、豊臣期における人々の生活のようすを知る上で貴重な発見であるといえる。

(李)

第3節 OJ98-8次調査

1) 調査の経緯と経過

当地は大坂城下町跡の中央やや西寄りに位置し、周辺の調査では、豊臣期や徳川初期の遺構のほか、弥生時代後期～中世の遺構・遺物も多く出土している。特に梅檀木橋筋に沿った当調査地の北方300mに位置する平野町3丁目地点(OS88-82次)では、庄内式期(弥生時代末葉～古墳時代初頭)の遺物が多く見つかり、同一砂州上に位置すると考えられる当地でも同時期の遺構があるものと期待された。

既存の市立安土町駐車場を、(仮称)安土町複合施設に建替えることになり、工事に先立って調査することになったが、立体駐車場部分はすでにGL-10m以下まで掘削されており、遺構が残存しないことは明白なので、駐車場以外の部分を調査することになった。重機で駐車場建設時の盛土を除去し、

さらに旧船場小学校の建物基礎が深くまで入っていたため、これら近代の建物基礎も同時に撤去することにした。その結果、徳川期の遺構検出面が残っている範囲でGL-1.5m、攪乱を受けた範囲でGL-2.0m前後まで重機で掘削した。後者は調査面積の2/3に及び、その個所では城下町建設以前の風成砂層からの調査を余儀なくされた。本文に用いた方位は国土平面直角座標第VI系に、水準はTP値に基づく。

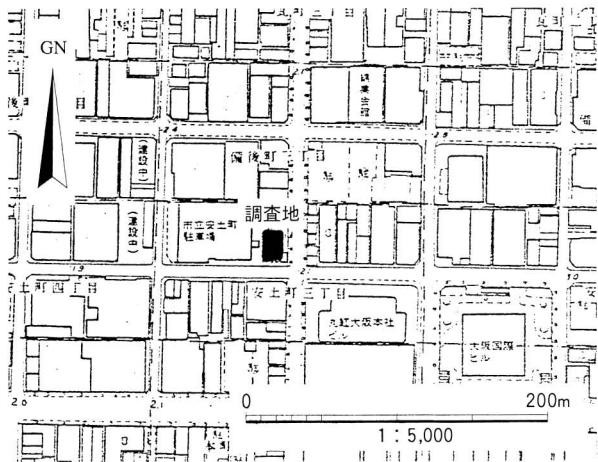


図90 OJ98-8次調査地位置図

2) 調査の結果

i) 層序(図91)

上面で遺構検出を行った層のみについて記す。

第1層：層厚20～30cmのオリーブ褐色小礫を含む細粒砂層で、徳川初期の整地層と考えられる。

第2A層：層厚15～30cmの褐色極細粒砂の風成層である。弥生土器から豊臣後期の唐津焼・青花にいたるまでの時代幅のある遺物を含む。次の第2B層とは層相が似かよっており、地層断面では分層できるが、平面的に分別することは困難であった。

第2B層：層厚15～40cmの褐色極細粒砂の風成層で、上面でSB301を構成する柱穴群や、柱穴と思われる穴が見つかった。

第3層：層厚20cm以上の明黄褐色細粒砂の風成層で、弥生時代後期～奈良時代の遺物を包含する。地層断面では確認できなかったが、上面から20cmほど下に層理面があるようで、本層の中途でSK337・338が検出された。SK337・338のベースとなっている地層は無遺物層の可能性がある。

ii) 遺構と遺物

a. 古代(図92～94・96、図版22～24)

第3層内検出遺構

SK337 長径3.2m、短径2.0m、深さ0.2mの平面が長楕円形の土壙で、西側をSK338に切られる。埋土上部で柳葉形銅鏡421や422をはじめとする5個の管状土錐が出土したことから、庄内式期の遺構と推定される。底面に2個所の浅い窪みがあり、東側は火によって変色したと思われる赤い細粒砂で埋っており、炉のような遺構と考えられる。

SK338 西半分が失われていたが、直径1.4m、深さ0.2mほどの土壙で遺物はない。

第3層出土遺物

古式土師器甕403・406・417、弥生土器底部407・408、飯蛸壺425、須恵器杯蓋432・433、杯434、高杯435、平瓶436、杯441が出土した。403・406は第V様式甕の系譜を引き、403の表面は煮炊きによって剥離している。407は内面をヘラケズリして器壁を薄く仕上げており、408は体部外面にタテ方向のヘラミガキを施す。432～436は南西部A地点(図93)で積み重なるようにして出土した。

第2B層上面検出遺構

SB301 SP301～306の柱穴からなる桁行2間(6.6m)、梁行2間(4.9m)の掘立柱建物で、SP307・308もこの建物に伴うと考えられる。遺物としては、SP303から頸部にカキメが見られる須恵器壺443、SP304から古式土師器甕405、SP307からタテ方向のヘラミガキを施した古式土師器直口壺409と須恵器杯蓋437、SP308から古式土師器甕404がそれぞれ出土した。奈良時代の建物と考えられる。

SP309 直径0.4m、深さ0.2mで、土師器高杯413が出土した。

SP310 直径0.2～0.4m、深さ0.2mで、外面にタタキメをもつ古式土師器甕414が出土した。

SP311 直径0.3m、深さ0.3mで、製塩土器と思われる410、小型丸底壺412、飯蛸壺426が出土した。

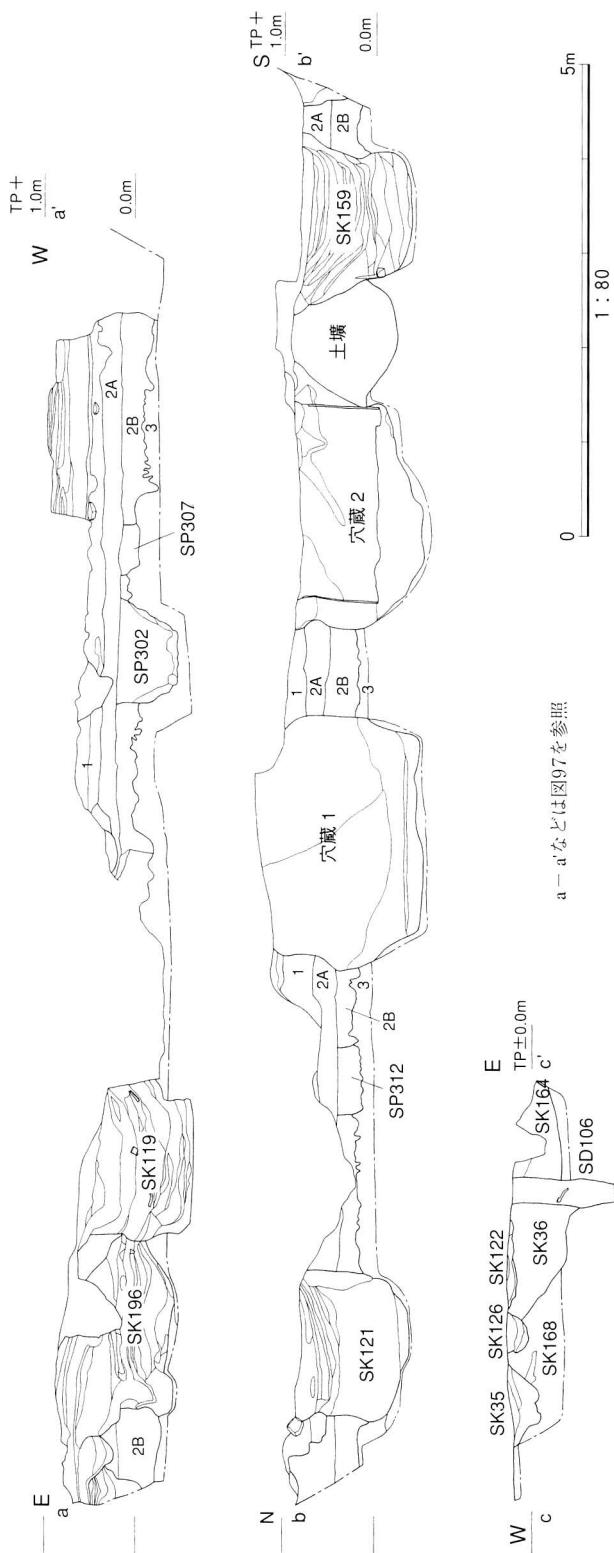


図91 地層断面図

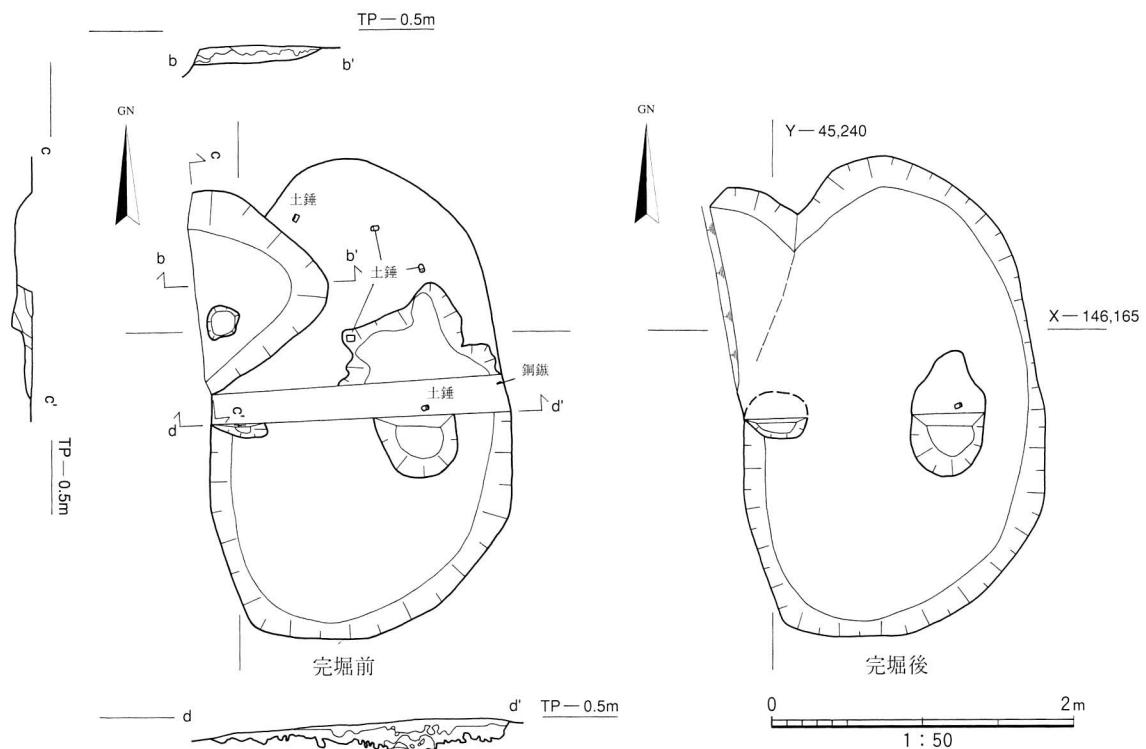


図92 SK337実測図

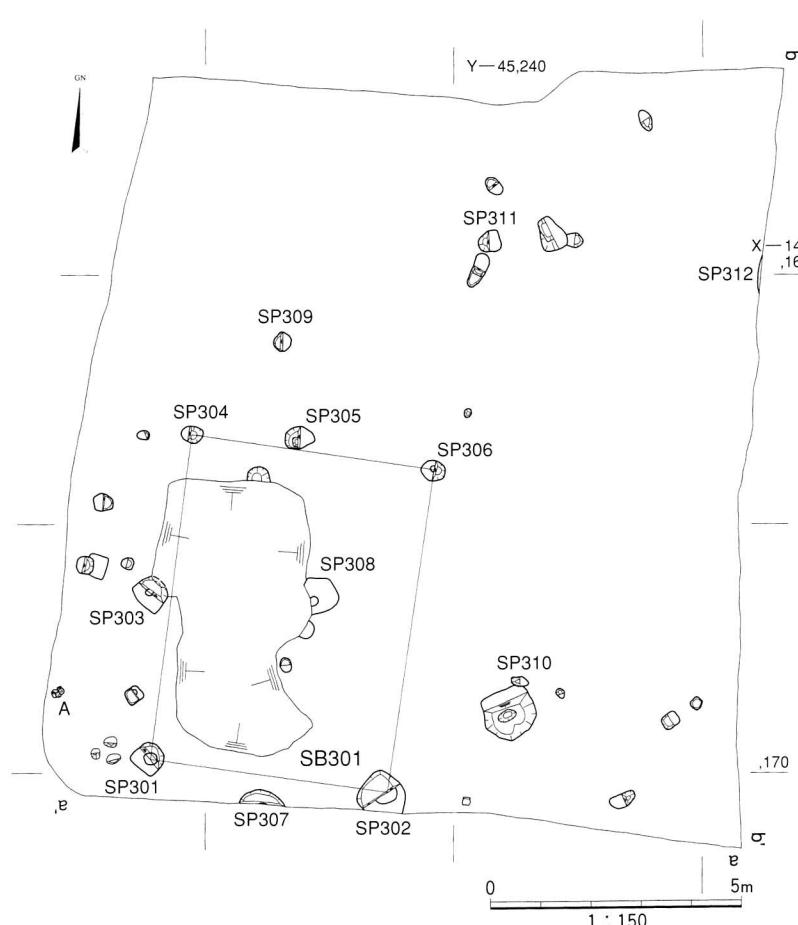


図93 第2B層上面検出遺構平面図

b. 近世(図95~97)

SE136・201をはじめとする井戸9基、西部の屋敷境と思われる柵SA01、北西部のSK36・64をはじめとする鉱滓や鋳造関係遺物を多く含む土壌群、東部の穴蔵2基などを検出した(図版24)。なお、穴蔵は2基ともに1724年の妙知焼けで焼失している。

第2A層上面検出遺構

SK119 南東部で検出した有機物を多く含む薄層で埋没した一辺1.8m、深さ1.1mの土壌で、白磁碗454、饅頭身の青花碗455、伊万里焼碗456・457、瀬戸美濃焼の天目碗458、志野焼碗459、唐津焼向付鉢460・461、唐津焼碗462~464、唐

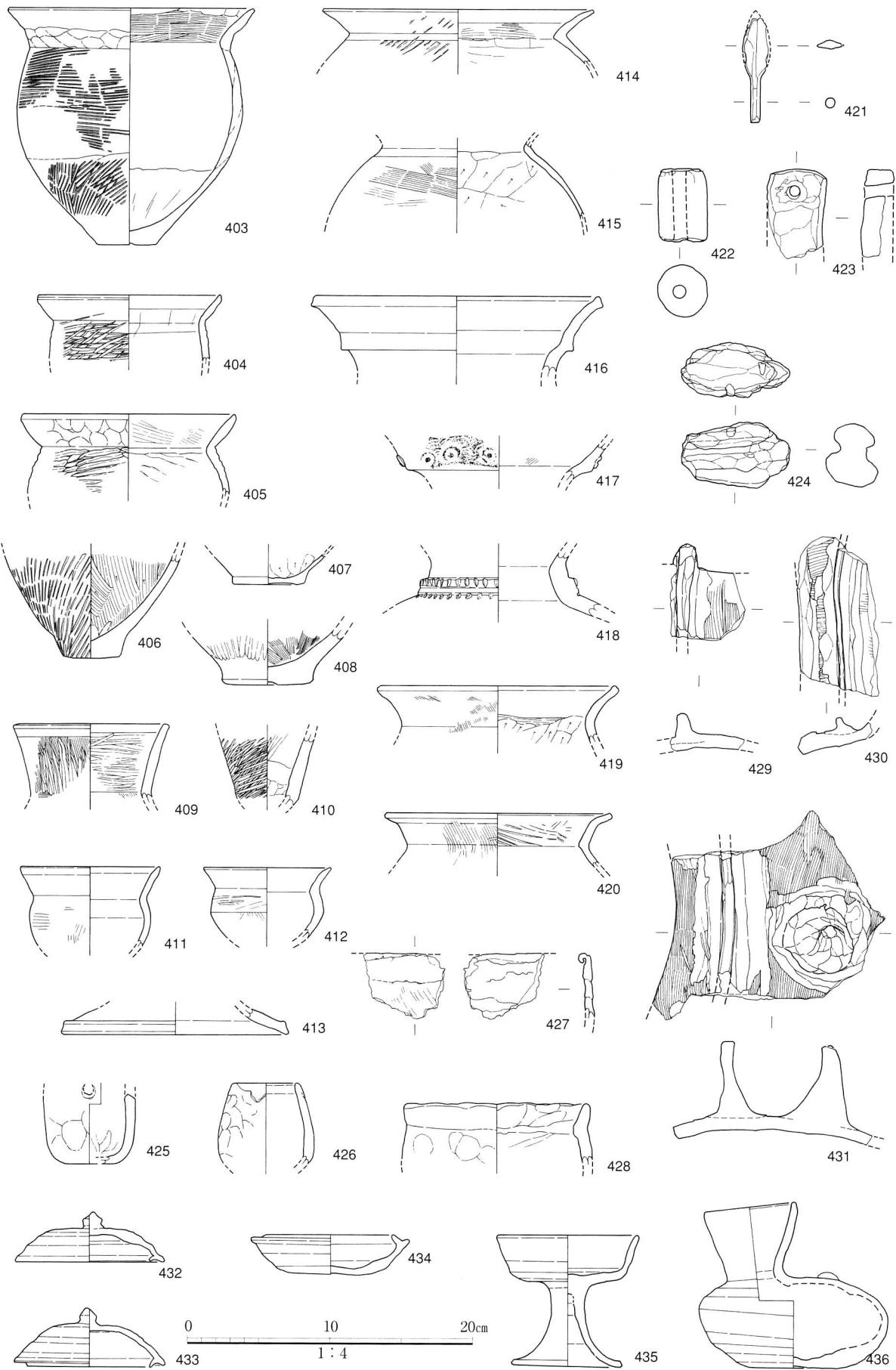


図94 出土遺物(1)(421のみ縮尺1/2)

SK337(421・422)、第3層(403・406~408・417・425・432~436)、SB01:SP304(405)・SP307(409)、SP308(404)、SP309(413)、SP310(414)、SP311(410・412・426)、第2A層(411・416・419・420・423・424・428・429~431)、遊離(418・427)

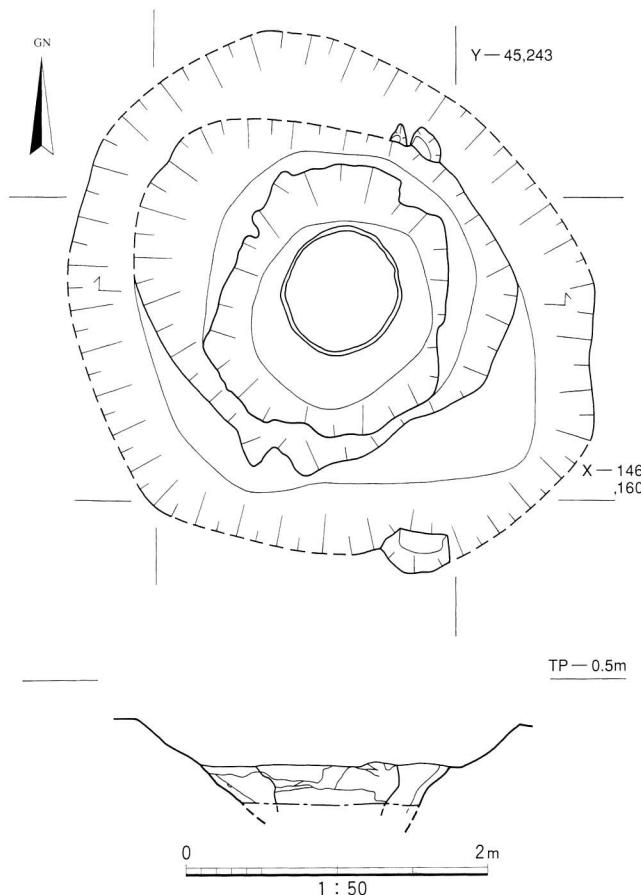


図95 SE201実測図

部糸切りの唐津焼壺452が出土した。井戸側内の埋土から鉱滓や伊万里焼が出土したことから、17世紀後半以降の埋没と考えられる。

第2A層出土遺物

層序の項で述べたように第2A・2B層は平面的に区分することは困難であったため、第2B層の遺物が混入した可能性がある。古式土師器の小型丸底壺411・二重口縁壺416・円形浮文を飾る壺417・甕419・420、土錘423・424、製塩土器428、竈429～431、須恵器の蓋438・439・杯440・鉢444、土師器杯442、青磁碗445が出土した。423は棒状で平面形が隅丸長方形をなす平べったい大型土錘で、424は側面が凹む有溝土錘である。430は内面をヘラケズリし、431は角状の把手をもち内面に布目痕跡が見られる。442は底部をヘラケズリする。445は外面に蓮弁をもつ。

第1層上面検出遺構

SA01 SK126などの柱穴からなる柵で、方位は北で東に5°振る。柱穴には切合い関係があることから、同じ位置での建替えが考えられる。

SK64 北西隅に位置する一辺2.0m以上の土壙で、支脚453など鋳造関係の遺物が多く出土した。

3)まとめ

今回の調査では、庄内式期のSK337とそれに伴う銅鏡・土錘や、奈良時代のSB301を検出し、また

津焼皿465～470、備前焼鉢471、土師質土器の鍋472、炮烙473、丹波焼の擂鉢474などが出土し、17世紀中葉のゴミ穴と考えられる(図版24)。

SE136 直径1.7mの井戸で、青花碗447、志野焼菊皿448、唐津焼丸皿449・天目碗450が出土した。

SK180 直径1.1mの17世紀後半頃の土壙で、伊万里焼・唐津焼のほかに、頸部に刻み目と刺突文をもつ土師器壺418が出土した。

SK196 一辺2.3m、深さ1.0mの土壙で、ゴミ穴とみられ、SK119に切られる。李朝青磁壺446、見込みに酢漿草を印刻した瀬戸美濃焼碗451が出土した。

SE201 北西部の土壙群の下層で検出された掘形上端の直径が2.5m、木製井戸側の直径が0.8mの井戸で、体部外面をハケメ調整した奈良時代の製塩土器427や底

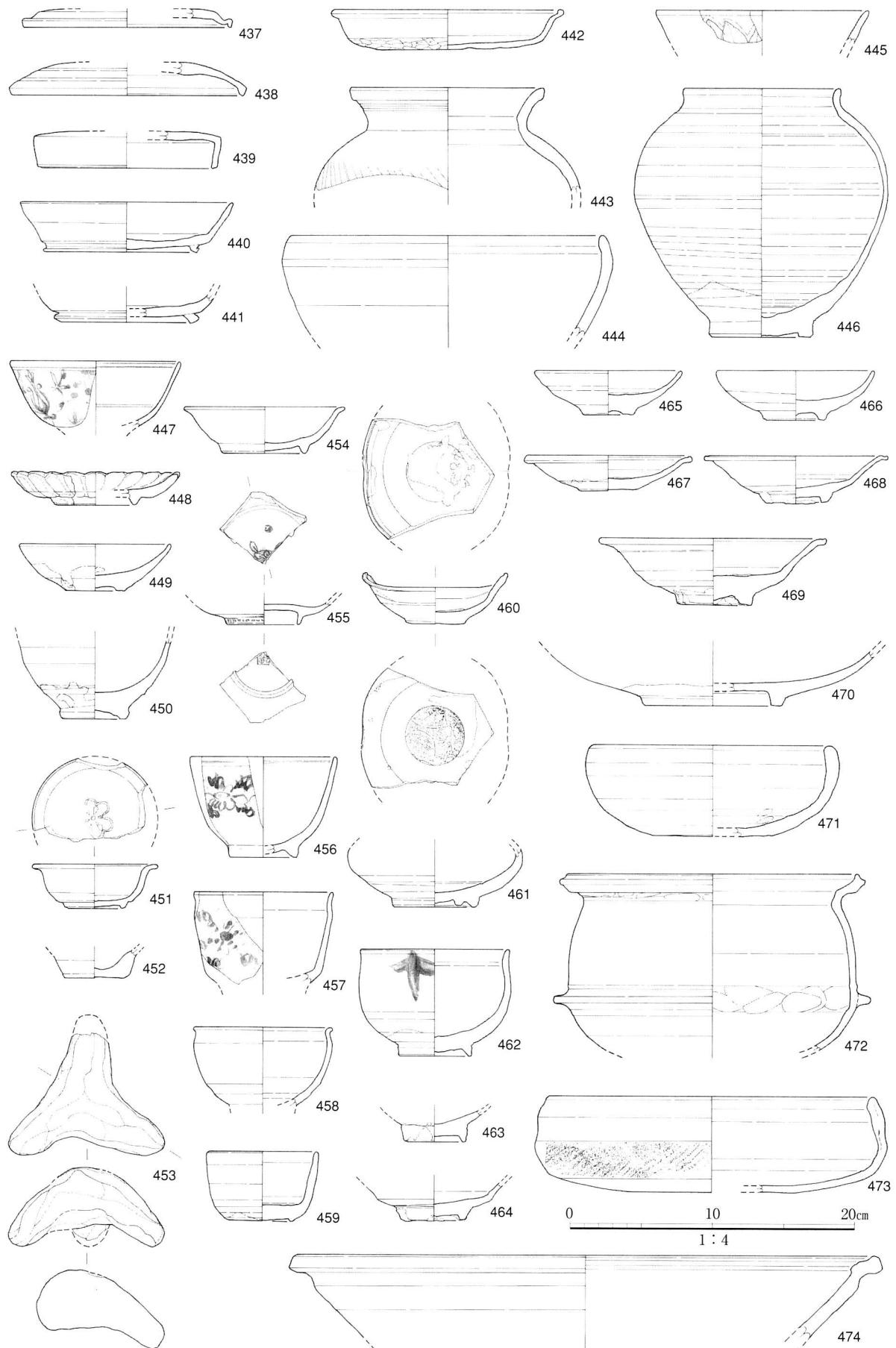


図96 出土遺物(2)

第3層(441)、SB301:SP303(443)、SP307(437)、SE201(452)、SK119(454~474)、SK196(446・451)、SE136(447~450)、第2A層(438~440・442・444・445)、SK64(453)

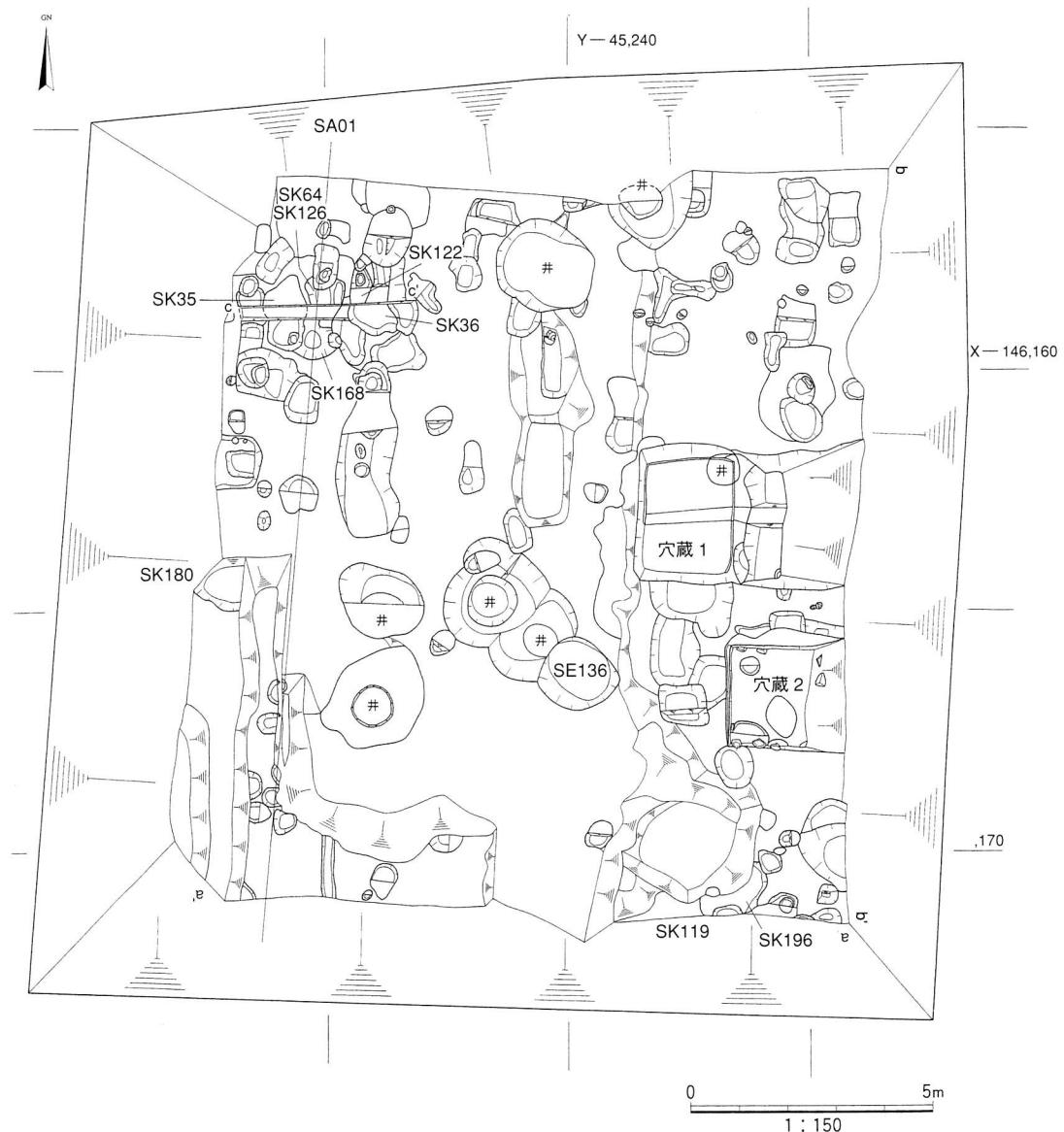


図97 第1層(一部は第2A層)上面検出遺構平面図

包含層からは庄内式期から奈良時代にいたる多くの遺物を採集するなど、古代以前に係わる多大の成果を得ることができた。

また、豊臣期に限定できる遺構は発見できなかったものの、徳川期の注目すべき遺構としては、第2A層上面検出のゴミ穴SK119・196があり、17世紀中葉の良好な一括遺物を得ることができた。さらに第1層上面の屋敷境のSA01や、北西部で出土した鋳造関係の遺物を多く含む土壙群は、徳川前期における当地での土地利用をうかがわせるものとして、貴重な成果である。 (黒田・清水和)

第X章 崇禪寺遺跡の調査

第1節 SZ98-1次調査

1) 調査の経緯と経過

本調査では1998年4月6日に発掘機材を搬入し、7・8日に重機による表土掘削を開始した。重機によりGL-1.2mまでを掘削した後、遺構を検出しながら人力によりGL-2.0mまで掘下げた。20日には、黄褐色粗粒砂～極粗粒砂で構成される水成堆積層に達した。この層の上面では遺物は認められなかった。調査区の中央と西側に部分的に試掘坑を設け、GL-2.9m(TP-0.07m)まで掘込んで、地層の堆積状況を観察し、水成堆積層が無遺物層であることを確認した上で調査を終了した(註1)。また4月20・21日に基準点測量を行った。なお、本報告で用いる水準はTP値に、方位は国土平面直角座標第VI系に基づく。

2) 調査の結果

i) 層序(図99、図版25)

第0層：現代の盛土層である。

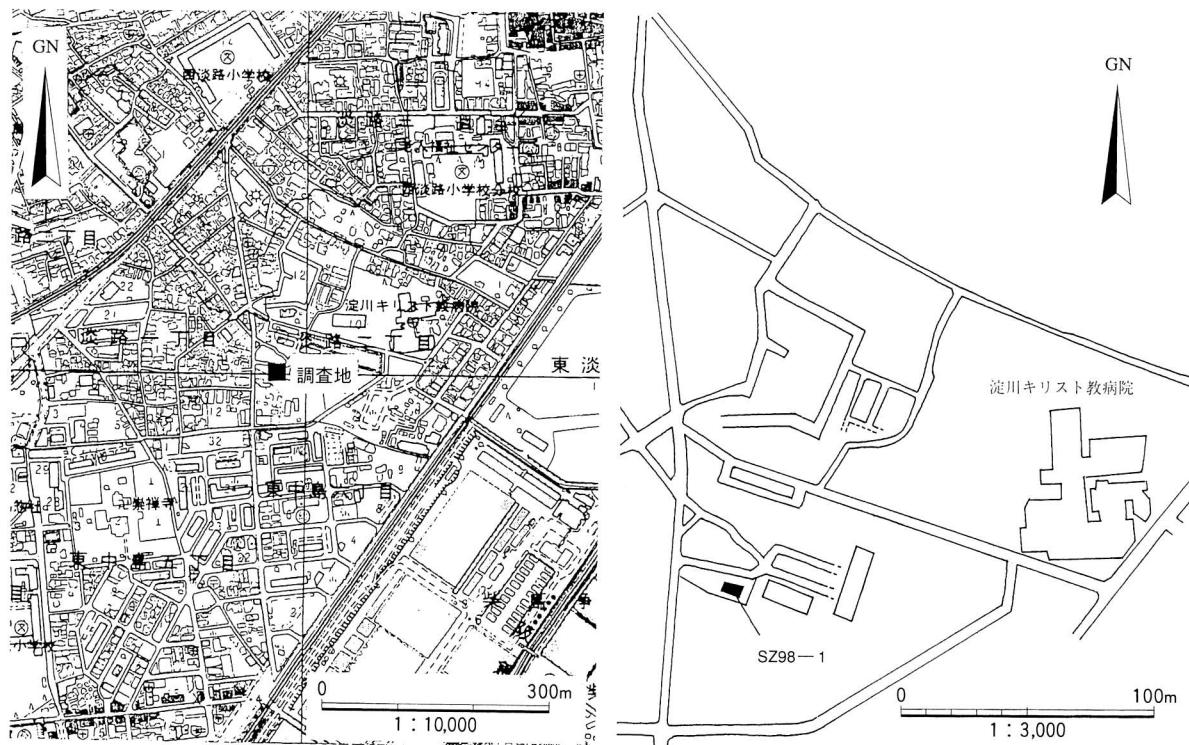


図98 SZ98-1次調査地位置図

第1a層：旧耕作土である。調査地の東側にのみ残っていた。

第1b層：シルト質細粒砂層である。コンクリート・ブロックや直径5～15cmの円礫、ビニールなどが含まれていた。

第1c層：炭および焼土層である。焼土は層厚3cm程度で調査区の北東部分に広がっていた。炭層は層厚1～3cm程度で、調査区の全体に広がっていた。太平洋戦争時の空襲によるものと考えられる。

第2a層：客土層で、褐色シルトを主体とし、層中に直径が5～15cmのシルト質粘土の偽礫を含んでいる。層厚は20～40cmで南側ほど厚く堆積し、調査区の東側に安定して認められた。

第2b層：灰色細粒砂である。この層の下部にビニールの断片が認められた。またこの層の北東部断面において、暗灰黄色中粒砂～中礫層を確認したが、重機掘削のため層の分布する範囲は確認できなかつた。

第2c層：暗灰黄色シルト質細粒砂である。平均層厚10cmで調査区全体にほぼ水平に広がっていた。

第3a層：オリーブ黒色シルト混り中粒砂で、木樁埋設時の埋土である。

第3b層：木樁内の埋土で、上部は黄灰色細粒砂混り中粒砂、下部はシルト質細粒砂で構成される。

第3c層：黄灰色シルト質細粒砂～細粒砂である。木樁の裏込めの土である。

第4a層：灰オリーブ色細粒砂で、層厚は8cm程度であるが、SD401の上部では20cmと厚く堆積していた。

第4b層：灰オリーブ色中粒砂で構成される。SD401の埋土(中層)で、層厚は20cm程度である。この層の下面には、第6a層を下刻するグループ・カストが観察された。

第4c層：オリーブ褐色粗粒砂で構成される。SD401の埋土(下層)である。この層の下面には、第5c層を下刻するグループ・カストが観察された。

第5a-1層：灰色シルト質細粒砂で構成される。層厚は4cmである。

第5a-2層：暗灰黄色シルト混り細粒砂によって構成される。層厚は14cmである。ラミナは観察されず、鉄分の集積が層の中程に帶状に認められ、作土層と判断した。

第5b層：暗灰黄色シルト質細粒砂で構成され、鉄分を多く含む。層厚は18cmである。

第5c-1層：灰オリーブ色シルト混り細粒砂で構成される。層厚は14cmである。

第5c-2層：SD601の埋土で、上部は灰色細礫～粗粒砂を少量含む細粒砂で、下部は灰色シルトを含む細粒砂である。

第6a-1層：暗灰黄色粘土で、調査地の東部分に分布していた。層厚8cmであった。

第6a-2層：黄灰色シルト質粘土である。上部は細粒砂・シルトを多く含む。層厚は12cmである。

第6b-1層：黒褐色粘土である。調査区の北東部に広がっていた。層厚は10cmである。断片化した植物遺存体が粘土の中に多く含まれていた。

第6b-2層：黄灰色粘土である。層厚は18cmである。植物遺体が多く含まれ、それらのほとんどは原型をとどめていた。また調査区南西部では、シルト質粘土の偽礫が観察された。

第6c層：暗黄灰色粘土である。層厚は22cmで調査区東側に広がっていた。

第7a層：オリーブ黄色粗粒砂で構成されていた層である。生痕と考えられる直径4～6cm、深さ14

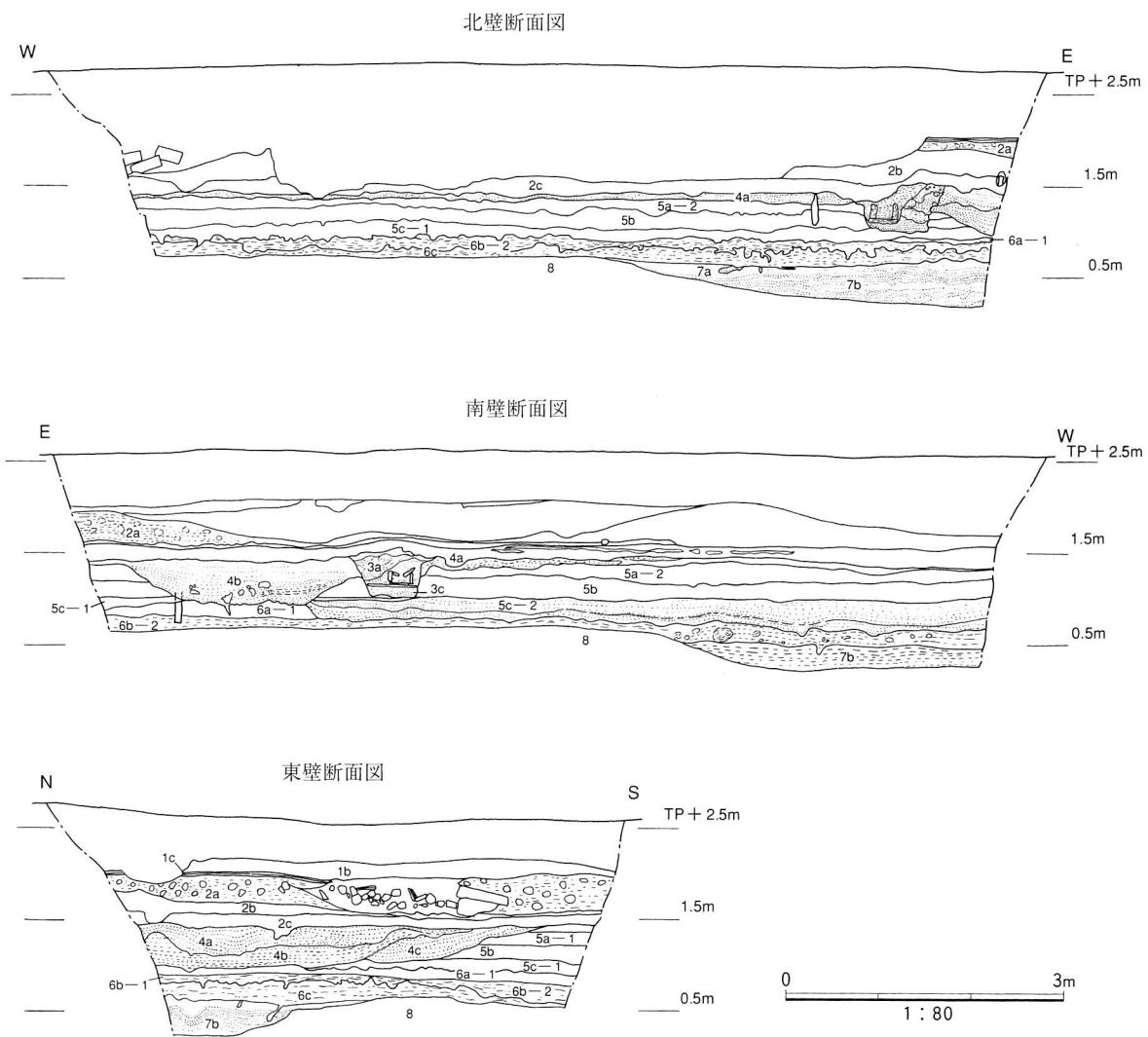


図99 地層断面模式図

cm程度の小穴の埋土である。

第7b層：灰色極細粒砂とオリーブ黒色シルト質細粒砂が交互に堆積する層である。ラミナは明瞭に観察されるが、変形していた。層厚は40cmで調査区北東部の落込みの中に堆積していた。

第8層：中粒砂と粗粒砂で構成されていた層であり、クロス・ラミナが発達していた。ラミナは東南東から西北西の方向へ傾斜していた(註2、図版25)。

ii) 遺構と遺物

a. 第5c-1層下面検出遺構(図100右・102・103、図版26)

SD601 調査区の南部で検出した。方位は南東一北西である。溝の埋土は極細粒～細粒砂を主体とし、ラミナが観察された。緩やかな水流の中で徐々に溝が埋没していったと考えられる。溝底の高さは東でTP+0.795m、西でTP+0.731mとなり、西に下がっていた。

溝の埋土上層(第5c-2層上部)からは土師器皿483、瓦質土器の羽釜510・515、備前焼の大甕520、埋土下層(第5c-2層下部)からは瓦質土器の羽釜511がそれぞれ出土した。

b. 第5b層下面検出遺構(図100左)

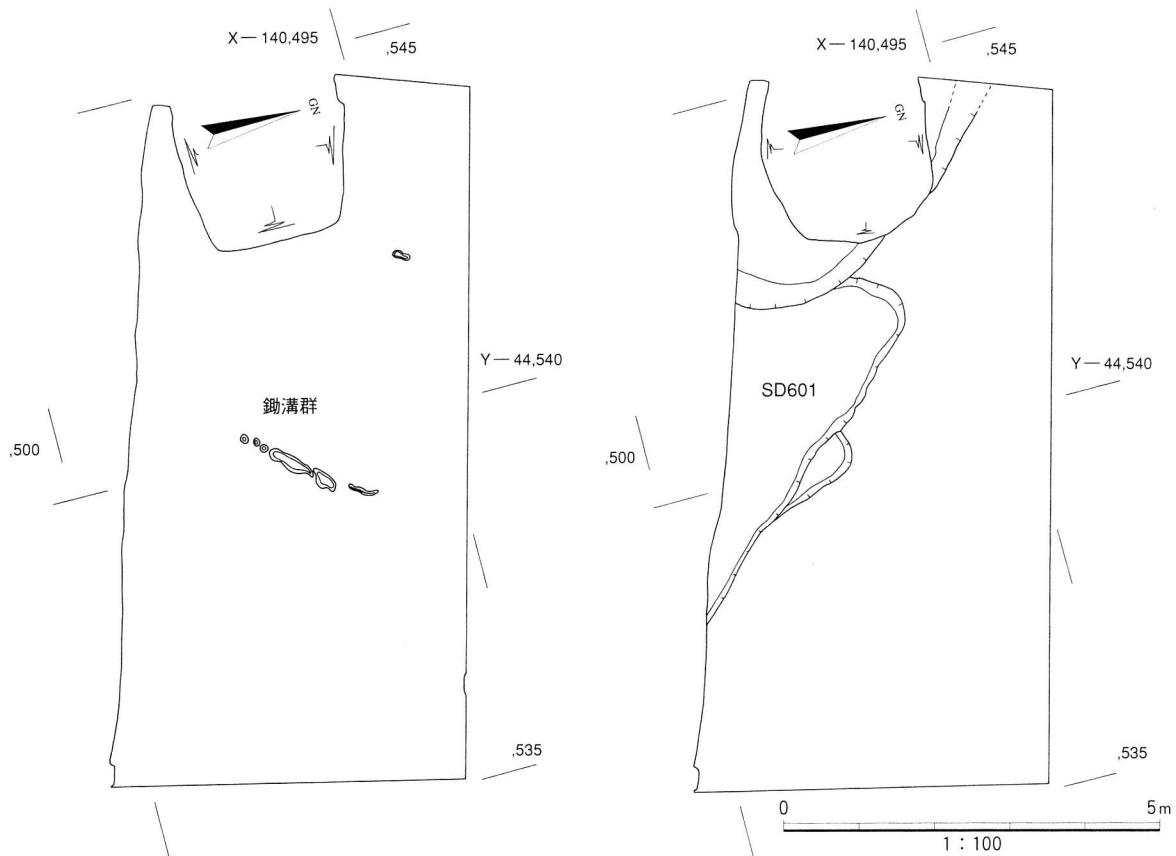


図100 遺構平面図(1)

鉤溝 調査区の西側で2条の鉤溝を検出した。方位はどちらも南西-北東であった。東側の1条は幅0.08~0.12mで、残存している深さは約0.03mと浅く、西側の1条についても痕跡をとどめるにすぎなかった。第5b層は下部に鉄分を多く含んでおり、淘汰も悪く、炭化物も混るため作土層と判断された。これらの鉤溝は第5b層を耕作した時の痕跡と考えられる。鉤溝の埋土中からは、遺物は出土しなかった。

c. 第4a層下面検出遺構(図101右)

SD401 調査区の東側で検出した溝で、方位は南西-北東である。幅1.8m、深さ1.1mで、溝の中は粗~中粒砂が堆積していた。溝の埋土は大きく上層(第4a層)、中層(第4b層)、下層(第4c層)の3層に区分できた。上層と中層は比較的粒径の細かな碎屑物による堆積であるのに対し、下層は粗粒砂が堆積していた。中層と下層において、南西から北東の方向に下がるラミナが観察され、水流の方向は南西から北東であったと判断される。

遺物は第4a層から弥生土器の甕底部527が、第4b層から青磁碗509、陶磁器496・497・506、第4c層から古式土師器の二重口縁壺524が出土した。

d. 第2層下面遺構(図101左、図版26)

木桶 調査区の東側で、南西から北東方向に延びる18世紀以降の木桶を検出した。第4a層を掘込んで幅0.6m、深さ0.4mの溝を設け、その中に敷設されたものである。一つの木桶は長さ3.9mで、それを複数連結して一連の施設ができていたと考えられる。木桶の内法は幅18cm、深さ16cmで、厚

さ3~5cm前後の針葉樹の板目板を使用していた。部分的に確認できたにすぎないが、木桶の底板と側板とは釘によって結合していた。天井板は土圧によって中央で割れているか、木桶の中に落込んでいた。木桶の底板上面の高さは、調査区の南端でTP+1.19m、北端でTP+1.173mである。南から北へ下がっており、木桶の中の水流の方向がSD401と同様に南西から北東に向うものであったと考えられる。木桶の内面基底から約6cm程度の厚さでシルト質細粒砂が堆積していた。遺物は裏込め土の中から釘529が出土した。

e. 噴砂

調査区の中央部から西側で噴砂の砂脈を検出した。砂脈の主軸は南東-北西である。噴砂は第8層の粗粒砂が噴き上げ、第6a層内の亀裂を充填していた。この亀裂は第5c層には認められず、第6a層堆積後、第5c層堆積以前のものと特定することができる。

f. 出土遺物(図102・103)

475~479・481~487は土師器皿である。皿は口径が6~10cmの小型のものと、口径14~16cmの中型のものに大別される。小型の土師器皿には、口縁端部をナデにより内湾ぎみに立上げるタイプ475~479と、口縁端部に強いナデを施し、つまみ出すようにして仕上げるタイプ481~483とがある。大まかな時期としては、前者は江戸時代の中頃、後者は室町時代後半から江戸時代初頭の時期に属するといえる。477・478は灯明皿で煤が口縁部に付着する。精良な胎土で、灰白色を呈する。器壁は戦国時代から江戸時代初期のものより若干薄く、また丸底の可能性が高いため、17~18世紀に属する

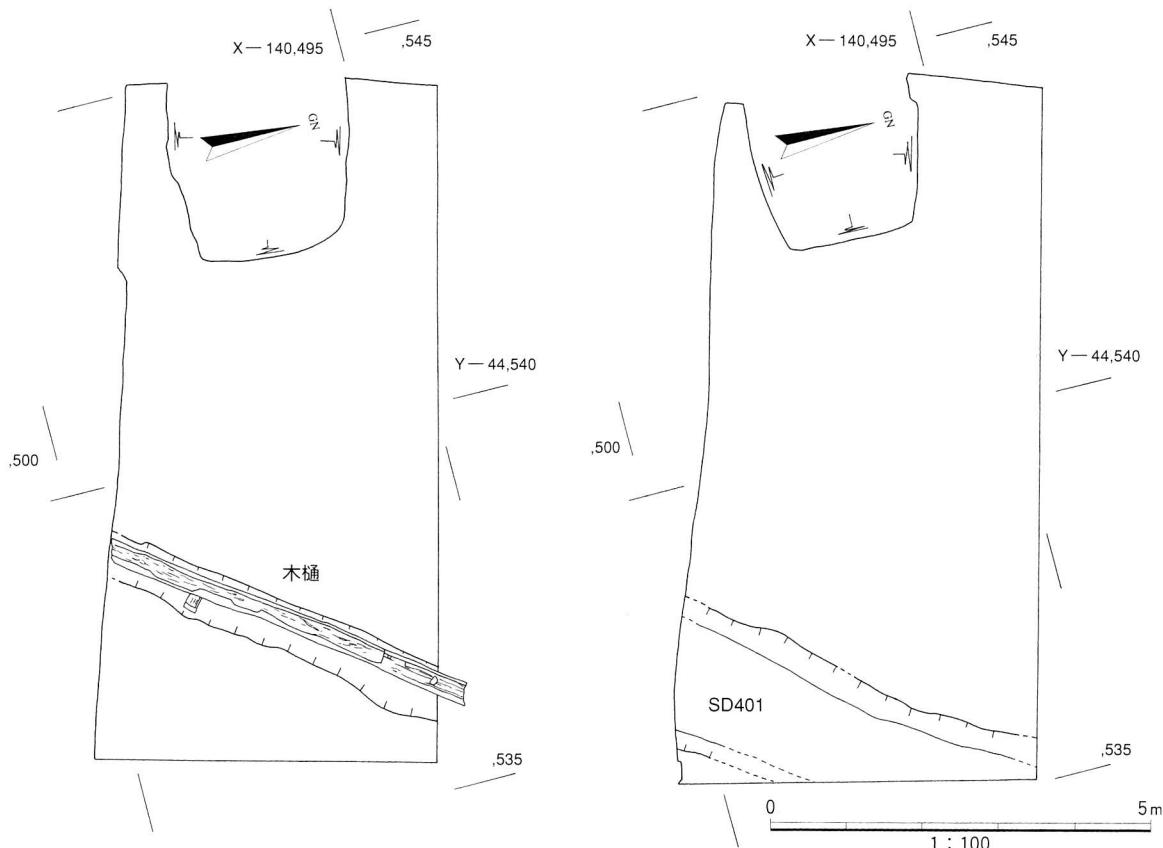


図101 遺構平面図(2)

資料と考えられる。486・487は白色系の平底の皿である。487は内面の立上がり部分に強いヨコナデが認められる。いずれも15世紀後葉の土師器皿の特徴を示す。480は内面に釉薬を施し、強いヨコナデによって仕上げている。18世紀頃の資料と考えられる。図示した破片以外に底部の破片も認められるが、いずれも平底で、内底面の圈線が不明瞭であり、15~16世紀前半の特徴を示すと考えられる。

488は瓦器椀の底部である。内面に格子状の暗文を入れる。鎌倉時代の資料と考えられる。489は白磁皿である。灰白~乳白色で貫入は認められない。古代の白磁碗・皿が口縁端部をまるく玉縁状に調整するのとは異なり、口縁部を外反させており「端反りの皿」と称されるものである。490は輪花形の皿である。491は小型の瓦質土器火鉢である。胴部の下方に花型を印刻している。492は唐津焼の片口である。493は水差しである。494・495はソバ猪口である。494は七宝繫文を手描きしている。495はプリントにより文様を転写するもので、点を用いて瑞鳥と雲文を表現している。近代以降の時期が想定される。496は唐津焼の粗磁である。497~499は陶磁器の碗の口縁部である。497は外面に

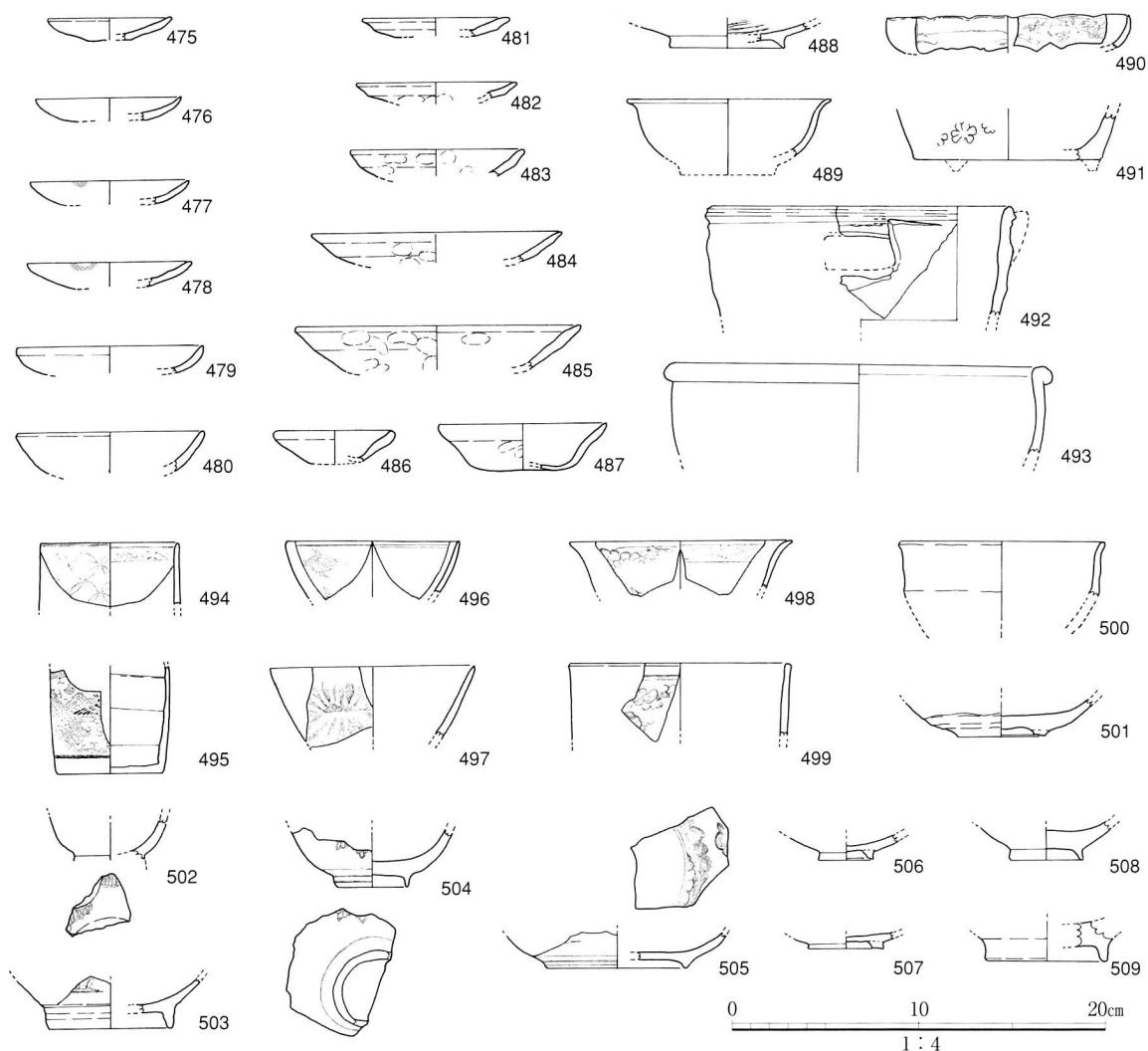


図102 出土遺物(1)

第1層中(495・499・505)、第2a層内(507)、第4a層上面(503・504)、第4a層内(494)、SD401中(第4b)層(496・497・506・509)、第5a-2層内(475・477~480・490・492・493・501・502・508)、第5b層下半(484・488)、第5b層内(486・489・500)、第5b層下面/5c層上面(476・491)、第5c層内(481・482)、SD601上(第5c-2)層(483)、第6a層内(487)、第6b層内(498)、排土中(485)

花の文様を筆で描いている。500は褐釉の天目茶碗の口縁部で、17世紀の資料である。501は碗の底
部である。高台内をヘラで搔き取って調整しており、縮緬皺のような器面となっている。底部外面は
露胎である。505は碗もしくは皿の底部と考えられる。紺色の呉須で輪郭を描き、やや淡い呉須で彩
色している。509は青磁の底部である。比較的大きめの貫入が認められる。畳付の部分は無釉である。

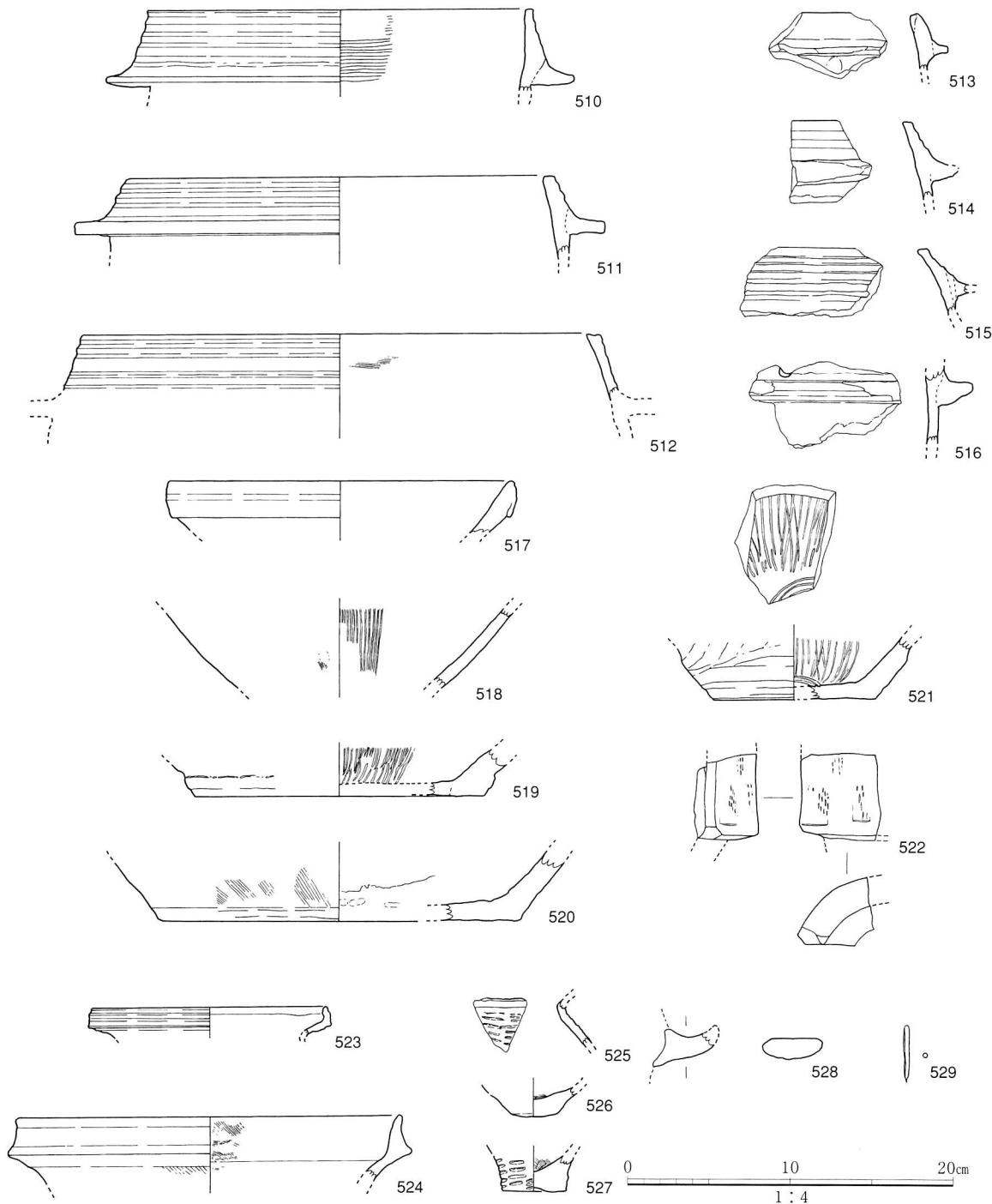


図103 出土遺物(2)

第3c(木桶裏込め)層(529)、SD401上(第4a)層(527)、第4b層?(528)、SD401下(第4c)層(524)、第5a-2層内(518・519・521)、第5a-2層下面/5b層上面(526)、第5c層内(512・513・516・517・522・523・525)、SD601上(第5c-2)層(510・515・520)、SD601下(第5c-2)層(511)、SD601(第5c-2層)(514)

510～516は炮烙・瓦質土器羽釜の口縁部および鍔の部分である。513は土師質土器の炮烙である。鍔の部分より下に煤が付着する。516は土師質土器の土釜である。鍔の上3mmの所に円孔が穿たれている。517・518は瓦質土器擂鉢、519は備前焼擂鉢、521は丹波焼の擂鉢である。518の摺り目は13本以上を一単位とする。521は内面立上がりの部分に加え、底部内面にも円形に摺り目を巡らしている。外面は立上がりの部分を右上にかき上げた後、底部側縁をヨコナデで仕上げている。520は備前焼の大甕である。内面はユビオサエ、外面はタテハケ調整を施す。

522は鎌倉～室町時代前半期の丸瓦である。素焼きであり、燻しの痕跡は認められない。側縁を鋭利な刃物で切り取りながら調整し、面取りをしている。外面はミガキで調整し、内面には布目圧痕が残る。玉縁は欠損している。

523～527は古式土師器である。523は吉備型甕口縁である。やや内傾ぎみに立上がり、凹線の起伏も明瞭なことから、下田所式に属するものと考えられる。暗茶褐色の胎土で石英・長石の他、角閃石を含み、吉備地域からの搬入品である可能性が高い。524は二重口縁壺の口縁部である。口縁部内外面をヨコナデで調整する。525は甕の頸部で外面は右上がりの比較的粗いタタキを施す。茶褐色の胎土で、角閃石・長石・石英を含む。526は凸レンズ状を呈する甕底部で、外面をナデ、内面をハケで調整している。527も甕底部で、外面をタタキ、内面をハケで調整している。528は甕の把手である。529は釘で、木樋の裏込めから出土した。長さ3.6cm、直径0.3cmである。

これらの遺物の年代をもとに第4層は18世紀、第5a-2層は18世紀、第5b層は17世紀、第5c層は15世紀末葉～16世紀、第6a層は15世紀後半であると判断される。またSD401は18世紀に掘削されて埋没しており、SD601は15世紀の後半に掘削され16世紀に埋没しているといえる。第5b層下面で検出した鋤溝群は16世紀以降18世紀以前の活動の痕跡と考えられる。また、地震は第6a層堆積後、第5c層堆積以前であり、15世紀末葉より古いが14世紀までさかのぼらない時期と考えられる。

3)まとめ

a. 本調査地ではTP+0.5m付近で、中世以前の河成堆積層が認められた。これは東南東から西北西へ流れる河川によるものである。この河成堆積層を基盤として中世以降の崇禪寺遺跡が形成されていた。

b. 15世紀後半には、この河川と同方向でSD601が掘削された。この溝は下半部が緩やかな流れで、上半部は比較的強い流れによって埋没し、土砂の一部が溝の周辺にオーバーフローしていた。また第5c-1層によってSD601が埋没する以前に地震があった。

c. 16世紀以降には、当該地は耕地として利用されていた。鋤溝は南南東から北北西に伸びるもので、18世紀に設けられるSD401の方向と一致する。

d. 18世紀以降に設けられたSD401は、幅も2.0mと比較的広く、この地域の用排水機能を担っていたと考えられる。この溝の埋没後も、木樋を設置することによって排水機能が踏襲されている。

e. 中世では、15世紀代の溝を検出した。出土した土器の型式から、この溝が機能していた時期は、崇禪寺の創建期に前後すると考えられる。崇禪寺の創建は嘉吉の乱で謀殺された足利義教の首級を葬っ

たことに因るもので、1442(嘉吉2)年には崇禪寺は成立していたと考えられている。本調査地の周辺の試掘調査でも、15世紀の遺構・遺物が多く確認され、それらが分布する範囲も東淀川区淡路1・2丁目まで及んでおり、弥生・古墳時代の遺跡の範囲より北へ拡大している。崇禪寺が創建されたとき、中島惣社の社領を割譲し、一町規模の周辺地域が寺領となったことが知られており(註3)、崇禪寺遺跡の北西約450mのところにある本調査地を含む周辺地域も、寺領として開発された可能性は高い。本調査地で検出されたSD601もこのような活動を示唆する証拠になるのかもしれない。いずれにせよ、崇禪寺の寺領の経営、生産活動の実態を知るための試みは、今後ともに同地域で継続される発掘調査の成果に期待すべきところが大きい。

f. 当初期待された弥生～古墳時代の遺構面は確認することができなかった。試掘調査によると、本調査地の周辺に弥生時代後期末葉から古墳時代初頭にかけての遺物が比較的高い密度で分布していることが明らかになっている。本調査地の南東約40mの地点、西約50mのSZ98-2次調査地、南南東約160mのSZ93-3次調査地、南約120mのSZ90-3次調査地で、それぞれ弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての土器がまとまって出土している。対称的に、本調査地の北側においては、これまでの調査で同時期の遺構・遺物は見つかっていない。しかし、本調査地の遺物包含層から同時期の土器片が少量ながら検出されたことは、当時の生活域からそれほど離れていないことを暗示している。以上の点から、本調査地は弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての崇禪寺遺跡の北限に当るものと判断され、ここの南側に当時の生活域が存在する可能性はきわめて高い。

また、1点ではあるが、弥生時代末葉から古墳時代にかかる時期に吉備地域から搬入された土器⁵²³が出土したことも貴重な成果である。これまでにも崇禪寺遺跡では、同時期の東海・近江・北陸・山陰・吉備の各地域からの搬入品が、大阪府教育委員会の調査[大阪府教育委員会1981]や、SZ89-6・13次調査で出土している。とりわけ吉備型甕は出土数が多く、型式も才ノ町Ⅱ式から亀川上層式にわたり、比較的時期幅が長い。今回得られた資料は下田所式に属し、搬入された吉備型甕のなかでも古相のものである。古墳が出現する前後の時期に、各地の土器が遠隔地にもたらされる現象が明らかにされているが、同時期の大規模な交流を示す証拠の一つとしてこの吉備型甕は注目される。(杉本)

註)

(1)堆積構造と砂堆の成因に関する情報は平朝彦氏の見解を参考にした[平朝彦1991]。

(2)崇禪寺遺跡は河内潟の時代に発達をとげた長柄砂州の上に位置するとされる[梶山彦太郎・市原実1986]。

本調査地のベースの砂堆(第8層)の形成時期は第8層が無遺物のため特定できなかった。

(3)三浦圭一氏が崇禪寺の寺領が形成された過程をまとめられている[三浦圭一1988]。それによると、嘉吉2年に成立した崇禪寺を取囲む寺領は、北は淡路荘、南は法花寺山、東は明王院山柴島左衛門尉知行地、西は新溝の範囲に広がるものであったとされる。

引 用・参 考 文 献

伊藤純1990、「葦をはりつけた井戸」：大阪市文化財協会編『葦火』27号、pp.6－7

大橋康二1989、『肥前陶磁』、ニュー・サイエンス社

大阪市文化財協会1984、『難波宮址の研究』第八

1985、『和田マンション建設に伴う加美遺跡発掘調査(KM85-6)略報』

1991、『上町台地の遺跡－大阪市天王寺区清水谷町の調査－』

1992、『小林清一氏による建設工事に伴う大坂城跡発掘調査(OS92-7)略報』

1998a、『大阪市住吉区山之内遺跡発掘調査報告』

1998b、『大阪市東住吉区桑津遺跡発掘調査報告』

1999a、『大阪市阿倍野区阿倍野筋遺跡発掘調査報告』

1999b、「加美遺跡の調査」：『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告－1997年度－』、pp.27－56

1999c、『大阪市住吉区山之内遺跡発掘調査報告』II

1999d、『大阪市東淀川区崇禪寺遺跡発掘調査報告』I

大阪府教育委員会1981、『崇禪寺遺跡発掘調査概要』I

梶山彦太郎・市原実1986、『大阪平野のおいたち』、青木書店、pp.80

古代の土器研究会編1992～1994、『都城の土器集成』I～III

佐原真1968、「近畿地方」：『弥生土器集成』本編2、東京堂出版、pp.53－72

白木小三郎1994、「船場の町割りと町屋－その形式と推移－」：『大阪市文化財論集』、pp.53－71

平朝彦1991、「碎屑物の移動とその機構」：『地球表層の物質と環境』、岩波書店、pp.27－29

田中清美1986、「加美遺跡の検討」：『古代を考える』43

田辺昭三1966、『陶邑古窯址群』I、平安学園考古学クラブ

1981、『須恵器大成』、角川書店

趙哲済1995、『大阪市平野区長原・瓜破遺跡発掘調査報告』VII、大阪市文化財協会編、pp.19－34

寺井誠1999、「阿倍野筋遺跡の変遷」：大阪市文化財協会編『大阪市阿倍野区阿倍野筋遺跡発掘調査報告』、pp.29－31

寺沢薰・森井貞雄1989、「河内地域」：『弥生土器の様式と編年－近畿編I－』、木耳社、pp.41－146

奈良国立文化財研究所1976、『平城宮発掘調査報告』VII、奈良国立文化財研究所学報第26冊

1978、『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』II、奈良国立文化財研究所学報第31冊

林野全孝1949、「摂津阿部廃寺について－概要－」：『建築学会研究報告集』4

藤沢一夫1941、「摂河泉出土古瓦の研究」：『仏教考古学論叢』

三浦圭一1988、「中世後期の莊園と公領」：『新修大阪市史』、p.517

明山大華1933、「阿倍寺塔心礎石」：『考古学雑誌』二十三卷第一号

米田敏幸1991、「土師器の編年－近畿－」：『古墳時代の研究』6、雄山閣、pp.19－33

脇田修1994、「近世大坂の経済と文化」、人文書院

あとがき

大阪市内では1年間に数10件にのぼる埋蔵文化財の発掘調査が行われ、我々にはその成果を可能な限り迅速に社会に伝えていく義務がある。本書を含めた『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告』のシリーズは、まさにその役目を担うものであろう。

1998年度では、11遺跡にわたり16件の試掘調査・発掘調査を報告することができた。とくに、阿倍寺跡の調査報告は、初めて刊行されるもので、大阪市内の古代寺院を解明していく過程での重要な資料となろう。また、他の遺跡に係わる報告も、既刊の報告書の内容をさらに補強するものとしてご活用いただきたい。

ひとつひとつは大部の報告をなしたわけではなく、内容に不十分な点も少なくないが、今後、本シリーズの刊行を重ねていくことで、各遺跡のさまざまな様相がいっそう鮮明に浮かび上がってくること信じている。大方の忌憚なきご叱正をお願いする次第である。

(田中清美)

索引

〈地理・地層に関する用語〉

あ 吾彦火山灰 6
 し 地震 110
 な 長柄砂嘴 4
 長柄砂州 4, 111

難波砂堆 76, 92
 ふ 噴砂 107
 へ 平安神宮火山灰 28, 42
 よ 横大路火山灰 27, 39, 42

〈遺構に関する用語〉

あ 足跡化石 6
 い 井戸 5, 8, 10, 16, 17, 18, 19,
 20, 21, 26, 28, 47, 63, 72,
 74, 84, 91, 94, 95, 98, 100
 せ 背割下水 75, 91, 92
 と 土壇 4, 51, 60

ほ 方形周溝墓 3, 5, 9, 10, 12~16, 18,
 20, 21, 24~26
 掘立柱建物 5, 26, 33, 34, 38, 43, 46,
 48, 49, 61, 63, 97
 も 木樁 5, 10, 12, 104, 106, 107,
 109, 110

〈遺物に関する用語〉

い 生駒西麓 15, 25, 44, 45, 48, 66
 石庖丁 5, 36
 か 貝 5, 54, 60, 76, 79, 89, 93
 刀 86
 瓦当 56, 71
 軽石 17
 き 漁撈具 4, 6
 こ 古式土師器 5, 97, 100, 106, 110
 さ サヌカイト 30, 36
 し 下田所式 110, 111
 庄内 3, 5, 9, 10, 12, 15, 17,
 20, 21, 25, 26, 43~45, 48,
 49, 50, 96, 97, 100, 102
 せ 製塩土器 5, 6, 69, 79, 80, 97, 100
 た 蜷壺 5, 80, 97
 ち 中国青花 82, 84

つ 土人形 5, 47, 48, 66
 て 鉄滓 5, 53~55, 60
 と 刀子 54
 銅鏡 5, 94
 銅鑓 5, 17, 97, 100
 土錘 3, 5, 46, 48, 69, 97, 100
 の 軒(丸・平)瓦 5, 56, 60, 71, 72, 82
 は 墳輪 5, 79, 80, 91
 ふ 布留 3, 5, 9, 12, 15, 20, 25,
 26, 48, 49, 50
 へ ベトナム製陶磁 84
 や 焼塙壺 82, 84, 86, 88, 91
 ゆ 釉裏紅 5, 95
 り 李朝青磁 100
 龍泉窯系青磁 53~56

Osaka City Archaeological Reports

1998

A Report of Excavations
at the
Kami, Yamanouchi, Kuwazu, Momogaike, Abenosuji,
Abe Temple, Naniwa Main Street, Naniwa-Capital Suzaku Street,
Osaka Castle, Osaka Castle-town and Sozenji Sites

March 2001

Osaka City Cultural Properties Association

Notes

The following symbols are used to represent archaeological features, and others , in this text

SA : Palisade or Fence

SB : Building

SD : Ditch

SE : Well

SK : Pit

SP : Pit or Posthole

SR : Paddy field

SX : Other feartures

CONTENTS

Foreword

Explanatory notes

Acknowledgements

Chapter I Outline of the investigations and sites	1
S.1 Research conducted during 1998	1
S.2 Outline of each site	3
1) Kami and Yamanouchi sites	3
2) Kuwazu, Momogaike, Naniwa Main Street, Naniwa-Capital Suzaku Street, Abenosuji and Abe Temple sites	3
3) Osaka Castle, Osaka Castle-town and Sozenji sites	4
S.3 Investigation results from trial excavations	6
1) AS98-1	6
2) ND98-6	6
3) NS98-1	7
Chapter II Kami site	9
S.1 KM98-8	9
1) Progress and outline of research	9
2) Investigation results	10
3) Conclusion	20
Chapter III Yamanouchi site	27
S.1 YM98-5	27
1) Progress and outline of research	27
2) Investigation results	27
3) Conclusion	30
Chapter IV Kuwazu site	31
S.1 KW98-3	31
1) Progress and outline of research	31
2) Investigation results	31
3) Conclusion	38
Chapter V Momogaike site	39
S.1 MG98-6	39
1) Progress and outline of research	39
2) Investigation results	39
3) Conclusion	42
Chapter VI Abenosuji site	43
S.1 AS98-7	43
1) Progress and outline of research	43

2) Investigation results	43
3) Conclusion	48
Chapter VII Abe Tmplesite	
S.1 AB98-5/6	51
1) Progress and outline of research	51
2) Investigation results	51
3) Conclusion	60
Chapter VIII Osaka Castle site	
S.1 OS98-3	61
1) Progress and outline of research	61
2) Investigation results	62
3) Conclusion	66
S.2 OS98-55	69
1) Progress and outline of research	69
2) Investigation results	69
3) Conclusion	72
Chapter IX Osaka Castle-town site	
S.1 OJ97-6	75
1) Progress and outline of research	75
2) Investigation results	76
3) Conclusion	91
S.2 OJ98-2	94
1) Progress and outline of research	94
2) Investigation results	94
3) Conclusion	95
S.3 OJ98-8	96
1) Progress and outline of research	96
2) Investigation results	96
3) Conclusion	100
Chapter X Sozenji site	
S.1 SZ98-1	103
1) Progress and outline of research	103
2) Investigation results	103
3) Conclusion	110
References	
Postscript	112
Index	

English Table of Contents and Summary

Reference Card

ENGLISH SUMMARY

The Osaka City Cultural Properties Association (OCCPA) undertook the excavations at 44 locations, totally covering 9, 971 square meters during fiscal 1998. In this volume we report the results of 11 of these excavations prior to the development by private enterprises and 4 trial investigations at the request of the Osaka City Board of Education, ranging from between the Yayoi (300 BC ~ AD 300) and Pre Modern periods (18th C AD).

Remains dating to the Yayoi period include a number of pottery vessels dating to the end of Late Yayoi period excavated from a well at the Kami site (Site no. 1).

Kofun period (4th ~ 6th C AD) remains include the additional three graves at the hokei-shukubo (square-shaped, moated burial tomb) previously found at the Kami site. This information has helped to clarify how the burial precinct expanded over time. Additionally, the remains of a large-scale hottatebashira structure (a structure with the pillar embedded directly in the ground) were found at the Abenosuji site (Site no. 5). When combined with previous results from the Abenosuji site, these remain help to identify how the village changed as it expanded through the Late Yayoi and the Kofun periods.

Asuka and Nara period (7th ~ 8th C AD) results come from excavations undertaken at the Kuwazu (Site no. 3) and the Abe Temple (Site no. 6) sites. The remains of an unidentified structure were found at the Kuwazu site. Roof-tiles were found within one of the structure's post-holes. These roof-tiles are thought to have been associated with the former Tanabe Temple, which was located near this site in ancient times. The Abe Temple, strongly associated with the ancient Abe Clan, had not previously been subject to a full-scale investigation. Excavation of the site revealed no features dating to the time of the temple's construction. The remains of ditches from a later date and a large number of roof tiles were found however. The ditches are thought to have originally surrounded the temple grounds. A thorough study of the roof-tiles, included a number of tiles thought to be from the original Abe Temple, may help researchers to clarify how the Temple changed over time.

Medieval (AD 1192 ~ 1603) and Pre-Modern (AD 1603 ~ 1868) period results come from the Osaka Castle (Site nos. 7-8) and Osaka Castle Town (Site nos. 9 -11) sites. A great number of artifacts including ceramic vessels were recovered from building remains, wells and cellars at the sites. The remains of residential structures and features related to agricultural activities were found at the Yamanouchi (Site no . 2) and Momogaike (Site no. 4) sites. A small number of Medieval and Pre-Modern features were also found at the Sozenji site (site no.12).

Principal features and remains of each research

	Site code	Yayoi	Kofun	Asuka / Nara	Heian	Kamakura / Muromachi	Azuchi-momoyama	Edo	Note
1	KM98-8	Well, ditch, pit Yayoi ware	Tomb 3 <i>Haji</i> ware, bronze arrow-head				Field	Field	
2	YM98-5					Ditch <i>Ga</i> ware	Field		
3	KW98-3	Post-hole, ditch, pit Yayoi ware, polished stone reaper, lithic tool	Ditch <i>Haji</i> ware	Structure2 <i>Haji</i> ware, <i>Sue</i> ware, tile	Structure3, pit <i>Haji</i> ware, <i>Sue</i> ware, smoked <i>Haji</i> ware, pottery				
4	MG98-6					Post-hole, ditch, pit, field baulk <i>Haji</i> ware, <i>Sue</i> ware, <i>Gu</i> ware, tile			
5	AS98-7		Structure1, ditch, pit <i>Haji</i> ware, <i>Sue</i> ware			Ditch, pit <i>Ga</i> ware		Foundation-stone, pit, Well, ditch <i>Haji</i> ware, pottery, figure	Structure1 during and after ancient period
6	AB98-5 + 6			<i>Sue</i> ware, tile	Tile	<i>Haji</i> ware, <i>Gashitsu</i> ware, <i>Bizen</i> ware, imported porcelain, tile, stone mortar, iron object, bowl shaped iron slag, shell			
7	OS98-3		Post-hole, well, pit <i>Haji</i> ware, <i>Sue</i> ware			Structure <i>Ga</i> ware, <i>Gashitsu</i> ware		Pit, field Ceramics, tile, figure	
8	OS98-55		Fence, post-hole, ditch, pit <i>Toshitsu</i> ware	<i>Haji</i> ware, <i>Sue</i> ware, tile		Ditch, pit <i>Sue</i> ware, <i>Ga</i> ware	Pottery	Post-hole, well, pit <i>Haji</i> ware, <i>Sue</i> ware, ceramics	
9	OJ97-6	Yayoi ware	<i>Haniwa</i>		Post-hole, pit <i>Haji</i> ware, <i>Sue</i> ware, smoked <i>Haji</i> ware, octopus trap pottery	Pit <i>Haji</i> ware, <i>Ga</i> ware, <i>Gashitsu</i> ware, pottery, tile	Well, ditch, pit Ceramics, imported porcelain	Furnace, house, well, pit, fence <i>Haji</i> ware, <i>Gashitsu</i> ware, ceramics, wooden writing tablet, wooden artifact	
10	OJ98-2						Pit Bronze mirror	Well, pit Imported porcelain, tile	
11	OJ98-8		Pit <i>Haji</i> ware, octopus trap pottery, bronze arrow-head, net sinker	Structure Salt washing pottery				Well, fence, pit, cellar Ceramics, imported porcelain, artefact associated with casting	
12	SZ98-1	Yayoi ware	<i>Haji</i> ware			Ditch <i>Ga</i> ware, <i>Gashitsu</i> ware, imported porcelain, tile	Field	Wooden water pipe, ditch <i>Haji</i> ware, ceramics	
13	AS98-1		archaeological layer						
14	ND98-6								Layers of lower terrace and middle terrace formation
15	NS98-1					Well <i>Gashitsu</i> ware, tile			

Further Reading

Osaka City Cultural Properties Association
 1999 *Osaka City Archaeological Reports 1996*, Osaka. (In Japanese, with English summary)
 1999 *Osaka City Archaeological Reports 1997*, Osaka. (In Japanese, with English summary)

報告書抄録

ふりがな	おおさかしまいぞうぶんかざいはっくつちょうさほうこく 一1998ねんど一						
書名	大阪市埋蔵文化財発掘調査報告 一1998年度一						
編著者名	清水和明・大庭重信・杉本厚典・清水和・小倉徹也・辻美紀・李陽浩・平田洋司・黒田慶一・趙哲濟・森毅・久保和士・田中清美・Robert Condon						
編集機関	財団法人 大阪市文化財協会						
所在地	〒540-0006 大阪市中央区法円坂1-1-35 TEL06-6943-6833						
発行年月日	西暦 2001年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード	北 緯	東 経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
	市町村	遺跡番号					
かみ 加美遺跡	ひらののかみひがし 平野区加美東	27126	—	34°37'29"	135°34'30"	19981124～ 19990212	241 民間による建設工事1件
やまのうち 山之内遺跡	すみよし あさか 住吉区浅香	27120	—	34°35'27"	135°30'09"	19980525～ 19980708	200 大阪市による建設工事1件
くわづ 桑津遺跡	ひがいすみよし くわづ 東住吉区桑津	27121	—	34°37'29"	135°34'30"	19980427～ 19980514	108 民間による建設工事1件
ももがいけ 桃ヶ池遺跡	あべのももがいけ 阿倍野区桃ヶ池	27119	—	34°37'43"	135°31'01"	19990118～ 19990203	72 民間による建設工事1件
あべのすじ 阿倍野筋遺跡	あべのあべのすじ 阿倍野区阿倍野筋	27119	—	34°38'11"	135°30'44"	19980410～ 19981126	240+※2 民間による建設工事1件 大阪市による建設工事1件
あべのみ 阿倍寺跡	あべのまつさきちょう 阿倍野区松崎町	27119	—	34°38'23"	135°31'07"	19990125～ 19990226	160 民間による建設工事1件
おほさかじょう 大坂城跡	てんのうじ しみずだにじょう 天王寺区清水谷町 ・中央区糸屋町	27109	—	34°41'00"	135°31'44"	19980417～ 19990218	295 民間による建設工事2件
おおさかじょうかまち 大坂城下町跡	ひらのまち びんこまち 中央区備後町・ ひらのまち あづちちょう 平野町・安土町	27128	—	34°40'50"	135°30'36"	19970916～ 19981126	1,080 民間による建設工事3件
さうせんじ 崇禪寺遺跡	ひがいよじわい あわり 東淀川区淡路	27114	—	34°43'50"	135°30'44"	19980406～ 19980423	71.2 民間による建設工事1件
なにわいとく 難波大道路	ひがいとく ながいこさえん 東住吉区長居公園	27121	—	34°36'55"	135°31'33"	19980629～	※ 5 大阪市による建設工事1件
なにわきょうすぞくおねじ 難波京朱雀大路跡	てんのうじ こくあくよう 天王寺区国分町	27109	—	34°39'45"	135°31'39"	19980402～ 19980403	26 民間による建設工事1件
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			
加美遺跡	集落・墓	弥生・古墳・安土桃山・江戸	井戸・方形周溝墓・田畠	弥生土器・古式土師器・銅鏡			
山之内遺跡	集落	鎌倉室町・安土桃山・江戸	溝・田畠	弥生土器・瓦器			
桑津遺跡	集落	弥生・古墳・飛鳥奈良・平安	柱穴・溝・建物	弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器			
桃ヶ池遺跡	集落	鎌倉室町	柱穴・畦畔	土師器・須恵器・瓦器			
阿倍野筋遺跡	集落	古墳・鎌倉室町・江戸	建物・溝・井戸	古式土師器・瓦器・土師器・陶器			
阿倍寺跡	社寺	鎌倉室町	区画溝	白鳳瓦・土師器・陶磁器・鉄製品・鉄滓			
大坂城跡	集落	古墳・飛鳥奈良・鎌倉室町・ 安土桃山・江戸	土壇・井戸・建物・畑	土師器・須恵器・陶質土器・陶磁器・瓦			
大坂城下町跡	集落	古墳～江戸	竈・建物・井戸・溝・土壇	古式土師器・土師器・須恵器・瓦器・瓦質 土器・陶磁器・瓦・木製品・銅鏡			
崇禪寺遺跡	集落	鎌倉室町・安土桃山・江戸	溝・田畠・木樋	古式土師器・土師器・瓦質土器・陶磁器			
難波大道路	その他						
難波京朱雀大路跡	集落	鎌倉室町	井戸	瓦質土器・陶器・瓦			

※は試掘壙1つを1m²として計算

図 版

方形周溝墓の調査風景
(東から)

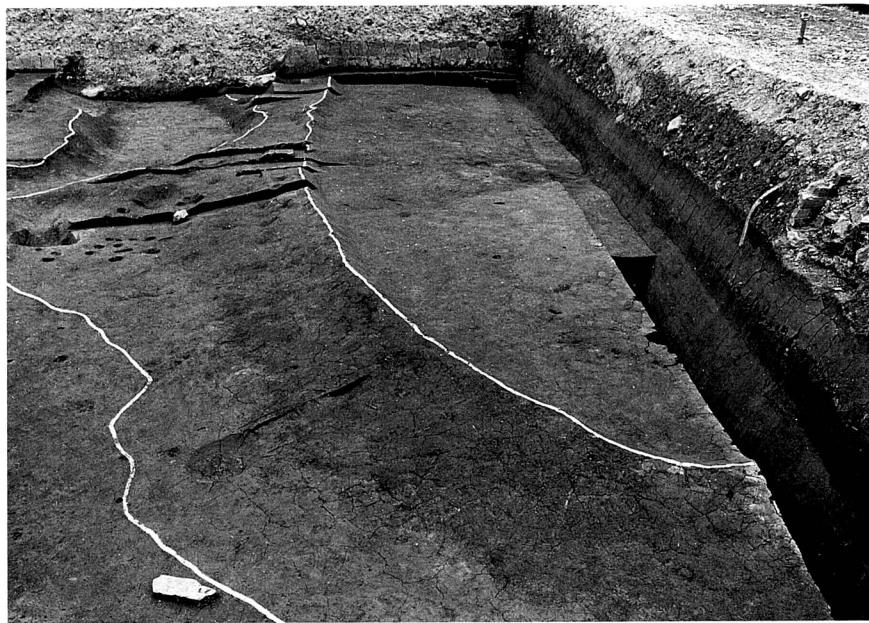


1号方形周溝墓完掘状況
(南東から)



2号方形周溝墓完掘状況
(東から)





3号方形周溝墓完掘状況
(南から)



SE601上層(北から)



SE601完掘状況
(北から)

図版三 KM98-8次調査の遺物（二）



SE601出土土器(1)

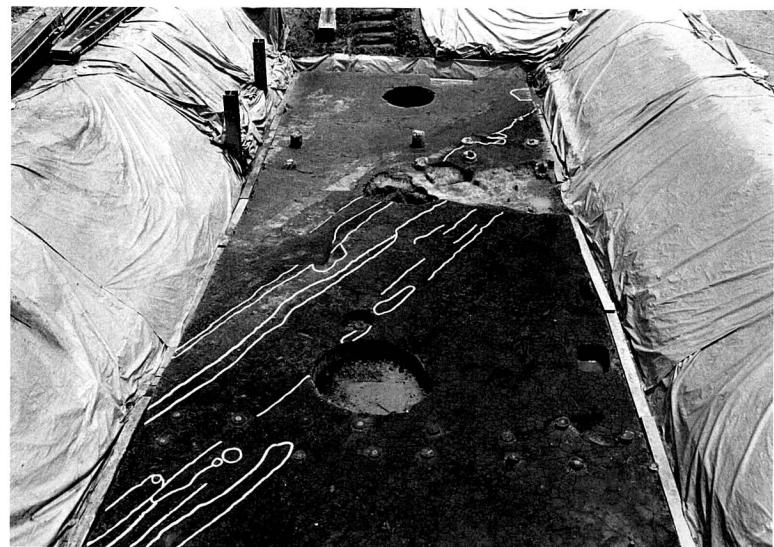


SE601出土土器(2)



2号方形周溝墓(3・4・6・7)、SP604・SD607(15)、SX605(16)、第7層(17)、SE601(33・52・53)

第2層下面検出遺構(西から)



SD103完掘状況(東から)



調査終了状況(西から)





調査区全景(南から)



SD01(西から)

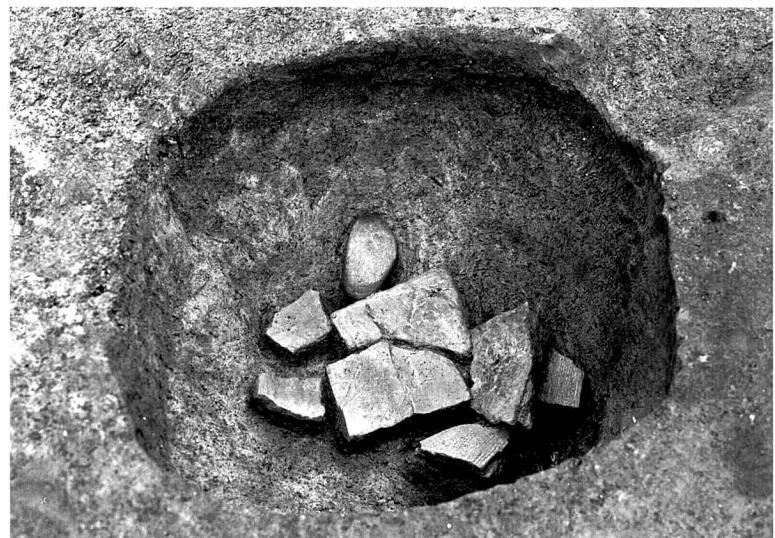


SD03西壁断面

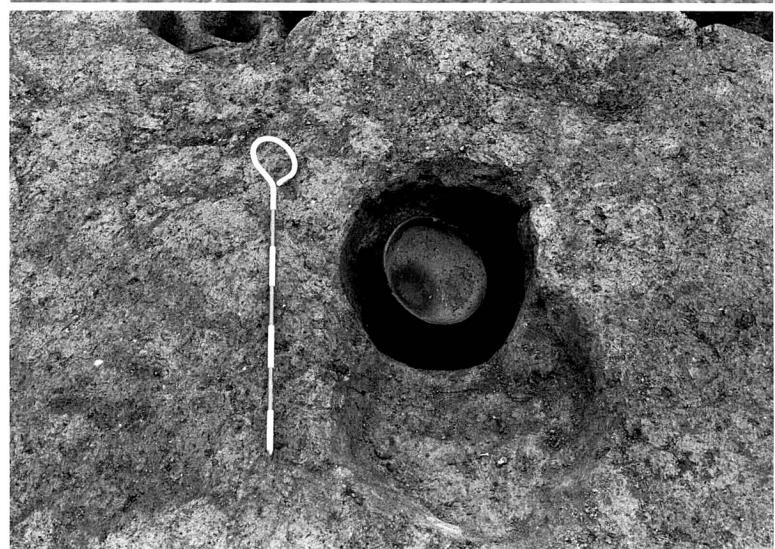
SB01・02(北から)



SP13



SP36遺物出土状況





調査地全景
(北西から)



北壁地層断面
およびSD301
(東半部：南から)

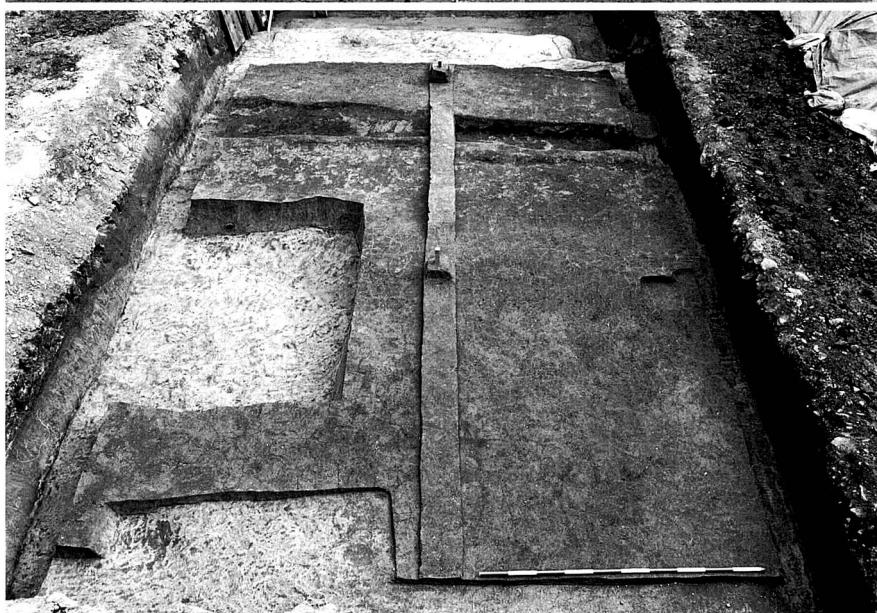


第5層上部上面検出状況
(北東から)

SR501検出状況
(北東から)



第5層下部上面検出状況
(西から)



SD501完掘状況
(北から)





調査地東半完掘状況
(東から)



SB01完掘状況
(北から)

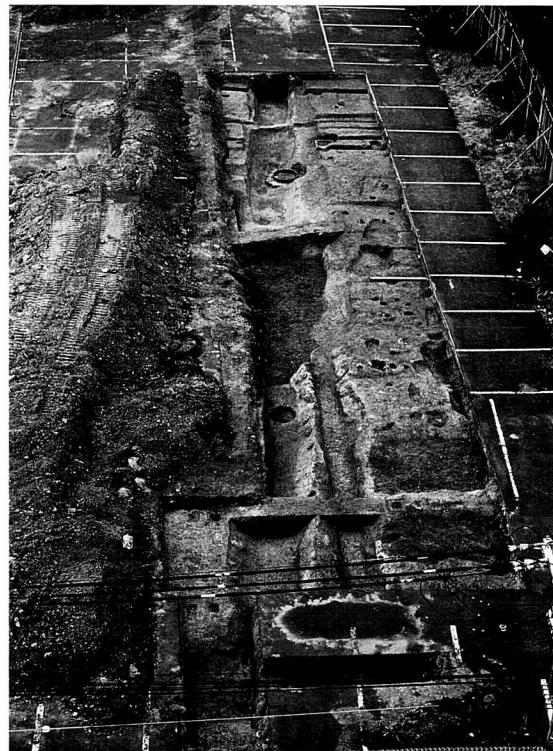


SB01柱穴完掘状況
(北から)

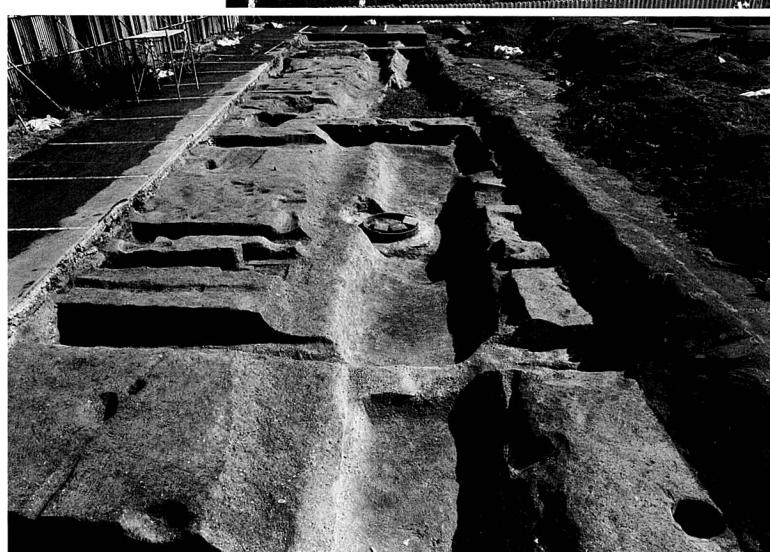
調査地全景(東から)



1区SD01・02(東から)



1区SD01・02(西から)





1区SD01・02地層断面
(東から)



4区全景(東から)

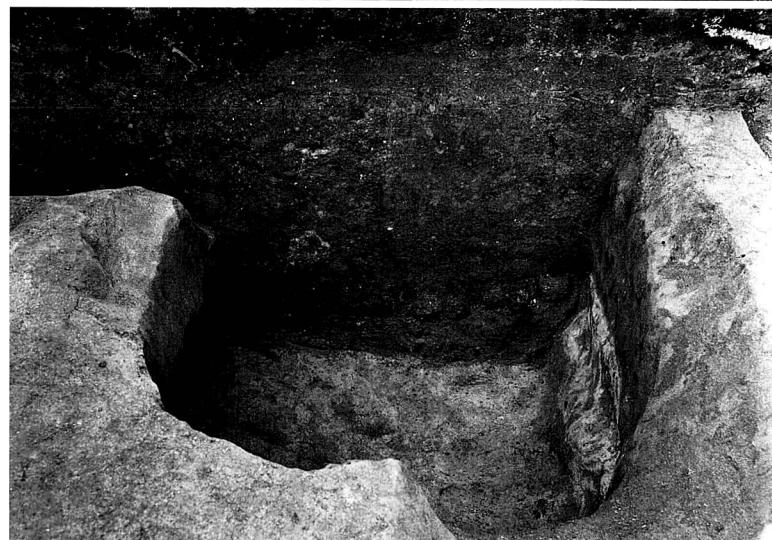


4・5区落込み1
(北東から)

3・6区全景(西から)



6区SK18地層断面

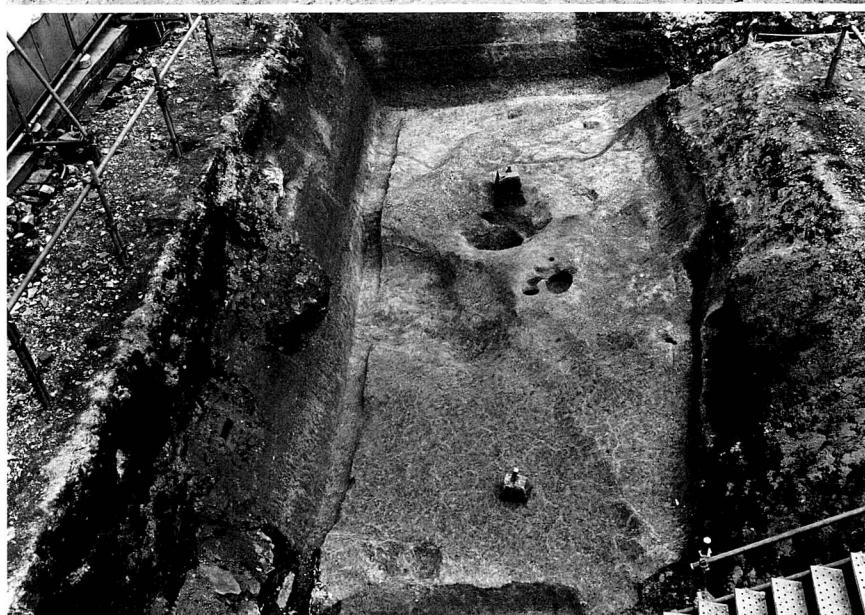


6区SK06遺物出土状況





1区西壁断面
(北部、東から)



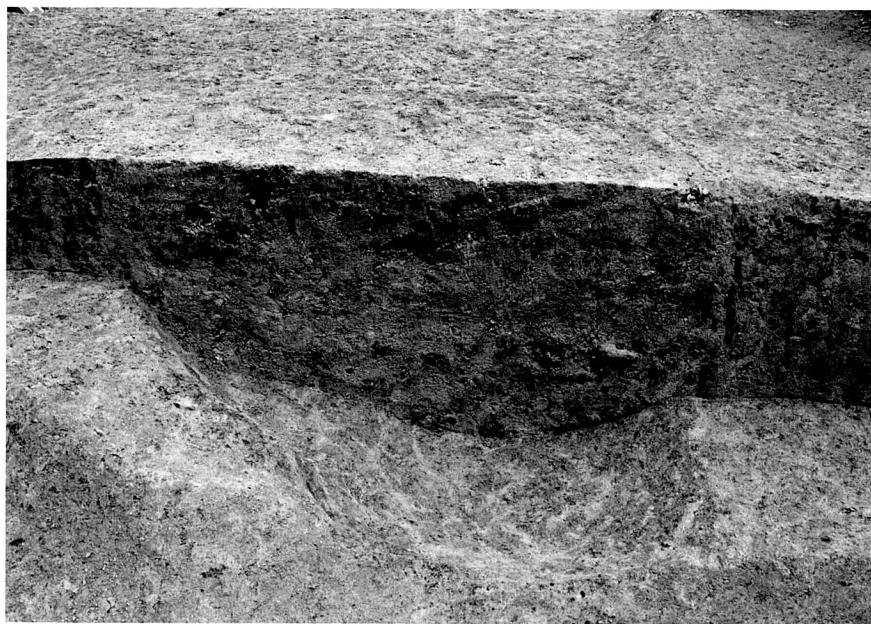
1区完掘状況(南から)



2区地山上面遺構
完掘状況(南から)

図版一五
OS98-3次調査の遺構(二)

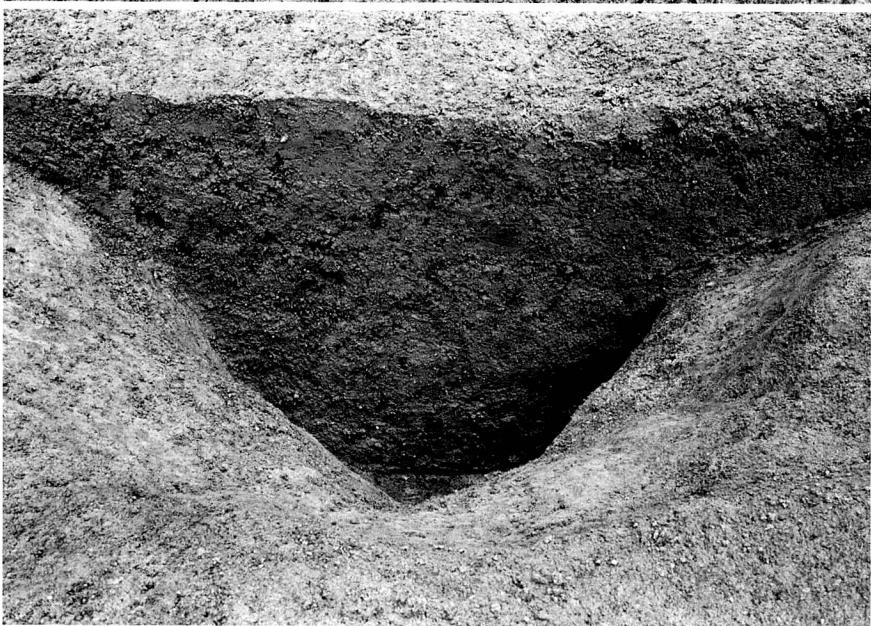
SK801断面(南から)



SK801土器出土状況
(第8a層上面、東から)



SE701断面(南から)





第3層下面、第4・5層
上面遺構検出状況



SK401土器出土状況
(北から)



SD301断面
(東から)

ザトウクジラおよび貝出土相当層
(南から)



I期の遺構(南から)



I期の遺構(東から)





SX102完掘状況
(南から)



竪4・5完掘状況
(南から)



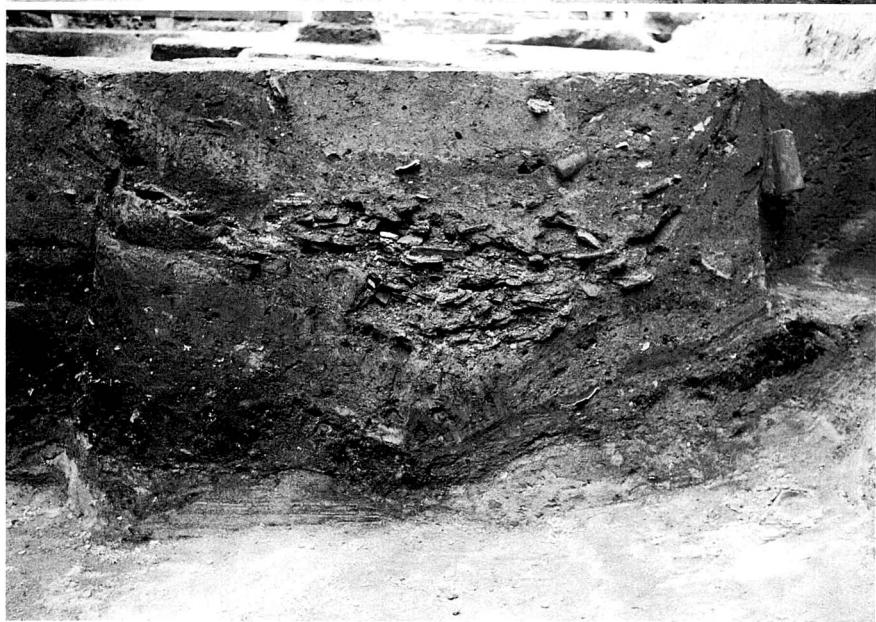
SB01南北断面
(西から)

図版一九
OJ97-6次調査の遺構 (三)

SX01南北断面北部
(東から)



SX01南北断面南部
(東から)

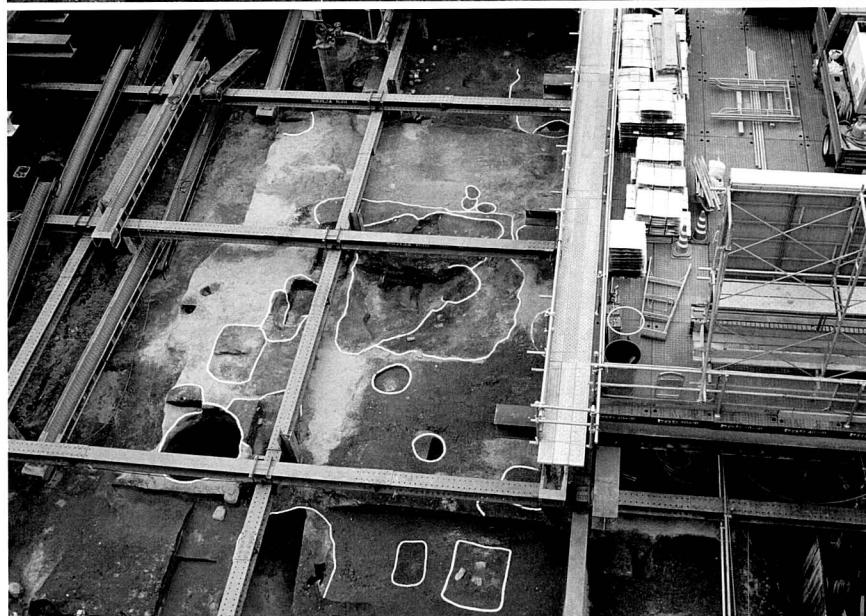


SX01東西断面
(北から)





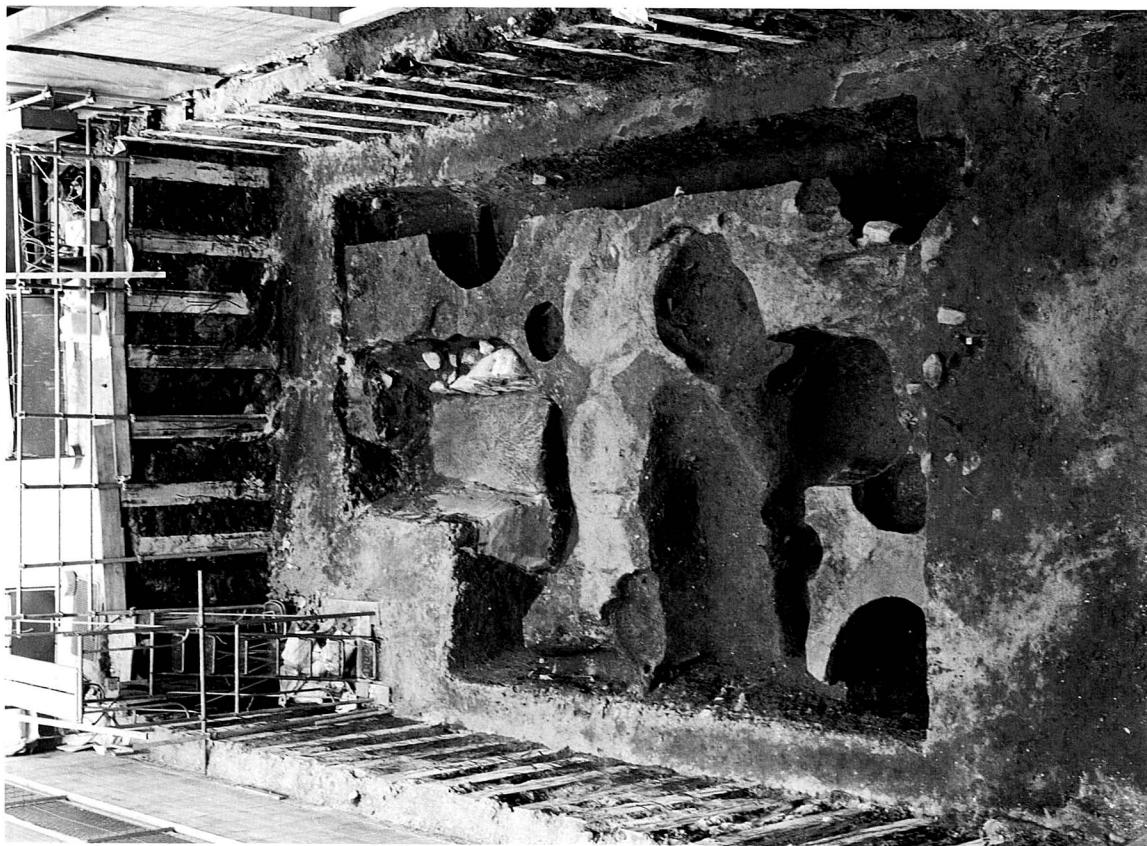
SK02上面検出陶磁器
(南から)



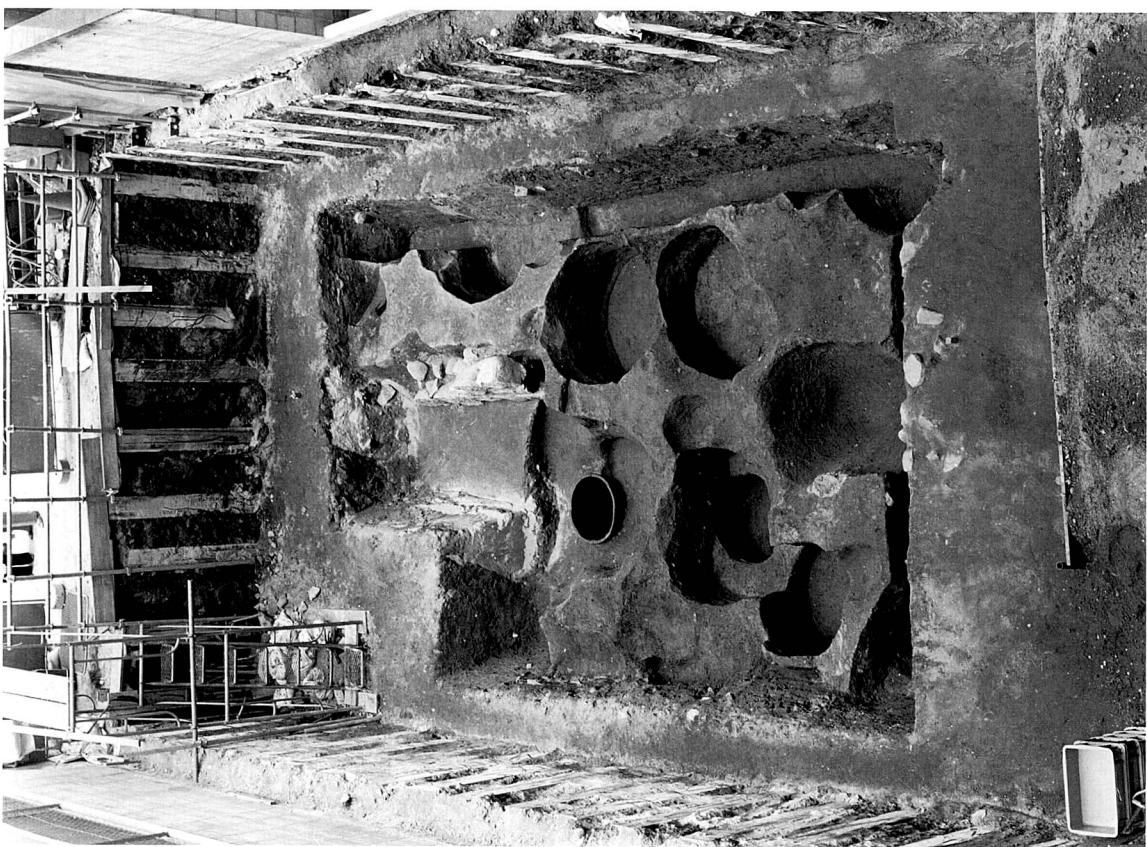
V期遺構検出状況
(南から)



20区e-f断面(南から)



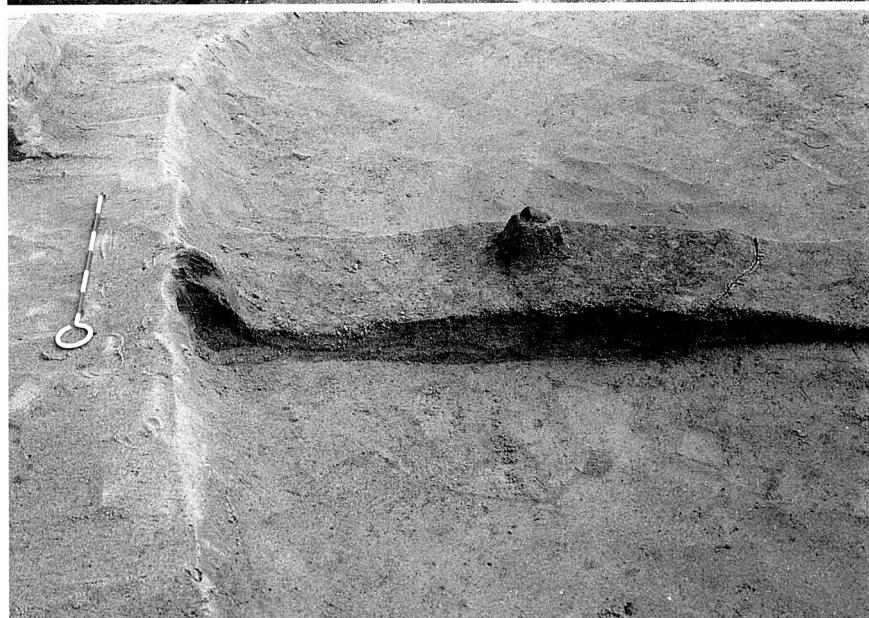
第1層遺構完掘状況(南から)



第2層遺構完掘状況(南から)



北東部SK337・338
検出状況(西から)



北東部SK337
銅鏃出土状況



南東部第3層内
庄内式土器出土状況

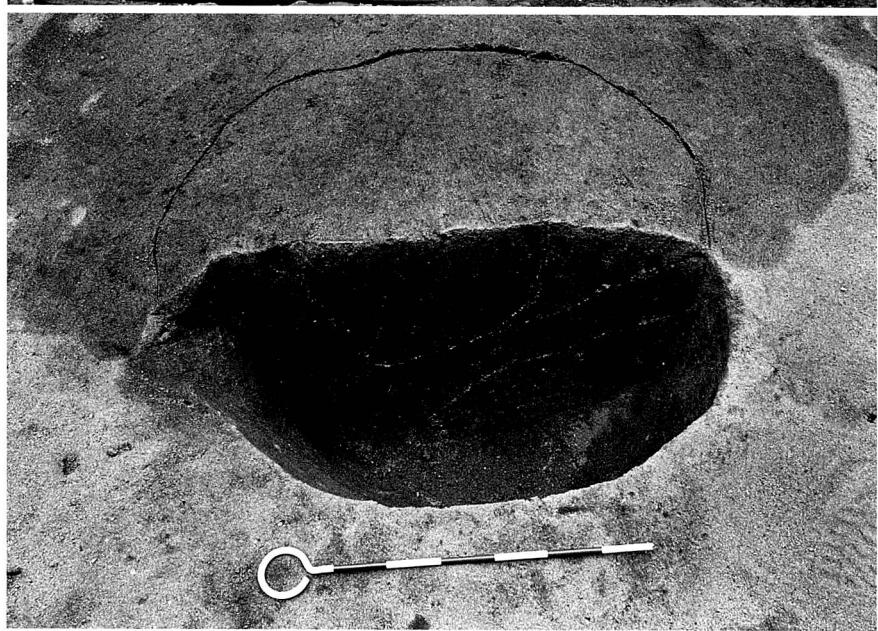
南西部第3層内
飛鳥時代の土器
出土状況



南西部古代の柱穴群
(西から)



南西部古代の柱穴
SP301(北東から)





古代の遺構全景
(白線部分、北から)



南東部ゴミ穴SK119
(北から)



南東部江戸時代穴蔵2
(東から)

図版二五 SZ98-1次調査の遺構(一)

調査地北東部地層断面
(南から)



第8層堆積状況
(西北西から)



第7層完掘状況
(西から)

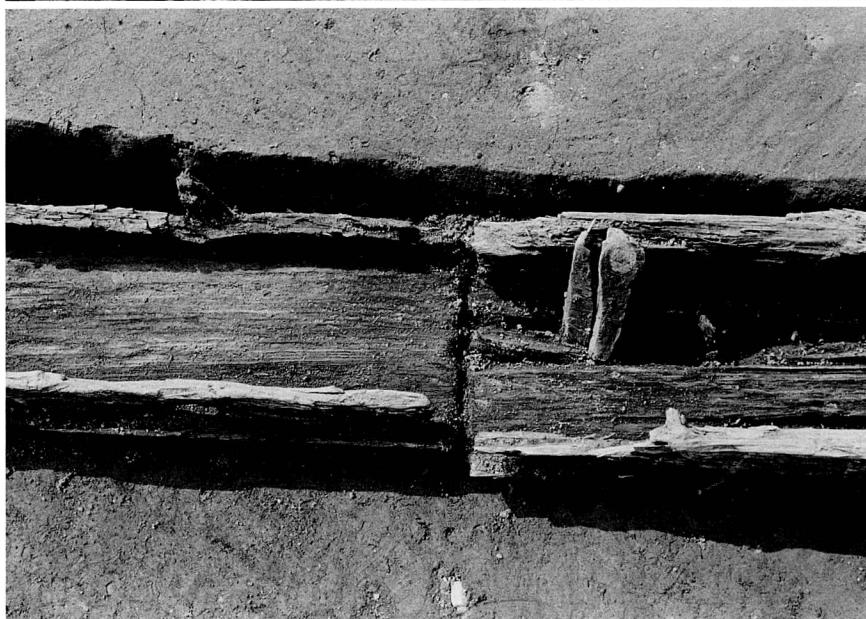




第5c-1層下面検出遺構
SD601(北西から)



木柵掘削状況(南から)



木柵連結状況(東から)

大阪市埋蔵文化財発掘調査報告－1998年度－

ISBN 4-900687-50-2

2001年3月31日 発行◎

編集・発行 財団法人 大阪市文化財協会

〒540-0006 大阪市中央区法円坂 1-1-35

(TEL.06-6943-6833 FAX.06-6920-2272)

印刷・製本 岡村印刷工業株式会社

〒558-0004 大阪市住吉区長居東3-4-17



Osaka City Archaeological Reports

1998

A Report of Excavations
at the

Kami, Yamanouchi, Kuwazu, Momogaike, Abenosuji,
Abe Temple, Naniwa Main Street, Naniwa-Capital Suzaku Street,
Osaka Castle, Osaka Castle-town and Sozenji Sites

March 2001

Osaka City Cultural Properties Association

Osaka City Archaeological Reports

1998

A Report of Excavations
at the

Kami, Yamanouchi, Kuwazu, Momogaike, Abenosuji,
Abe Temple, Naniwa Main Street, Naniwa-Capital Suzaku Street,
Osaka Castle, Osaka Castle-town and Sozenji Sites

March 2001

Osaka City Cultural Properties Association

『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告－1998年度－』 正誤表

頁	行など	誤	正
目次 i	10行目	3) 大阪城跡	3) 大坂城跡
17	3行目	井戸底面まで1.83mあった。	井戸底面まで0.9mあった。
29	図22 キャプション	Y-444,555	Y-44,555
32	図26 キャプション	東側調査区	北側調査区
38	4行目	SP03	SP13
44	11行目	102は生駒西麓産の…	101・102は生駒西麓産の…
48	表5 90 器種	椀口縁部	碗口縁部
	表5 92 器種	茶椀底部	茶碗底部
	表5 99 備考	長4.3cm、直径2.6cm、管径11.2cm	長4.0cm以上、直径2.3cm、管径11.2mm
	表5 101・102 器種	庄内式甕？	庄内式甕
	表5 103・106 区分	弥生土器	古式土師器
53	8行目	…130は16世紀前半、127は15世紀前半	…127は16世紀前半、130は15世紀前半
54	8行目	理戻し	埋戻し
	35行目	石臼129	石臼126
56	5行目	備前焼擂鉢126	備前焼擂鉢129
	6行目	108・109・126は	108・109・129は
58	図55 キャプション	129	126
	図55 キャプション	126	129
60	9行目	b. 動物遺体	b. 動植物遺体
69	31行目	SK301・302	SK201・202
71	6行目	東で南に…	東で北に…
72	14行目	東で南に…	東で北に…
82	2行目	前期と後期を判別する	豊臣期と徳川期を判別する
	8行目	瀬戸美濃焼天目碗289・皿290	瀬戸美濃焼皿289・290
84	13行目	瀬戸美濃焼天目碗276・277、唐津焼碗 278・279	瀬戸美濃焼天目碗276・279、唐津焼碗 277・278
86	13行目	308～311は唐津焼碗	308・309・311・312は唐津焼碗
	14行目	瀬戸美濃焼天目碗312	瀬戸美濃焼天目碗310
87	13行目	唐津焼262・263、丹波焼	唐津焼、丹波焼
97	13行目	古式土師器甕403・406・417	古式土師器甕403・406
98	15行目	饅頭身	饅頭心
	17～19行目	瀬戸美濃焼の天目碗458、志野焼碗459、 唐津焼向付鉢460・461、唐津焼碗462 ～464	志野焼碗459、唐津焼向付460・461、 唐津焼碗458・462～464
100	7行目	天目碗450	碗450
報告書抄録	主な遺物 1行目	銅銀	銅錫

